千葉県文化財センター調査報告第356集

東関東自動車道(千葉・富津線)
埋蔵文化財調査報告書 4

－市原市今富新山遺跡・古市場（２）遺跡、千葉市古市場（１）遺跡－

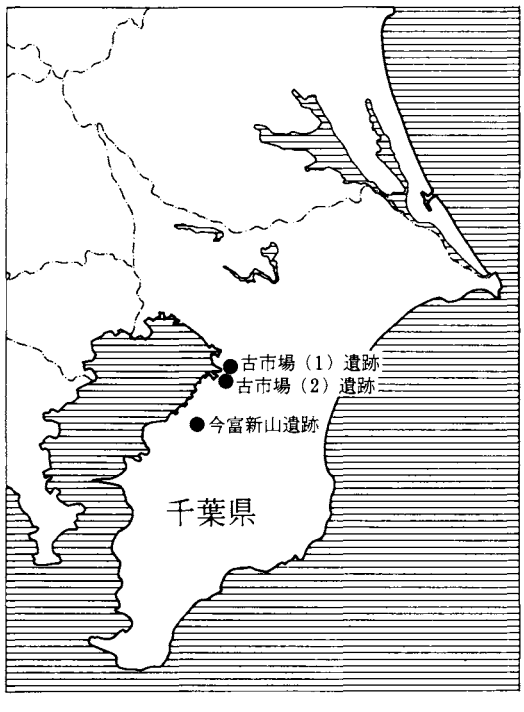
平成11年 3 月

日　本　道　路　公　団

財団法人　千葉県文化財センター

東関東自動車道(千葉・富津線)
埋蔵文化財調査報告書 4

－市原市今富新山遺跡・古市場（２）遺跡、千葉市古市場（１）遺跡－



旧石器時代石器群

今富新山1号墳内部施設出土遺物

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第356集として、日本道路公団の東関東自動車道（千葉・富津線）建設事業に伴って実施した市原市今富新山遺跡・古市場(2)遺跡、千葉市古市場(1)遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、装飾付大刀や木製品が出土するなど、この地域の古墳時代や古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年３月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中村好成

凡　　例

1　本書は、日本道路公団による東関東自動車道（千葉・富津線）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第４集である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

今富新山遺跡　　千葉県市原市今富字新山1,123ほか（遺跡コード219-044）

古市場(2)遺跡　　市原市古市場字上鎧384ほか（遺跡コード219-094）

古市場(1)遺跡　　千葉市中央区浜野170-1ほか（遺跡コード201-090）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本道路公団の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は、研究員　石倉亮治が第１章第１節１(2)・２(2)・第２節２・第３章・第４章第２節を、主任技師　新田浩三が第２章第１節・第４章第１節１を担当し、技師　高梨友子がその他を担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本道路公団、市原市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　今富新山１号墳出土の鉄製品については、早稲田大学文化財整理室の車崎正彦氏に類例に関して御教示を得た。また、観察・実測に当たっては、財団法人千葉県史料研究財団の白井久美子氏に御教示を得た。

8　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第１図　　昭和40年市原市役所発行　１：3,000　市原基本図「28」、「36」

第５図　　国土地理院発行　１：25,000　「姉崎」（NI-54-19-16-3）

第６図　　国土地理院発行　１：25,000　「蘇我」（NI-54-19-15-2）

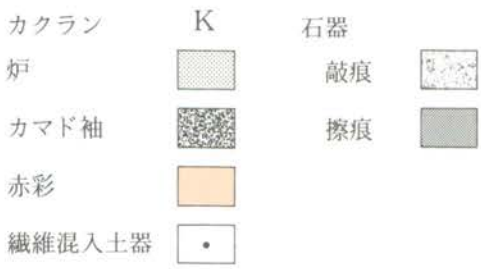
　　国土地理院発行　１：25,000　「五井」（NI-54-19-15-4）

第139図　　国土地理院発行　１：50,000　「姉崎」（NI-54-19-16）

9　周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

10　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

11　挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。



本　文　目　次

第１章　はじめに……1
第１節　調査の概要……1
1　調査の経緯と経過……1
(1)今富新山遺跡 ……1
(2)古市場(1)遺跡・(2)遺跡 ……1
2　整理作業の経過……4
(1)今富新山遺跡 ……4
(2)古市場(1)遺跡・(2)遺跡 ……7
第２節　遺跡の位置と環境……8
1　今富新山遺跡……8
(1)　地理的環境 ……8
(2)　歴史的環境 ……8
2　古市場(1)遺跡・(2)遺跡……11
(1)　遺跡の位置と歴史的環境 ……11
(2)　遺跡周辺の地形と地質 ……15
第２章　今富新山遺跡……17
第１節　旧石器時代の遺物……17
1　概要……17
2　ブロック各説……22
(1)第１ブロック ……22
(2)第２ブロック ……31
(3)第３ブロック ……38
(4)第４ブロック ……40
(5)第５ブロック ……44
第２節　古墳と出土遺物……60
1　調査の方法と経過……60
2　古墳の形態と規模……65
3　墳丘・周溝内出土遺物……65
4　内部施設……70
5　副葬品……70
第３節　住居跡と出土遺物……77
第４節　土坑と出土遺物 ……131
第５節　溝状遺構と出土遺物 ……134
第６節　遺構外出土遺物 ……138
1　土器 ……138

(1)縄文土器……138
(2)土師器……140
2　金属製品 ……140
3　石器 ……140
4　土製品 ……142
第3章　古市場（1）遺跡・（2）遺跡 ……153
第1節　古市場（1）遺跡の遺構と遺物 ……153
1　発掘区の基本層序 ……153
2　検出された遺構 ……153
3　出土遺物 ……156
第2節　古市場（2）遺跡の遺構と遺物 ……162
1　発掘区の基本層序 ……162
2　検出された遺構 ……164
3　出土遺物 ……166
第4章　まとめ ……171
第1節　今富新山遺跡 ……171
1　旧石器時代 ……171
(1)石器群の概要……171
(2)器種組成……171
(3)石器製作技術……174
(4)母岩消費について……175
(5)石器製作体系について……175
(6)石器群の位置付けと問題点……176
2　弥生時代以降の集落 ……177
3　1号墳とその被葬者 ……177
第2節　古市場（1）遺跡・（2）遺跡 ……180

報告書抄録……巻末

挿　図　目　次

第1図　今富新山遺跡周辺の地形と調査範囲……2
第2図　グリッド設定図……3
第3図　古市場（1）遺跡・（2）遺跡の調査区設定 ……5
第4図　古市場（1）遺跡の調査年次……6
第5図　今富新山遺跡の位置と周辺の遺跡……9
第6図　古市場（1）遺跡・（2）遺跡の位置 …12
第7図　古市場（1）遺跡・（2）遺跡周辺の地形 ……13
第8図　古市場（1）遺跡・（2）遺跡の地質…14
今富新山遺跡
第9図　旧石器時代確認グリッド及び本調査範囲……18
第10図　ブロックの分布状況……19

第11図　第１ブロック器種別分布図……23
第12図　第１ブロック母岩別分布図……24
第13図　第１ブロック石器実測図(１)……25
第14図　第１ブロック石器実測図(２)……26
第15図　第１ブロック石器実測図(３)……27
第16図　第１ブロック石器実測図(４)……28
第17図　第１ブロック石器実測図(５)……29
第18図　第１ブロック石器実測図(６)……30
第19図　第２ブロック器種別分布図……32
第20図　第２ブロック母岩別分布図……33
第21図　第２ブロック石器実測図(１)……34
第22図　第２ブロック石器実測図(２)……35
第23図　第２ブロック石器実測図(３)……36
第24図　第２ブロック石器実測図(４)……37
第25図　第３ブロック母岩別分布図……38
第26図　第３ブロック器種別分布図……39
第27図　第３ブロック石器実測図……40
第28図　第４ブロック器種別分布図……41
第29図　第４ブロック母岩別分布図……42
第30図　第４ブロック石器実測図……43
第31図　第５ブロック器種別分布図……45
第32図　第５ブロック母岩別分布図……46
第33図　第５ブロック石器実測図(１)……47
第34図　第５ブロック石器実測図(２)……48
第35図　第５ブロック石器実測図(３)……49
第36図　第５ブロック石器実測図(４)……50
第37図　属性表の見方……54
第38図　調査区の設定……60
第39図　墳丘測量図……61
第40図　封土除去後実測図……62
第41図　墳丘土層断面図……63
第42図　周溝内遺物出土状況図……66
第43図　１号墳出土土器(１)……68
第44図　１号墳出土土器(２)……69
第45図　内部施設実測図……71
第46図　金銀装大刀鞘尻金具……72
第47図　飾り金具と柄頭推定復元図……72
第48図　金銀装大刀・鹿角装小刀……73
第49図　鹿角装剣・鹿角装刀子……75
第50図　遺構配置図(１)……76
第51図　遺構配置図(２)……77
第52図　003号実測図……78
第53図　004号実測図……78
第54図　004号出土土器……79
第55図　009号実測図……80
第56図　010号実測図……80
第57図　013・014号実測図……81
第58図　015・016A・016B号実測図・
出土土器……82
第59図　017号実測図……83
第60図　019・020・021・023号実測図……84
第61図　019号出土土器……86
第62図　020号出土土器……86
第63図　021号出土土器……86
第64図　025号実測図……87
第65図　029・031号実測図……88
第66図　031号出土土器……88
第67図　030号実測図・出土土器……88
第68図　032号実測図・出土土器……89
第69図　033号実測図……90
第70図　033号出土土器……90
第71図　034号実測図・出土土器……91
第72図　036号実測図……91
第73図　037号実測図・出土土器……92
第74図　038号実測図……92
第75図　039A・039B号実測図・出土土器……93
第76図　040・042号実測図・出土土器……94
第77図　043号実測図……96
第78図　044号実測図……97
第79図　047号実測図……98
第80図　048号実測図……99
第81図　049・050・051・053・054・
072号実測図……100
第82図　053号カマド実測図……101

第83図　049・050・051・053・054・
072号出土土器……101
第84図　052号実測図……103
第85図　056・057・058号実測図……104
第86図　056号出土土器……105
第87図　059号実測図……105
第88図　061・062・063・064・065号実測図……107
第89図　061号出土土器……108
第90図　062・064号出土土器 ……109
第91図　066・067・068・070号実測図 ……110
第92図　066・068号出土土器 ……110
第93図　070号出土土器(1) ……111
第94図　070号出土土器(2) ……112
第95図　069号実測図……113
第96図　071・088号実測図 ……114
第97図　071号出土土器……114
第98図　074号実測図・出土土器……115
第99図　075・076・080号実測図……116
第100図 076号出土土器……116
第101図 078・079号実測図・出土土器 ……117
第102図 081・083・084・100・101・104号
実測図 ……119
第103図 081・084・100号出土土器……120
第104図 085号実測図・出土土器……121
第105図 087号実測図……122
第106図 087号出土土器……123
第107図 089・090号実測図・出土土器 ……124
第108図 091・094・096・098号実測図・
出土土器 ……126
第109図 092・093・099号実測図……128
第110図 092・093号出土土器 ……128
第111図 097号実測図……129
第112図 102・105号実測図・出土土器 ……130
第113図 086号実測図……131
第114図 086号出土土器……132
第115図 018・026・027・028・035・045・106・
107号実測図……133
第116図 001・002・005・006・007・008号
実測図……135
第117図 011・012・046・109号実測図……136
第118図 縄文土器……139
第119図 グリッド出土土器……140
第120図 金属製品……140
第121図 石器……141
第122図 土製品(1) ……143
第123図 土製品(2) ……144
古市場(1)遺跡・(2)遺跡
第124図 古市場（１）遺跡の遺構配置図
及び基本層序……154
第125図 遺構平面図及び土層観察図……155
第126図 土器……157
第127図 土製品……158
第128図 土製品、石製品、鉄製品、銭貨……159
第129図 石塔……160
第130図 古市場（２）遺跡の発掘区
及び基本層序……162
第131図 木製品・木材出土状況図……163
第132図 遺構配置図及び遺構平面図・
土層観察図……164
第133図 古市場（２）遺跡出土遺物……165
第134図 木製品（１）……167
第135図 木製品（２）……168
第136図 木製品（３）……169
まとめ
第137図 今富新山遺跡旧石器器種組成(1) ……172
第138図 今富新山遺跡旧石器器種組成(2) ……173
第139図 姉崎古墳群の主な古墳……178

表　目　次

今富新山遺跡
第１表　ブロック別母岩組成表
第２表　ブロック別器種組成表
第３表　全ブロック石器組成表
第４表　第１ブロック石器組成表
第５表　第１ブロック石器属性表(1)
第６表　第１ブロック石器属性表(2)
第７表　第１ブロック石器属性表(3)
第８表　第２ブロック石器組成表
第９表　第２ブロック石器属性表(1)
第10表　第２ブロック石器属性表(2)
第11表　第３ブロック石器組成表
第12表　第３ブロック石器属性表
第13表　第４ブロック石器組成表
第14表　第４ブロック石器属性表
第15表　第５ブロック石器組成表
第16表　第５ブロック石器属性表
第17表　土器観察表(1)
第18表　土器観察表(2)
第19表　土器観察表(3)
第20表　土器観察表(4)
第21表　土器観察表(5)
第22表　土器観察表(6)
第23表　土器観察表(7)
古市場(1)遺跡・(2)遺跡
第24表　古市場（１）遺跡銭貨計測表
第25表　古市場（２）遺跡銭貨計測表

図　版　目　次

巻頭図版１　旧石器時代石器群
巻頭図版２　今富新山１号墳内部施設出土遺物
今富新山遺跡
図版１　今富新山遺跡周辺航空写真
図版２　第１ブロック遺物出土状況
　　第３ブロック遺物出土状況
　　4C－79土層断面
図版３　第１ブロック石器（正面）
　　第１ブロック石器（裏面）
図版４　第２～第５ブロック石器（正面）
　　第２～第５ブロック石器（裏面）
図版５　１号墳調査前近景
　　１号墳墳丘断面（A－A′）
　　１号墳墳丘断面（B－B′）
図版６　１号墳周溝内遺物出土状況
　　１号墳西側周溝
　　１号墳内部施設検出状況
図版７　１号墳内部施設遺物出土状況
　　１号墳内部施設完掘
　　１号墳調査終了後
図版８　東側集落群（北から）
　　003号全景
図版９　004号全景
　　009号全景
　　010号全景
図版10　011号全景
　　013・014号全景
　　015・016A・016B号全景
図版11　017・018号全景
　　019・020・021号全景
　　023号全景
図版12　025号全景
　　026号全景
　　027号全景
図版13　028・029・030号全景
　　031号全景

032・035号全景
図版14　033号全景
034号全景
036・045号全景
図版15　037号全景
038号全景
039A・039B号全景
図版16　040号全景
042・043・044号全景
047号全景
図版17　048号全景
049・050・053・072号全景
051・052号全景
図版18　054号全景
056・057・058号全景
059・097号全景
図版19　061・062号全景
063・064・065号全景
066号全景
図版20　067・070号全景
070号遺物出土状況
068・069号全景
図版21　071号全景
074号全景
075・076号全景
図版22　078・079号全景
081号全景
083・084・100・101号全景
図版23　085・106・107号全景
086号遺物出土状況
087号全景
図版24　088・089号全景
090号全景
091・092・098号全景
図版25　093号全景
094・096号全景
099号全景
図版26　102号全景
104号全景
105号全景
図版27　金銀装大刀のX線写真
図版28　1号墳出土土器
図版29　遺構出土土器(1)
図版30　遺構出土土器(2)
図版31　遺構出土土器(3)
図版32　遺構出土土器(4)
古市場（1）遺跡・（2）遺跡
図版33　古市場(1)遺跡・(2)遺跡周辺航空写真
図版34　古市場(1)遺跡全景（右）
古市場(1)遺跡F6トレンチ溝状遺構確認状況（左）
古市場(1)遺跡近景（右）
古市場(1)遺跡C10トレンチ畦畔状遺構確認状況（左）
古市場(1)遺跡近景（右）
古市場(1)遺跡D10トレンチ土層堆積状況（左）
古市場(1)遺跡平成2年度本調査区流路状遺構確認状況（右）
古市場(1)遺跡平成2年度本調査区流路状遺構土層堆積状況（左）
図版35　古市場(2)遺跡全景（左）
古市場(2)遺跡1号土坑（右）
古市場(2)遺跡近景（左）
古市場(2)遺跡2号土坑（右）
古市場(2)遺跡木製品及び流木集中状況（S→N）
古市場(2)遺跡木製品及び流木集中状況（E→W）
図版36　古市場(1)遺跡出土土器
図版37　古市場(1)遺跡出土土製品
古市場(1)遺跡出土中近世の遺物
図版38　古市場(1)遺跡出土石塔
図版39　古市場(2)遺跡出土遺物
古市場(1)遺跡出土植物種子
図版40　古市場(2)遺跡出土木製品(1)
図版41　古市場(2)遺跡出土木製品(2)
図版42　平成3年次補足調査区（近景）

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査の経緯と経過

日本道路公団は、東関東自動車道（千葉・富津線）建設事業に当たり、事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県教育庁文化課との間で協議の結果、遺跡の現状保存が困難な部分について発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財団法人千葉県文化財センターに委託され、今富新山遺跡・古市場(1)遺跡・(2)遺跡に関しては、発掘調査を平成元年度～平成2年度に実施し、平成7年度から平成10年度まで整理作業を行った。なお、今富新山遺跡は、隣接する今富遺跡の発掘調査中に新たに発見された遺跡である。

（1）今富新山遺跡

今富新山遺跡は、北側に隣接する今富遺跡の発掘調査中に発見された古墳1基を含む新発見の遺跡である（第1図）。発掘区の設定については、今富遺跡同様、公共座標に基づく20ｍ×20ｍの方眼を基準としたが、その呼称はそれぞれ別個である。まず、調査対象範囲を覆う20ｍ×20ｍの方眼を大グリッドとし、西から東へA、B、C、…G、北から南へ0、1、2、…7と呼称した。さらに、大グリッド内を2ｍ×2ｍの小グリッドに100分割し、北西隅より東方向へ00、01、02、…09、南方向へ00、10、20、…90と付し、南東隅が99となるようにした。したがって、各グリッドは、2B-03、5D-45などと呼称されることとなる（第2図）。

発掘調査は、平成元年5月10日から平成2年2月9日まで行われた。まず古墳の清掃と測量とを行い、古墳以外の部分については、重機で表土を除去し、古墳の調査と並行して、検出された住居跡等の遺構の調査を調査区の南側から開始した。古墳の墳丘発掘後、墳丘下の遺構の調査も行った。上層の調査終了後、調査範囲全体にわたって2ｍ×2ｍの確認トレンチを、大グリッドに沿ってほぼ等間隔になるよう配置して下層の確認調査を行った。その結果、確認された遺物の集中地点に関しては、引き続き本調査を行った。

発掘調査の対象面積、調査組織、担当者は次のとおりである。

調査対象面積

確認調査　（上層）－㎡/－㎡　（下層）220㎡/5,500㎡

本調査　（上層）5,500㎡、古墳1基　（下層)194㎡

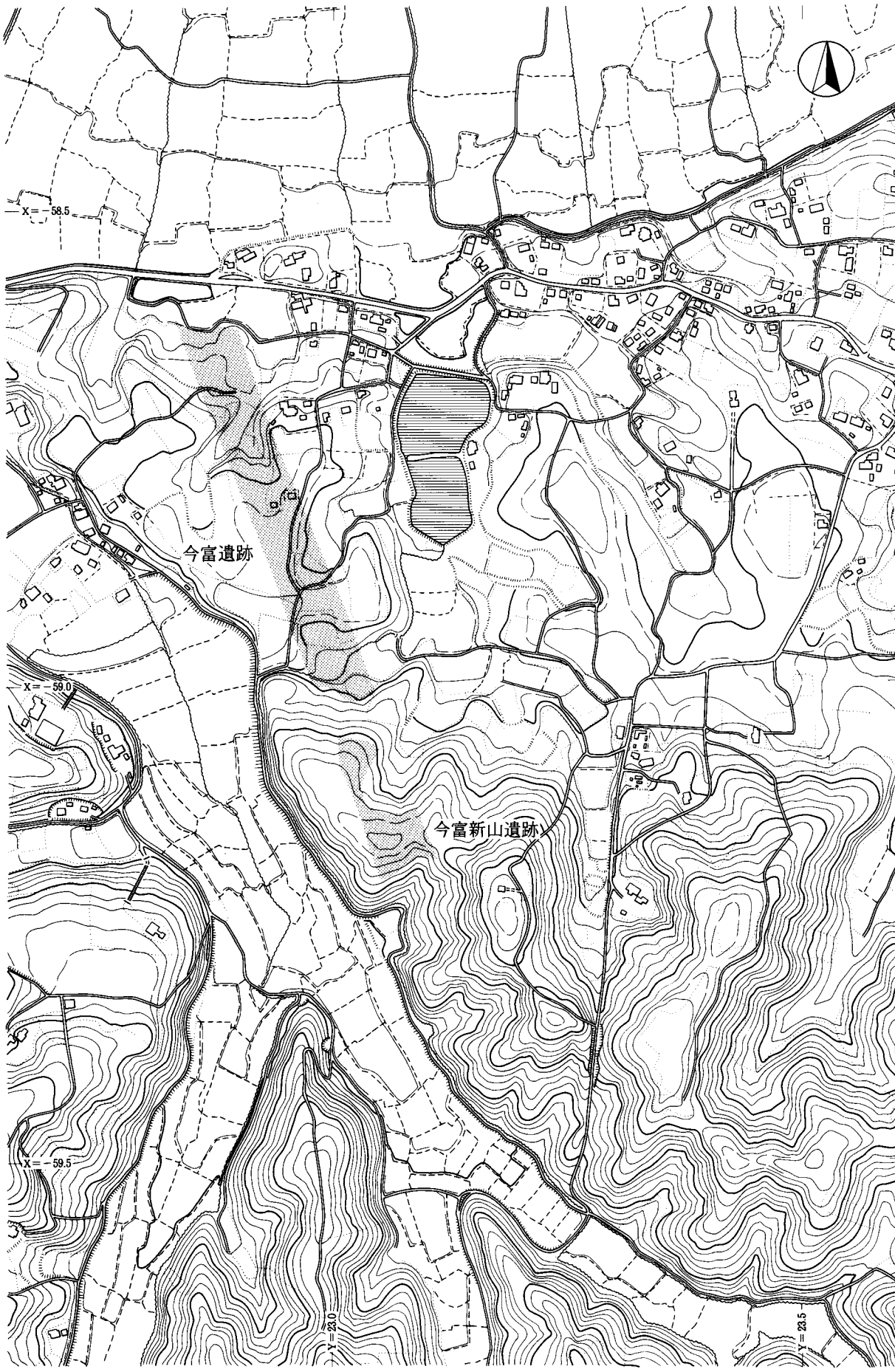
組　織　調査部長　堀部昭夫、班長　佐久間　豊

担当者　研究員　村木正記、主任技師　加藤正信

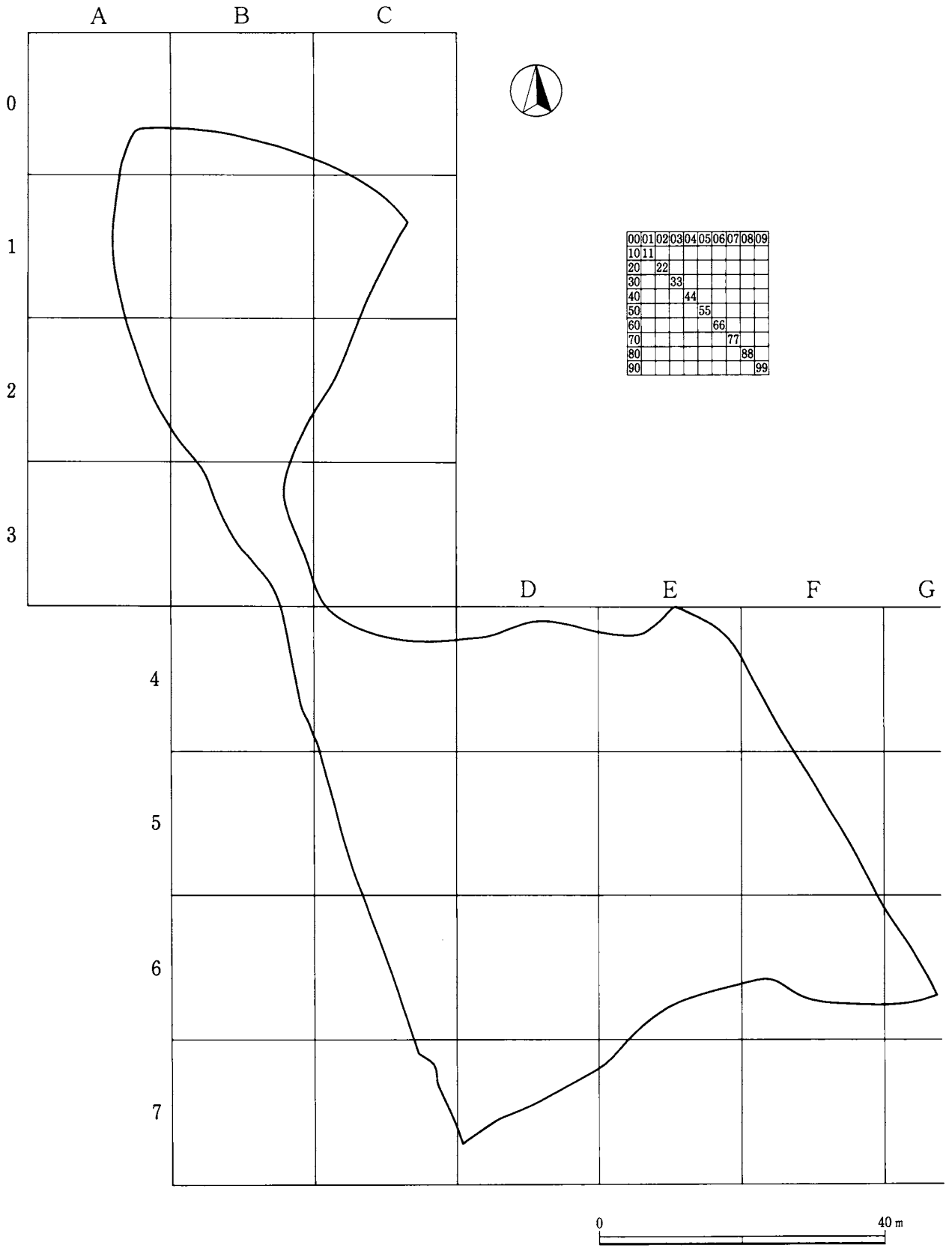
（2）古市場(1)遺跡・(2)遺跡

古市場(1)遺跡及び古市場(2)遺跡は約300ｍほど離れた地点に位置するため、それぞれに独立した調査区の設定を行った。

調査区は、両遺跡とも20ｍ四方のグリッドを設定し、それぞれ北西隅から東にA、B、C・・・、南に1、2、3・・・と設定した（第3図）。



第１図　今富新山遺跡周辺の地形と調査範囲（1:6,000）


A
B
C
D
E
F
G
0
1
2
3
4
5
6
7
00 01 02 03 04 05 06 07 08 09
10 11
20 22
30 33
40 44
50 55
60 66
70 77
80 88
90 99
0
40 m

第2図　グリッド設定図

古市場(1)遺跡は全体の約2/3の面積に当たる東側部分を中心とした区域を平成2年1月8日から3月17日まで上層10%、1,270㎡/12,700㎡の確認調査を行い、平成2年4月2日から5月16日まで残りの西側部分上層10%、600㎡/6,000㎡の確認調査を実施した。これに引き続いて上層1,500㎡の本調査を行った。

確認調査は調査区内のグリッドごとトレンチを入れ遺構の確認を行い、幅約7.5mの溝状遺構が確認された北東端部を中心に本調査の範囲を確定し、調査を実施した。また、路線のセンターに沿った20m間隔の土層観察用試掘坑9か所により基本層序を観察した（第4図)。

これとは別に、平成3年に橋脚工事の際新たに確認された溝状遺構について、古市場(1)遺跡の南約50mの旧茂原街道沿いの3地点でトレンチによる補足調査を行った。

古市場(2)遺跡は(1)遺跡の南約300mの所に位置し、平成2年10月1日から11月22日まで上層10%、680㎡/6,800㎡の確認調査を行った。調査区内に任意の発掘区1トレンチ～11トレンチを設定し、路線のセンターに沿って土層観察用の試掘坑を20m間隔で6か所設定した。3トレンチでは木材集中地点が北西方向へ広がる可能性が確認されたため、1トレンチとの間に拡張区を設け木材集中範囲の確認を行った。

発掘調査は以下の経過を経て行われた。

○平成元年度（平成2年1月8日～3月17日）

組　織　調査部長　堀部昭夫、班長　佐久間　豊

担当者　技師　半澤幹雄

内　容　古市場(1)遺跡確認調査

○平成2年度（平成2年4月1日～5月16日）

組　織　調査部長　堀部昭夫、班長　郷田良一

担当者　技師　半澤幹雄

内　容　古市場(1)遺跡確認調査及び本調査

○平成2年度（平成2年10月1日～11月22日）

組　織　調査部長　堀部昭夫、班長　郷田良一

担当者　技師　糸原　清

内　容　古市場(2)遺跡確認調査

2　整理作業の経過

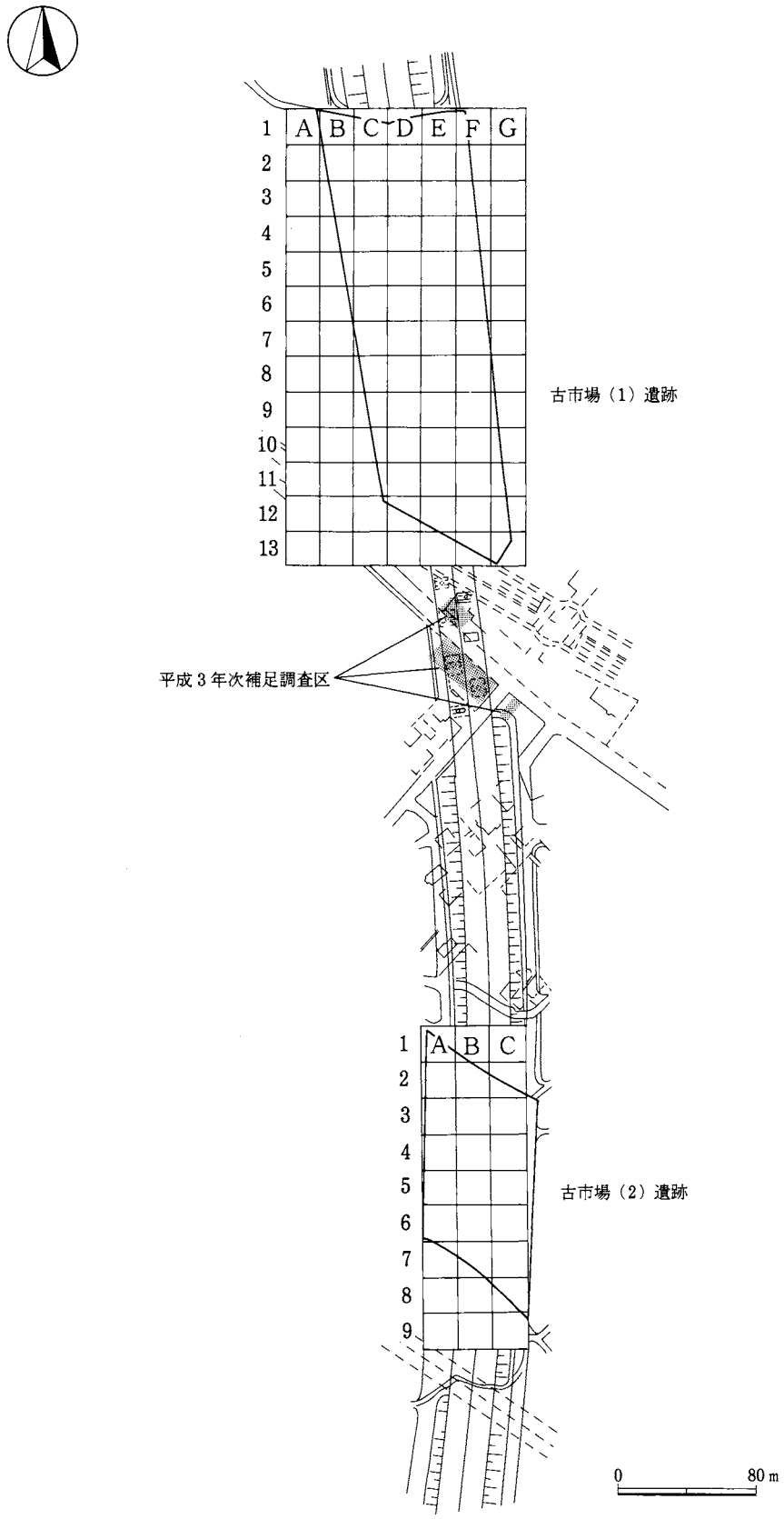
（1）今富新山遺跡

整理作業は、平成7年度から平成10年度まで行われた。各年度における調査組織、担当者、作業内容は次のとおりである。

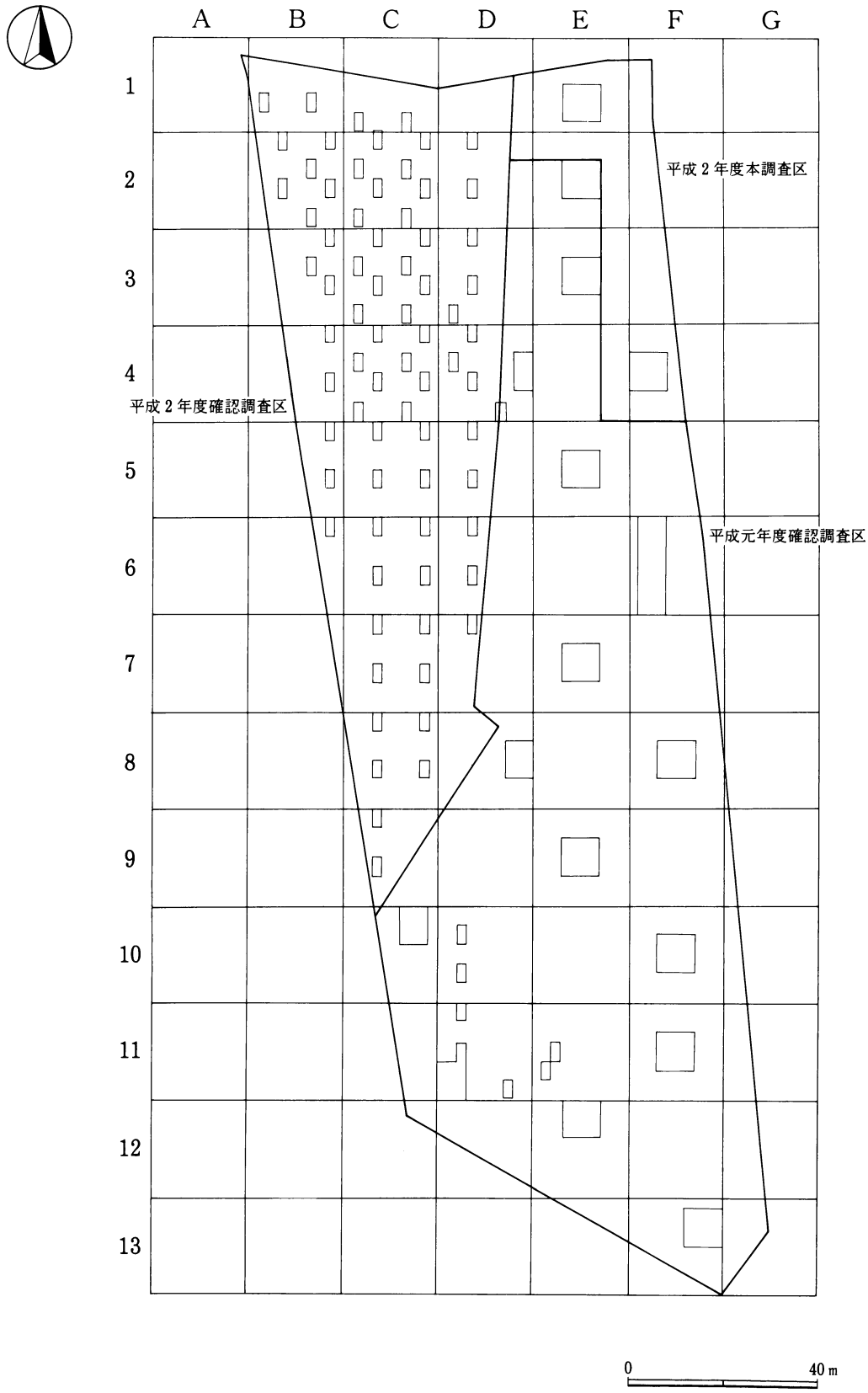
○平成7年度

組　織　調査研究部長　西山太郎、市原調査事務所長　森　尚登

担当者　研究員　森本和男



第３図　古市場（1）遺跡・(2）遺跡の調査区設定



第４図　古市場（１）遺跡の調査年次

内　容　出土遺物の水洗・注記、接合・復元、実測の一部、図面・写真の整理

○平成８年度

組　織　調査部長　西山太郎、南部調査事務所長　高田　博

担当者　研究員　森本和男

内　容　遺物の実測、遺構・遺物のトレース、挿図・図版作成の一部

○平成９年度

組　織　調査部長　西山太郎、南部調査事務所長　高田　博

担当者　研究員　土屋治雄、研究員　森本和男、主任技師　新田浩三、技師　高梨友子

内　容　挿図・図版の作成、原稿執筆

○平成10年度

組　織　調査部長　沼澤　豊、南部調査事務所長　高田　博

担当者　技師　高梨友子

内　容　印刷・刊行

（２）古市場(1)遺跡・(2)遺跡

整理作業は、平成10年度に実施された。南部調査事務所長　高田　博の指導の下に下記の担当者が行った。

担当者　研究員　石倉亮治

内　容　水洗・注記、接合・復元、実測、遺構・遺物のトレース、挿図・図版作成、原稿執筆、印刷・刊行

第2節　遺跡の位置と環境

1　今富新山遺跡

（1）地理的環境

今富新山遺跡は市原市今富字新山1,123ほかに所在する。

市原市は、南北に長い形を呈し、千葉県の中央部に位置する県下最大の市である。北から時計回りに、千葉市・茂原市・長柄町・長南町・大多喜町・君津市・木更津市・袖ヶ浦市などと境を接し、北西部で東京湾に開けている。市域の中央部を、県内有数の河川、養老川が縦に貫いている。

市原市の地形は大きく3つに分けることができる。南部の丘陵地と北部の台地と、海岸部の平野である。南部は上総丘陵の一部であり、最高点で280ｍ程度の標高を有する山地である。養老渓谷などの渓谷も見られ、谷が深く入り込んでいて複雑な地形を呈している。北部は茨城県南部から続く下総台地の南辺で、浅い谷が樹枝状に発達している。養老川を挟んで東側は市原台地、西側は袖ヶ浦台地と呼ばれている。そして、これらを開析して流れる養老川によって形成された沖積地が、主に海岸部に広がる。台地上は、特に海岸部に近いところでは市街地化・住宅地化されているところも少なくないが、特に南方では、山林や畑地として利用されているところも見られる。河川によって形成された沖積低地も同様な傾向であるが、古くから水田として利用されていることが多い。

養老川は、房総半島の分水嶺である清澄山系に源を発する河川であり、蛇行を繰り返して両岸に河岸段丘を形成しながらほぼ北西方向に流れる。そして最下流に三角州状低地を形成して市原市五井付近で東京湾に注いでいる。流路変遷の激しい川として知られており、氾濫も頻繁であった。下流の沖積低地には自然堤防や旧河道等が随所に見られる[1)]。

今富新山遺跡は養老川下流の左岸、河岸段丘奥部に位置する標高約35ｍの丘陵上に立地している。遺跡の現況は山林であった。遺跡南側には山林が続くが、北側は標高10ｍ～20ｍのやや平坦な段丘で、遺跡からは南に開ける養老川流域の平野と、漁村地帯から京葉工業地帯へと変貌を遂げた海岸部とを眺望することができる。

（2）歴史的環境（第5図）

今富新山遺跡(1)の位置する養老川下流域は、上海上国造の本拠地として、また上総国の中心地として知られるところである。ほとんど全域に遺跡が所在すると言っても過言ではない状況であるが、これまで調査された遺跡の多くは、古墳群や古代の遺跡である。最近になって東関東自動車道の建設に伴い、主に南方の台地上でそれ以前の時代に属する遺跡も調査されているが、今富新山遺跡の周辺では調査によって明らかにされている遺跡は、養老川右岸などに比べてまだ少ない。

遺跡の位置と周辺の遺跡　（スクリーントーン部は既調査部分）

1．今富新山遺跡　2．今富遺跡　3．長老塚古墳　4．今富塚山古墳　5．上総国分僧寺　6．神門古墳群　7．諏訪台古墳群 8．村上遺跡　9．村上山王前遺跡　10.廿五里十三割遺跡　11.西野遺跡　12.今富廃寺　13.海保古墳群　14.大作頭遺跡　15.海保野口遺跡　16.片又木遺跡　17.山見塚遺跡　18.外迎山遺跡　19.唐沢遺跡　20.中伊沢遺跡　21.百目木遺跡　22.志保知遺跡　23.下椎木遺跡　24.ヤジ山遺跡

第5図　今富新山遺跡の位置と周辺の遺跡（1:25,000）

旧石器時代の遺物は、海保野口遺跡(15)・ヤジ山遺跡(24)などで出土している。このうち特に海保野口遺跡では、石器集中地点が15か所検出され、ナイフ形石器や局部磨製石斧などを含む300点以上の石器が出土している[2]。ヤジ山遺跡でも、Ⅸ層中位から質・量ともに優れた石器群が検出されている[3]。そのほか下椎木遺跡(23)や志保知遺跡(22)などで石器集中地点が確認されている[4]。

続く縄文時代については、比較的古い時期の遺構や遺物が多く検出されている。早期の炉穴が、海保野口遺跡で166基検出されたのを筆頭に、大作頭遺跡(14)や片又木遺跡(16)[5]、下椎木遺跡などでまとまって調査されている。ほかにも今富遺跡(2)[6]・ヤジ山遺跡・外迎山遺跡(18)[7]などで数基ずつの炉穴が、志保知遺跡では陥穴がまとまって検出されている。住居跡は、片又木遺跡と外迎山遺跡で早期後半のものがそれぞれ1軒ずつ確認されている。そのほかには海保野口遺跡で中期のものが16軒、大作頭遺跡でも中期の住居跡が見られる。また、山見塚遺跡(17)では後期のものが19軒[7]検出された。これらの遺跡では住居内や土坑内などに貝堆積も見られ、特に山見塚遺跡は土器や石器等の遺物も多量に出土し、中央部を広場とする環状集落であったとみられ、特筆されよう。また、ヤジ山遺跡では早期、村上遺跡(8)[8]では後期、唐沢遺跡(19)[7]では晩期の包含層が確認されている。中伊沢遺跡(20)[4]・百目木遺跡(21)[4]でも早期の土器が出土している。

弥生時代の生活の痕跡は、この周辺からはあまり確認されていない。養老川右岸の諏訪台古墳群(7)の墳丘下や周辺から、今富新山遺跡の集落とほぼ同時代とみられる弥生時代後半から古墳時代前期の住居跡が50軒ほど確認されている[9]ほかは、村上遺跡から後期の土器や弓が出土し、今富遺跡から中期の再葬墓が1基検出されている程度である。

古墳時代になると、周辺の状況はにわかに活気づいてくる。集落としては、片又木遺跡で前期とみられる住居跡が17軒、村上遺跡でも前期とみられる住居跡が9軒検出されている。また、今富遺跡では古墳時代から奈良時代にかけての住居跡が34軒検出されており、注目される。しかし、この時期特筆されるのはむしろ墓域の方で、まず養老川右岸には、出現期の古墳として注目を集めた神門古墳群(6)[10]、推定で総計200基にものぼるといわれ、径約60mの大型円墳を含む諏訪台古墳群などがある[9・11]。「王賜銘鉄剣」を出土した稲荷台1号墳も同じ台地上で至近距離にある[12]。養老川左岸でも、4世紀の築造と考えられる全長110mの前方後円墳、今富塚山古墳(4)[13]を初め、鉄剣・鉄鏃・玉類などを出土した海保3号墳を含む海保古墳群(13)[14]などが調査されている。この周辺には古墳群が多数存在することが分かっており、今富新山遺跡の所在する台地上やその北方の段丘上にも、今富新山1号墳を挟んで東に今富東部古墳群、西に終末期の方墳、長老塚古墳(3)[6]を含む今富西部古墳群といった小規模な古墳群が存在する[15]。ただし現在のところ未調査のものが多く、詳細は明らかでない。なお、姉崎天神山古墳や、石枕や立花、銀製耳飾りなどを出土した姉崎二子塚古墳、銀装環頭大刀や金銅製冠などを出土した姉崎山王山古墳などの大型の前方後円墳を含む姉崎古墳群も、遺跡西方の至近距離にある[16]。

奈良・平安時代も遺跡の内容は豊富で、まず、上総国分寺跡(5)や尼寺跡の所在が市原台地上で明らかになっている。そして、西野遺跡(11)では掘立柱建物跡や溝などが検出され、海上郡衙跡と推定されている[17]。また、その付近には、遺構は確認されていないものの、大和山田寺系の瓦や平城宮系の瓦が表採される今富廃寺跡(12)があり、海上郡の郡寺と考えられている[18]。さらに村上遺跡からは掘立柱建物跡が65棟検出されており、緑釉陶器などが出土している。今富遺跡でも奈良時代のものと思われる掘立柱建物跡が17棟検出されている。集落としては、片又木遺跡で9世紀後半から10世紀初めの住居跡が7軒検出され

ている。墓域としては、この時代に位置付けられる方墳ないし方形周溝状遺構と呼ばれるものが、諏訪台古墳群中や海保野口遺跡、片又木遺跡、山見塚遺跡、外迎山遺跡などでそれぞれ10基前後検出されている。外迎山遺跡で28基検出されたものについては、9世紀後葉に比定されている。

中世の遺跡としては、村上遺跡が村上城の範囲に含まれており、陶磁器なども出土している。村上山王前遺跡(9)・廿五里十三割遺跡(10)でも陶磁器が出土した[8]。

2　古市場(1)遺跡・(2)遺跡

（1）遺跡の位置と歴史的環境（第6図）

古市場(1)遺跡は千葉市中央区浜野170-1ほか、古市場(2)遺跡は市原市古市場字上鎧384ほかに所在し、共に千葉市と市原市の境界付近を流れる村田川の下流域右岸の氾濫堆積土からなる低地平野に位置する。現在の行政区界は旧茂原街道を境に千葉市と市原市に分かれており、小字名は古市場(1)遺跡が塩辛（しおから）ほか、古市場(2)遺跡が上鎧（かみよろい）である。

両遺跡のある低地平野は北には浜野川が、また南には村田川がそれぞれ東京湾へと流れる河口付近に形成されている。両河川の中流域洪積台地上に多くの集落遺跡や墓跡が存在する。その盛衰は東南部ニュータウン（おゆみ野）や千原台ニュータウン（ちはら台）などの埋蔵文化財調査により明らかになりつつある。

浜野川中流域の北部の台地上には縄文時代前期から古墳時代に至る集落である南二重堀遺跡、縄文時代後期から古墳時代後期の集落として著名な木戸作遺跡、古墳時代後期から奈良・平安時代の集落である高沢遺跡、有吉遺跡、有吉南遺跡、椎名崎遺跡などがある[19]。

また、石枕や石製模造品を出土した前方後円墳の上赤塚古墳[20]、石釧や石製刀子を出土した円墳の七廻塚古墳[21]、そのほか前方後円墳の人形塚古墳、大覚寺山古墳、生浜古墳群、椎名崎古墳群などの古墳や古墳群が知られている[22]。

村田川中流域の右岸台地には縄文時代中期の環状貝塚や縄文時代中期から古墳時代後期にかけての集落である調査された草刈遺跡[23]、古墳時代前期から後期の集落や大型の円墳が調査された草刈六之台遺跡がある。

村田川の左岸台地上には馬蹄状に展開する縄文時代後期の手永貝塚、弥生時代中期から古墳時代後期の集落としてV字状の環濠を伴う大厩遺跡や下郷遺跡、菊間遺跡[24]、若宮遺跡などがある。

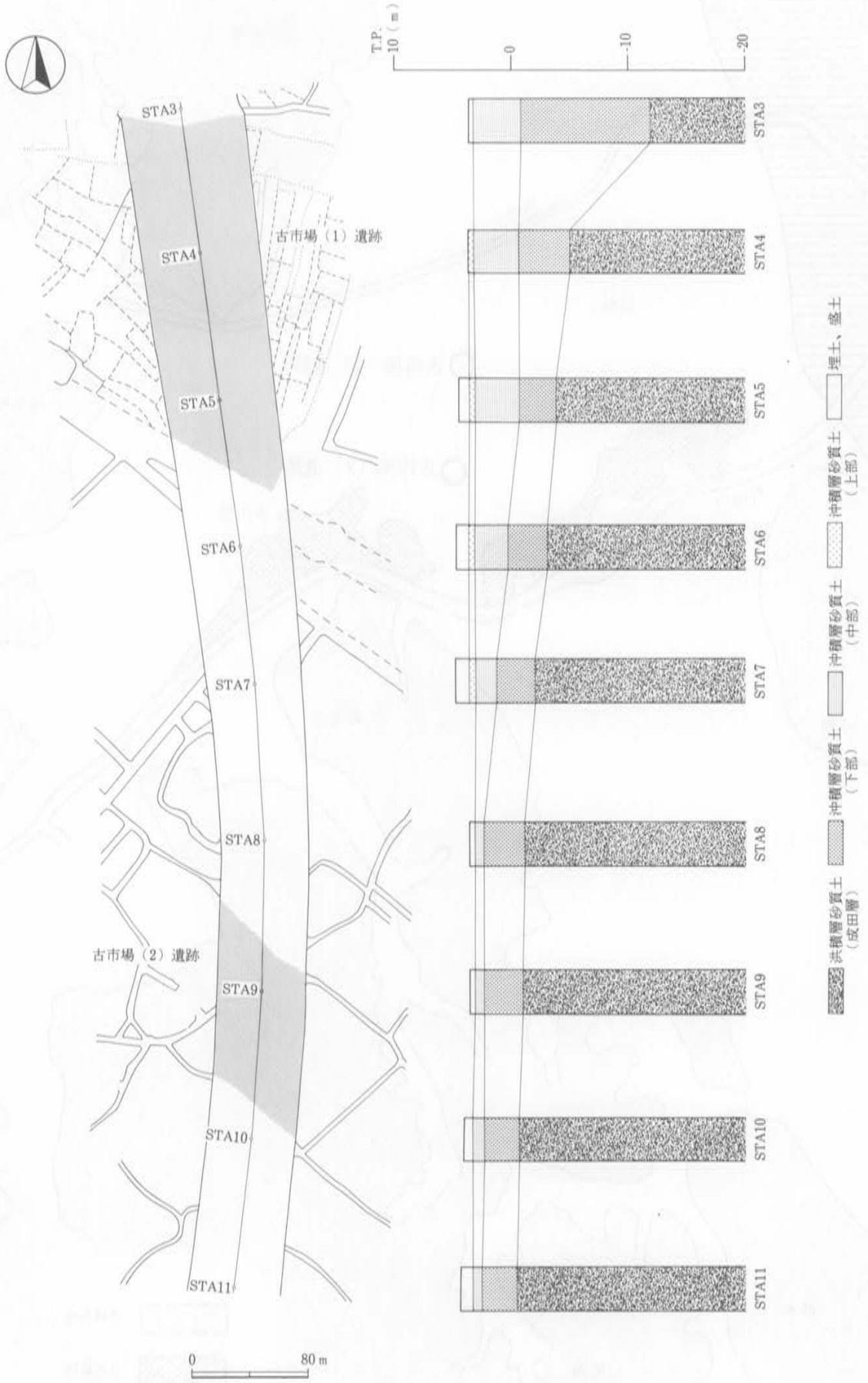
また、古墳時代では粘土槨から珠文鏡・石釧等を出土した前方後方墳の可能性のある新皇塚古墳、全長61ｍの前方後円墳東関山古墳、径44ｍの円墳菊間天神山古墳、全長51ｍの前方後円墳姫宮古墳、全長推定75ｍの前方後円墳権現山古墳といった大型の古墳を含む菊間古墳群をはじめ、全長63.4ｍの前方後円墳大厩二子塚古墳、径45ｍの円墳大厩浅間様古墳がある[25]。

古代では、低地平野に面してなだらかに高度を増す台地上に市原市郡本の市原郡衙跡推定地があり、同じ台地縁部の小支谷を取り込んだ地勢を利用して築かれた中世城郭跡として白船・能満・市原の各城跡が確認されている[26]。

木製品を出土した遺跡としては、東関東自動車道（千葉・富津線）関連で市原条里制遺跡が昭和63年から平成5年にかけて調査され、田下駄・大足等をはじめ多くの木製品が出土した。昭和60年には、古市場(1)遺跡・(2)遺跡の北東約1㎞の浜野川河口付近に所在する低湿地貝塚である神門遺跡[27]を含む浜野川遺

第6図　古市場（1）遺跡・（2）遺跡の位置

第7図　古市場（1）遺跡・（2）遺跡周辺の地形図



第8図　古市場（1）遺跡・（2）遺跡の地質

跡群が調査され、木製品、木製構造物、植物遺体等が多量に検出されている。平成3年には古市場(1)遺跡に隣接した旧茂原街道沿いの橋脚工事部分において溝状の遺構が確認されている[28]。また、同様の遺跡としては、村田川によって形成された自然堤防上に位置し、昭和59年に調査された村田服部遺跡[29]がある。

（2）遺跡周辺の地形と地質

古市場(1)遺跡・(2)遺跡は、共に古村田川によって形成された沖積層下部の砂層を中心とする堆積土で覆われた低地平野上に位置し、その標高はほぼ4ｍである(第7図)。

古村田川は現在の村田川より北方に位置し、両遺跡周辺の層序は下総層群上部を構成する成田層を初めとする第四紀更新世の地層を基盤とするが、最終氷期の最も海退の進んだ時期には、20ｍ以上にも及ぶ高低差のある深い渓谷が刻まれていたものと考えられている。遺跡の北方には洪積台地を大きく削り込んだ渓谷の最深部に相当する落込みの存在が見られ、基盤地層浸食後に沖積層が直接堆積した形跡がボーリング調査の結果からも確認されている(第8図)。

両遺跡周辺の地形は臨海部の埋立地と沖積低地からなり、背後に海抜45ｍ前後の洪積台地を擁する。

古市場(1)遺跡・(2)遺跡の位置する地点の地質は、村田川の運んだ氾濫土壌が主体であり、沖積層中部・上部の砂層を主体とするN値0～1の軟弱な沖積低地となっている。沖積層中からは、植物遺体や木材等有機物の遺存が随所で確認された。

沖積低地は、東京湾に面した養老川河口の三角州平野に連なる海岸平野と、小支谷によって形成された谷底平野からなり、現在の村田川によって形成された自然堤防上右岸には市原市古市場の集落がある。また、上流には椎名崎、生実、菊間、能満、郡本などの地籍を有する海抜20ｍ～60ｍの洪積台地がひかえ、これらの台地を浸食して形成された小支谷を埋め立てて若宮地区などの現在の住宅地が造成されている。

また、東京湾の沿岸流により形成された砂州や浜堤が海岸線に平行して微高地として存在したとみられ、市原市八幡付近には旧海岸線沿いにわずかにその痕跡が認められる。また、この微高地はこれより南の五所、君塚、五井上宿の集落へと連なっている。

注1　木村泰治　1979「第8章　市原市の地形と地質」『市原市史　別巻』市原市教育委員会
藤原文夫　1979「第9章　養老川」『市原市史　別巻』市原市教育委員会
2　森本和男・新田浩三　1998『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書1　市原市海保野口遺跡』（財）千葉県文化財センター
3　村木正記　1991「市原市ヤジ山遺跡第2黒色帯中の石器群」『研究連絡誌』第31号（財）千葉県文化財センター
4　（財）千葉県文化財センター　1989『千葉県文化財センター年報14』
（財）千葉県文化財センター　1990『千葉県文化財センター年報15』
（財）千葉県文化財センター　1991『千葉県文化財センター年報16』
5　寺島　博　1984『片又木遺跡』（財）市原市文化財センター
6　森本和男　1998『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書2　市原市今富遺跡』（財）千葉県文化財センター
7　木對和紀　1987『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（財）市原市文化財センター

8　小久貫隆史・渡邊高弘　1997『村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書－市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡－』（財）千葉県文化財センター
9　白井久美子・永沼律朗　1982「諏訪台古墳群の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団
10　田中新史　1977「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』63号
田中新史　1986「東国の古墳時代出現期とその前後」『東アジアの古代文化』46号
11　深澤克友・白井久美子　1981「諏訪台古墳群の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団
米田耕之助・半田堅三・大貫好弘　1984『諏訪台古墳群』市原市教育委員会
12　滝口宏監修・（財）市原市文化財センター・市原市教育委員会編集　1988『「王賜」銘鉄剣　概報』吉川弘文館
13　永沼律朗　1992『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』（財）千葉県文化財センター
14　中村恵次ほか　1968『市原市埋蔵文化財調査報告4　南大広遺跡・海保古墳群』市原市教育委員会
15　市原市教育委員会　1988『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図　北部編』
16　小出義治ほか　1980『上総山王山古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会
17　高梨俊夫　1996『市原市西野遺跡第1次発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
渡邊高弘　1997『市原市西野遺跡第2次発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
18　福間　元ほか　1982『今富地区遺跡発掘調査報告書』市原市今富地区遺跡調査会
19　三森俊彦ほか　1975「木戸作遺跡（第1次）」『千葉東南部ニュータウン2』（財）千葉県都市公社
種田斉吾ほか　1975「有吉遺跡（第1次）」『千葉東南部ニュータウン3』（財）千葉県都市公社
種田斉吾ほか　1978「有吉遺跡（第2次）」『千葉東南部ニュータウン5』（財）千葉県文化財センター
種田斉吾ほか　1979「椎名崎遺跡」『千葉東南部ニュータウン6』（財）千葉県文化財センター
伊藤智樹　1983「南二重堀遺跡」『千葉東南部ニュータウン12』（財）千葉県文化財センター
20　栗田則久　1982「上赤塚1号墳」『千葉東南部ニュータウン13』（財）千葉県文化財センター
21　武田宗久　1974「七廻塚古墳」『千葉市史』千葉市教育委員会
22　沼沢　豊　1975「椎名崎古墳群（第1次）」『千葉東南部ニュータウン1』（財）千葉県都市公社
種田斉吾ほか　1977「生浜古墳群」『千葉東南部ニュータウン4』（財）千葉県文化財センター
23　三森俊彦ほか　1983『千原台ニュータウンII』（財）千葉県文化財センター
24　斎木　勝ほか　1974『菊間遺跡』千葉県都市公社
25　前掲注14。
26　前掲注14。
27　金丸　誠　1989『千葉市浜野川神門遺跡（低湿地貝塚の発掘調査）』（財）千葉県文化財センター
28　大谷弘幸　1993「茂原街道に隣接した溝跡について」『研究連絡誌』第38号　（財）千葉県文化財センター
29　金丸　誠　1985『千葉市村田服部遺跡』（財）千葉県文化財センター

第２章　今富新山遺跡

第１節　旧石器時代の遺物

１　概要（第９・10図、第１～３表）

旧石器時代の遺物集中地点は、調査対象範囲の南側で、標高33ｍ～34ｍの北側に緩やかに傾斜する斜面から検出された。この遺物集中地点は、５か所のブロックとして構成され、ブロック間の接合が認められる。遺物の総出土点数は449点である。

本遺跡の基本層序は、以下のとおりであるが、旧石器時代の本調査をⅤ層の下部付近まで行っているので、Ⅲ層からⅤ層の土層の説明を行うことにする。

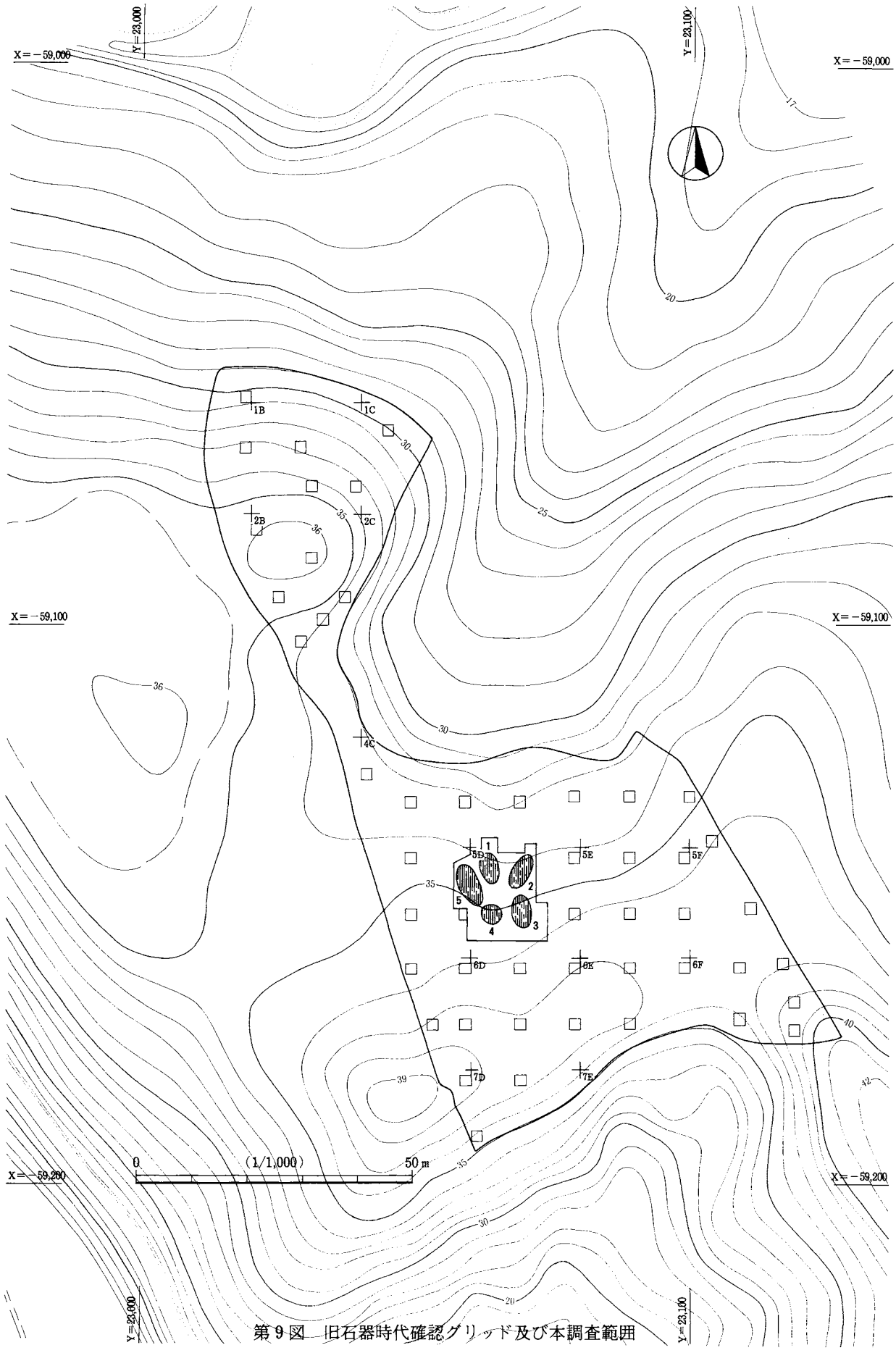
Ⅲ層　暗褐色土　ソフトロームである。赤色・青灰色スコリアを少量含む。層厚は10cm～20cm。

Ⅴ層　明褐色土　Ⅳ層以下はハードローム層である。色調は明るい。赤色スコリアを多く含む。黒色・青灰色スコリアを少量含む。層厚は20cm～30cm。

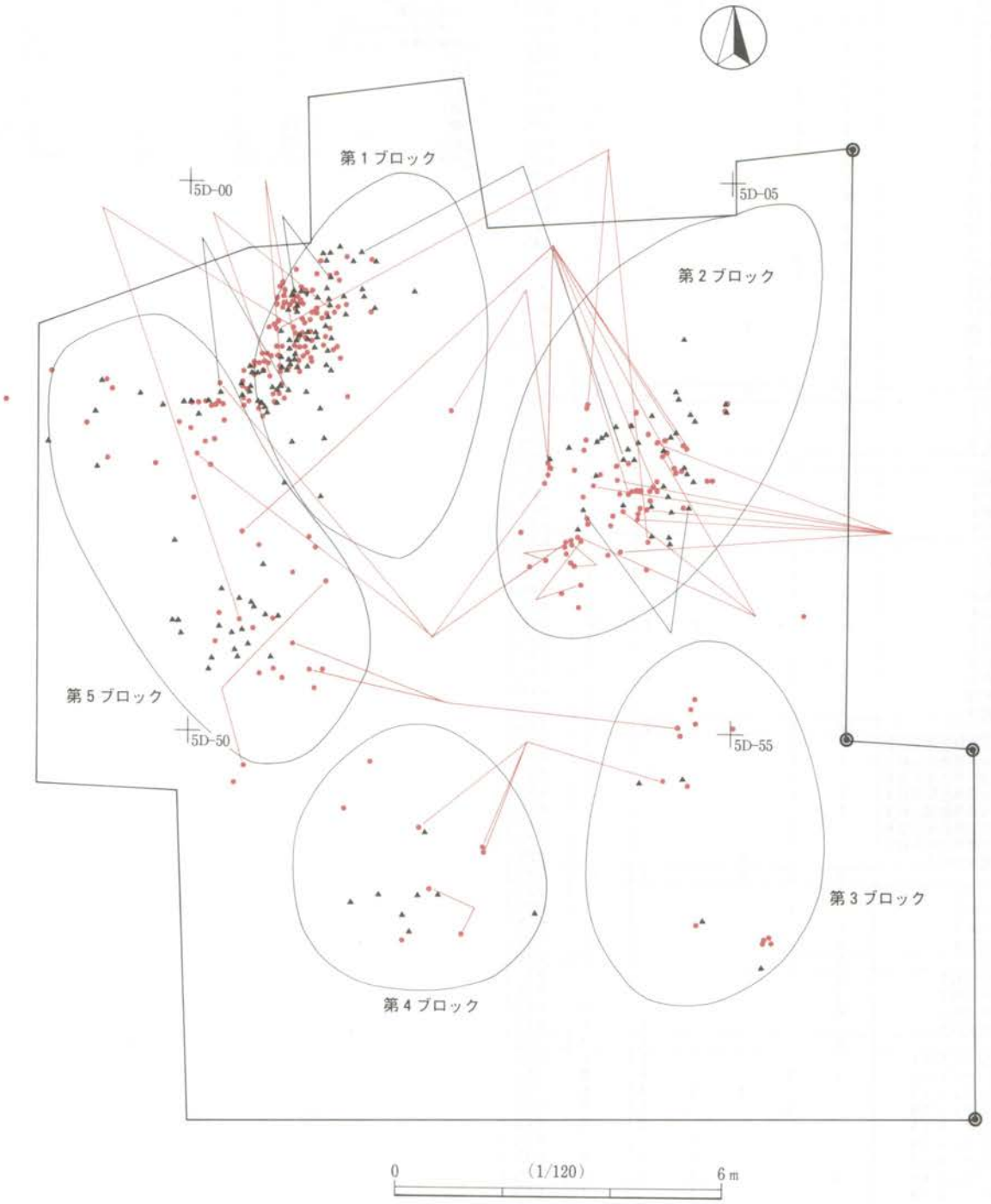
Ⅴ層　暗赤褐色土　第1黒色帯である。色調はⅣ層に比べると格段に黒味を帯びる。市原市から木更津市にかけてのこの地域は、Ⅴ層である第1黒色帯が非常に黒味を帯び、Ⅳ層との分層が極めて容易であることが特徴である。黒色スコリアを多く含む。赤色スコリアを少量含む。層厚は20cm～30cm。

石器は、Ⅳ層上部からⅤ層上部にかけて出土しており、Ⅳ層下部にもっとも集中する。各ブロックともに、石器の内容は類似しており、ナイフ形石器、角錐状石器、礫（焼け礫）をその内容にもつものである。出土石器の大半のものは礫（61.7％）である。礫は、長さが20mm～50mm、重量が２ｇ～50ｇ程度の小型のものである。赤化しており、熱を受けたものと思われる。これらの礫は、礫群としてとらえられるものである。石器の出土層位・接合関係・形態・石材構成・器種組成等からみて、石器はすべて同じ時期に使用されたものであり、石器を使用した時期の生活面はⅤ層～Ⅳ層下部の時期であったと思われる。

遺物の分布状況は、直径12ｍの環状に５つのブロックが配列されている。ブロックの規模は、第１ブロックがもっとも大きく、次に第２ブロック、第５ブロックと続く。第３・４ブロックは散漫な分布状況である。礫は、接合するものが多い。特に、第２ブロックと第１ブロックにおいて頻繁に接合する。ブロック間接合も認められる。礫の占める割合が、石器組成において61.7％（277点）と高いこともこの石器群の特徴と言える。礫と剥片・剥片石器類の分布状況はほぼ重複する。母岩は、礫以外の剥片・剥片石器類が72母岩、172点（38.3％）で構成される。多種の母岩で構成されるが、石核の割合が4.9％（22点）と高いことから、多種の母岩を少量ずつ遺跡に持ち込んで消費していることがうかがわれる。石材では、頁岩Aは、田村隆氏が産地同定した千葉県鴨川市で産出される珪質頁岩である白滝頁岩[1]と類似するものである。ただし、鉱物分析等を行っていないので、ここでは頁岩Aとして石材分類した。石材組成では、頁岩Aが47点で最も多く、次に凝灰岩、ホルンフェルスと続く。出土点数が少ないが、３点の緑色凝灰岩（グリーンタフ）と1点の黒曜石が含まれることも、石材構成の中で注目される。器種組成では、ナイフ形石器（４点）と角錐状石器（４点）と磨石（１点）が出土していることが、この石器群の特徴と言える。



第9図　旧石器時代確認グリッド及び本調査範囲



黒▲石器

赤●礫

◉セクションポイント

第10図　ブロックの分布状況

第1表　ブロック別母岩組成表

母岩＼ブロック	1	2	3	4	5	総計	組成比
黒曜石1				1		1	0.2%
計				1		1	0.2%
頁岩A 1		1				1	0.2%
頁岩A 2	1					1	0.2%
頁岩A 3	1					1	0.2%
頁岩A 4	1					1	0.2%
頁岩A 5	3	4				7	1.6%
頁岩A 6	1					1	0.2%
頁岩A 7	2	2				4	0.9%
頁岩A 8	1	1				2	0.4%
頁岩A 9	2					2	0.4%
頁岩A 10	2					2	0.4%
頁岩A 11	2					2	0.4%
頁岩A 12					1	1	0.2%
頁岩A 13	8				1	9	2.0%
頁岩A 14	2					2	0.4%
頁岩A 15		2				2	0.4%
頁岩A 16	1	1	1			3	0.7%
頁岩A 17	1					1	0.2%
頁岩A 18	1					1	0.2%
頁岩A 19			1			1	0.2%
頁岩A 20	1					1	0.2%
頁岩A 21	1					1	0.2%
頁岩A 22	1					1	0.2%
計	32	11	2		2	47	10.5%
頁岩B 1		1				1	0.2%
頁岩B 2	1					1	0.2%
頁岩B 3	1					1	0.2%
計	2	1				3	0.7%
流紋岩1	1					1	0.2%
流紋岩2	1					1	0.2%
流紋岩3	1					1	0.2%
流紋岩4	1					1	0.2%
計	4					4	0.9%
凝灰岩1	1	3				4	0.9%
凝灰岩2		1				1	0.2%
凝灰岩3	4	3				7	1.6%
凝灰岩4	6					6	1.3%
凝灰岩5	14			1	1	16	3.6%
凝灰岩6				1		1	0.2%
凝灰岩8		1				1	0.2%
凝灰岩9	1	1			1	3	0.7%
凝灰岩10	2					2	0.4%
凝灰岩11	1					1	0.2%
計	29	9		2	2	42	9.4%
ガラス質黒色安山岩1		2				2	0.4%
ガラス質黒色安山岩2	1	1				2	0.4%
ガラス質黒色安山岩3		1			1	2	0.4%
ガラス質黒色安山岩4	1	1				2	0.4%
ガラス質黒色安山岩5	1	1				2	0.4%
ガラス質黒色安山岩6		1				1	0.2%
ガラス質黒色安山岩7		1				1	0.2%
多孔質安山岩1			1			1	0.2%
計	3	8	1		1	13	2.9%
チャート1	1					1	0.2%
チャート2		1				1	0.2%
チャート3	1					1	0.2%
チャート4	5	1				6	1.3%
計	7	2				9	2.0%
トロトロ石1	3					3	0.7%
トロトロ石2	2					2	0.4%
トロトロ石3	3					3	0.7%
トロトロ石4					1	1	0.2%
計	8				1	9	2.0%
ホルンフェルス1					1	1	0.2%
ホルンフェルス2	1	1			6	8	1.8%
ホルンフェルス3			1	1	4	6	1.3%
ホルンフェルス4		5			1	6	1.3%
ホルンフェルス5					2	2	0.4%
ホルンフェルス6				1		1	0.2%
ホルンフェルス7				1	1	2	0.4%
ホルンフェルス8	3			2	5	10	2.2%
ホルンフェルス9				1		1	0.2%
ホルンフェルス10					1	1	0.2%
ホルンフェルス11					1	1	0.2%
ホルンフェルス12					1	1	0.2%
ホルンフェルス13	1					1	0.2%
計	5	6	1	6	23	41	9.1%
緑色凝灰岩1	1					1	0.2%
緑色凝灰岩2					1	1	0.2%
緑色凝灰岩3					1	1	0.2%
計	1				2	3	0.7%
チャート	1				1	2	0.4%
ホルンフェルス	4	4	2		3	13	2.9%
凝灰岩	1	3			2	6	1.3%
砂岩	28	23	5	6	15	77	17.1%
石英ハン岩	29	16	2	1	20	68	15.1%
石英岩	72	30	4		5	111	24.7%
計	135	76	13	7	46	277	61.7%
総計	226	113	17	16	77	449	100.0 %
組成比	50.3%	25.2%	3.8%	3.6%	17.1%	100.0%	

第2表　ブロック別器種組成表

器種＼ブロック	1	2	3	4	5	総計	組成比
ナイフ形石器	1	1		1		3	0.7%
角錐状石器	3	1			1	5	1.1%
二次加工のある剥片	7	4			1	12	2.7%
微細剥離痕のある剥片	7	3		1	1	12	2.7%
剥片	55	18	3	5	21	102	22.7%
砕片	9	2		1	3	15	3.3%
石核	9	8		1	4	22	4.9%
磨石			1			1	0.2%
礫	135	76	13	7	46	277	61.7%
総計	226	113	17	16	77	449	100.0%
組成比	50.3%	25.2%	3.8%	3.6%	17.1%	100.0%	

第3表　全ブロック石器組成表

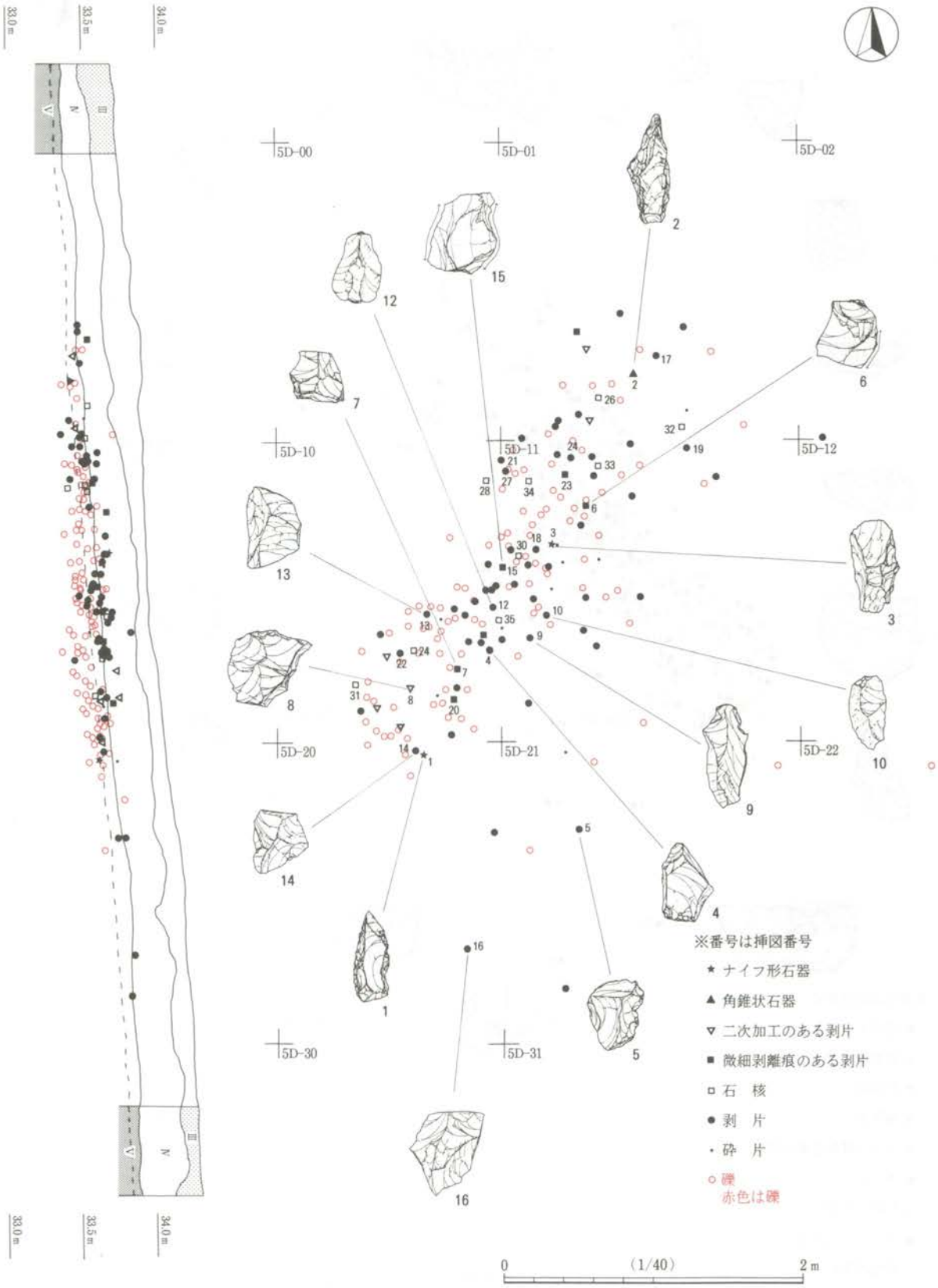
器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	砕片	石核	磨石	礫	総計	組成比
黒曜石 1	1									1	0.2%
計	1									1	0.2%
頁岩A 1	1									1	0.2%
頁岩A 2					1					1	0.2%
頁岩A 3							1			1	0.2%
頁岩A 4			1							1	0.2%
頁岩A 5		1			4		2			7	1.6%
頁岩A 6							1			1	0.2%
頁岩A 7				1	2		1			4	0.9%
頁岩A 8					2					2	0.4%
頁岩A 9				1	1					2	0.4%
頁岩A 10					1	1				2	0.4%
頁岩A 11					2					2	0.4%
頁岩A 12							1			1	0.2%
頁岩A 13				1	6		2			9	2.0%
頁岩A 14					2					2	0.4%
頁岩A 15					2					2	0.4%
頁岩A 16		1	1		1					3	0.7%
頁岩A 17					1					1	0.2%
頁岩A 18					1					1	0.2%
頁岩A 19					1					1	0.2%
頁岩A 20					1					1	0.2%
頁岩A 21					1					1	0.2%
頁岩A 22					1					1	0.2%
計	1	2	2	3	30	1	8			47	10.5 %
頁岩B 1				1						1	0.2%
頁岩B 2					1					1	0.2%
頁岩B 3			1							1	0.2%
計			1	1	1					3	0.7%
流紋岩 1	1									1	0.2%
流紋岩 2					1					1	0.2%
流紋岩 3					1					1	0.2%
流紋岩 4					1					1	0.2%
計	1				3					4	0.9%
凝灰岩 1			1		1		2			4	0.9%
凝灰岩 2		1								1	0.2%
凝灰岩 3					5	1	1			7	1.6%
凝灰岩 4				1	4	1				6	1.3%
凝灰岩 5			2	3	6	4	1			16	3.6%
凝灰岩 6					1					1	0.2%
凝灰岩 8				1						1	0.2%
凝灰岩 9					2	1				3	0.7%
凝灰岩10					2					2	0.4%
凝灰岩11					1					1	0.2%
計		1	3	5	22	7	4			42	9.4%
ガラス質黒色安山岩 1					2					2	0.4%
ガラス質黒色安山岩 2					1		1			2	0.4%
ガラス質黒色安山岩 3				1	1					2	0.4%
ガラス質黒色安山岩 4					1		1			2	0.4%
ガラス質黒色安山岩 5			1		1					2	0.4%
ガラス質黒色安山岩 6					1					1	0.2%
ガラス質黒色安山岩 7				1						1	0.2%
多孔質安山岩 1								1		1	0.2%
計			1	2	7		2	1		13	2.9%
チャート 1		1								1	0.2%
チャート 2			1							1	0.2%
チャート 3							1			1	0.2%
チャート 4			4		2					6	1.3%
計		1	5		2		1			9	2.0%
トロトロ石 1					2		1			3	0.7%
トロトロ石 2					1		1			2	0.4%
トロトロ石 3					3					3	0.7%
トロトロ石 4					1					1	0.2%
計					7		2			9	2.0%
ホルンフェルス 1		1								1	0.2%
ホルンフェルス 2					4	3	1			8	1.8%
ホルンフェルス 3					6					6	1.3%
ホルンフェルス 4					3	2	1			6	1.3%
ホルンフェルス 5					2					2	0.4%
ホルンフェルス 6				1						1	0.2%
ホルンフェルス 7					1	1				2	0.4%
ホルンフェルス 8					9	1				10	2.2%
ホルンフェルス 9							1			1	0.2%
ホルンフェルス10							1			1	0.2%
ホルンフェルス11					1					1	0.2%
ホルンフェルス12					1					1	0.2%
ホルンフェルス13					1					1	0.2%
計		1		1	28	7	4			41	9.1%
緑色凝灰岩 1							1			1	0.2%
緑色凝灰岩 2					1					1	0.2%
緑色凝灰岩 3					1					1	0.2%
計					2		1			3	0.7%
チャート									2	2	0.4%
ホルンフェルス									13	13	2.9%
凝灰岩									6	6	1.3%
砂岩									77	77	17.1%
石英ハン岩									68	68	15.1%
石英岩									111	111	24.7%
計									277	277	61.7%
総計	3	5	12	12	102	15	22	1	277	449	100.0%
組成比	0.7%	1.1%	2.7%	2.7%	22.7%	3.3%	4.9%	0.2%	61.7%	100.0%	

2　ブロック各説

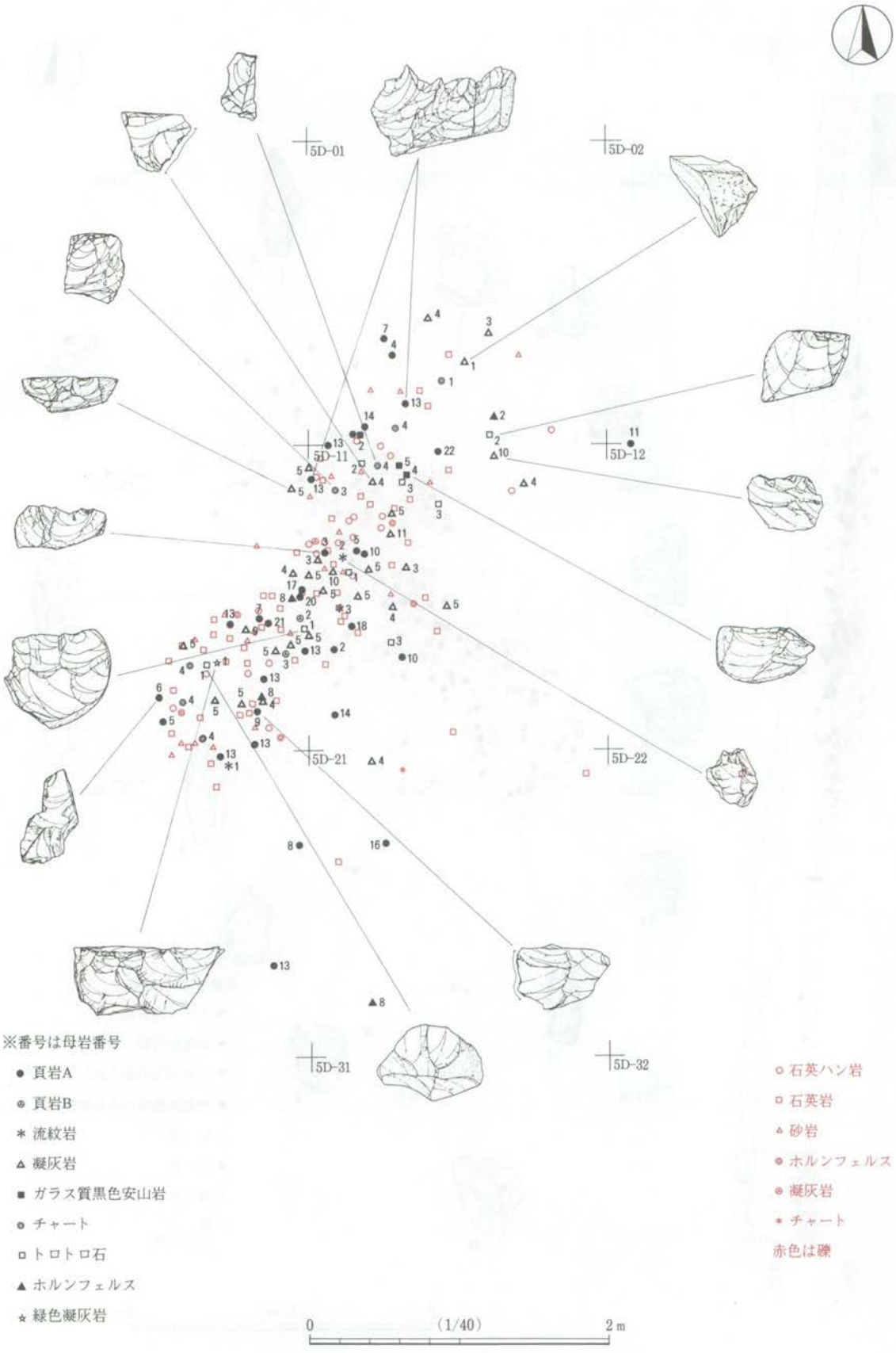
（1）第1ブロック（第11～18図、第4～7表、図版2・3）

出土状況　本調査区北側から出土したブロックである。ブロックの中で、最も出土点数が多い。平面分布は、約5ｍ×2ｍの長楕円形に分布する。礫と剥片・剥片石器類の平面・垂直分布状況は、ほぼ重複する。出土層位は、Ⅳ層下部からⅤ層上部に集中する。ブロック間の接合は、剥片・剥片石器類では第2ブロック（1資料）・第5ブロック（1資料）との接合関係が見られ、礫では第2ブロック（2資料）・第5ブロック（1資料）との接合関係が見られる。

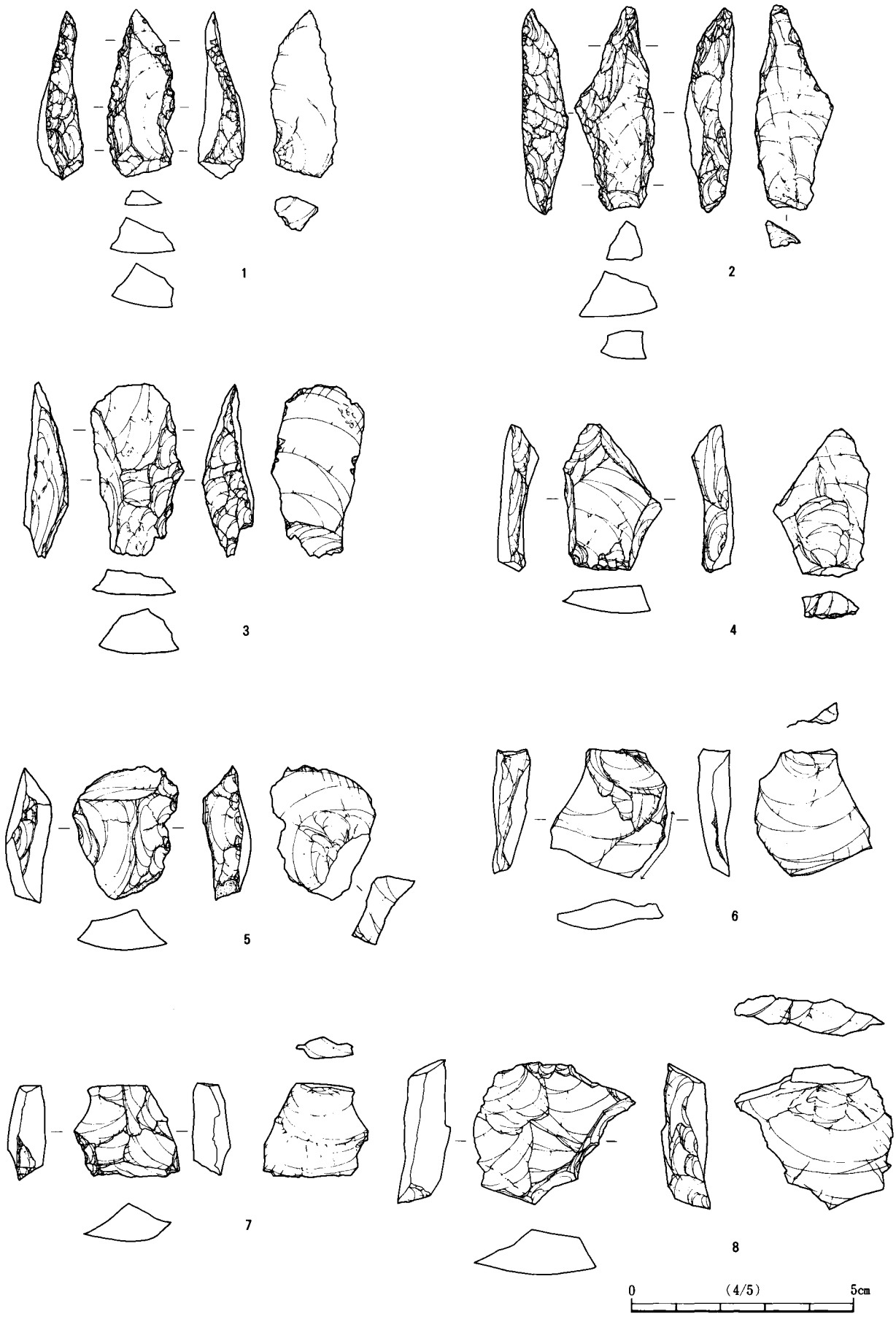
出土遺物　総計226点出土した。器種組成は、ナイフ形石器1点、角錐状石器3点、二次加工のある剥片7点、微細剥離痕のある剥片7点、剥片55点、砕片9点、石核9点、礫135点である。礫の占める割合が高い。石材別に見ると、頁岩A・凝灰岩の占める割合が高い。母岩別に見ると、頁岩A13・凝灰岩4・凝灰岩5・チャート4は5点以上で構成されているが、その他の母岩は1・2点のものがほとんどである。1・2・5は単独母岩である。1はナイフ形石器である。幅広の剥片を素材として、素材の末端部と打面部に急角度の調整加工を施している。打面は残存している。2は角錐状石器である。両側縁に比較的荒い調整加工が施されている。左側縁の中間部がやや肩が張る。先端部は、背面から微細な調整加工が施されている。打面は残っていない。3は角錐状石器である。左側縁と打面部は大きく折断されている。右側縁は、やや荒い急角度の調整加工が施されている。4は二次加工のある剥片である。幅広の剥片を素材として、両側縁は折断加工されている。角錐状石器の未製品の可能性がある。5は角錐状石器である。横長幅広剥片を素材として、素材の末端部に大きく荒い加工が施され、打面部側は部分的な加工が施されている。6～25は、二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片・剥片である。6・7は横長幅広剥片の縁辺に微細剥離痕のある剥片である。8は二次加工のある剥片である。幅広の剥片の末端部に荒い調整加工が鋸歯状に施されている。9～16・24・25はやや縦長の剥片である。いずれも背面は多方向からの剥離で構成されており、両側縁は平行ではなく不定形な剥片で、石刃と言えるものは含まれない。17～23は横長剥片である。背面は縦長剥片よりも多方向の剥離で構成される。打面は幅広のものが多い。26～35は石核である。26＋27は分割した亜角礫を素材としている。分割面を底面として、上端から交互に横長の剥片を剥離している。右上端部から剥片を剥離した際に、節理面で26と27に分割されてしまい、その後の剥離は行っていない。打面調整や頭部調整はほとんど行っていないものと思われる。28は分割剥片を素材として、分割面を打面に設定し正面側で小型の横長剥片を剥離している。29は比較的大きな分割礫を素材として、分割面を打面に設定しほぼ全周から横長剥片を剥離している。30は小型の分割礫を素材とし、交互に横長剥片を剥離している。31は不定形な板状の剥片を素材として、分割に近いかたちで剥片を剥離している。32～35は円礫を素材としている。32～34は正面のみが剥離が行われ、裏面に自然面が大きく残されている。32は大きい平坦な剥離面を打面として、やや縦長の剥片を剥離している。頭部調整が見られるが、打面調整は行われていないようである。33は分割面に数回の剥離を行った後に、分割面を打面として、横長剥片を剥離している。34は自然面を打面として、両極剥離により分割後、左側縁から貝殻状の剥片を剥離している。35は分割面を打面として、正面と裏面に多方向から剥片を剥離している。



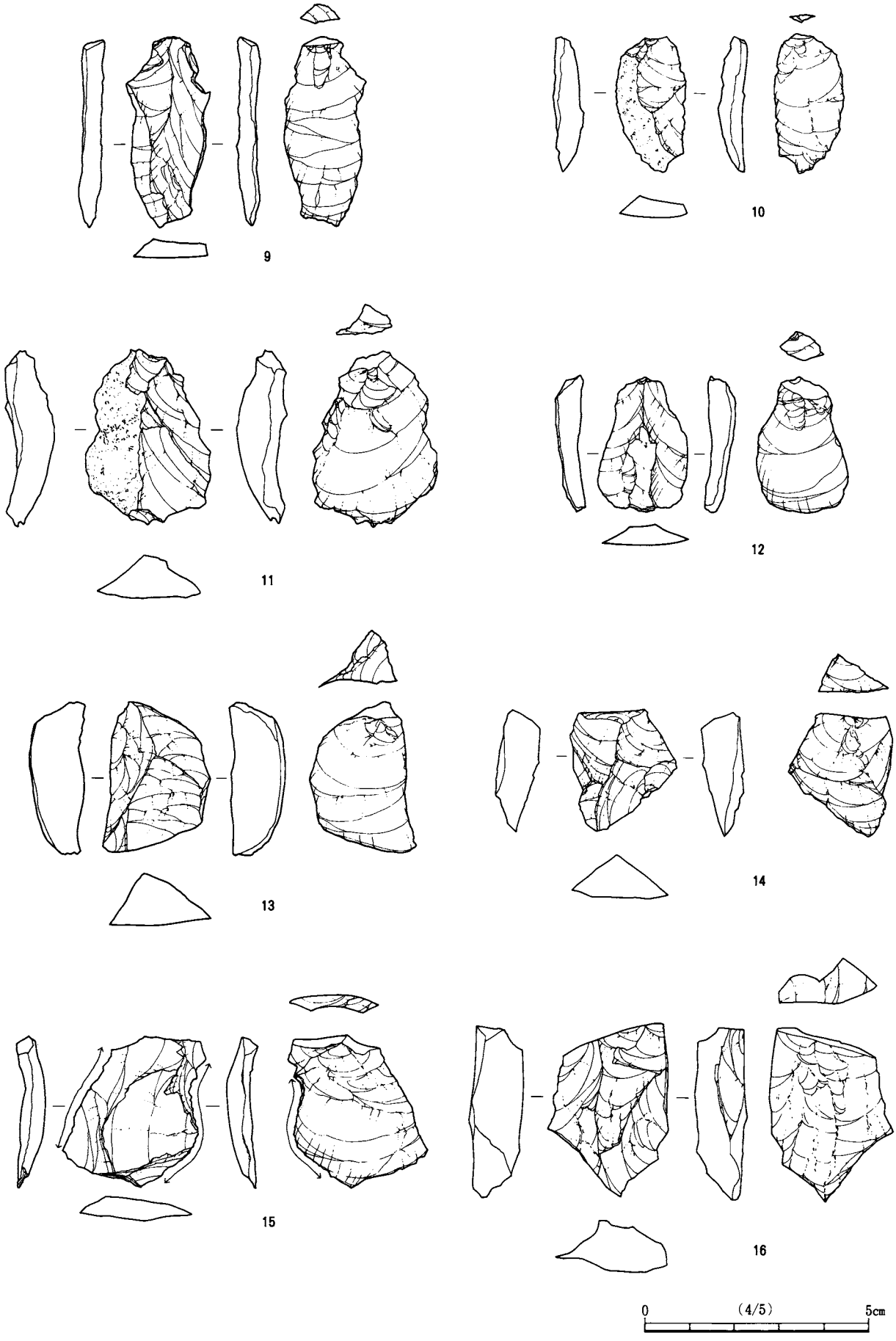
第11図　第1ブロック器種別分布図



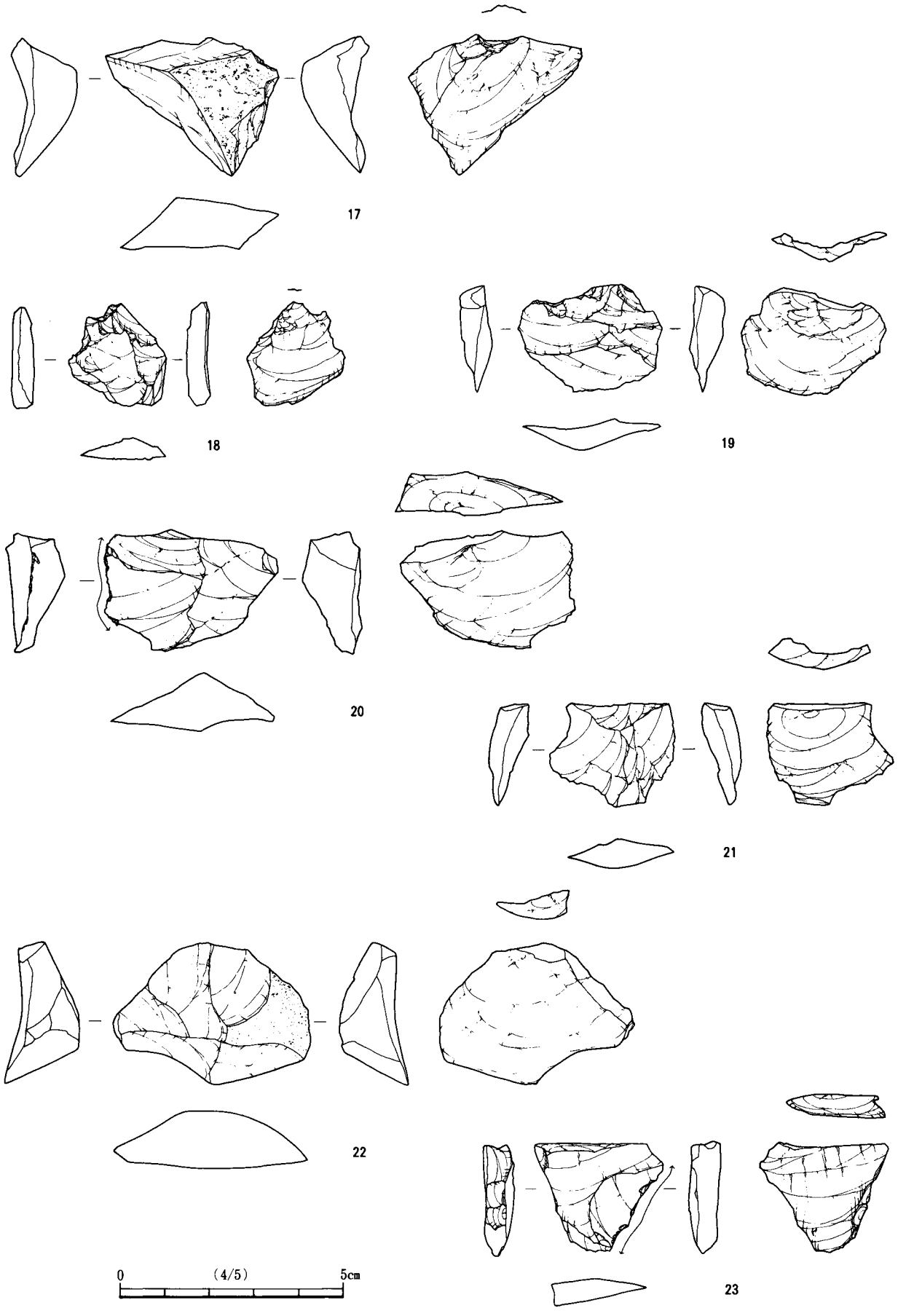
第12図　第１ブロック母岩別分布図



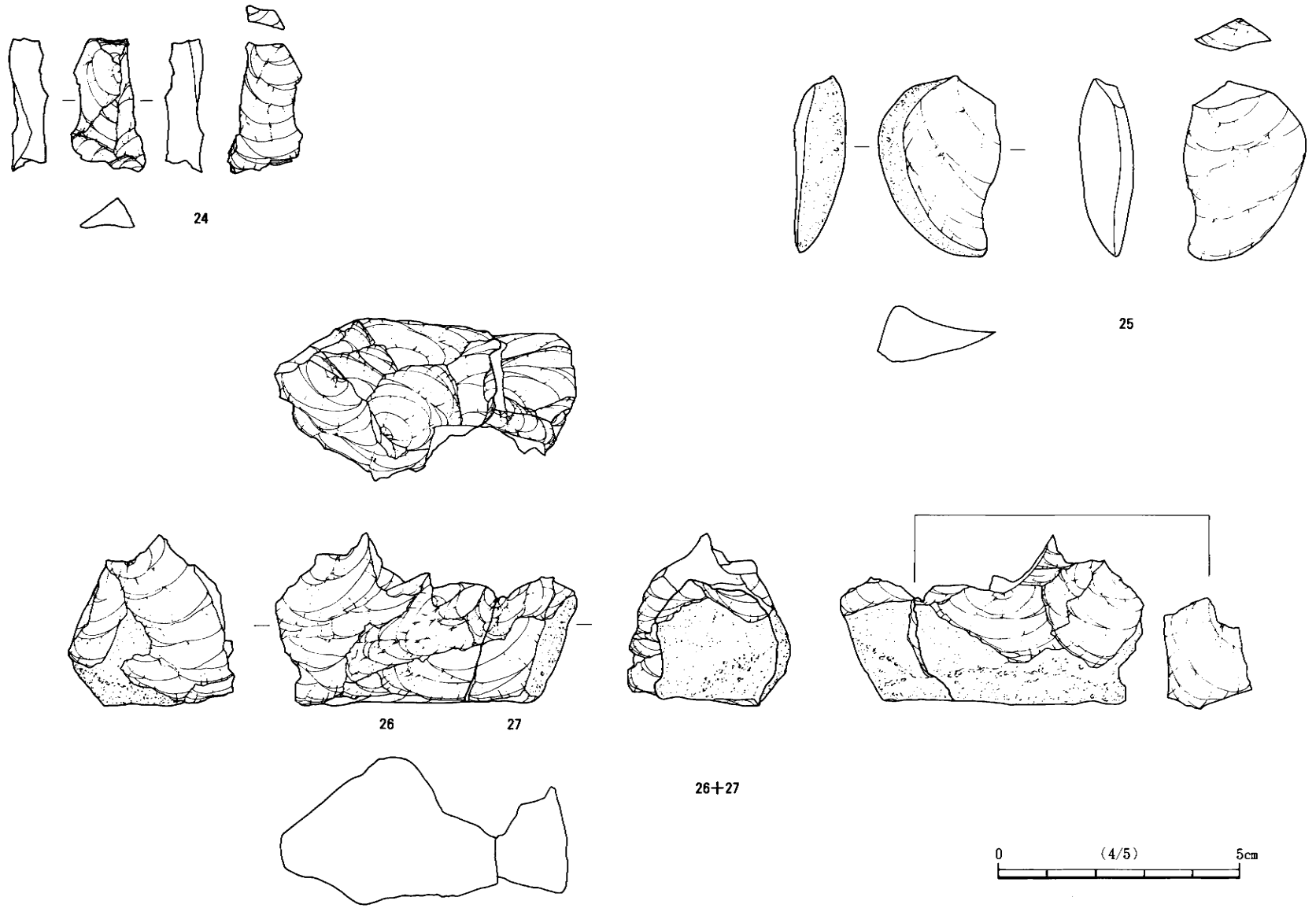
第13図　第１ブロック石器実測図（1）



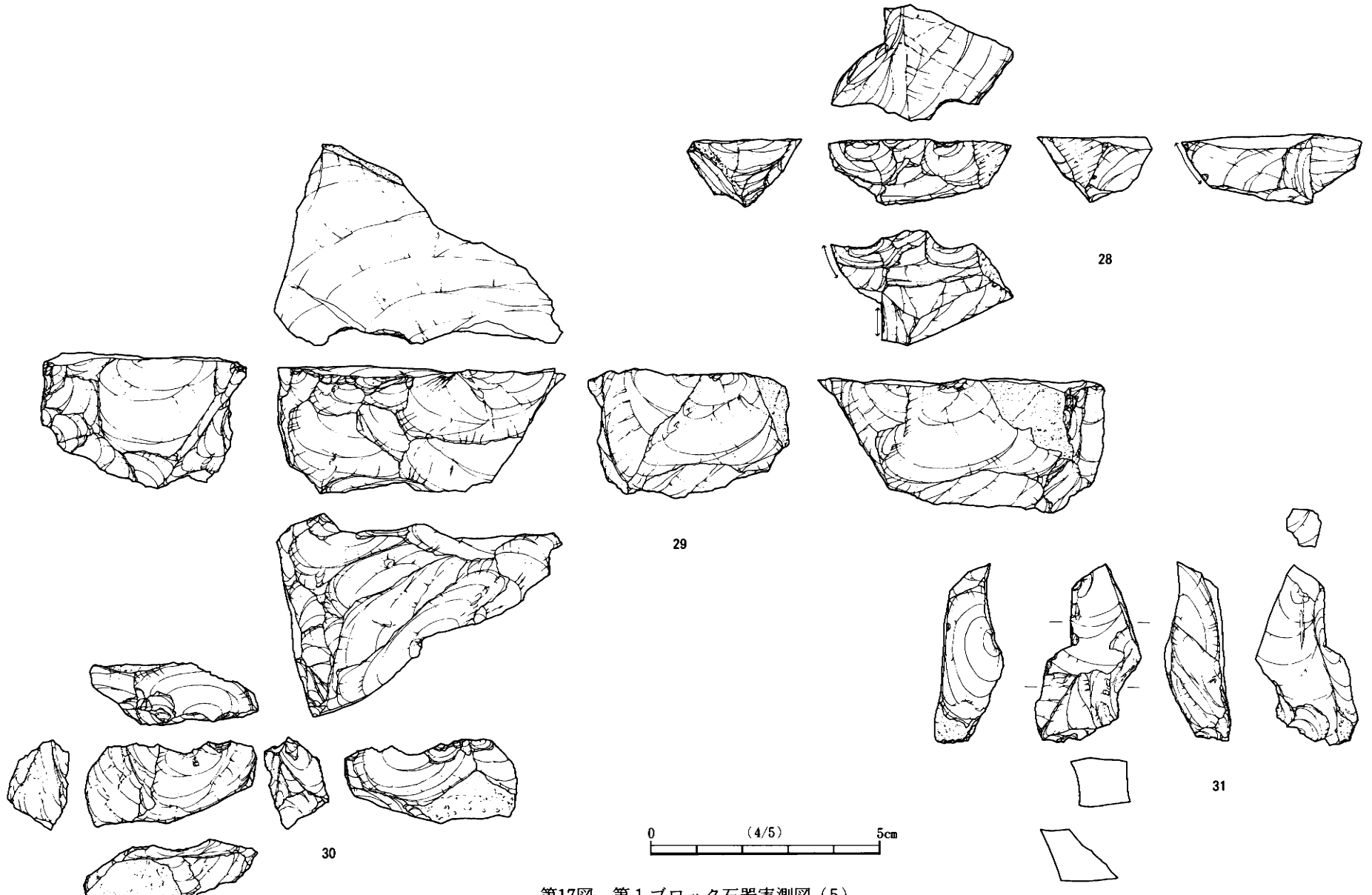
第14図　第１ブロック石器実測図（2）



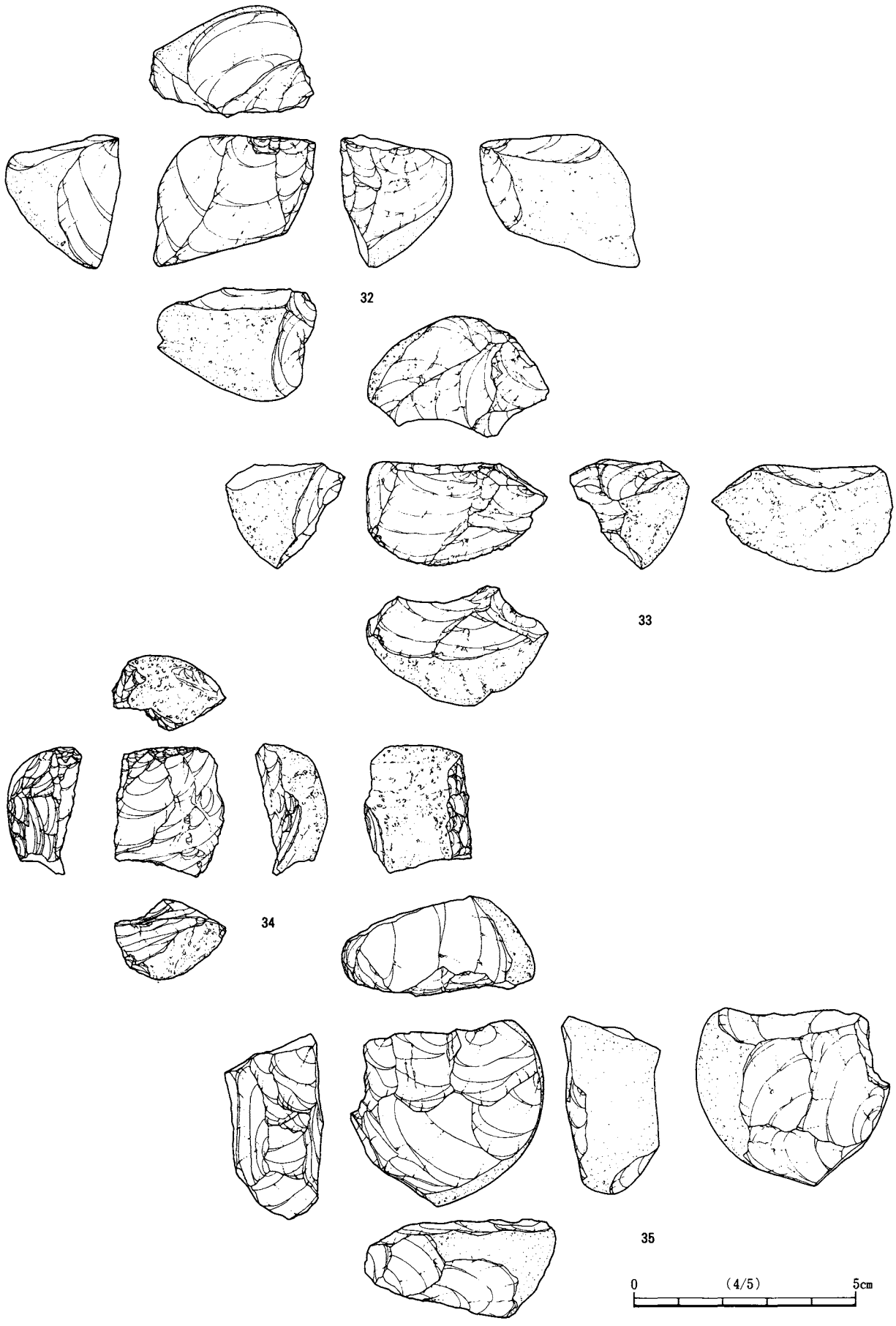
第15図　第１ブロック石器実測図（3）



第16図　第１ブロック石器実測図（4）



第17図　第１ブロック石器実測図（５）

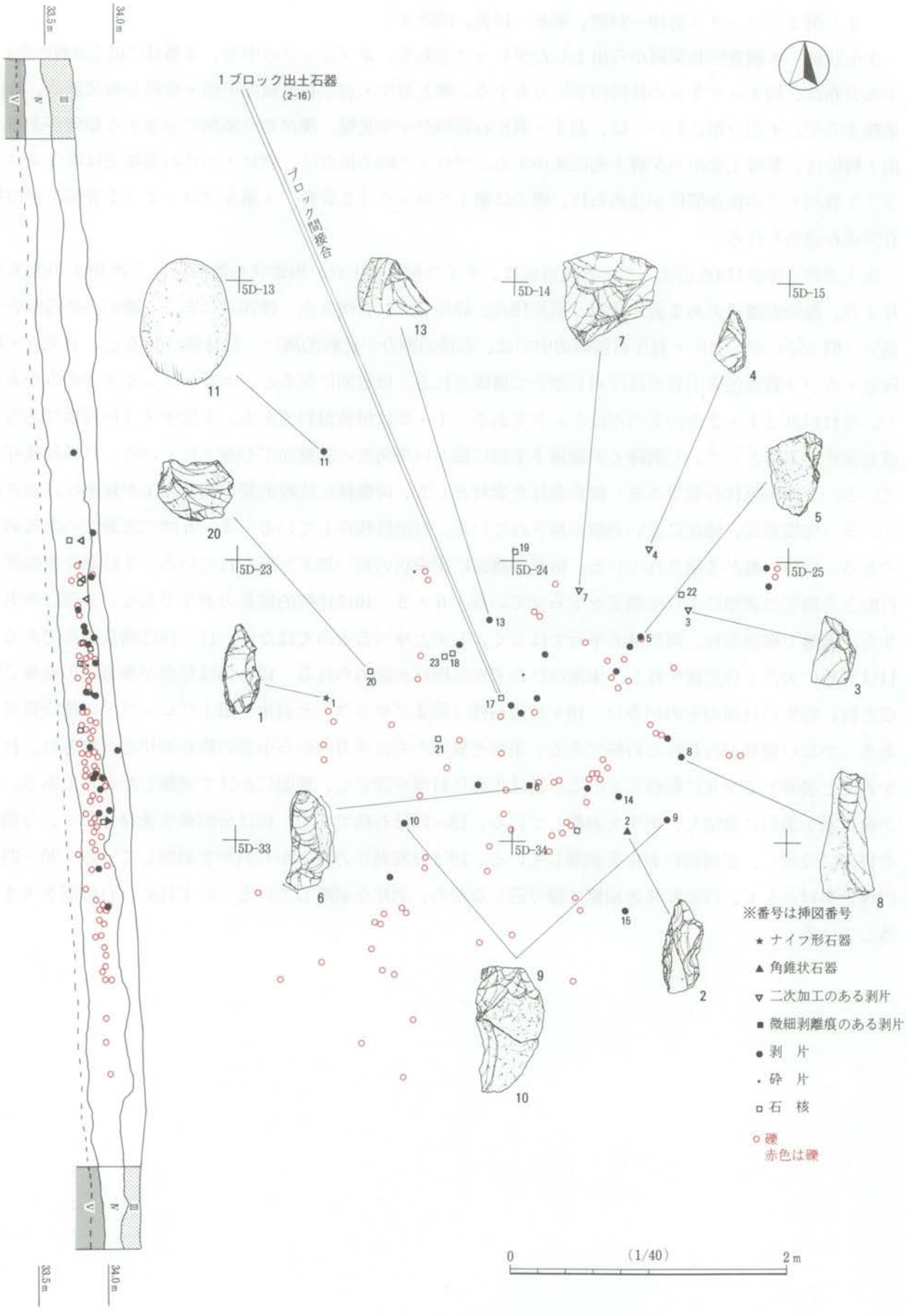


第18図　第１ブロック石器実測図（6）

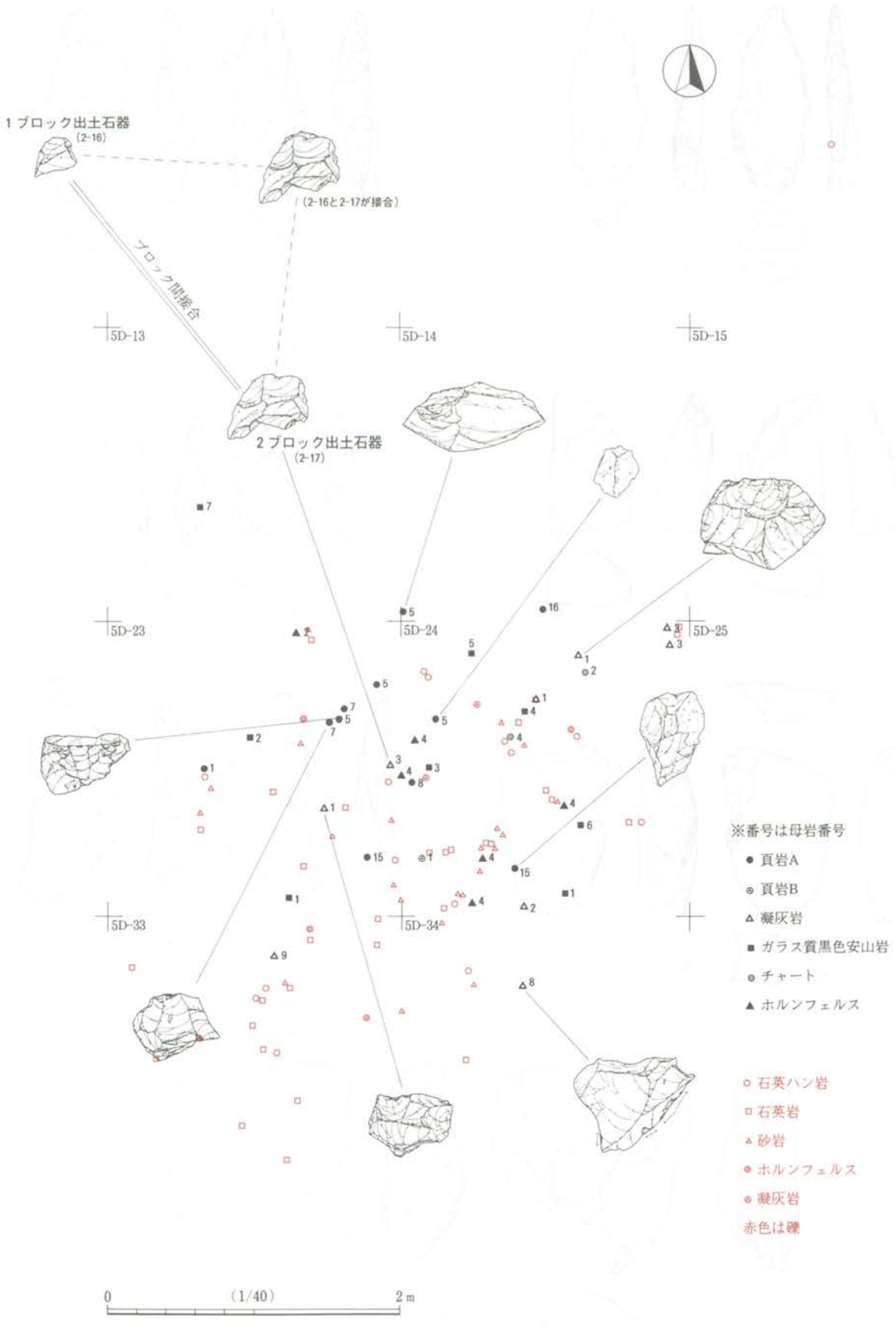
（２）第２ブロック（第19～24図、第８～10表、図版４）

出土状況　本調査区北東側から出土したブロックである。５ブロックの中で、２番目に出土点数が多い。平面分布は、約４ｍ×３ｍの長楕円形に分布する。礫と剥片・剥片石器類の平面・垂直分布状況は、ほぼ重複するが、平面分布においては、剥片・剥片石器類がやや北側、礫がやや南側に分布する傾向がある。出土層位は、Ⅳ層上部からⅣ層下部に集中する。ブロック間の接合は、剥片・剥片石器類では第１ブロック（１資料）との接合関係が認められ、礫では第１ブロック（２資料）・第５ブロック（１資料）との接合関係が認められる。

出土遺物　総計113点出土した。器種組成は、ナイフ形石器１点、角錐状石器１点、二次加工のある剥片４点、微細剥離痕のある剥片３点、剥片18点、砕片２点、石核８点、礫76点である。礫の占める割合が高い（67.3％）が、剥片・剥片石器類の中では、石核の割合が比較的高い。石材別に見ると、頁岩A・凝灰岩・ガラス質黒色安山岩がほぼ同じ割合で構成される。母岩別に見ると、ホルンフェルス４のみが５点で、それ以外は１・２点のものがほとんどである。１・２は単独母岩である。１はナイフ形石器である。縦長剥片を素材として、左側縁と右側縁下半部に細かい急角度の調整加工が施されている。打面は残存している。２は角錐状石器である。縦長剥片を素材として、両側縁に比較的荒い調整加工が鋸歯状に施されている。先端部は、樋状に近い剥離が施されている。打面は残存している。３～５は二次加工のある剥片である。折断剥離が多用されている。折断剥離面に鋸歯状の荒い加工が施されている。７は剥片末端部を折断と急角度の調整により先端部を尖らせている。６・８～10は比較的縦長の剥片である。背面は多方向からの剥離で構成され、両側縁も平行ではなく、石刃と呼べるものではない。11～15は横長剥片である。11は背面に大きく自然面を残し、末端部にわずかに擦痕が認められる。12～15は背面が多方向の剥離で構成され、幅広の打面のものが多い。16＋17は石核（第２ブロック）と剥片（第１ブロック）の接合資料である。かなり剥離が行われた石核である。正面と裏面ともに多方向から小型の横長剥片を剥離され、打面を正面と裏面とで交互に転移している。16は正面に打面を設定し、裏面にかけて剥離した剥片である。その後打面を裏面に設定し、剥片を剥離している。18～23は石核である。18は分割礫を素材として、分割面を打面に設定し、正面側に剥片を剥離している。19は分割剥片の稜上から剥片を剥離している。20～23は円礫を素材として、打面転移を頻繁に繰り返しながら、剥片を剥離している。いずれも、自然面を大きく残している。

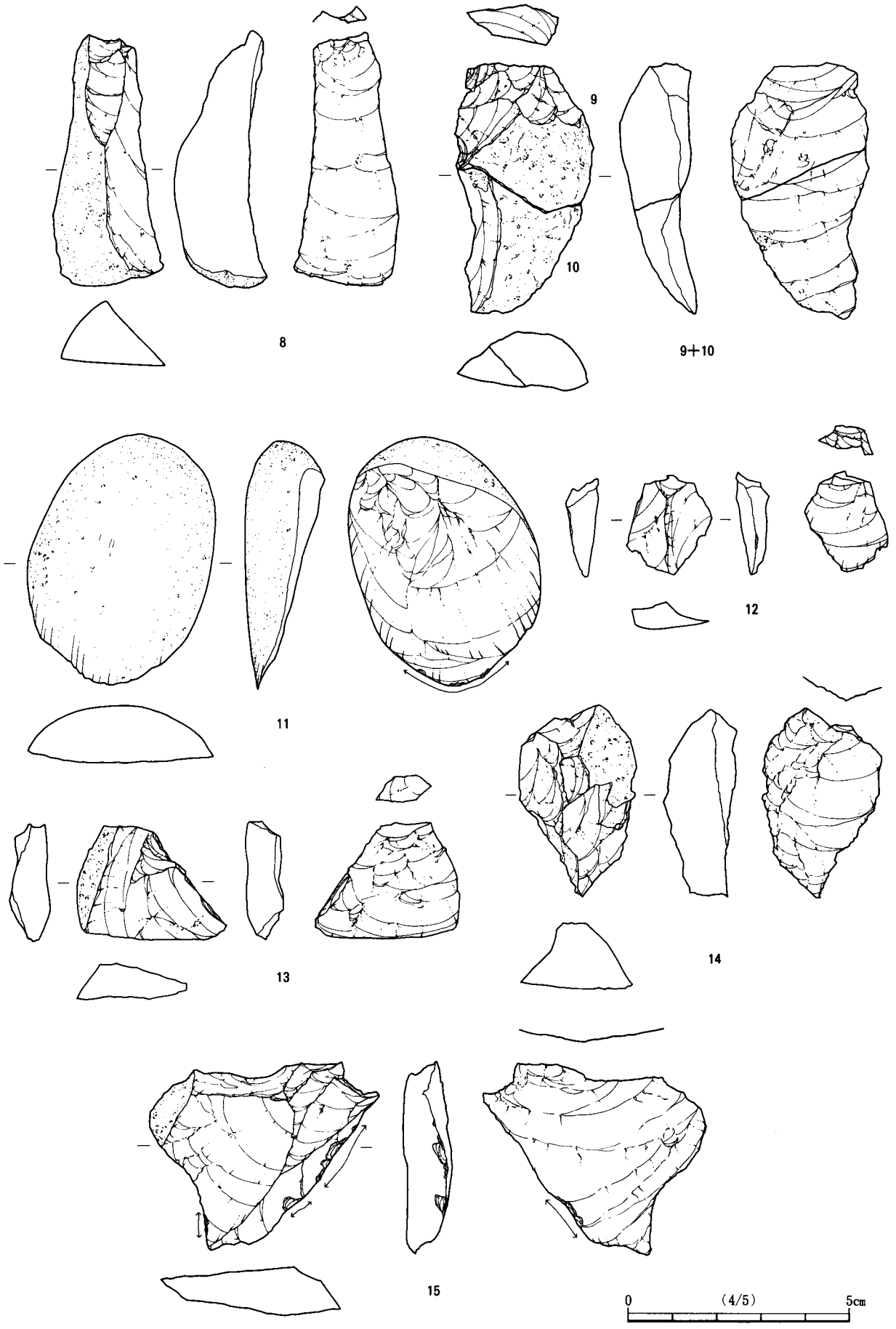


第19図　第2ブロック器種別分布図

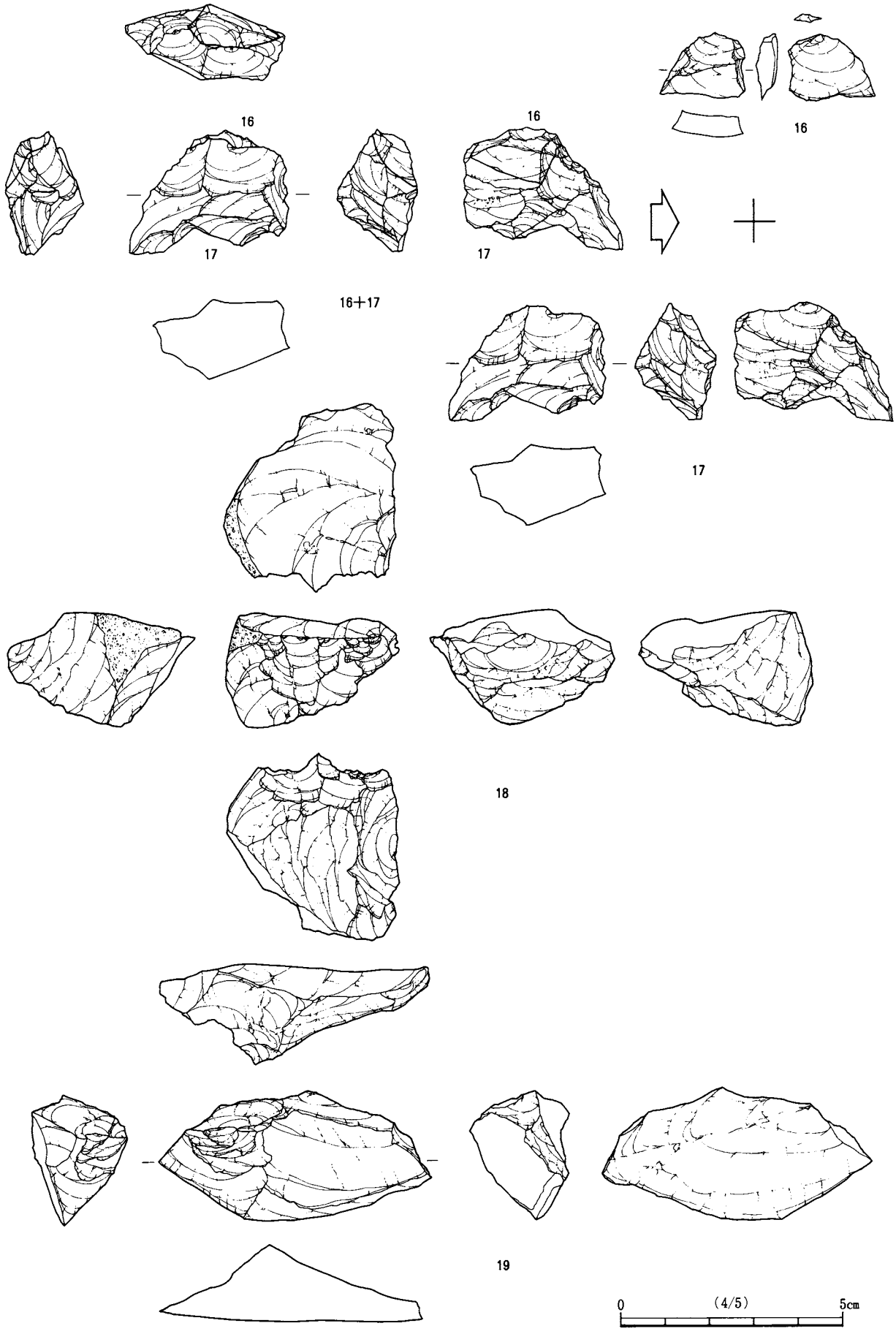


第20図　第2ブロック母岩別分布図

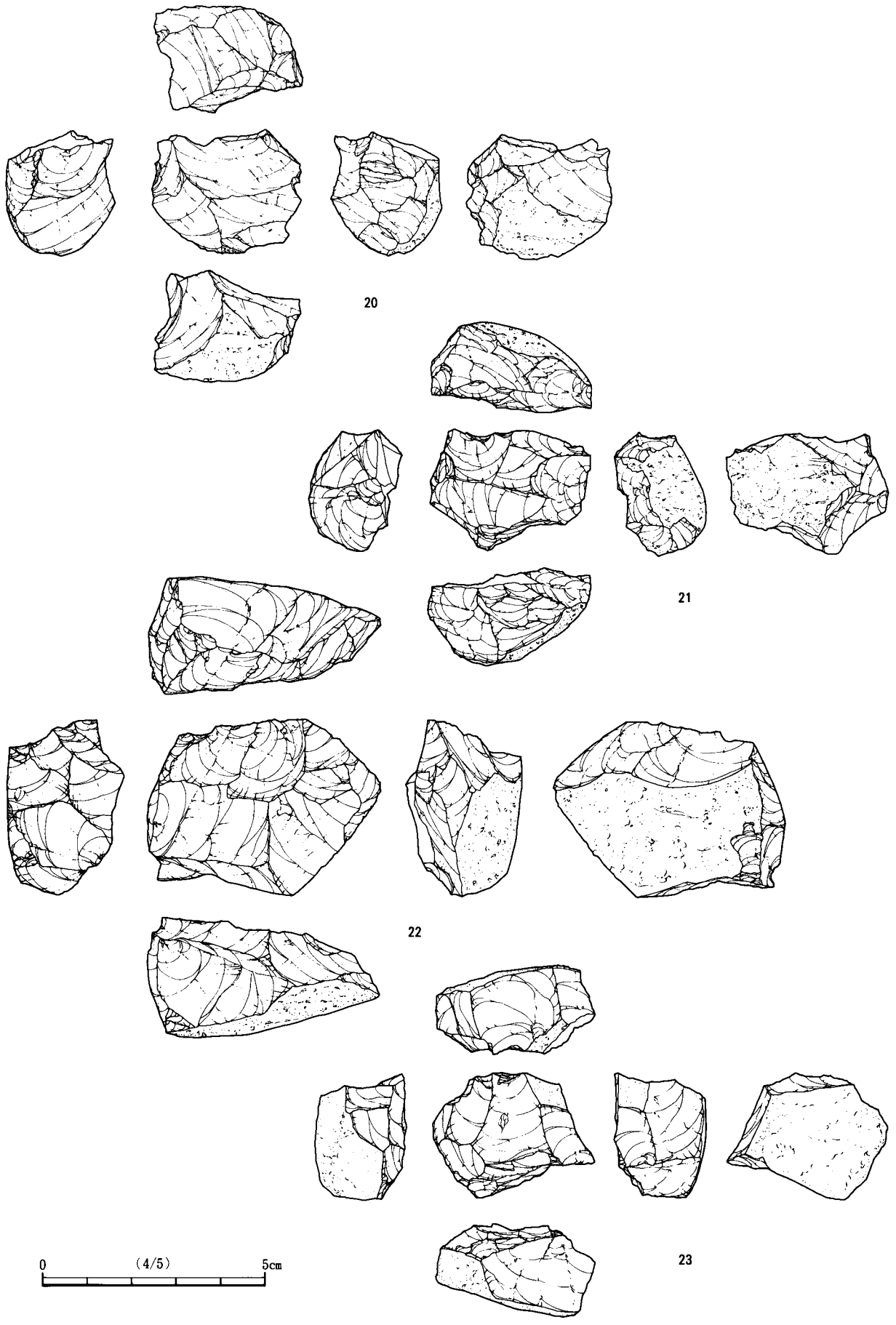
第21図　第２ブロック石器実測図（1）



第22図　第２ブロック石器実測図（２）



第23図　第２ブロック石器実測図（３）



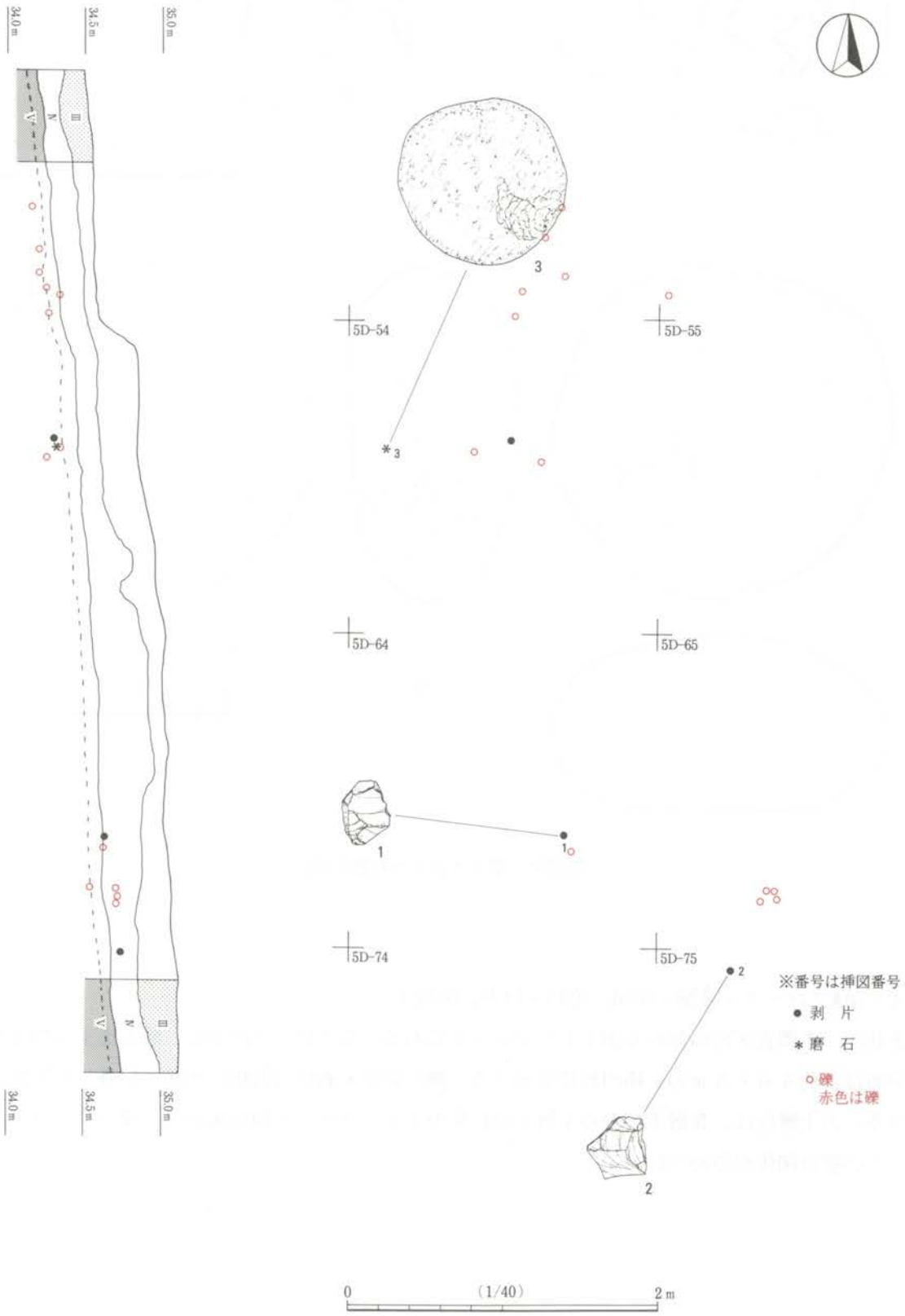
第24図　第２ブロック石器実測図（４）

（３）第３ブロック（第25～27図、第11・12表、図版２・４）

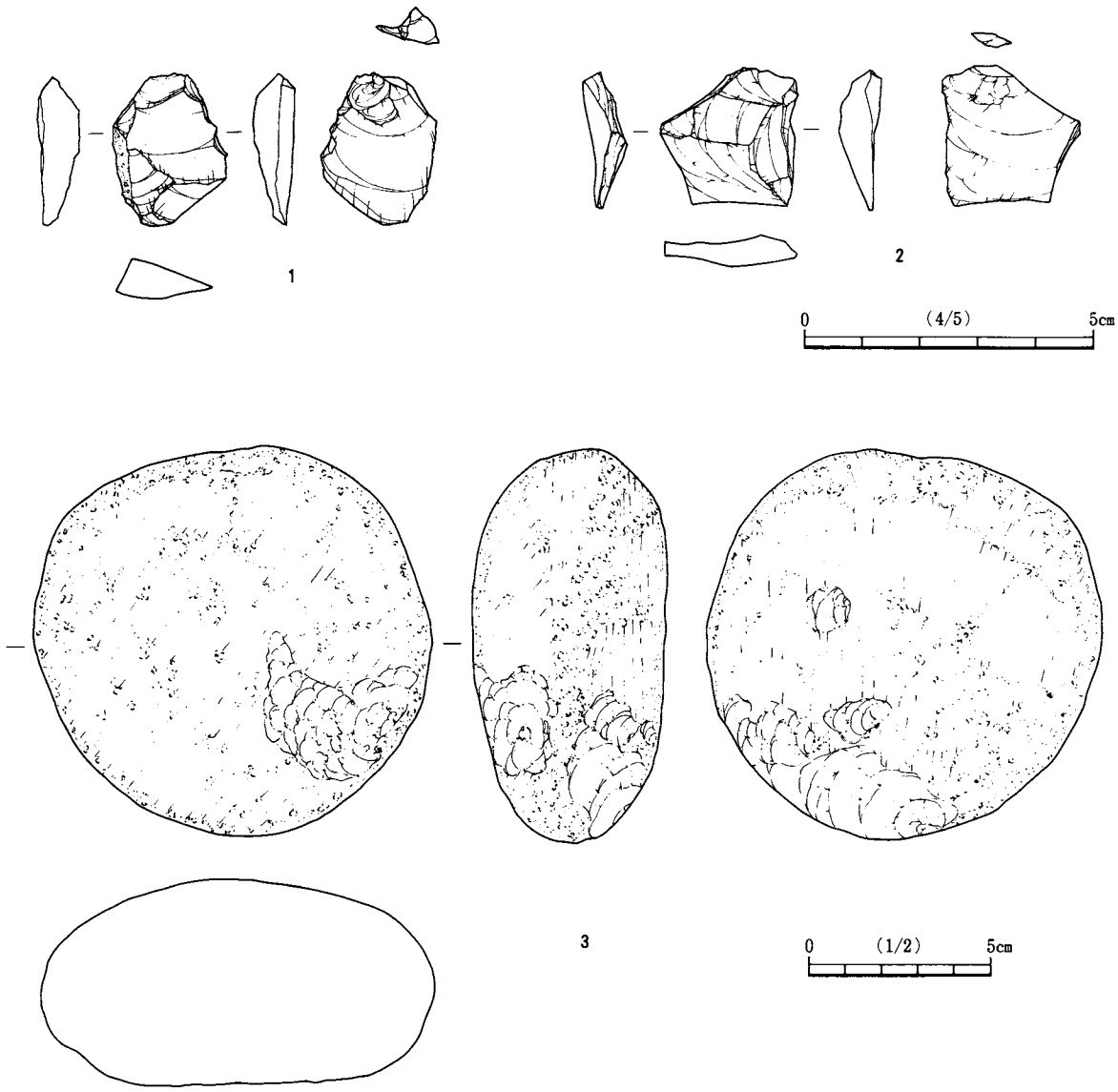
出土状況　本調査区南東側から出土したブロックである。ブロックの中で、出土点数は少ない。平面分布は、約５ｍ×２ｍの長楕円形の範囲に散漫に分布する。礫と剥片・剥片石器類の平面・垂直分布状況は、ほぼ重複する。出土層位は、Ⅳ層下部からⅤ層上部に集中する。ブロック間の接合は、礫が第４ブロック（１資料）・第５ブロック（１資料）との接合関係が認められる。

出土遺物　総計17点出土した。器種組成は、剥片３点、磨石１点、礫13点である。１・２は剥片である。２は左側縁が折断されている。３は磨石である。多孔質安山岩の楕円形礫を素材として、ほぼ全面に研磨痕が見られ、平坦面の研磨が顕著である。外周部は敲打した後に研磨されている。おそらく、外周部を敲打により成形した後に、研磨により楕円形の磨石を作り上げたものと思われる。このような形態をした磨石は、この時期に特徴的に見られるもので注目される。

第25図　第３ブロック母岩別分布図



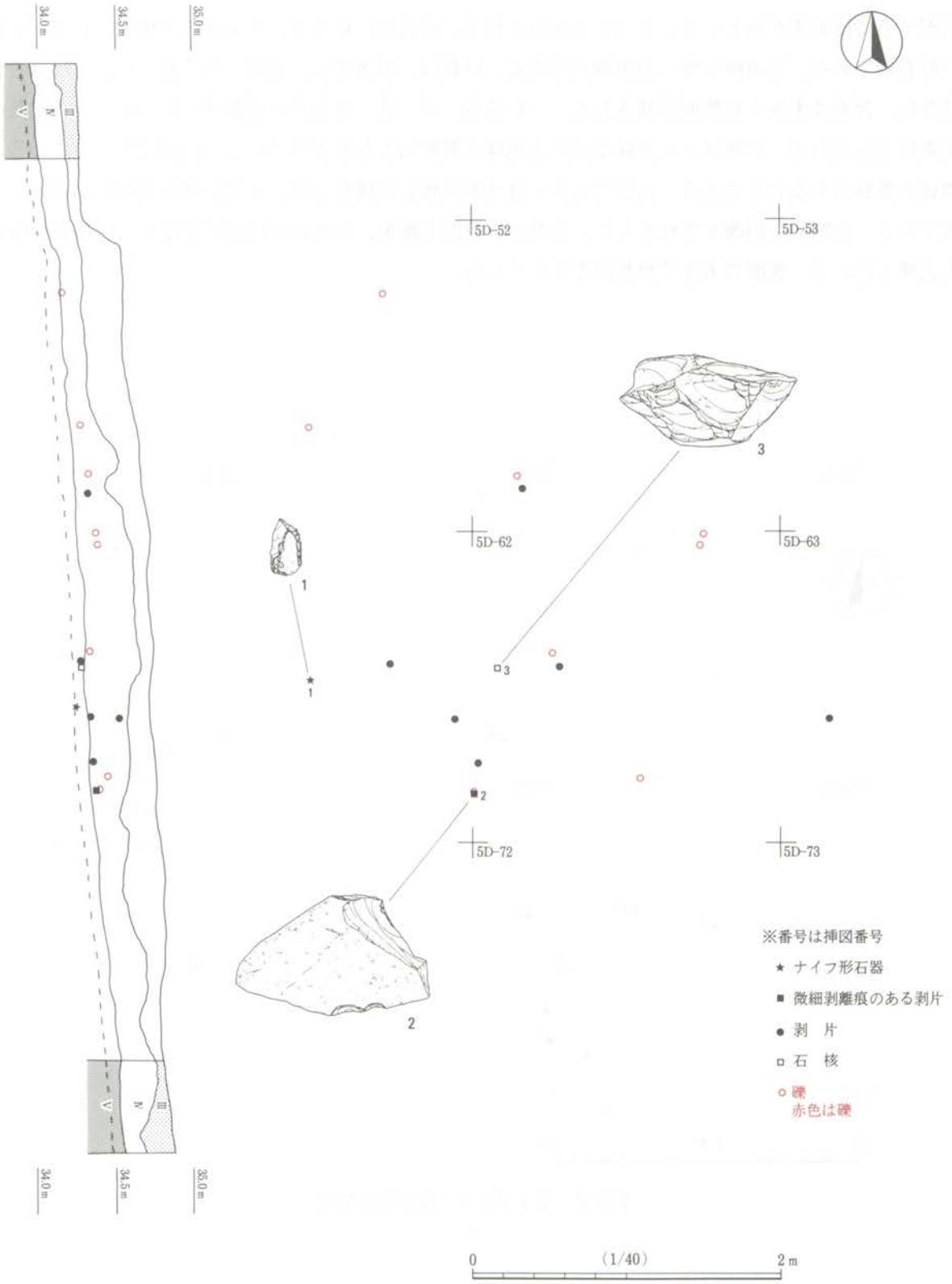
第26図　第３ブロック器種別分布図



第27図　第３ブロック石器実測図

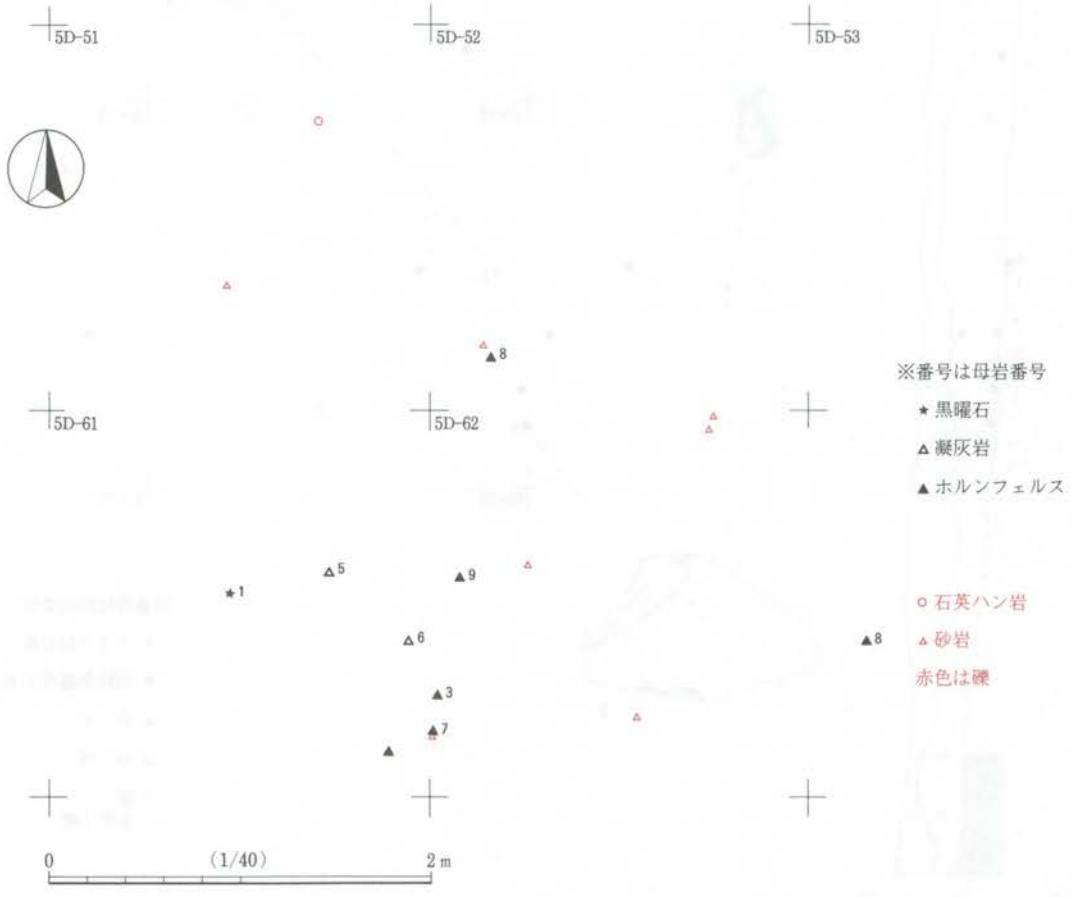
（４）第4ブロック（第28～30図、第13・14表、図版４）

出土状況　本調査区南西側から出土したブロックである。５ブロックの中で、最も出土点数が少ない。平面分布は、約４ｍ×３ｍの長楕円形に分布する。礫と剥片・剥片石器類の平面・垂直分布状況は、ほぼ重複する。出土層位は、Ⅳ層下部からⅤ層上部に集中する。ブロック間の接合は、礫が第３ブロック（１資料）との接合関係が認められる。

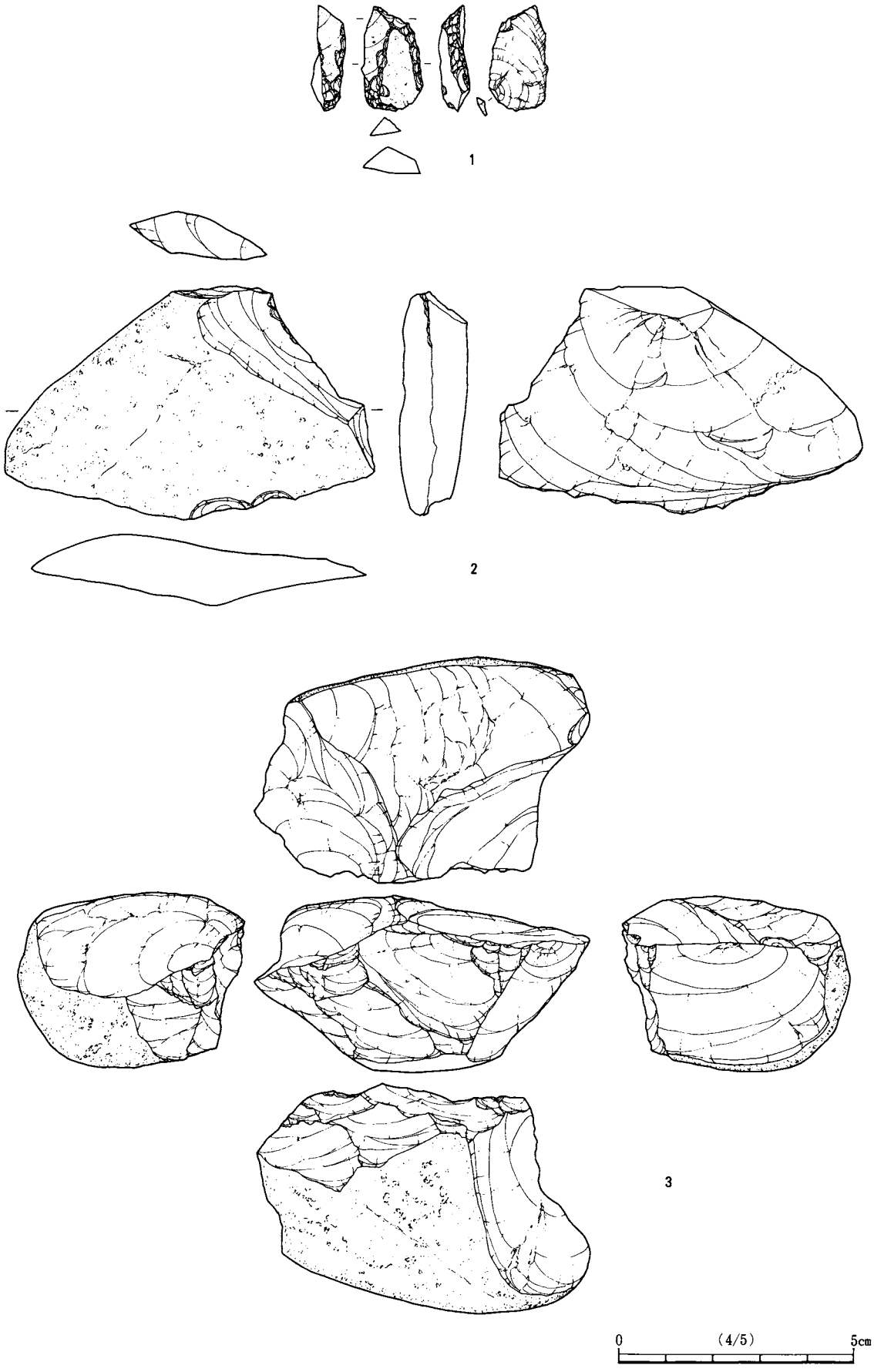


第28図　第4ブロック器種別分布図

出土遺物　総計16点出土した。器種組成は、ナイフ形石器１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片５点、砕片１点、石核１点、礫７点である。石材組成では、ホルンフェルスの占める割合が高く（37.5％）、黒曜石が１点ではあるが出土していることも注目される。母岩別に見ると、１・２点で構成される。１はナイフ形石器である。当遺跡で唯一の黒曜石である。材質は、半透明で、気泡が多く見られ、それほど良質ではない。背面は大きく自然面が残される。いわゆる「ズリ状」原石から剥離されたと思われる縦長の剥片を素材としている。右側縁と左側縁基部に急角度の調整加工が施されている。打面は残存している。２は微細剥離痕のある剥片である。背面に大きく自然面を残した横長剥片の末端に微細剥離痕がある。３は石核である。分割した円礫を素材として、分割面を数回剥離後、分割面を打面に設定して、横長幅広の剥片を剥離している。裏面に大きく自然面を残している。



第29図　第４ブロック母岩別分布図

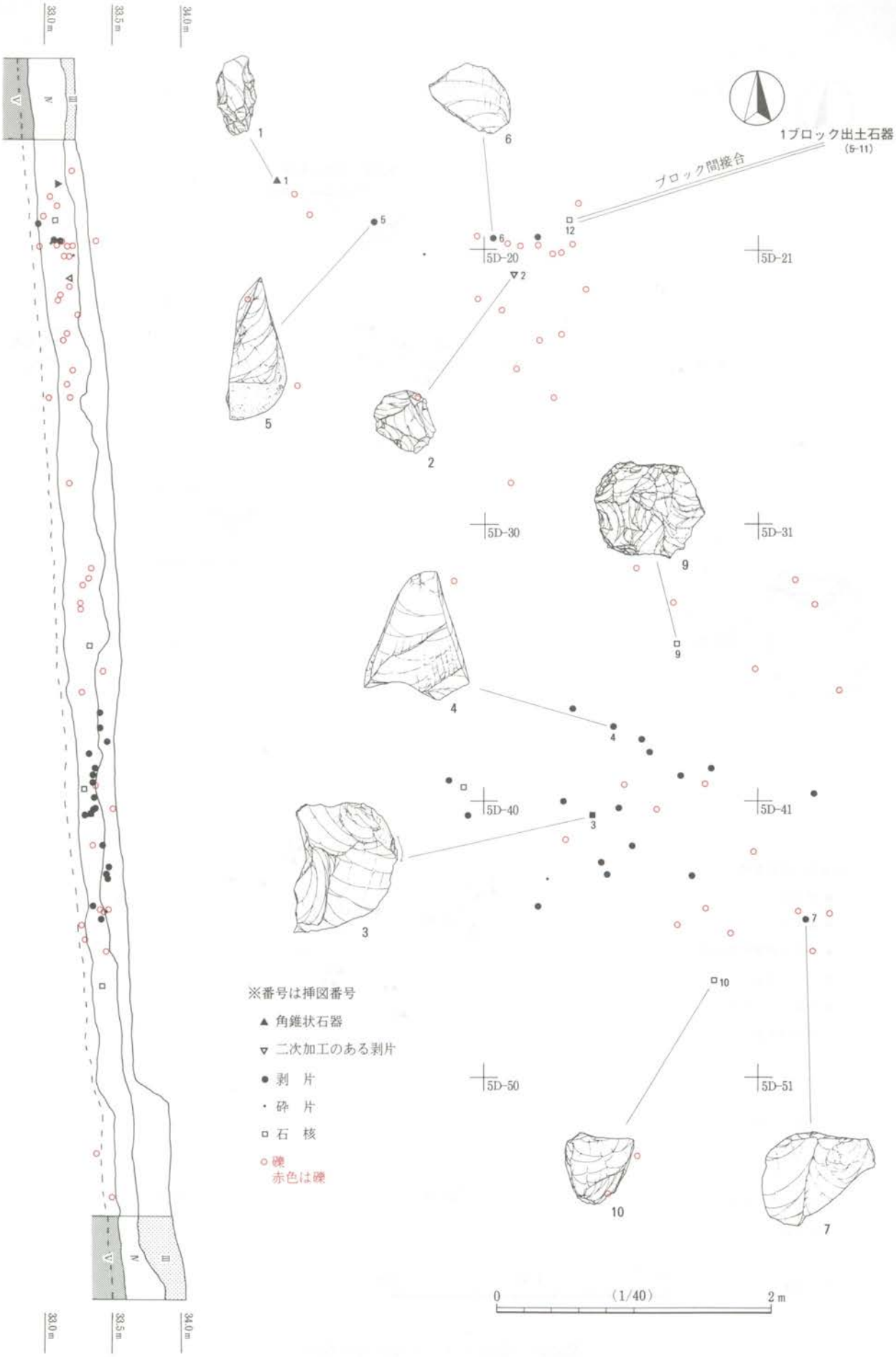


第30図　第４ブロック石器実測図

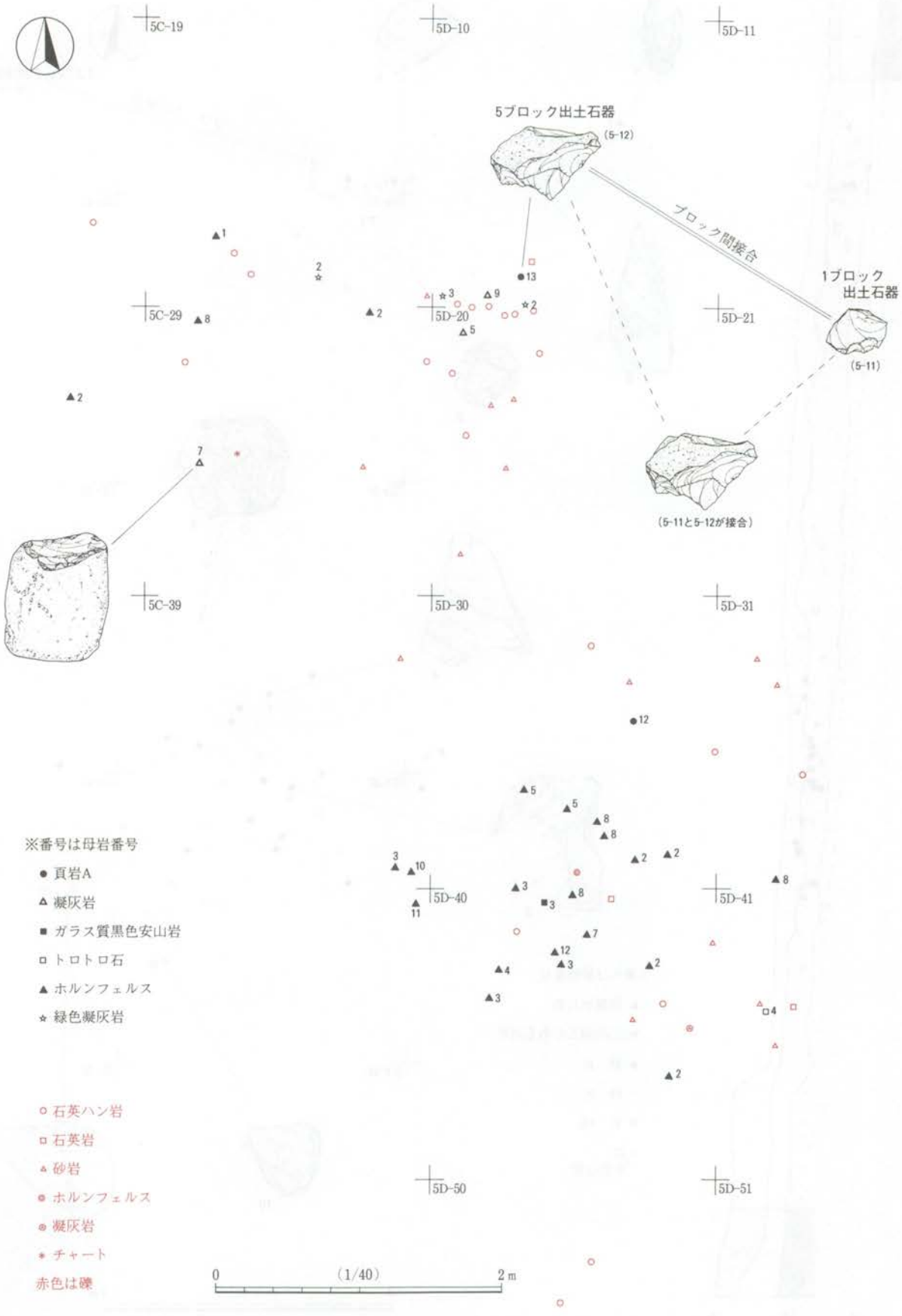
（５）第5ブロック（第31～36図、第15・16表、図版４）

出土状況　本調査北西側から出土したブロックである。５ブロックの中で、３番目に出土点数が多い。平面分布は、約７ｍ×４ｍの長楕円形に分布する。礫と剥片・剥片石器類の平面・垂直分布状況は、ほぼ重複する。出土層位は、Ⅳ層上部からⅤ層上部に集中する。ブロック間の接合は、剥片・剥片石器類では第１ブロック（１資料）との接合関係が認められ、礫では第1ブロック（１資料）・第2ブロック（２資料）・第３ブロック（１資料）との接合関係が認められる。

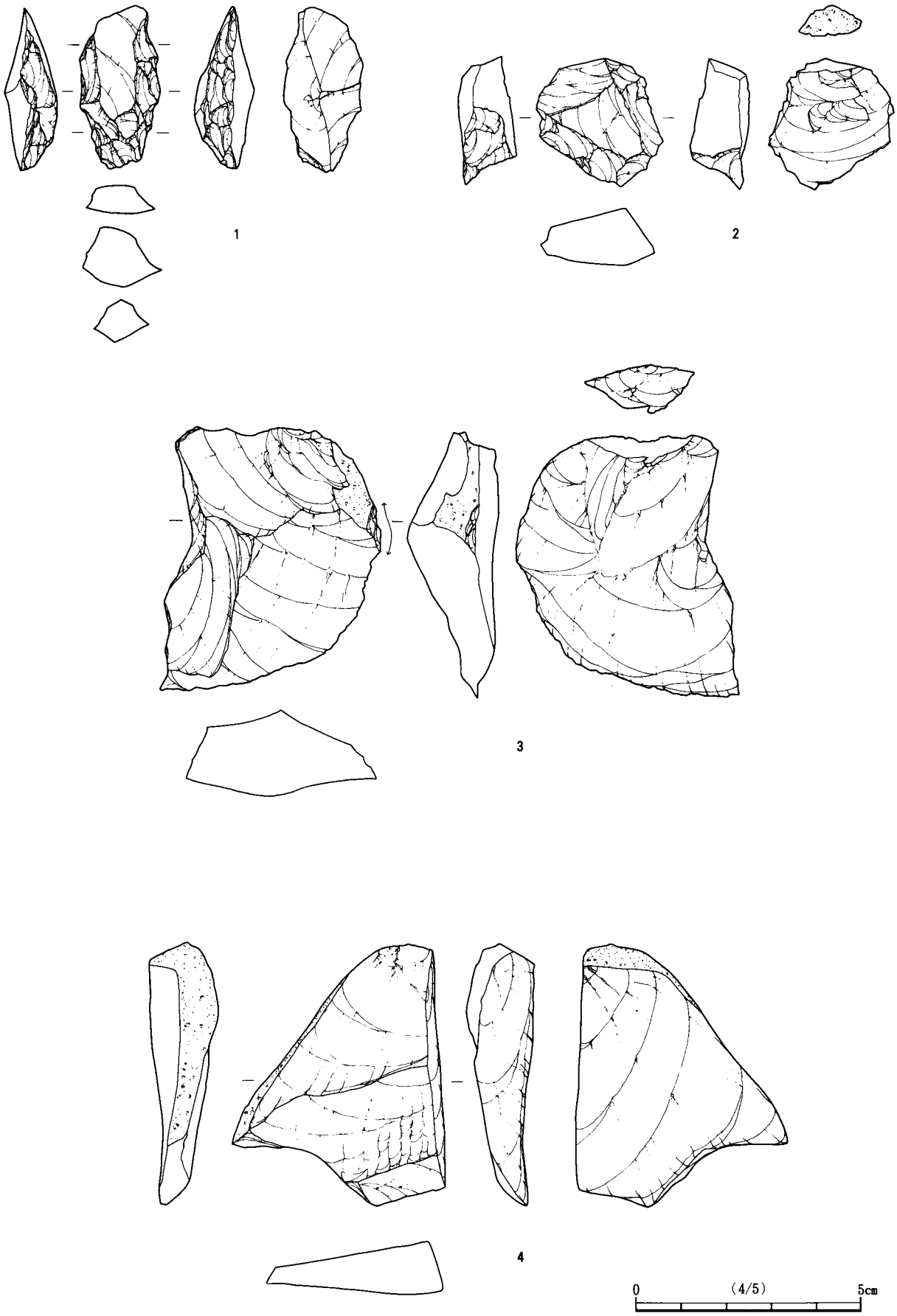
出土遺物　総計77点出土した。器種組成は、角錐状石器１点、二次加工のある剥片１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片21点、砕片３点、石核４点、礫46点である。石材別に見るとホルンフェルスの占める割合が高く（29.9％）、緑色凝灰岩（グリーンタフ）が２点ではあるが出土していることが注目される。母岩別に見ると、ホルンフェルス２・８が５点以上で構成され、その他は１・２点で構成される。１は単独母岩である。１は角錐状石器である。厚みのある横長剥片を素材として、剥片末端部と打面部側に比較的荒い加工が鋸歯状に施されている。２は剥片末端部に荒い加工が施されている。３は幅広の剥片の右側縁に微細剥離痕が施されている。４～７は不定形な剥片である。８は礫器である。楕円形の礫を素材として、末端部を大きく剥離し、縁辺には微細な剥離痕が多く見られる。石核の可能性もある。９・10は打面転移が頻繁でサイコロ状の形態を示す石核である。11＋12は石核（第5ブロック）と二次加工のある剥片（第1ブロック）の接合資料である。分割礫を素材とした打面転移の頻繁な石核である。11は分割面側を剥離した横長剥片を素材として、末端部に二次加工が施されている。背腹両面ともにポジティブ面となっている。



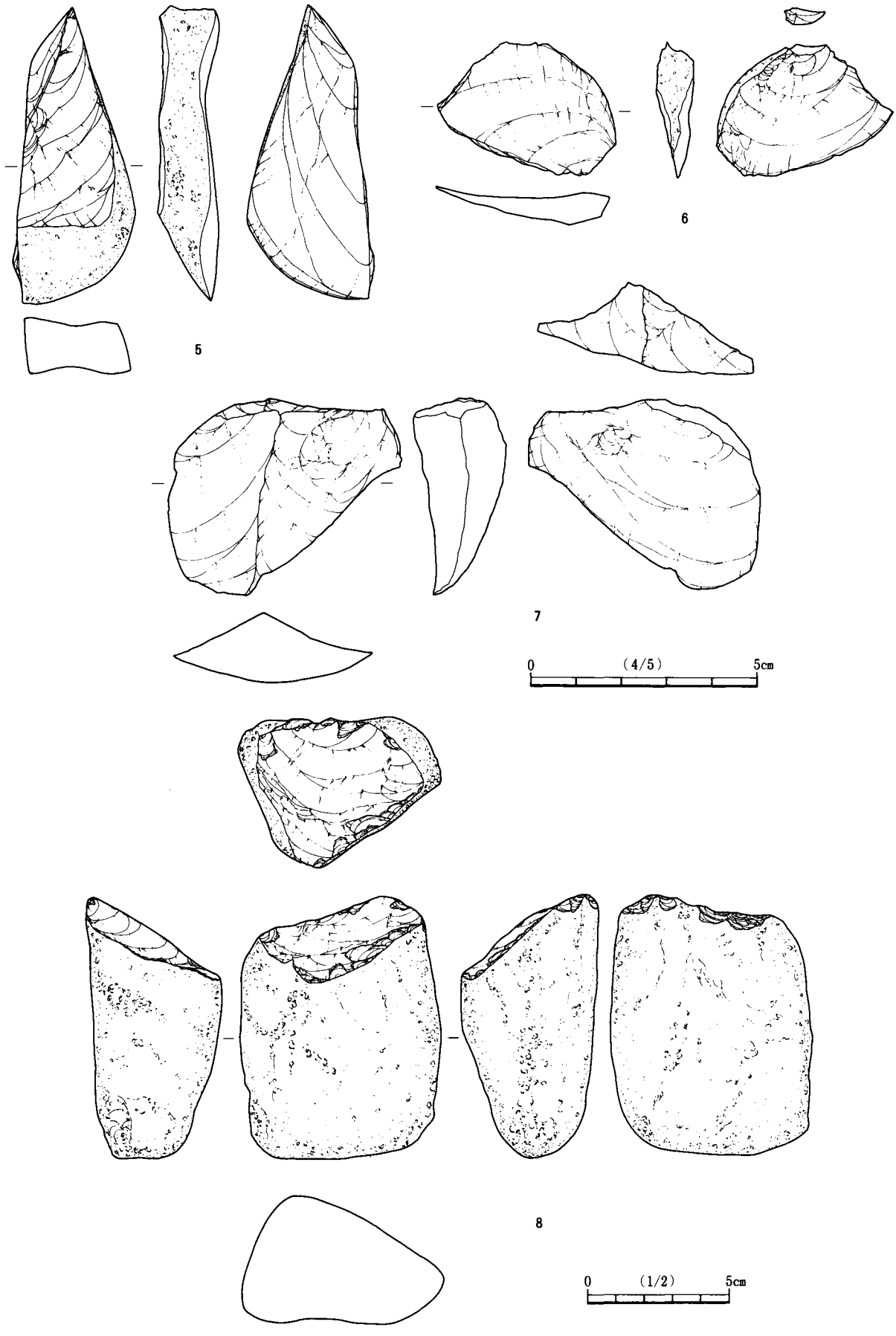
第31図　第5ブロック器種別分布図



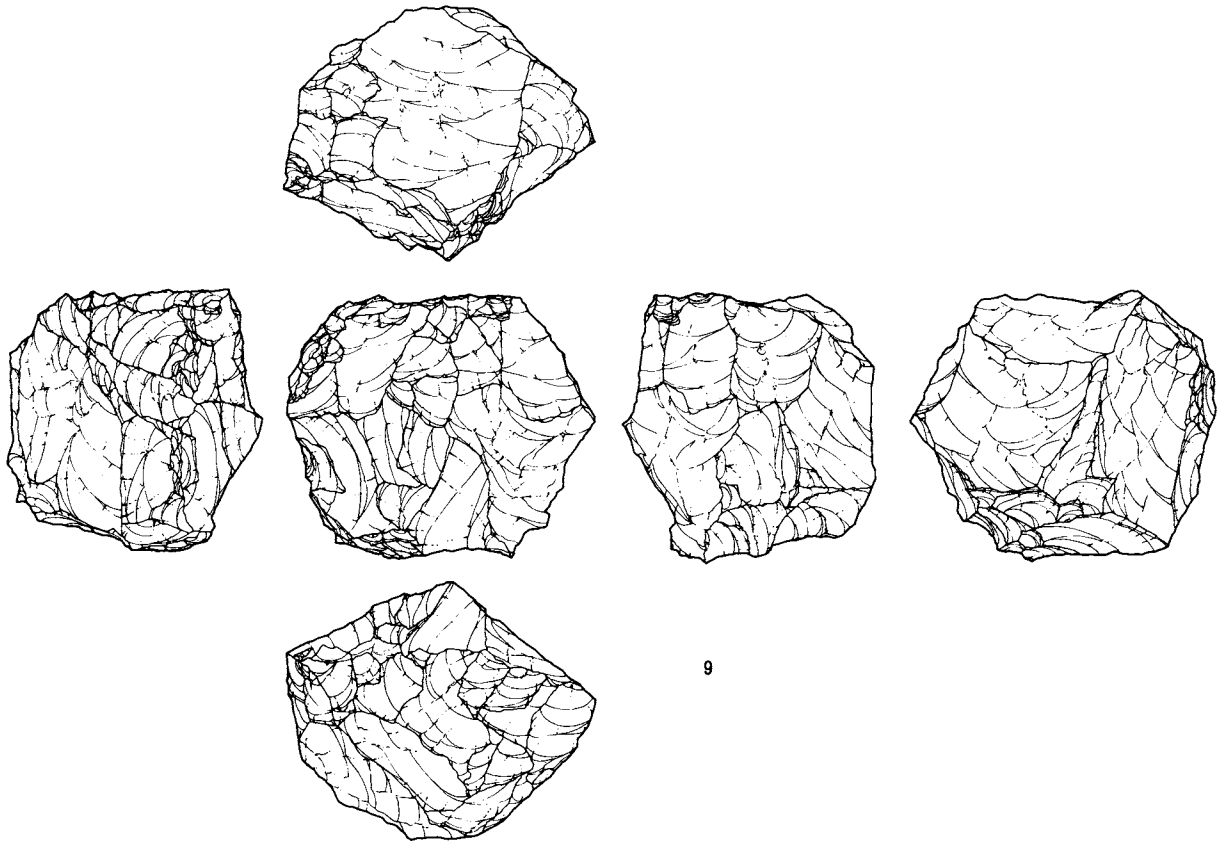
第32図　第５ブロック母岩別分布図

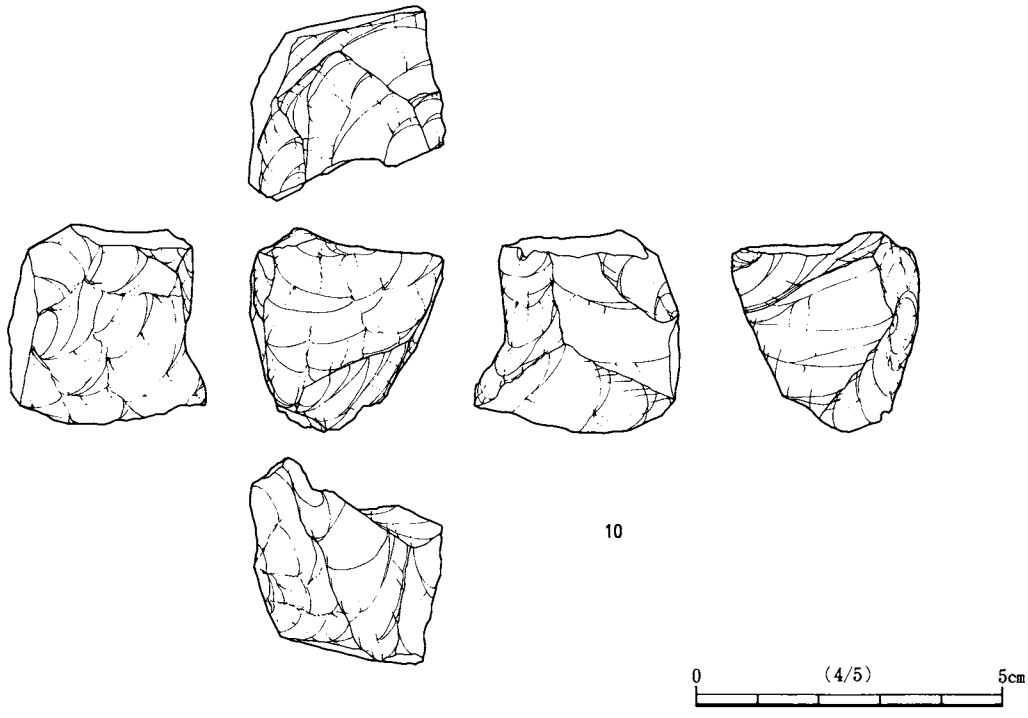


第33図　第５ブロック石器実測図（1）

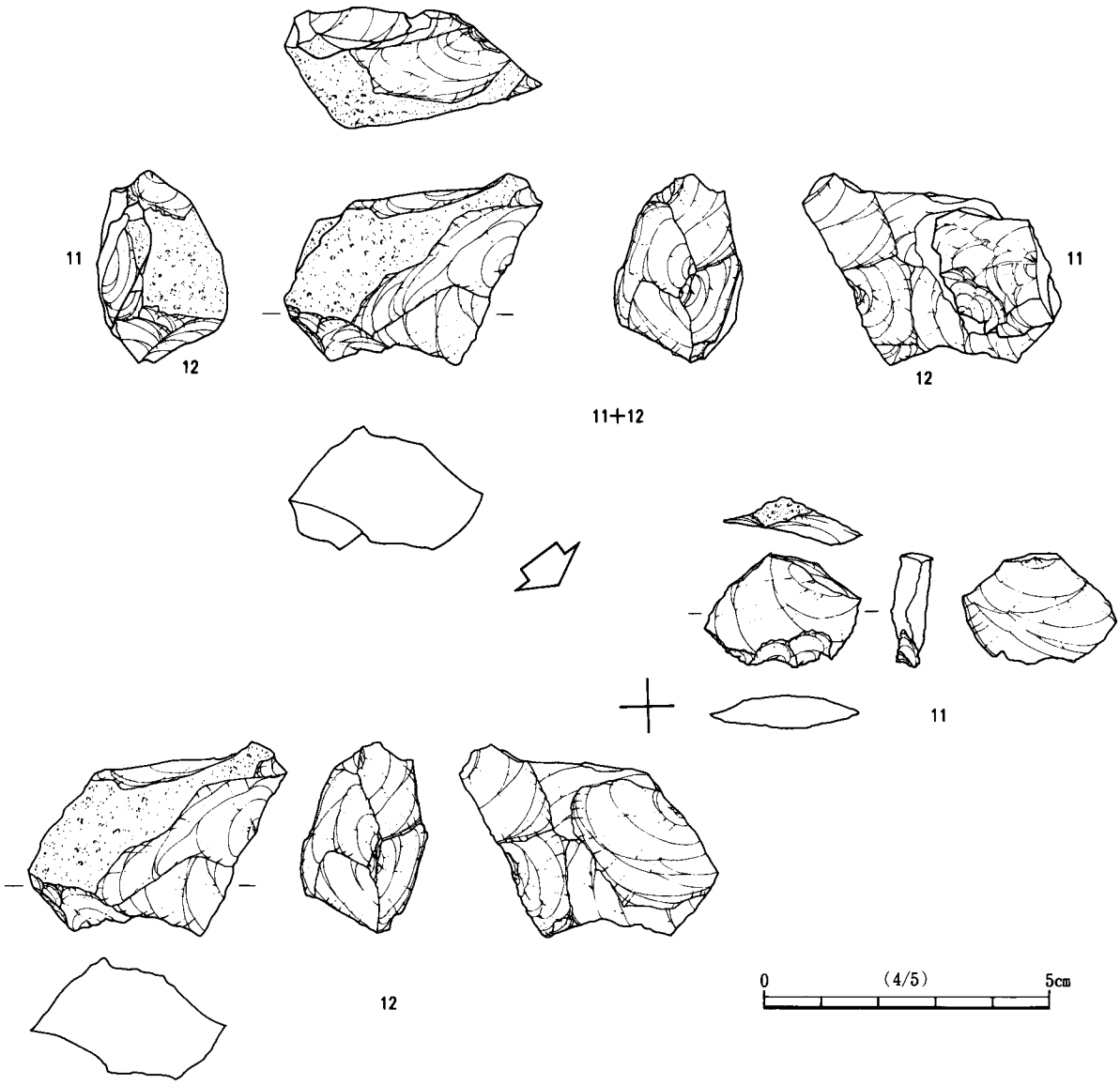


第34図　第５ブロック石器実測図（２）





第35図　第５ブロック石器実測図（３）



第36図　第５ブロック石器実測図（４）

第4表　第1ブロック石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥　片	砕　片	石　核	礫	総　計	組成比
頁岩A 2					1				1	0.4%
頁岩A 3							1		1	0.4%
頁岩A 4			1						1	0.4%
頁岩A 5		1			2				3	1.3%
頁岩A 6							1		1	0.4%
頁岩A 7				1	1				2	0.9%
頁岩A 8					1				1	0.4%
頁岩A 9				1	1				2	0.9%
頁岩A 10					1	1			2	0.9%
頁岩A 11					2				2	0.9%
頁岩A 13				1	6		1		8	3.5%
頁岩A 14					2				2	0.9%
頁岩A 16		1							1	0.4%
頁岩A 17					1				1	0.4%
頁岩A 18					1				1	0.4%
頁岩A 20					1				1	0.4%
頁岩A 21					1				1	0.4%
頁岩A 22					1				1	0.4%
計		2	1	3	22	1	3		32	14.2%
頁岩B 2					1				1	0.4%
頁岩B 3			1						1	0.4%
計			1		1				2	0.9%
流紋岩1	1								1	0.4%
流紋岩2					1				1	0.4%
流紋岩3					1				1	0.4%
流紋岩4					1				1	0.4%
計	1				3				4	1.8%
凝灰岩1					1				1	0.4%
凝灰岩3					3	1			4	1.8%
凝灰岩4				1	4	1			6	2.7%
凝灰岩5			1	3	5	4	1		14	6.2%
凝灰岩9						1			1	0.4%
凝灰岩10					2				2	0.9%
凝灰岩11					1				1	0.4%
計			1	4	16	7	1		29	12.8%
ガラス質黒色安山岩2					1				1	0.4%
ガラス質黒色安山岩4							1		1	0.4%
ガラス質黒色安山岩5					1				1	0.4%
計					2		1		3	1.3%
チャート1		1							1	0.4%
チャート3							1		1	0.4%
チャート4			4		1				5	2.2%
計		1	4		1		1		7	3.1%
トロトロ石1					2		1		3	1.3%
トロトロ石2					1		1		2	0.9%
トロトロ石3					3				3	1.3%
計					6		2		8	3.5%
ホルンフェルス2						1			1	0.4%
ホルンフェルス8					3				3	1.3%
ホルンフェルス13					1				1	0.4%
計					4	1			5	2.2%
緑色凝灰岩1							1		1	0.4%
計							1		1	0.4%
チャート								1	1	0.4%
ホルンフェルス								4	4	1.8%
凝灰岩								1	1	0.4%
砂岩								28	28	12.4%
石英ハン岩								29	29	12.8%
石英岩								72	72	31.9%
計								135	135	59.7%
総計	1	3	7	7	55	9	9	135	226	100.0%
組成比	0.4%	1.3%	3.1%	3.1%	24.3%	4.0%	4.0%	59.7%	100.0%	

第5表　第1ブロック石器属性表（1）

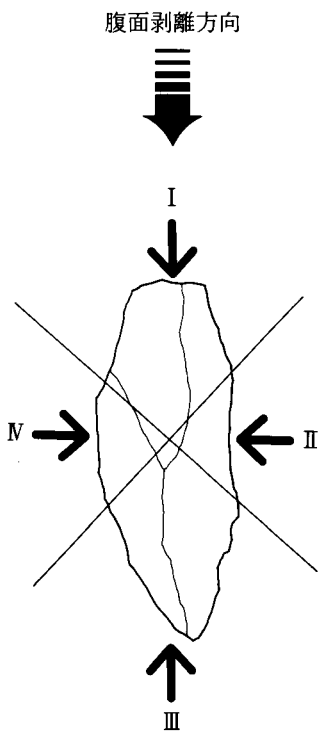
ブロック	遺物番号	枝番号	器種	母岩名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成 I	II	III	IV	C	打角(°)	折面部位	接合
1	289		ナイフ形石器	流紋岩1	36.9	16.6	9.5	4.2	1-1	H	0	0	2					77		
1	310		角錐状石器	頁岩A5	22.8	38.3	10.2	6.5	1-3				1		2					
1	226		角錐状石器	頁岩A16	22.8	24.7	9.3	5.4	1-5	H	0	3	1		1	1		128		
1	160		角錐状石器	チャート1	46.3	18.0	10.3	7.5	1-2	H	0	2						111		
1	159		二次加工のある剥片	頁岩A4	31.9	15.8	8.1	2.9		H	0	0	1	1				100		
1	324		二次加工のある剥片	頁岩B3	32.3	22.2	6.7	5.0	1-4	H	0	T	1	3		1		104	B	
1	286		二次加工のある剥片	凝灰岩5	28.0	37.6	9.9	9.4	1-8	2	0	T	3					120		
1	274		二次加工のある剥片	チャート4	30.6	25.5	8.1	3.7									1	176	H	
1	276		二次加工のある剥片	チャート4	17.3	21.8	3.8	1.1					3						H	
1	284		二次加工のある剥片	チャート4	26.2	14.5	9.3	2.5		H	0	T	2	1		1		88		
1	318		二次加工のある剥片	チャート4	13.3	20.0	9.1	2.1		H							1	118		
1	158		微細剥離痕のある剥片	頁岩A7	23.9	17.1	6.1	1.1		S	0	4	1	1	1					
1	295		微細剥離痕のある剥片	頁岩A9	26.9	39.3	12.6	9.5	1-20					2			1		H	
1	328		微細剥離痕のある剥片	頁岩A13	21.0	23.0	8.7	3.4	1-7	H	0	3	5	1				102		
1	333		微細剥離痕のある剥片	凝灰岩4	24.0	30.0	5.3	3.5	1-23				1	1					H	
1	188		微細剥離痕のある剥片	凝灰岩5	27.4	27.2	7.2	4.2	1-6	H	0	3	3			1		101	B	
1	200		微細剥離痕のある剥片	凝灰岩5	33.1	39.2	5.1	4.6	1-15	2	0	0		1			1	120	B	
1	323		微細剥離痕のある剥片	凝灰岩5	6.2	24.1	6.6	0.5		H	0	0						103		
1	237		剥片	頁岩A2	41.5	18.1	5.3	3.5	1-9	H	0	T	3		1			114		
1	279		剥片	頁岩A5	26.3	17.1	18.6	5.7		2	0	3	1	2	1			109		
1	339	a	剥片	頁岩A5	11.0	12.3	3.1	0.1		H	0	2	3				1	104		
1	244		剥片	頁岩A7	18.9	26.3	2.8	0.9		H	0	0	2	1				94		
1	228		剥片	頁岩A8	29.8	29.3	13.7	9.3		H	0	0		2	1			86		
1	231		剥片	頁岩A9	35.6	25.2	10.9	7.6	1-11	H	0	4	2				1	112		
1	222		剥片	頁岩A10	15.7	29.8	9.2	3.2					2				1		H	
1	151		剥片	頁岩A11	23.0	11.4	4.6	0.8		S	0	0				1	1			
1	179		剥片	頁岩A11	19.8	22.5	6.3	2.8		H	0	0		1		1		111	B	
1	229		剥片	頁岩A13	35.2	30.2	11.1	10.7	1-16	H	0	4	3	1				101	B	
1	288		剥片	頁岩A13	22.9	26.3	9.2	4.2	1-14					4		2			H	
1	291		剥片	頁岩A13	18.6	27.4	6.9	2.7	5-11	H	0	0		2				101		420(第5ブロック)
1	306		剥片	頁岩A13	32.1	22.9	13.0	8.8	1-13	H	0	4	3	1				117		
1	322		剥片	頁岩A13	18.7	18.7	4.6	1.0		2	0	0		1			1	120		
1	335		剥片	頁岩A13	29.6	27.7	17.7	14.6	1-27						1	1			H	163
1	301		剥片	頁岩A14	15.4	19.3	10.5	1.8		H	0	T	2		1			99		
1	316		剥片	頁岩A14	21.9	12.4	6.8	0.6		H	0	0		1		1		81		
1	449		剥片	頁岩A17	24.5	23.6	6.7	3.3		H	0	0		2			1	120		
1	321		剥片	頁岩A18	30.3	16.2	5.2	1.7	1-10	H	0	4	1				1	102		
1	448		剥片	頁岩A20	13.0	16.6	7.3	1.2						1			1		H	
1	251		剥片	頁岩A21	37.2	30.2	14.7	18.7		S	0	0					1			
1	170		剥片	頁岩A22	25.1	31.0	17.1	14.1									1		H	
1	217		剥片	頁岩B2	26.1	21.3	7.7	2.9	1-12	H	0	2	2	1				116		
1	262		剥片	流紋岩2	22.9	21.9	4.7	1.6	1-18	S	0	3	1	2						
1	259		剥片	流紋岩3	15.6	18.8	4.0	0.6		H	0	T	1	1				109		
1	155		剥片	流紋岩4	23.2	28.2	17.1	7.7		H	0	0		1		2		108		
1	156		剥片	凝灰岩1	31.4	39.4	12.3	8.8	1-17	H	0	0		1	1		1	101		
1	154		剥片	凝灰岩3	16.8	19.6	4.5	0.7	2-16	H	0	3	1		1	1		102		109(第2ブロック)
1	201		剥片	凝灰岩3	24.8	17.2	6.8	2.3		H	0	0		1		1		103		
1	334		剥片	凝灰岩3	22.1	25.9	14.2	7.4		H	0	T	2	1				110		
1	169		剥片	凝灰岩4	28.8	36.2	11.7	7.5					2	1			1		H	
1	199		剥片	凝灰岩4	15.1	33.0	10.6	4.1											H	
1	329		剥片	凝灰岩4	23.9	34.2	7.6	3.3		S	0	0	3							
1	339	b	剥片	凝灰岩4	11.2	16.8	2.7	0.1		H	0	0	2	1				115		
1	242		剥片	凝灰岩5	28.4	18.0	5.5	1.5					2	1					H	
1	255		剥片	凝灰岩5	22.6	28.2	7.2	3.2	1-21	H	0	0	1		2			94		
1	272		剥片	凝灰岩5	38.0	51.7	13.9	21.9		H	0	T	5	2				108		
1	320		剥片	凝灰岩5	12.0	19.2	7.3	1.0		H	0	T	2	1				99	B	
1	437		剥片	凝灰岩5	17.0	27.3	3.5	1.1		H	0	T	3					92	B	
1	166		剥片	凝灰岩10	23.9	32.3	6.0	3.4	1-19	H	0	T	2	1				98		
1	263		剥片	凝灰岩10	19.6	10.8	4.5	0.6		S	0	0					1			
1	190		剥片	凝灰岩11	16.2	21.0	3.5	1.0					1						H	
1	315		剥片	ガラス質黒色安山岩2	26.1	20.6	6.9	3.3		H	0	0		4	1			112		
1	175		剥片	ガラス質黒色安山岩5	23.0	19.1	4.2	0.9												
1	332		剥片	チャート4	29.0	14.4	6.4	1.8	1-24	H	0	0	1	3				79		
1	258		剥片	トロトロ石1	33.5	25.8	9.2	7.1	1-25	H	0	0		1			1	122		
1	269		剥片	トロトロ石1	30.0	44.2	15.4	15.5	1-22	2	0	0	3				2	118		
1	314		剥片	トロトロ石2	37.2	12.7	9.2	3.4		H	0	3	4	1				110		
1	171		剥片	トロトロ石3	29.2	19.1	8.1	2.9		H	0	0		1		1		80		
1	223		剥片	トロトロ石3	22.8	19.8	6.5	1.4		H	0	0		1	2			83		
1	443		剥片	トロトロ石3	24.4	24.1	6.6	3.1		C	0	0	1			1		91		
1	213		剥片	ホルンフェルス8	19.8	8.6	8.3	0.5		H	0	0	1	1				114		
1	230		剥片	ホルンフェルス8	11.8	15.8	9.5	0.9		H	0	0	1	1	1			83		
1	425	a	剥片	ホルンフェルス8	29.3	18.3	9.1	4.2		H	0	T	3		3			115		
1	425	b	剥片	ホルンフェルス13	67.5	39.3	20.6	63.0		H	0	0					1	119		
1	203		砕片	頁岩A10	7.8	15.5	2.8	0.1		H	0	T	1		1					
1	205		砕片	凝灰岩3	18.5	13.8	3.5	0.3		H	0	0		1		1		77		
1	225		砕片	凝灰岩4	10.2	16.8	5.5	0.4					1				1		H	
1	207		砕片	凝灰岩5	8.8	17.2	4.2	0.1		H	0	T	1					99		
1	260		砕片	凝灰岩5	9.8	13.2	4.3	0.1		S	0	0	1							
1	330		砕片	凝灰岩5	9.0	15.9	7.4	0.6		H	0	0		2	1			101		
1	434		砕片	凝灰岩5	15.3	22.2	7.3	0.3		S	0	0	2							
1	248		砕片	凝灰岩9	14.1	11.2	3.6	0.0		S	0	0	1							
1	232		砕片	ホルンフェルス2	7.5	4.4	3.9	0.2												
1	197		石核	頁岩A3	18.2	37.6	16.3	7.4	1-30											
1	302		石核	頁岩A6	16.0	41.7	17.9	8.9	1-31											
1	163		石核	頁岩A13	40.4	39.0	41.1	51.8	1-26											335
1	336		石核	凝灰岩5	15.2	42.0	25.9	10.5	1-28											
1	174		石核	ガラス質黒色安山岩4	26.1	41.3	23.8	21.5	1-33											
1	313		石核	チャート3	29.5	24.7	15.1	10.6	1-34											
1	218		石核	トロトロ石1	37.7	43.8	22.3	41.4	1-35											
1	165		石核	トロトロ石2	31.1	38.4	26.0	27.3	1-32											
1	268		石核	緑色凝灰岩1	28.5	62.2	45.0	73.5	1-29											
1	137		礫	石英ハン岩	29.2	18.2	15.4	7.6												
1	147		礫	石英ハン岩	30.4	15.5	15.2	8.8												116
1	152		礫	石英ハン岩	24.9	18.0	15.8	5.9												

第6表　第1ブロック石器属性表（2）

ブロック	遺物番号	枝番号	器種	母岩名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成 I	背面構成 II	背面構成 III	背面構成 IV	背面構成 C	打角(°)	折面部位	接合
1	176		礫	石英ハン岩	34.1	20.8	27.9	16.2		H	0	0		1				102		
1	177		礫	石英ハン岩	27.2	18.1	14.3	7.8												
1	178		礫	石英ハン岩	25.9	23.8	12.1	7.0												194
1	181		礫	石英ハン岩	19.5	16.5	6.6	1.6												
1	187		礫	石英ハン岩	52.2	28.0	23.1	34.1												
1	191		礫	石英ハン岩	20.6	13.5	14.1	3.0												
1	193		礫	石英ハン岩	42.5	34.7	23.5	31.7												
1	194		礫	石英ハン岩	37.5	22.6	19.0	12.7												178
1	196		礫	石英ハン岩	40.5	32.0	21.3	32.3												
1	254		礫	石英ハン岩	63.5	30.1	20.2	30.9												256
1	256		礫	石英ハン岩	60.3	23.5	11.1	19.3												254
1	265		礫	石英ハン岩	40.8	23.1	20.1	17.5												
1	266		礫	石英ハン岩	33.6	16.3	7.4	7.0												
1	277		礫	石英ハン岩	29.0	24.4	19.5	6.8												
1	297		礫	石英ハン岩	34.9	18.5	15.5	9.5												
1	307		礫	石英ハン岩	31.1	20.9	10.9	5.4												
1	312		礫	石英ハン岩	15.6	11.3	5.9	1.2												
1	340		礫	石英ハン岩	26.9	17.4	17.9	9.3												
1	342		礫	石英ハン岩	31.8	29.1	21.8	18.1												
1	343		礫	石英ハン岩	16.6	13.9	12.5	2.6												
1	344		礫	石英ハン岩	13.4	8.5	13.7	1.6												
1	424		礫	石英ハン岩	29.5	15.5	18.6	2.8												
1	441		礫	石英ハン岩	29.3	28.2	18.7	3.3												
1	444		礫	石英ハン岩	21.2	28.2	11.2	5.8												
1	445		礫	石英ハン岩	17.2	14.6	18.4	3.2												
1	446		礫	石英ハン岩	12.3	19.4	18.1	1.8												
1	148		礫	石英岩	3.1	13.8	14.4	4.0												
1	150		礫	石英岩	27.2	23.7	18.9	11.5												
1	157		礫	石英岩	16.8	10.6	7.6	0.9												
1	161		礫	石英岩	27.8	21.4	10.0	7.5												
1	164		礫	石英岩	16.8	11.6	9.3	2.1												
1	167		礫	石英岩	40.8	26.3	20.5	24.0												234
1	172		礫	石英岩	27.3	29.5	19.0	17.7												341
1	183		礫	石英岩	13.5	11.8	8.2	1.7												
1	185		礫	石英岩	17.8	16.5	12.8	4.7												
1	186		礫	石英岩	35.4	32.8	22.7	25.0												
1	192		礫	石英岩	17.3	19.5	5.3	1.7												
1	202		礫	石英岩	17.4	12.8	13.8	2.5												
1	204		礫	石英岩	22.3	15.2	7.3	1.9												
1	208		礫	石英岩	34.8	17.5	10.0	4.0												
1	209		礫	石英岩	23.5	17.1	17.0	7.0												
1	210		礫	石英岩	16.9	15.7	8.2	1.0												
1	211		礫	石英岩	50.2	19.0	21.1	19.7												
1	212		礫	石英岩	30.9	26.4	15.4	13.7												
1	214		礫	石英岩	30.0	21.7	13.4	9.1												
1	215		礫	石英岩	14.2	11.9	11.2	1.1												
1	216		礫	石英岩	38.6	26.5	24.4	23.9												
1	220		礫	石英岩	16.6	19.2	17.0	7.1												
1	221		礫	石英岩	29.0	15.4	13.6	7.4												
1	227		礫	石英岩	35.5	34.2	19.2	15.5												
1	233		礫	石英岩	33.0	16.7	14.4	7.9												
1	234		礫	石英岩	38.1	22.5	10.5	6.9												167
1	235		礫	石英岩	32.8	28.7	27.3	22.9												
1	236		礫	石英岩	19.2	15.2	10.5	1.5												
1	238		礫	石英岩	27.3	20.1	17.0	10.3												299
1	239		礫	石英岩	16.6	14.0	10.5	1.8												
1	240		礫	石英岩	33.5	12.0	11.0	5.0												
1	241	b	礫	石英岩	40.7	32.5	17.5	24.1												327
1	243		礫	石英岩	17.8	13.2	7.1	1.9												
1	246		礫	石英岩	26.2	15.6	10.7	3.6												
1	247		礫	石英岩	19.4	17.2	8.4	2.6												
1	249		礫	石英岩	25.0	16.2	13.1	4.6												
1	253		礫	石英岩	22.8	19.9	7.0	3.0												
1	257		礫	石英岩	42.3	25.1	27.0	38.6												
1	264		礫	石英岩	22.3	14.6	13.8	3.6												
1	267		礫	石英岩	23.3	28.0	19.3	10.8												
1	270		礫	石英岩	32.3	25.2	18.5	18.8												
1	273		礫	石英岩	17.2	15.2	9.2	1.5												
1	275		礫	石英岩	18.5	17.2	13.5	4.8												
1	280		礫	石英岩	30.5	22.4	16.7	15.8												
1	282		礫	石英岩	32.7	18.8	23.8	15.3												
1	283		礫	石英岩	27.5	16.7	10.0	3.5												
1	285		礫	石英岩	16.8	14.5	6.0	1.1												
1	290		礫	石英岩	33.7	32.2	22.4	16.3												
1	294		礫	石英岩	22.2	16.7	9.3	3.3												
1	299		礫	石英岩	33.1	30.5	19.7	16.6												238
1	300		礫	石英岩	27.6	19.4	19.5	21.2												
1	303		礫	石英岩	26.2	1.3	5.0	1.2												
1	304		礫	石英岩	37.4	21.3	11.7	7.8												
1	308		礫	石英岩	28.4	25.4	14.4	10.0												
1	319		礫	石英岩	10.3	6.9	4.5	0.1												
1	327		礫	石英岩	42.1	30.2	18.6	34.3												241
1	337		礫	石英岩	22.5	11.6	8.1	1.8												
1	341		礫	石英岩	26.1	19.4	15.1	9.2												172
1	426		礫	石英岩	7.8	7.4	19.7	0.6												
1	428		礫	石英岩	25.4	22.3	18.3	7.0												
1	430		礫	石英岩	22.2	16.5	12.9	6.3												
1	431		礫	石英岩	13.9	13.1	4.8	1.2												
1	432		礫	石英岩	17.2	16.2	18.3	3.1												
1	433		礫	石英岩	28.5	16.9	11.6	6.2												
1	435		礫	石英岩	11.2	18.5	19.8	0.7												
1	436		礫	石英岩	39.1	28.3	11.7	8.6												
1	438		礫	石英岩	14.6	12.1	6.9	1.3												
1	439		礫	石英岩	28.8	11.9	7.1	2.1												

第７表　第１ブロック石器属性表（３）

ブロック	遺物番号	枝番号	器種	母岩名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成 I	背面構成 II	背面構成 III	背面構成 IV	背面構成 C	打角(°)	折面部位	接合
1	440		礫	石英岩	34.5	27.9	19.7	6.3												
1	442		礫	石英岩	17.5	18.8	13.7	3.2												
1	447		礫	石英岩	13.1	19.5	3.5	0.6												
1	450		礫	石英岩	15.8	11.8	18.2	1.7												
1	153		礫	砂岩	30.3	27.5	20.0	19.1												
1	162		礫	砂岩	17.4	17.8	9.7	3.8												
1	173		礫	砂岩	57.0	41.9	26.6	85.2												
1	180		礫	砂岩	19.8	20.1	6.7	2.7												
1	182		礫	砂岩	40.6	29.1	14.0	14.7												
1	184		礫	砂岩	51.4	41.6	33.5	52.6												
1	198		礫	砂岩	65.6	15.1	19.6	15.6												62+125
1	206		礫	砂岩	28.9	17.8	7.3	4.9												
1	241	a	礫	砂岩	23.9	16.5	5.3	1.6												
1	245		礫	砂岩	29.5	27.8	16.5	12.9												
1	250		礫	砂岩	15.3	7.4	7.1	0.8												
1	252		礫	砂岩	16.4	12.5	5.8	0.6												
1	261		礫	砂岩	44.4	24.5	16.3	20.6												
1	271		礫	砂岩	24.1	12.6	11.7	3.3												
1	281		礫	砂岩	59.5	24.5	22.3	40.3												
1	287		礫	砂岩	45.0	25.0	23.2	22.8												
1	296		礫	砂岩	48.2	46.5	27.2	58.1												
1	305		礫	砂岩	51.3	36.5	15.3	32.9												
1	309		礫	砂岩	20.4	16.6	12.2	3.2												
1	311		礫	砂岩	22.4	16.8	11.7	3.6												
1	317		礫	砂岩	21.6	17.4	11.8	3.5												
1	325		礫	砂岩	51.4	28.7	17.2	30.1												
1	326		礫	砂岩	46.5	26.4	22.6	31.2												
1	331		礫	砂岩	18.9	14.7	7.8	1.8												
1	338		礫	砂岩	35.1	27.9	9.7	9.8												
1	345		礫	砂岩	16.1	13.4	10.2	2.0												
1	427		礫	砂岩	7.3	6.2	4.4	0.2												
1	429		礫	砂岩	21.7	19.5	2.6	0.8												
1	189		礫	ホルンフェルス	21.5	18.1	8.9	4.2												
1	219		礫	ホルンフェルス	34.5	32.6	6.8	10.8												
1	278		礫	ホルンフェルス	33.4	31.5	20.2	14.5												
1	292		礫	ホルンフェルス	26.5	19.2	12.9	7.7												
1	195		礫	凝灰岩	47.2	45.8	22.8	45.9												373
1	224		礫	チャート	54.0	39.2	17.2	43.2												



①背面構成

②長さ、幅、厚さの単位はmm
③重量の単位はg
④打種――打面種類
　数字……剥離数
　H……平坦打面
　S……線状打面
⑤打調――打面調整
　数字……剥離数
⑥頭調――頭部調整
　数字……剥離数
　T……多剥離
⑦背面構成　C……自然面
⑧打角の単位は度
⑨打面――打面部位
　H……頭部
　B……末端部

第37図　属性表の見方

第8表　第2ブロック石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥　片	砕　片	石　核	礫	総　計	組成比
頁岩A 1	1								1	0.9%
頁岩A 5					2		2		4	3.5%
頁岩A 7					1		1		2	1.8%
頁岩A 8					1				1	0.9%
頁岩A 15					2				2	1.8%
頁岩A 16			1						1	0.9%
計	1		1		6		3		11	9.7%
頁岩1				1					1	0.9%
計				1					1	0.9%
凝灰岩1			1				2		3	2.7%
凝灰岩2		1							1	0.9%
凝灰岩3					2		1		3	2.7%
凝灰岩8				1					1	0.9%
凝灰岩9					1				1	0.9%
計		1	1	1	3		3		9	8.0%
ガラス質黒色安山岩1					2				2	1.8%
ガラス質黒色安山岩2							1		1	0.9%
ガラス質黒色安山岩3					1				1	0.9%
ガラス質黒色安山岩4					1				1	0.9%
ガラス質黒色安山岩5			1						1	0.9%
ガラス質黒色安山岩6					1				1	0.9%
ガラス質黒色安山岩7				1					1	0.9%
計			1	1	5		1		8	7.1%
チャート2			1						1	0.9%
チャート4					1				1	0.9%
計			1		1				2	1.8%
ホルンフェルス2						1			1	0.9%
ホルンフェルス4					3	1	1		5	4.4%
計					3	2	1		6	5.3%
ホルンフェルス								4	4	3.5%
凝灰岩								3	3	2.7%
砂岩								23	23	20.4%
石英ハン岩								16	16	14.2%
石英岩								30	30	26.5%
計								76	76	67.3%
総計	1	1	4	3	18	2	8	76	113	100.0%
組成比	0.9%	0.9%	3.5%	2.7%	15.9%	1.8%	7.1%	67.3%	100.0%	

第9表　第2ブロック石器属性表（1）

ブロック	遺物番号	枝番号	器種	母岩名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成 I	II	III	IV	C	打角(°)	折面部位	接合
2	117		ナイフ形石器	頁岩A1	40.2	17.1	7.2	3.6	2-1	H	0	0						100		
2	80		角錐状石器	凝灰岩2	42.0	17.4	9.6	6.3	2-2	H	0	0		1	1	1	1	107		
2	129		二次加工のある剥片	頁岩A16	27.2	15.1	6.2	2.1	2-4	H	0	0	2	2				102		
2	91		二次加工のある剥片	凝灰岩1	37.7	24.6	12.5	12.2	2-5	H	0	0	1				1	109		
2	98		二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩5	44.2	43.5	17.6	26.4	2-7	2	0	6	3	5	1			110		
2	131		二次加工のある剥片	チャート2	17.8	30.4	110.	7.5	2-3	H	0	0	1					111	B	
2	70		微細剥離痕のある剥片	頁岩B1	44.1	18.3	8.8	6.6	2-6	H	0	0	2	2	3		1	113		76+85+89+90+140+389
2	63		微細剥離痕のある剥片	凝灰岩8	40.1	52.4	10.4	18.2	2-15	S	0	T	2	1			1			
2	146		微細剥離痕のある剥片	ガラス質黒色安山岩7	53.1	46.5	16.3	39.0	2-11	C	0	0					1	126		
2	102		剥片	頁岩A5	20.7	20.5	7.8	1.8	2-12	H	3	1		1	1	1		110		
2	127		剥片	頁岩A5	25.0	34.2	8.5	6.5	2-13	H	0	5		2			1	107		
2	123		剥片	頁岩A7	22.2	13.8	11.3	2.9		H	0	0	2				1	110		
2	106		剥片	頁岩A8	27.3	26.8	4.9	1.7		H	0	4	3	1				109		
2	56		剥片	頁岩A15	58.3	40.3	21.9	51.8		H	0	0						111		
2	79		剥片	頁岩A15	38.1	28.3	14.9	13.3	2-14	2	0	0		2	1	1	1	93		
2	132		剥片	凝灰岩3	18.3	19.1	5.6	0.7		H	0	T	2			1		107		
2	135		剥片	凝灰岩3	16.3	17.3	5.5	0.7		2	0	0	3	1		1		99		
2	50		剥片	凝灰岩9	18.2	25.8	4.9	2.3		H	0	T	5					94		
2	53		剥片	ガラス質黒色安山岩1	32.9	32.2	12.6	8.3	2-10	H	0	0				1	1	79		81
2	81		剥片	ガラス質黒色安山岩1	38.9	32.3	16.4	16.3	2-9	S	0	0			4		1			53
2	104		剥片	ガラス質黒色安山岩3	23.1	33.2	5.7	2.1		S	0	0	2	1						
2	92		剥片	ガラス質黒色安山岩4	25.6	20.6	5.7	2.1		H	0	0	1	1			1	118		
2	82		剥片	ガラス質黒色安山岩6	56.4	23.5	17.4	17.5	2-8	H	0	2	2				1	125		
2	95		剥片	チャート4	37.1	40.3	18.8	18.3		S	0	0		3	1		1			
2	78		剥片	ホルンフェルス4	23.5	15.4	4.5	1.0		S	0	2	1	1	1					
2	83		剥片	ホルンフェルス4	29.6	49.5	9.1	6.6		H	0	0	1	3				102		
2	107		剥片	ホルンフェルス4	74.7	25.9	15.5	28.2		H	0	0	2	3			1	89		
2	124		剥片	ホルンフェルス2	15.8	11.6	8.2	0.6		S	0	0	2							
2	103		剥片	ホルンフェルス4	17.7	15.1	4.9	0.8		S	0	0	2	1						
2	122		石核	頁岩A5	24.0	43.5	36.6	32.9	2-18											
2	136		石核	頁岩A5	30.8	61.3	20.8	22.9	2-19											
2	121		石核	頁岩A7	25.8	36.3	19.3	21.2	2-23											
2	112		石核	凝灰岩1	27.3	36.5	18.7	18.5	2-21											
2	130		石核	凝灰岩1	36.5	50.2	32.5	53.0	2-22											
2	109		石核	凝灰岩3	28.1	41.2	17.4	11.7	2-17											154
2	118		石核	ガラス質黒色安山岩2	27.7	34.2	28.8	23.4	2-20											
2	65		石核	ホルンフェルス4	32.0	46.7	18.7	26.9												
2	38		礫	石英ハン岩	68.3	49.1	38.7	84.3												43
2	40		礫	石英ハン岩	63.8	35.0	41.3	106.1												44
2	43		礫	石英ハン岩	80.3	33.2	20.9	83.6												38
2	44		礫	石英ハン岩	48.2	49.2	42.2	118.5												40
2	60		礫	石英ハン岩	48.8	40.4	18.1	27.1												
2	67		礫	石英ハン岩	35.6	27.8	10.9	10.4												
2	88		礫	石英ハン岩	32.2	21.0	12.1	5.1												
2	89		礫	石英ハン岩	34.6	31.9	16.2	17.4												70+76+85+90+140+389
2	97		礫	石英ハン岩	73.1	63.2	46.3	244.9												
2	100		礫	石英ハン岩	29.0	19.6	29.6	12.7												
2	108		礫	石英ハン岩	31.6	24.7	11.3	7.9												
2	116		礫	石英ハン岩	42.5	44.7	46.1	63.2												147
2	128		礫	石英ハン岩	26.5	20.4	13.2	6.7												
2	138		礫	石英ハン岩	35.0	30.5	29.0	24.5												
2	139		礫	石英ハン岩	38.4	24.8	18.0	19.0												
2	140		礫	石英ハン岩	43.3	37.6	27.3	37.5												70+76+85+89+90+389
2	34		礫	石英岩	48.0	30.0	22.9	36.7												
2	35		礫	石英岩	44.5	27.8	17.7	21.8												
2	36		礫	石英岩	26.8	21.3	23.5	11.6												
2	37		礫	石英岩	54.9	37.4	22.6	55.2												
2	39		礫	石英岩	33.9	31.0	30.0	40.6												47
2	41		礫	石英岩	27.0	24.6	26.8	18.9												
2	42		礫	石英岩	59.3	38.3	33.0	57.9												
2	45		礫	石英岩	55.4	22.5	39.7	61.8												114+411+423
2	47		礫	石英岩	33.7	25.1	25.9	15.0												39
2	51		礫	石英岩	27.3	20.3	20.0	10.3												
2	54		礫	石英岩	55.4	34.5	23.4	47.1												
2	57		礫	石英岩	26.6	30.0	22.5	20.1												
2	58		礫	石英岩	25.3	19.0	12.5	7.0												
2	64		礫	石英岩	69.3	59.6	43.5	298.6												
2	66		礫	石英岩	49.2	36.3	28.7	25.4												
2	71		礫	石英岩	53.9	37.5	27.8	60.8												
2	72		礫	石英岩	42.8	31.8	17.6	20.8												
2	74		礫	石英岩	40.9	26.0	27.6	29.8												
2	84	a	礫	石英岩	23.4	23.2	15.4	6.2												
2	85		礫	石英岩	34.4	25.5	20.1	21.9												70+76+89+90+140+389
2	87		礫	石英岩	58.9	24.6	16.3	17.4												
2	93		礫	石英岩	48.7	34.8	25.7	38.0												
2	111		礫	石英岩	35.8	33.8	19.2	15.3												
2	113		礫	石英岩	34.8	24.0	15.0	16.0												
2	114		礫	石英岩	20.5	11.8	19.1	7.5												45+411+423
2	126		礫	石英岩	33.1	21.1	21.3	14.9												
2	133		礫	石英岩	27.0	19.2	5.9	2.5												
2	134		礫	石英岩	32.9	19.3	18.0	7.5												
2	142		礫	石英岩	29.4	24.7	11.7	10.0												
2	143		礫	石英岩	24.7	19.2	15.2	4.8												
2	46		礫	砂岩	39.6	20.1	22.0	16.8												59+96
2	49		礫	砂岩	53.5	48.6	25.2	58.2												55+61+68+94+110+141
2	55		礫	砂岩	59.2	40.8	21.2	60.4												49+61+68+94+110+141
2	59		礫	砂岩	34.5	25.8	16.4	15.4												46+96
2	61		礫	砂岩	45.2	37.0	22.0	41.8												49+55+68+94+110+141
2	62		礫	砂岩	72.1	60.1	33.7	202.0												125+198
2	68		礫	砂岩	52.4	35.5	16.4	50.1												49+55+61+94+110+141
2	69		礫	砂岩	35.5	33.9	13.1	13.4												
2	73		礫	砂岩	36.5	20.2	14.2	11.3												75
2	75		礫	砂岩	34.7	12.5	29.7	10.7												73
2	76		礫	砂岩	31.0	26.4	23.9	16.4												70+85+89+90+140+389

第10表　第２ブロック石器属性表（２）

ブロック	遺物番号	枝番号	器種	母岩名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成 I	背面構成 II	背面構成 III	背面構成 IV	背面構成 C	打角(°)	折面部位	接合
2	77		礫	砂岩	55.9	26.5	22.0	33.0												
2	84	b	礫	砂岩	51.6	51.2	31.2	106.8												
2	86		礫	砂岩	44.1	40.1	26.0	63.4												390
2	94		礫	砂岩	36.7	30.0	23.3	42.4												49+55+61+68+110+141
2	96		礫	砂岩	42.3	22.5	13.9	19.0												46+59
2	110		礫	砂岩	39.8	31.9	13.7	17.3												49+55+61+68+94+141
2	115		礫	砂岩	33.9	24.5	22.3	28.7												
2	119		礫	砂岩	31.5	18.7	12.2	7.2												
2	125		礫	砂岩	54.6	29.6	20.7	64.0												62+198
2	141		礫	砂岩	36.1	20.5	17.7	14.7												49+55+61+68+94+110
2	144		礫	砂岩	20.6	17.5	5.4	1.6												
2	145		礫	砂岩	18.2	18.1	7.8	2.1												
2	48		礫	ホルンフェルス	27.8	26.7	14.3	13.6												
2	52		礫	ホルンフェルス	59.5	47.3	27.1	94.3												
2	90		礫	ホルンフェルス	58.4	44.6	35.6	86.7												70+76+85+89+140+389
2	120		礫	ホルンフェルス	27.1	23.5	10.7	6.1												
2	99		礫	凝灰岩	38.0	21.7	11.3	8.0												
2	101		礫	凝灰岩	24.8	14.5	19.4	5.8												
2	105		礫	凝灰岩	21.2	17.3	16.2	4.4												

第11表　第３ブロック石器組成表

母岩＼器種	剥片	磨石	礫	総計	組成比
頁岩A16	1			1	5.9%
頁岩A19	1			1	5.9%
計	2			2	11.8%
多孔質安山岩１		1		1	5.9%
計		1		1	5.9%
ホルンフェルス３	1			1	5.9%
計	1			1	5.9%
ホルンフェルス			2	2	11.8%
砂岩			5	5	29.4%
石英ハン岩			2	2	11.8%
石英岩			4	4	23.5%
計			13	13	76.5%
総計	3	1	13	17	100.0%
組成比	17.6%	5.9%	76.5%	100.0%	

第12表　第３ブロック石器属性表

ブロック	遺物番号	枝番号	器種	母岩名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成 I	背面構成 II	背面構成 III	背面構成 IV	背面構成 C	打角(°)	折面部位	接合
3	3		剥片	頁岩A16	25.1	26.2	5.8	2.3	3-2	H	0	0		4	1			116		
3	66		剥片	頁岩A19	25.6	19.5	6.1	2.6	3-1	H	0	0	3	2	1		1	114		
3	25		剥片	ホルンフェルス３	82.6	50.4	26.4	73.8		2	0	0	2		1			122		
3	24		磨石	多孔質安山岩１	107.1	104.3	54.7	667.9	3-3											
3	1		礫	石英ハン岩	33.8	32.3	17.1	40.6												
3	28		礫	石英ハン岩	89.4	57.8	36.8	268.7												
3	27		礫	石英岩	28.7	13.2	6.8	1.3												
3	30		礫	石英岩	30.8	29.4	18.2	27.3												
3	31		礫	石英岩	42.4	37.4	16.3	28.4												
3	32		礫	石英岩	27.1	17.8	11.7	5.0												
3	4		礫	砂岩	56.6	22.9	14.3	14.5												
3	5		礫	砂岩	11.0	12.6	7.4	0.4												
3	7		礫	砂岩	52.4	13.6	13.8	13.7												
3	26		礫	砂岩	43.6	38.0	14.4	23.3												9+10+21
3	29		礫	砂岩	65.8	45.9	22.7	66.2												354+358
3	2		礫	ホルンフェルス	41.8	38.2	18.3	19.8												
3	33		礫	ホルンフェルス	37.1	35.4	31.1	30.2												

第13表　第４ブロック石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	微細剥離痕のある剥片	剥片	砕片	石核	礫	総計	組成比
黒曜石１	1						1	6.3%
計	1						1	6.3%
凝灰岩５			1				1	6.3%
凝灰岩６			1				1	6.3%
計			2				2	12.5%
ホルンフェルス３			1				1	6.3%
ホルンフェルス６		1					1	6.3%
ホルンフェルス７				1			1	6.3%
ホルンフェルス８			2				2	12.5%
ホルンフェルス９					1		1	6.3%
計		1	3	1	1		6	37.5%
砂岩						6	6	37.5%
石英ハン岩						1	1	6.3%
計						7	7	43.8%
総計	1	1	5	1	1	7	16	100.0%
組成比	6.3%	6.3%	31.3%	6.3%	6.3%	43.8%	100.0%	

第14表　第４ブロック石器属性表

ブロック	遺物番号	枝番号	器　種	母岩名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	C	打角(°)	折面部位	接　合
4	19		ナイフ形石器	黒曜石1	19.9	21.1	5.6	1.0	4-1	H	0					1	1	107		
4	14		微細剥離痕のある剥片	ホルンフェルス6	51.3	78.0	12.9	45.5	4-2	H	0	0		3			1	122		
4	18		剥片	凝灰岩5	24.2	28.3	7.0	4.7		H	0	T	2		1		1	132		
4	16		剥片	凝灰岩6	53.4	34.8	19.5	25.8		H	0	T		15				119		
4	15		剥片	ホルンフェルス3	51.2	55.0	13.7	32.1		H	0	0	1					117		
4	8		剥片	ホルンフェルス8	27.9	31.2	7.1	6.7		H	0	0		1	1			81		
4	20		剥片	ホルンフェルス8	47.2	24.3	9.0	7.4		S	0	1				1				
4	13		砕片	ホルンフェルス7	18.1	12.2	3.0	0.3		S	0	0		1	2					
4	17		石核	ホルンフェルス9	48.2	75.2	39.3	128.4	4-3											
4	23		礫	石英ハン岩	45.8	40.5	27.8	53.2												
4	9		礫	砂岩	61.9	56.8	27.8	91.2												10+21+26
4	10		礫	砂岩	67.4	63.6	30.2	145.9												9+21+26
4	11		礫	砂岩	65.2	53.8	33.8	158.1												12
4	12		礫	砂岩	61.1	37.4	58.8	118.6												11
4	21		礫	砂岩	37.6	32.5	14.2	21.9												9+10+26
4	22		礫	砂岩	49.9	32.8	10.9	14.5												

第15表　第５ブロック石器組成表

母岩＼器種	角錐状石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥　片	砕　片	石　核	礫	総　計	組成比
頁岩A12						1		1	1.3%
頁岩A13						1		1	1.3%
計						2		2	2.6%
凝灰岩5		1						1	1.3%
凝灰岩9				1				1	1.3%
計		1		1				2	2.6%
ガラス質黒色安山岩3			1					1	1.3%
計			1					1	1.3%
トロトロ石4				1				1	1.3%
計				1				1	1.3%
ホルンフェルス1	1							1	1.3%
ホルンフェルス2				4	1	1		6	7.8%
ホルンフェルス3				4				4	5.2%
ホルンフェルス4					1			1	1.3%
ホルンフェルス5				2				2	2.6%
ホルンフェルス7				1				1	1.3%
ホルンフェルス8				4	1			5	6.5%
ホルンフェルス10						1		1	1.3%
ホルンフェルス11				1				1	1.3%
ホルンフェルス12				1				1	1.3%
計	1			17	3	2		23	29.9%
緑色凝灰岩2				1				1	1.3%
緑色凝灰岩3				1				1	1.3%
計				2				2	2.6%
チャート							1	1	1.3%
ホルンフェルス							3	3	3.9%
凝灰岩							2	2	2.6%
砂岩							15	15	19.5%
石英ハン岩							20	20	26.0%
石英岩							5	5	6.5%
計							46	46	59.7%
総計	1	1	1	21	3	4	46	77	100.0%
組成比	1.3%	1.3%	1.3%	27.3%	3.9%	5.2%	59.7%	100.0%	

第16表　第5ブロック石器属性表

ブロック	遺物番号	枝番号	器種	母岩名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成 I	II	III	IV	C	打角(°)	折面部位	接合
5	397		角錐状石器	ホルンフェルス1	36.6	18.6	11.2	6.3	5-1											
5	408		二次加工のある剥片	凝灰岩5	27.1	27.3	15.2	8.8	5-2	H	0	T		1	4			105		
5	368		微細剥離痕のある剥片	ガラス質黒色安山岩3	55.5	48.0	19.6	43.4	5-3	H	0	0	1			1	1	109		
5	421		剥片	凝灰岩9	14.0	19.1	4.1	0.6		S	0	T	2							
5	355		剥片	トロトロ石4	36.1	56.8	20.2	31.3	5-7	H	0	0	1	2				112		
5	359		剥片	ホルンフェルス2	23.2	30.9	22.7	10.4		C	0	0	2					87		
5	379		剥片	ホルンフェルス2	13.4	18.9	7.5	1.3		H	0	0	2					108		
5	381		剥片	ホルンフェルス2	23.7	16.5	6.2	1.6		H	0	5	1	1	1			79		
5	394		剥片	ホルンフェルス2	33.5	15.9	4.6	2.2		S	0	0		2			1			
5	360		剥片	ホルンフェルス3	54.5	40.7	24.8	40.5		S	0	0	2				1			
5	363		剥片	ホルンフェルス3	60.7	79.3	20.1	90.6		S	0	0	1	2	1	1				
5	366		剥片	ホルンフェルス3	41.7	48.1	18.6	35.0		H	0	0	3	1			1	108		
5	370		剥片	ホルンフェルス3	35.2	29.3	13.1	7.0		H	0	0	2					94		
5	375		剥片	ホルンフェルス5	25.7	31.4	8.7	7.1					3	1					H	
5	376		剥片	ホルンフェルス5	57.4	47.9	12.2	29.0	5-4	C	0	0		1			1	128		
5	372		剥片	ホルンフェルス7	20.3	22.6	5.0	2.2		H		0					1	111		
5	357		剥片	ホルンフェルス8	39.8	69.3	10.3	24.3		H	0	0		1				96		
5	369		剥片	ホルンフェルス8	50.7	49.1	21.1	58.5		H	0	0				1	1	94		
5	377		剥片	ホルンフェルス8	37.0	44.6	6.2	13.5		H	0	0	1	1				104		
5	378		剥片	ホルンフェルス8	29.1	30.6	9.9	5.4		H	0	0	2	1				102		
5	362		剥片	ホルンフェルス11	53.9	67.8	16.6	58.0		C	0	0		1			1	104		
5	371		剥片	ホルンフェルス12	33.8	38.9	9.5	11.9									1		H	
5	402		剥片	緑色凝灰岩2	63.7	26.9	11.5	24.0	5-5	S	0	0	1			1	1			
5	404		剥片	緑色凝灰岩3	27.9	40.4	7.5	6.0	5-6	C	0	0		2				100		
5	413		砕片	ホルンフェルス2	12.2	12.0	3.9	0.2		H	0	0	1					84		
5	361		砕片	ホルンフェルス4	13.0	13.2	3.6	0.6		S	0	0	1							
5	400		砕片	ホルンフェルス8	10.6	11.5	3.7	0.0		H	0	0	2	1				119		
5	386		石核	頁岩A12	43.9	50.8	49.3	95.6	5-9											
5	420		石核	頁岩A13	30.2	46.3	17.0	24.1	5-12											291
5	349		石核	ホルンフェルス2	30.8	29.5	40.1	32.4	5-10											
5	364		石核	ホルンフェルス10	36.7	57.2	53.7	117.9												
5	347		礫	石英ハン岩	73.3	51.9	46.8	259.4												
5	348		礫	石英ハン岩	48.5	41.9	24.2	38.7												382
5	351		礫	石英ハン岩	47.2	26.1	23.7	29.0												
5	367		礫	石英ハン岩	61.9	39.2	22.4	74.7												
5	380		礫	石英ハン岩	33.1	30.0	18.8	11.1												
5	382		礫	石英ハン岩	41.8	43.9	31.5	86.7												348
5	383		礫	石英ハン岩	53.8	24.7	14.5	24.8												
5	389		礫	石英ハン岩	51.9	38.2	23.4	62.7												70+76+85+89+90+140
5	398		礫	石英ハン岩	70.4	32.9	22.8	79.7												
5	399		礫	石英ハン岩	47.0	47.2	24.6	49.3												
5	401		礫	石英ハン岩	36.7	25.2	14.6	15.4												
5	405		礫	石英ハン岩	43.7	20.8	27.5	34.4												409
5	406		礫	石英ハン岩	14.5	7.9	7.3	0.3												
5	407		礫	石英ハン岩	22.5	20.4	16.7	6.4												
5	409		礫	石英ハン岩	43.7	30.5	17.4	36.8												405
5	410		礫	石英ハン岩	29.7	18.1	18.3	1.3												
5	416		礫	石英ハン岩	23.1	20.1	10.5	6.5												
5	417		礫	石英ハン岩	31.4	21.7	6.2	5.2												
5	418		礫	石英ハン岩	12.9	9.4	8.1	1.6												
5	419		礫	石英ハン岩	46.1	37.9	20.9	35.8												
5	356		礫	石英岩	20.9	18.6	8.7	3.0												
5	374		礫	石英岩	14.8	13.8	15.8	1.5												
5	388		礫	石英岩	22.4	21.1	7.2	3.8												
5	411		礫	石英岩	36.1	30.8	21.4	37.1												45+114+423
5	423		礫	石英岩	31.6	27.5	16.1	18.7												45+114+411
5	346		礫	砂岩	16.8	11.8	5.6	9.3												
5	350		礫	砂岩	69.5	36.6	37.6	146.8												
5	353		礫	砂岩	86.5	59.2	38.7	22.0												
5	354		礫	砂岩	96.6	54.8	32.3	176.6												29+358
5	358		礫	砂岩	93.5	52.2	29.7	106.6												29+354
5	384		礫	砂岩	60.3	51.1	34.5	59.4												
5	385		礫	砂岩	34.9	24.9	15.5	7.3												
5	387		礫	砂岩	48.9	29.2	28.6	14.0												
5	390		礫	砂岩	37.7	45.3	26.6	57.0												86
5	391		礫	砂岩	124.5	60.2	61.1	734.2												
5	395		礫	砂岩	70.4	54.9	15.4	82.2												
5	403		礫	砂岩	26.7	17.1	6.6	4.1												
5	412		礫	砂岩	35.4	26.1	15.2	15.2												
5	414		礫	砂岩	25.8	18.9	13.9	1.3												
5	415		礫	砂岩	28.9	13.3	3.0	1.7												
5	373		礫	ホルンフェルス	46.5	44.6	18.9	38.0												195
5	396		礫	ホルンフェルス	36.7	25.7	18.5	13.5												
5	422		礫	ホルンフェルス	30.1	29.6	22.7	9.0												
5	352		礫	凝灰岩	58.7	58.3	27.8	116.7												
5	365		礫	凝灰岩	65.7	58.6	49.5	141.6												
5	392		礫	チャート	41.1	31.9	18.1	16.2												

第2節　古墳と出土遺物

1　調査の方法と経過

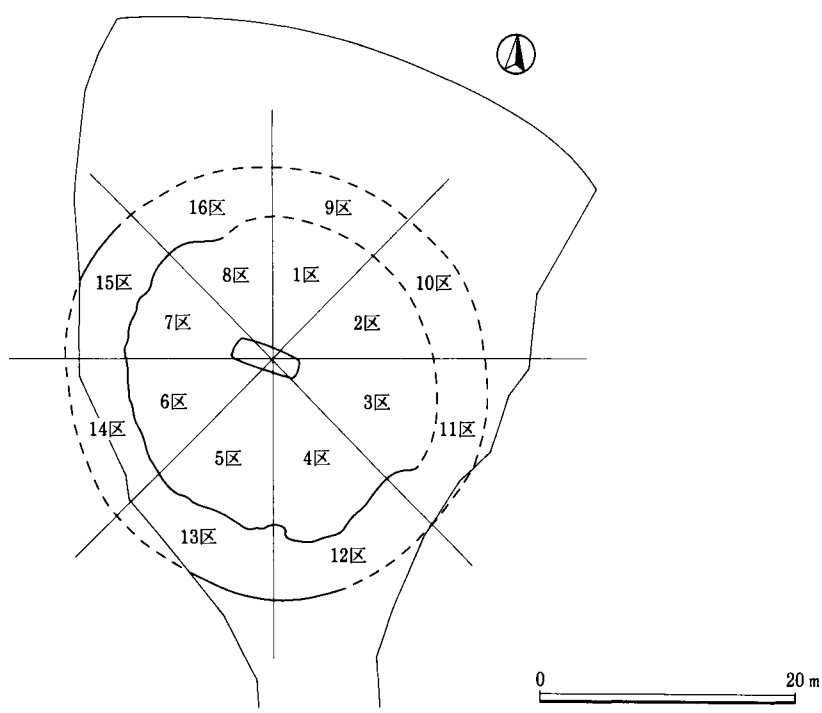
1号墳は、調査前は山林におおわれていた。発掘調査を実施するに当たってまず墳丘の測量を行い（第39図）、その後調査区を設定して確認トレンチを入れることとした。

調査区は、測量によって円墳と推定された古墳の墳頂部を中心として、南北方向と東西方向に直交するラインを引き、墳丘下でそれぞれにポイントを設けた。さらに北西－南東方向、北東－南西方向の軸を引き、同様にポイントを設置した。そしてこれらのポイントを結ぶ線によって区切られる各区を、北北東部から時計回りに1区～8区と称し、それぞれの軸線に沿って1m幅のトレンチを入れ確認を行った。なお、周溝部分は墳丘部とは別に北北東部から時計回りに9区～16区とした（第38図）。その後土層観察のためのベルトを残し、旧表土上面まで墳丘を掘り下げ、周溝内に堆積した土を取り除いたところで実測を行った（第40図）。

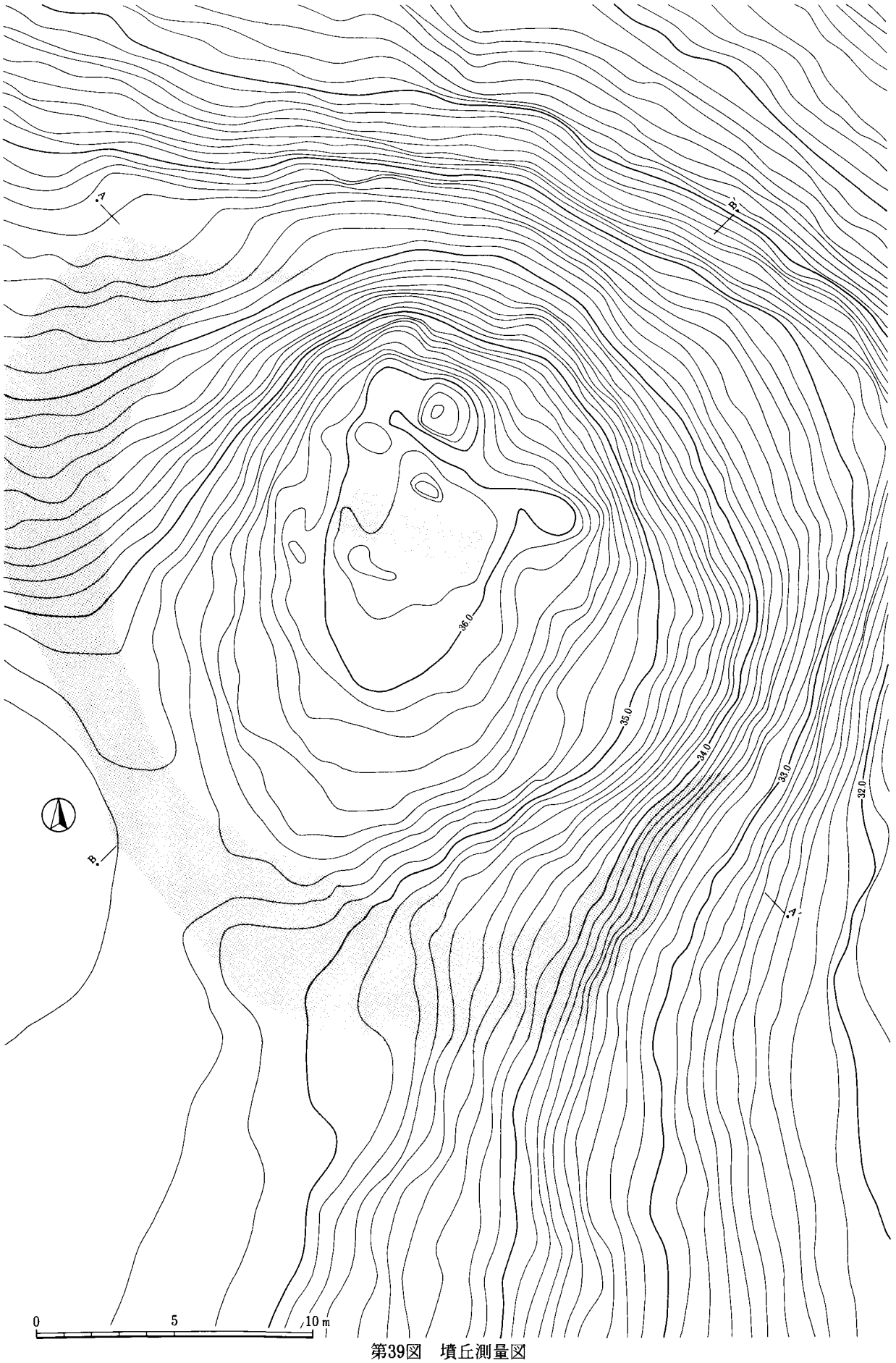
出土遺物は、原則的には各区ごとに一括で取り上げたが、適宜出土位置の記録も行った。

内部施設は、旧表土を剥ぐ過程で墳丘下住居跡群とともに検出された。土層観察のため半截して掘り進めていったところ、鉄鏃や刀剣類が出土したため出土遺物の実測と写真撮影を行ってから内部施設を完掘し、1号墳調査の終了とした。

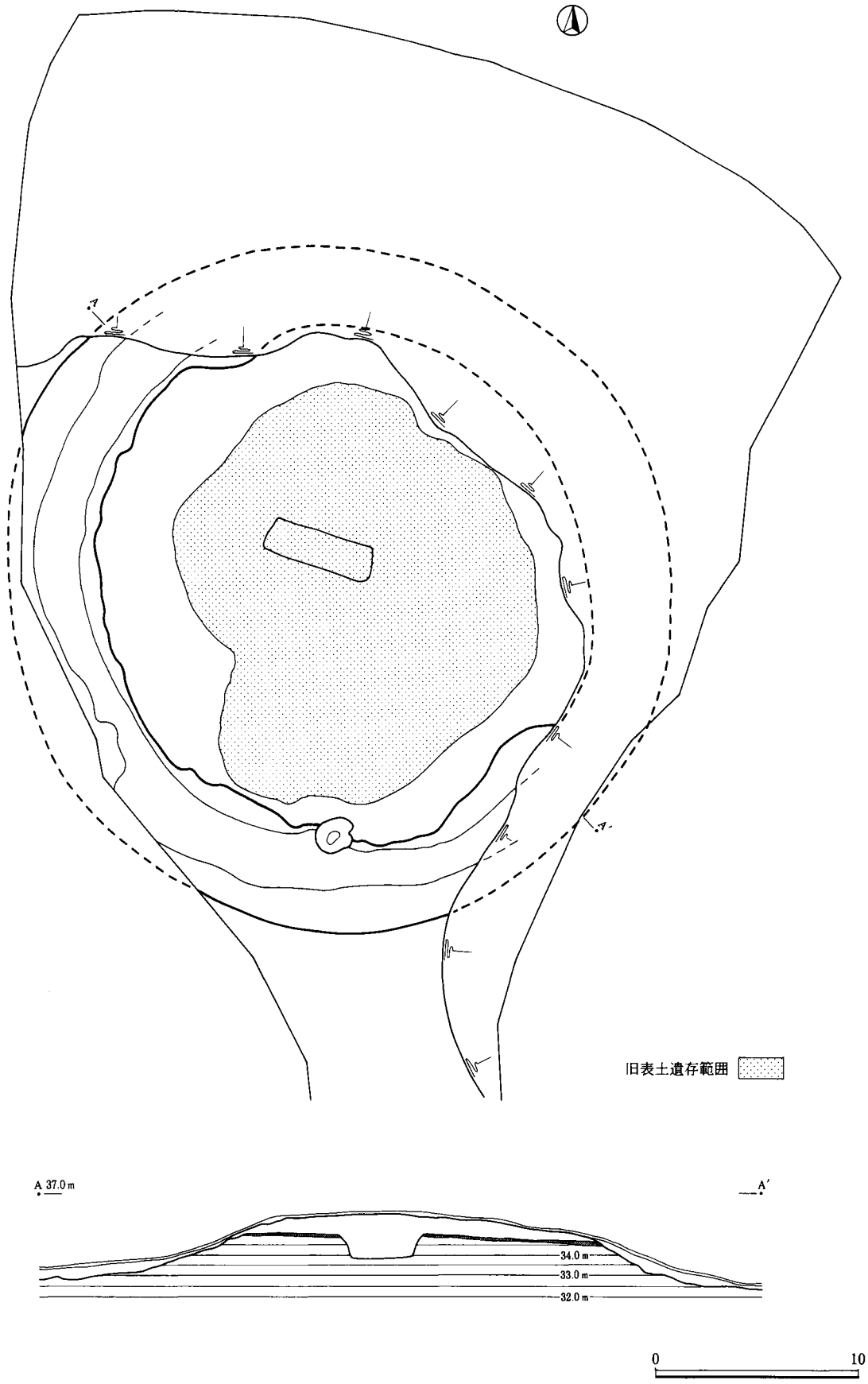
なお、今回の調査では、古墳は1号墳のほか検出されていない。



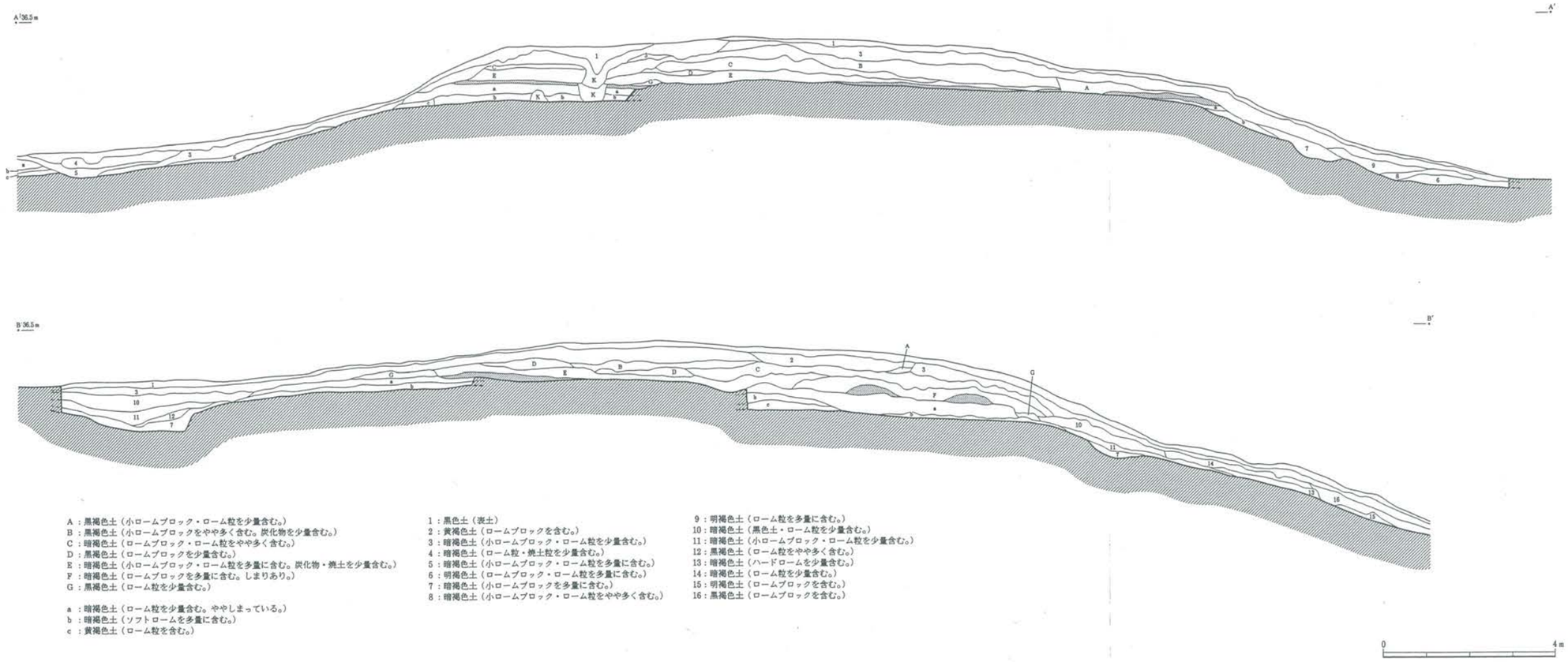
第38図　調査区の設定



第39図　墳丘測量図



第40図　封土除去後実測図



A：黒褐色土（小ロームブロック・ローム粒を少量含む。）
B：黒褐色土（小ロームブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む。）
C：暗褐色土（ロームブロック・ローム粒をやや多く含む。）
D：黒褐色土（ロームブロックを少量含む。）
E：暗褐色土（小ロームブロック・ローム粒を多量に含む。炭化物・焼土を少量含む。）
F：暗褐色土（ロームブロックを多量に含む。しまりあり。）
G：黒褐色土（ローム粒を少量含む。）

a：暗褐色土（ローム粒を少量含む。ややしまっている。）
b：暗褐色土（ソフトロームを多量に含む。）
c：黄褐色土（ローム粒を含む。）

1：黒色土（表土）
2：黄褐色土（ロームブロックを含む。）
3：暗褐色土（小ロームブロック・ローム粒を少量含む。）
4：暗褐色土（ローム粒・焼土粒を少量含む。）
5：暗褐色土（小ロームブロック・ローム粒を多量に含む。）
6：明褐色土（ロームブロック・ローム粒を多量に含む。）
7：暗褐色土（小ロームブロックを多量に含む。）
8：暗褐色土（小ロームブロック・ローム粒をやや多く含む。）

9：明褐色土（ローム粒を多量に含む。）
10：暗褐色土（黒色土・ローム粒を少量含む。）
11：暗褐色土（小ロームブロック・ローム粒を少量含む。）
12：黒褐色土（ローム粒をやや多く含む。）
13：暗褐色土（ハードロームを少量含む。）
14：暗褐色土（ローム粒を少量含む。）
15：明褐色土（ロームブロックを含む。）
16：黒褐色土（ロームブロックを含む。）

第41図　墳丘土層断面図

2　古墳の形態と規模

調査の結果１号墳は、北東側が急斜面、西側が一部調査区外でその部分の周溝が確認できていないものの、円墳であると考えられる。検出された内部施設は１か所のみであり、平面的には墳丘中央部に位置し、旧表土を掘り込んで構築されていた。

古墳の規模は、周溝の内側下端間で径26ｍを測る。周溝の外側上端間では、推定で33.5ｍである。周溝の幅は、上端で５ｍ、下端で2.5ｍである。

墳丘は、土層断面を観察すると、まず周囲の旧表土面を削って整形を行い、円形に残された旧表土面の中央部に墓壙を掘り込んで埋葬を行い、その上に盛土をして構築されていたことが窺える。周溝はさらに周囲を深く掘り込んで造られており、断面形は比較的緩やかなU字状を呈すようである。第41図A層～G層は、盛土と考えられる層である。これらが、遺体を埋めた後、旧表土下自然層と考えられるa～c層及び旧表土層（スクリーントーン部分）の上に盛られたようである。１層～16層は、墳丘及び周溝完成後に自然に堆積したものであると考えられる。なお、墳丘中からは、周囲の住居跡と同時期の土器片が夥しい数で出土しており、周囲の住居跡群を含む範囲を削平して盛土しているものと考えられる。

また、周溝14区にはテラス状の土壇があり、須恵器がその周辺からのみまとまって出土した（第42図）。12区と13区の境あたりでは、径約1.7ｍ、深さ60cmほどのピットが検出されたが、特に遺物は見られなかった。

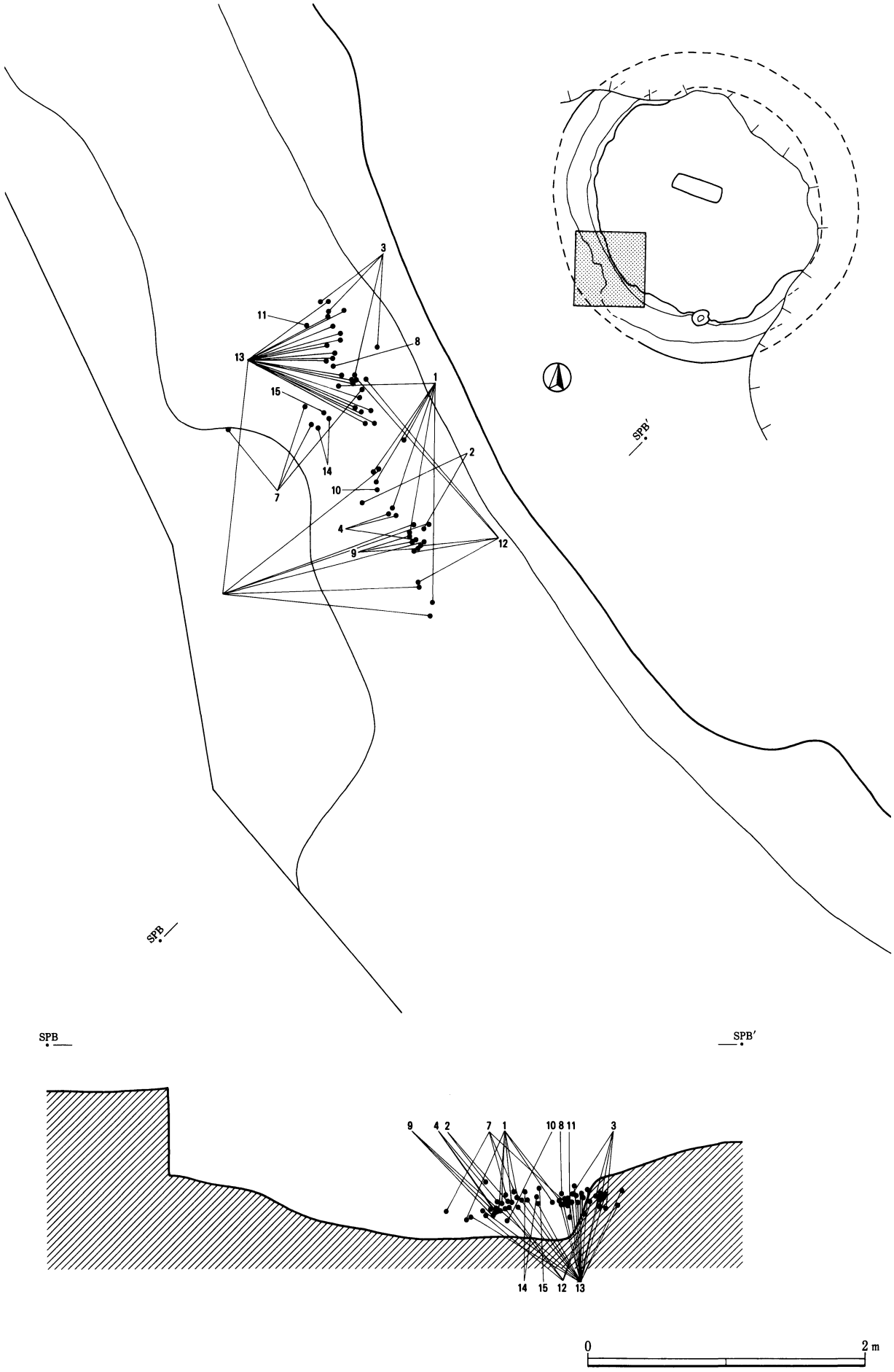
旧表土上面の標高は、35ｍ前後を測る。墳頂部の標高は最高点で36.1ｍであったので旧表土上面から墳頂部までの高さは約1.1ｍとなるが、土層断面図からみるところ、盛土そのものの高さは最高で約80cmである。旧表土上面から周溝底面までは約2.1ｍである。

3　墳丘・周溝内出土遺物（第43・44図、図版28）

実測可能な土器は、墳丘中及び周溝部からしか出土していない。そのうち須恵器は周溝14区のみからの出土であり、ほとんど完形又は完形に近く復元できる状態であった。これらの須恵器群に伴って、内外面に赤彩を施す須恵器模倣杯も２点出土している（第44図14・15）。これらの出土状況から、周溝部出土の遺物については、古墳に伴うものとみてよいだろう。ただし、いずれもレベル的には周溝底面から浮いた状態であり、これらが直ちに１号墳築造年代を表すと考えるのはやや性急である。

墳丘部出土の遺物については、19点を図示することができたが、周辺の住居跡群中のものが多く含まれていると考えられ、明確に古墳に伴うと言えるものはない。

なお、墳丘中央部付近の旧表土面から墳丘下住居跡である079号の覆土上層中にかけて管状土錘がまとまって出土しているが、これらは古墳に伴うものとも住居に伴うものとも判断しかねるため、土製品として一括して後頁に掲載した（第122図）。



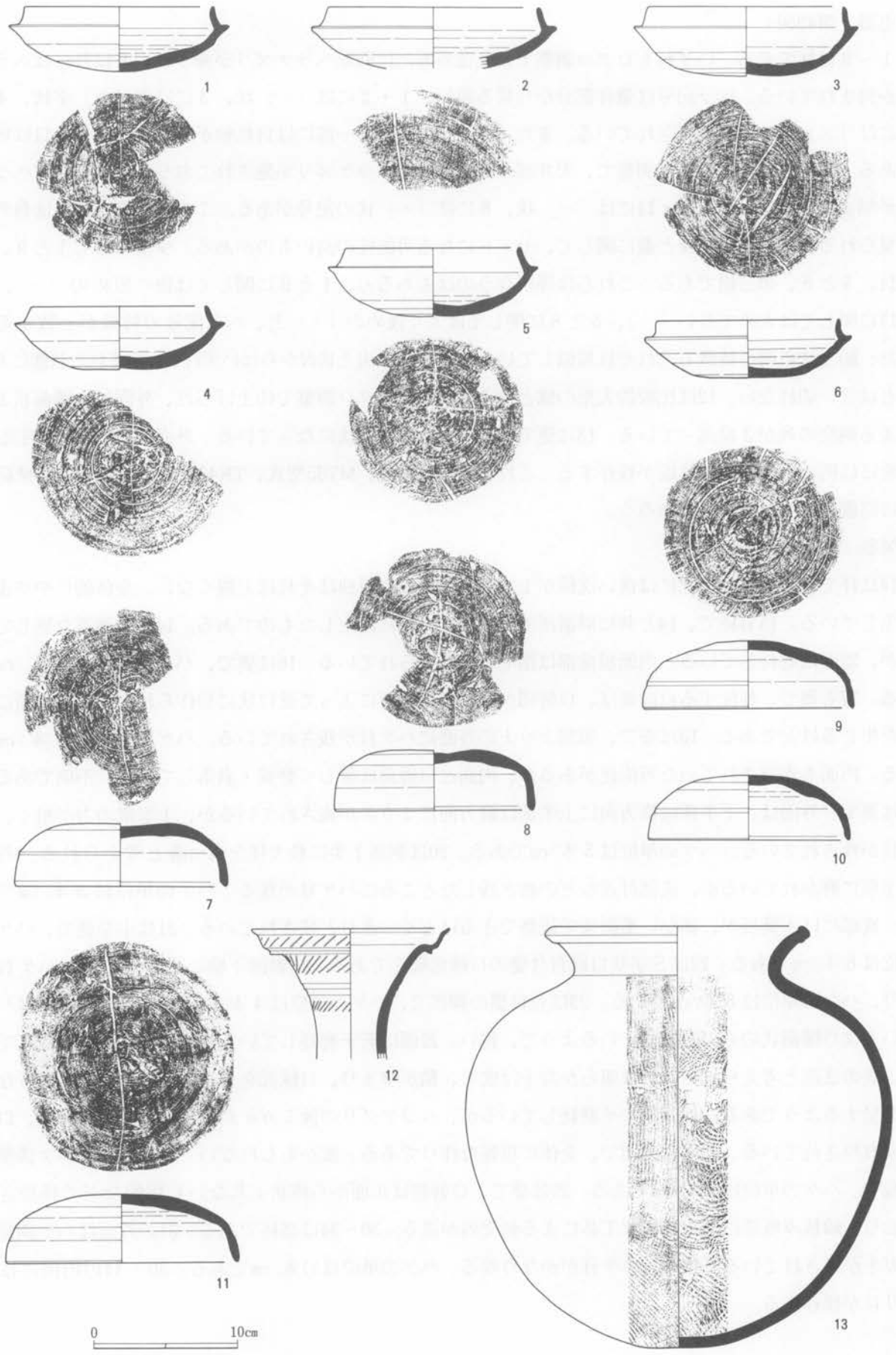
第42図　周溝内遺物出土状況図

須恵器（第43図）

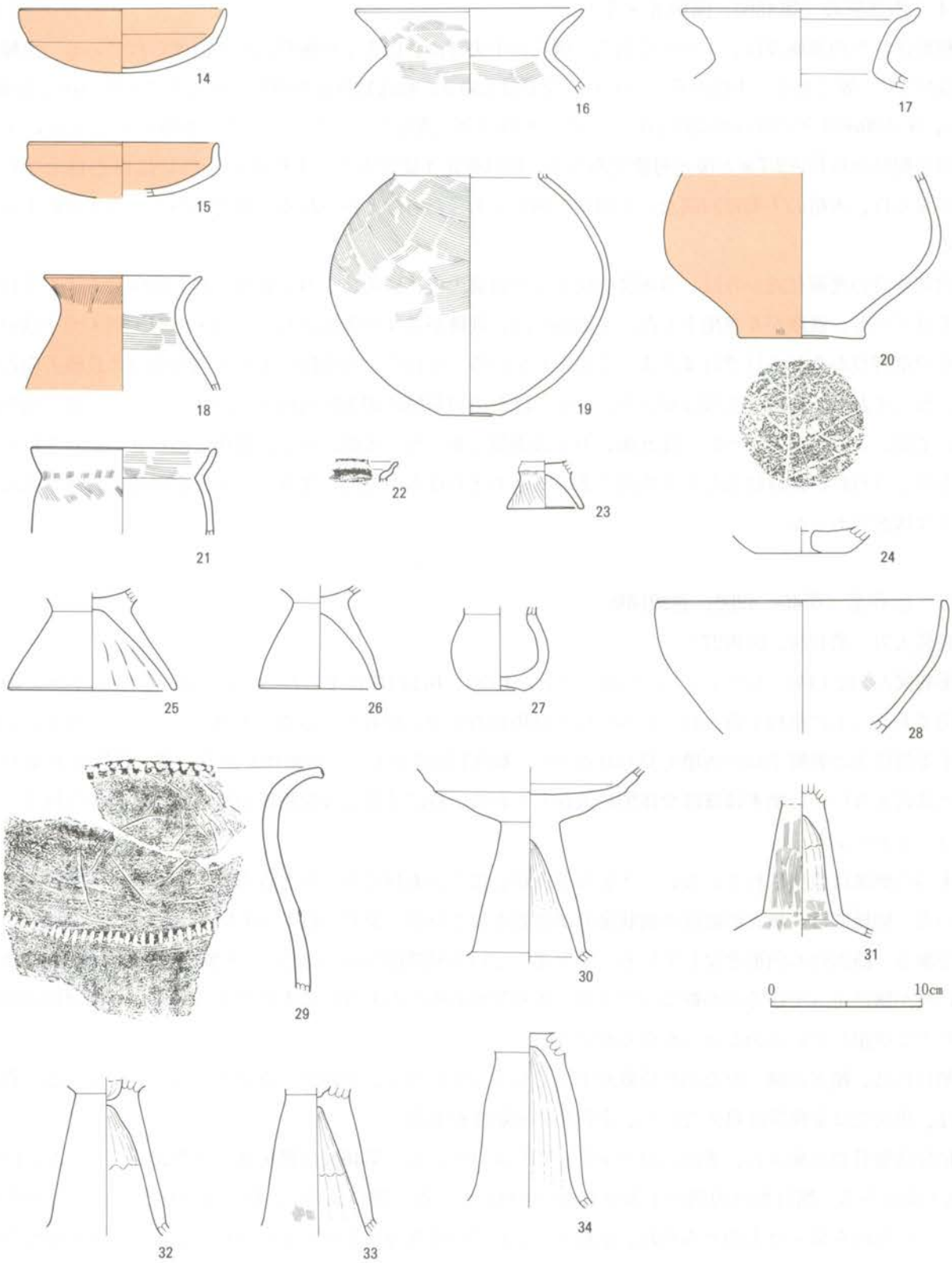
1～6は杯である。いずれもロクロ調整で、底部外面には回転ヘラケズリが施され、6以外にはヘラ記号が刻まれている。ヘラ記号は遺存部分から見る限り、1・2には「－」状、3には逆「キ」字状、4・5には「×」状の記号が施されている。また、4・5の外面の一部には自然釉が見られる。7～11は杯蓋である。蓋もいずれもロクロ調整で、天井部外面には回転ヘラケズリが施されており、10以外にはヘラ記号が刻まれている。7・9・11には「－」状、8には「×」状の記号がある。7の外面の一部には自然釉が見られる。これらの杯身と蓋に関して、セットになる可能性の高いものがある。少なくとも1と9、2と11、5と8、の三組である。これらは径が合うのはもちろん、1と9に関しては鋭く短めの「－」、2と11に関しては太めで長い「－」、5と8に関しては太く浅めの「×」と、ヘラ記号の特徴が一致する。また、胎土や色調の特徴もそれぞれ類似している。ただし、出土状況からはいずれも、組まれた状態にあったとは言い切れない。12は比較的大型の瓶と考えられる。ロクロ調整で仕上げられ、外面には櫛歯状工具による刺突の列が3段巡っている。13は甕である。折返し口縁状になっている。外面には平行叩き目文が、内面には同心円状の当て具痕が残存する。これらの須恵器は、MT85型式、TK43型式に相当し、6世紀後半に位置付けられるものであろう。

土師器（第44図）

14は杯で、外面屈曲部上には浅い沈線が1本巡る。内面の屈曲はそれほど鋭くない。全体的にやや歪みが生じている。15も杯で、14と共に周溝部で須恵器と一緒に出土したものである。14より硬質な感じであるが、器面は磨耗している。内面屈曲部は指で一筋なぞられている。16は甕で、ハケの単位は8本/cmである。17も甕で、外反する口縁部は、口唇部が強いヨコナデによって受口状に形作られている。内面には稜を生じるほどである。18は壺で、頸部より上の外面にハケ目が残されている。ハケの単位は7本/cmである。内面も赤彩されていた可能性があるが、内面と口唇部は著しく磨滅・剥落しており、不明である。19は甕で、外面は、下半部は横方向に上半部は縦方向にミガキが施されているが、上半部の方が粗く、ハケ目が残されている。ハケの単位は5本/cmである。20は胴部下半に最大径をもつ壺と考えられる。外面は丁寧に磨かれているが、底部付近などの磨き残したところにハケ目が残る。ハケの単位は8本/cmである。底部には木葉痕が、細かい葉脈まで観察できるほどくっきりと残されている。21は小型甕で、ハケの単位は8本/cmである。22はS字状口縁台付甕の口縁部破片である。拓影図下端に縦方向の鋭いハケ目があり、ハケの単位は8本/cmである。23は台付甕の脚部で、ハケの単位は4本/cmと粗く、また工具はハケというより櫛歯状のものを用いているようで、鋭い。器面は若干磨耗している。24の孔は焼成前穿孔であり、甑の底部と考えられる。27は明らかな上げ底で、頸が窄まり、口縁部を欠くものの巾着袋のような形態を呈するようである。外面はやや磨耗しているが、ヘラケズリの後ミガキが施されている。28は、口唇が面取りされている。器面は凸凹で、全体に粗雑な作りである。甑かもしれない。内面に一部ハケ調整痕を残す。ハケの単位は8本/cmである。29は甕で、口唇部は正面から棒状工具ないし指頭などで押捺されており、輪積み痕部には布巻棒状工具による刺突列が巡る。30～34は高杯である。31の外面はハケ調整後ミガキが施されているが粗く、ハケ目がかなり残る。ハケの単位は11本/cmである。30～34の内面にはシボリ目が残存する。



第43図　1号墳出土土器（1）



第44図　1号墳出土土器（2）

4　内部施設（第45図、図版６・７）

検出された内部施設は、１か所である。墳丘の中央部に、旧表土を掘り込んで設けられている。主軸方向はN-74°-Wである。木棺直葬とみられ、全長は5.50ｍ、幅は1.75ｍを測る。中央部に長軸1.0ｍ、短軸0.5ｍ、深さ30cmほどの窪みが設けられている。木質は全く遺存していなかったが、木棺の大きさは、土層断面の観察から長さ2.7ｍと復元可能であるが、幅は推定不能である。木棺部の下部には白色粘土ブロックが見られ、木棺の下端部四隅ないし周囲に施してあったものとみられる。確認面からの深さは約１ｍである。

内部施設の底面付近からは、金銅装の鞘をもつ銀装大刀、鹿角装小刀、鹿角装剣、鹿角装刀子がそれぞれ１点ずつと、鉄鏃が６点出土した。平面的には、鉄鏃がほぼ中央部から、大刀・小刀・剣・刀子は中央部やや東寄りから、それぞれまとまって出土している。それらの方向はいずれも内部施設の長軸方向と平行になっており、鉄鏃の先端は東向きに、そのほかの刀剣類の切先は西向きに揃っていた。刃部の向きについては、大刀と小刀については北側、刀子は南側であった。木棺の中に、遺体に添わせて副葬されていたものとみられ、鉄鏃はもともと空洞であったと考えられる中央部の窪みに、木棺の腐朽後、落ち込んだような状況であった。

5　副葬品（第46～49図、巻頭図版）

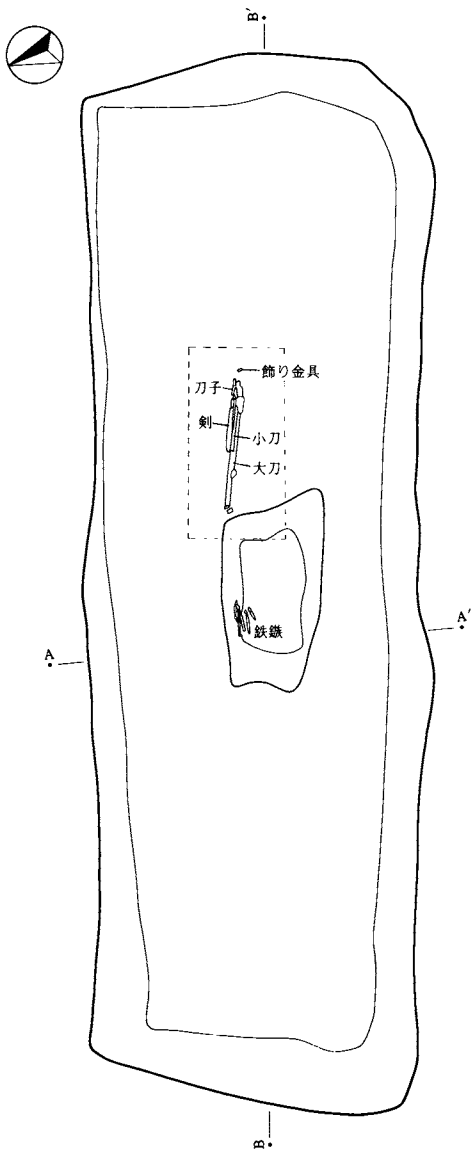
金銀装大刀（第48図、図版27）

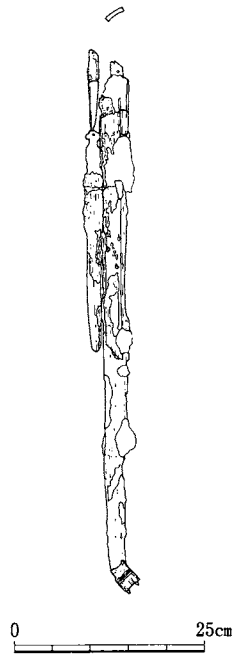
第48図Aは出土時に上になっていた面（以下、上面）、Bは同様に下になっていた面（以下、下面）の実測図である。上に重ねて置かれたとみられる鹿角装の小刀と癒着している。大刀の上に小刀を固定して副葬する例は主に朝鮮半島の古墳で見られるが[2]、本例も同様であった可能性がある。遺存状態はあまり良いとは言えないが、鞘木はほぼ全体的に遺存しており、特に下面では樹脂膜の残る部分も認められる（スクリーントーン部分）。

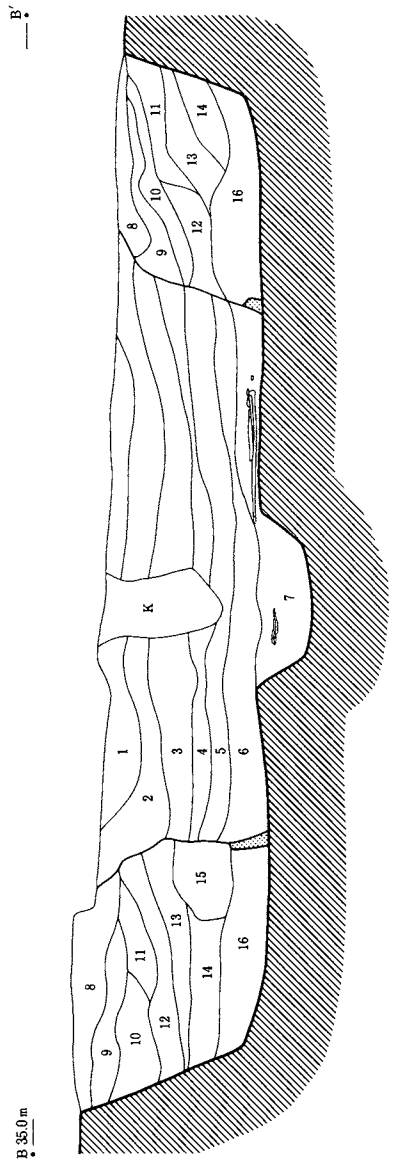
大刀の柄頭は検出されていない。木製など遺存しにくい素材であったとみられる。茎は全体的に遺存している。柄縁には、無文の銀板の筒状金具が装着されている。金具の長さは3.4cm、幅は3.1cm、厚さは1.5mmを測る。断面は八角形を呈している。茎を覆っている柄間部分は、おそらく木製とみられ、表面には所々低い段が横に走っているのが観察されるが、彫刻等があるのかどうかは不明である。また、柄頭側の端部はそこで破損しているのかどうか明らかでない。

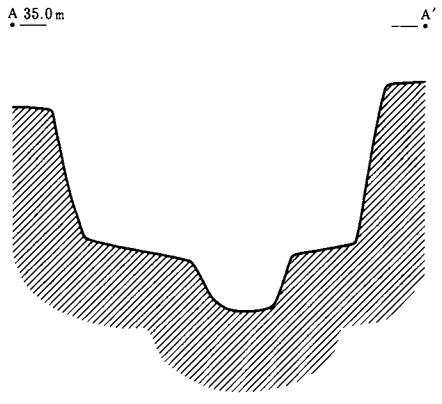
鞘口には、鞘木が腐ったために位置がずれてしまっているが、金銅製の責金具がはめられている。責金具は、現状では金膜等は見えないが、金銅装の可能性がある。

鞘尻は蟹目釘が施され、表面に飾り金具が巡らされている。第46図は鞘尻部の実測図である。Aは上面、Bは下面である。蟹目釘は刃側の１本の先端が折損している。飾り金具は、細かな文様が施された銅の地金に金の薄板を貼ったものとみられ、金板がつぶれている部分や文様が出し切れていない部分も観察される。幅は８mmを測る。実測図のスクリーントーン部分は、銅地が露出してしまっている部分である。また、上面の金板の上の一部には、錆のような付着物も認められる。文様は、沈線によって５層に区切られており、中央には直径２mmほどの珠文が連続的に見られ、その上下に綾杉状の刻みが施されるものである。鞘尻部の金具部分以外の表面は、全体的に緑青色の銅錆の付着が認められ、金銅製の筒金具で覆われていた可能性がある。ただし、下面のごく一部に布片の付着が認められるが、これには銅錆が付着していない。









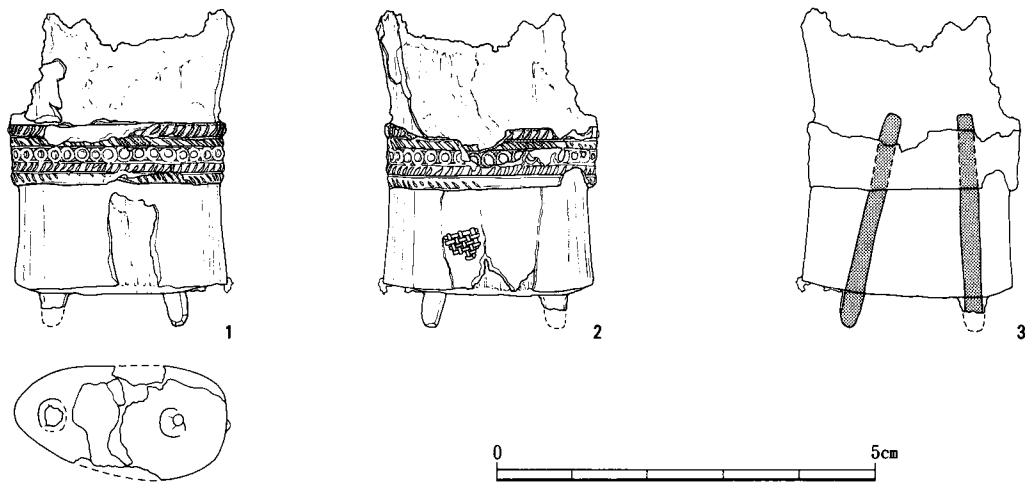
1．暗褐色土：小ロームブロックを主とし、ローム粒を多く含む。
2．暗褐色土：ロームブロックを主とし、黒褐色土・ローム粒を少量含む。
3．暗褐色土：小ロームブロックを主とし、黒色土を多く、ローム粒を少量含む。
4．暗褐色土：ロームブロックを主とし、ローム粒を少量含む。
5．暗褐色土：ロームブロックを主とし、黒色土を少量含む。
6．暗褐色土：ローム粒を主とし、小ロームブロック、暗褐色土を少量含む。
7．黒褐色土：小ロームブロックを多く含む。しまりがない。
8．暗褐色土：ソフトロームを多く含む。
9．暗褐色土：小ロームブロック・ローム粒を主とし、黒褐色土を少量含む。
10．黒褐色土：ローム粒を多く含む。小ロームブロックを少量含む。
11．黒褐色土：ロームブロックを主とし、ローム粒を多く含む。
12．暗褐色土：ロームブロックを主とし、ローム粒を多く、黒色土を少量含む。
13．暗褐色土：ロームブロックを主とし、ローム粒を多く含む。
14．暗褐色土：ローム粒を多く含む。
15．明褐色土：ロームブロックを主とし、黒色土・ローム粒を多く含む。
16．暗褐色土：ロームブロックを多く含む。

0　1m

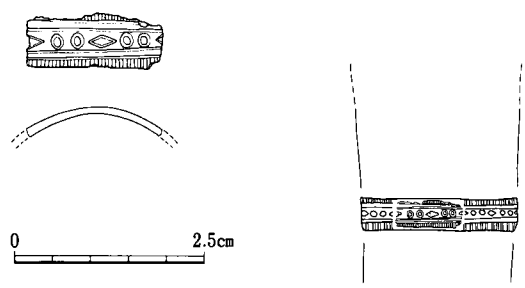
第45図　内部施設実測図

金銅製の飾り金具とみられるものは、このほかに鞘尻金具と類似するものが1片遊離して検出されている（第47図）。これはごく一部分の遺存であり、肉眼では金で飾られていたか確認できないが、推定される幅や、文様が沈線によって5層に区切られているところは鞘尻金具と共通する。しかし文様の構成を見ると、中央部は珠文2つの間に菱形を1つ挟むパターンの繰り返しとみられ、その上下の区画は無文、縁辺の区画は縦の刻み文で、鞘尻金具とは異なるものである。出土した位置や、鞘や柄よりやや膨らむ形であることなどを考え合わせると、これは鞘に付くものではなく、有機質の柄頭を飾る1条の金具であった可能性が高いと言えよう。

鞘木を含めた現存の全長は71.4cm、蟹目釘の先端まで含めた復元現存長は77.8cm、刀身の現存の全長は71.3cm、現存の刃部長は60.5cm、茎長は10.8cmを測る。また、刃部の背の厚さは約7mmで、幅は先端付近で2.6cm、刀身中央付近で2.7cm、関付近で3.1cmである。目釘は関から9cmのところにあり、孔径は約4mmである。



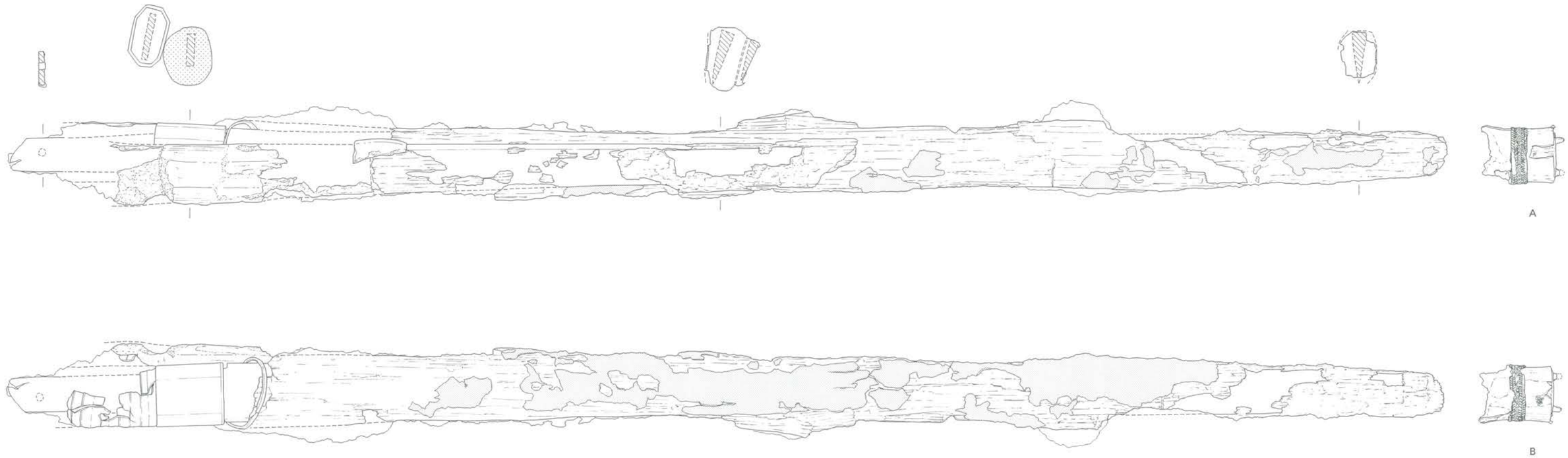
第46図　金銀装大刀鞘尻金具

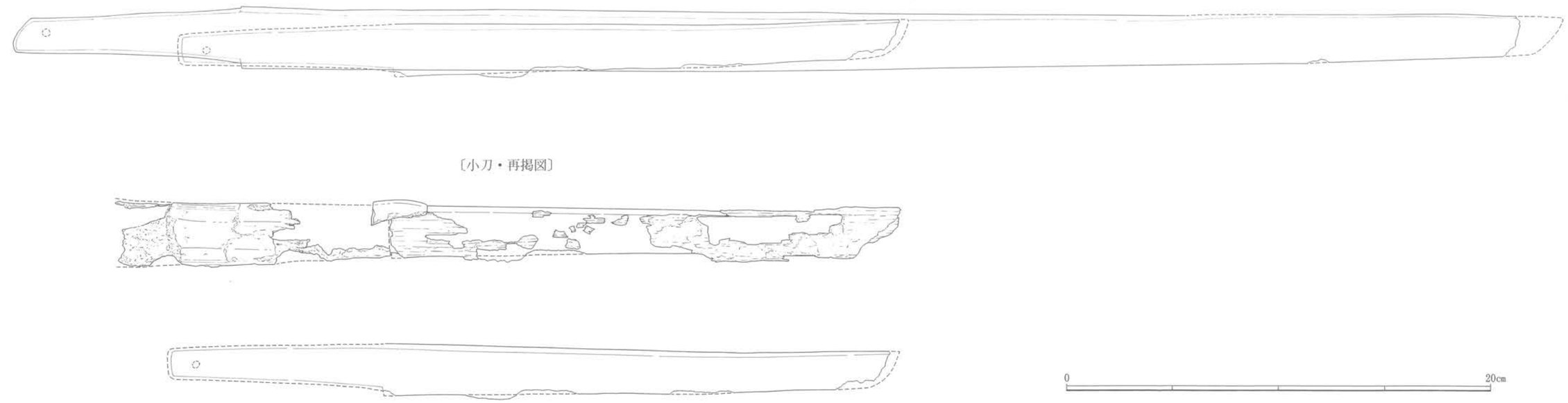


第47図　飾り金具と柄頭推定復元図

鹿角装小刀（第48図）

金銀装大刀の上面に密着した状態で出土し、現状では大刀と癒着して分離不可能である。佩表と佩裏の向きは大刀と同じで、きちんと揃えて重ねて副葬したものと考えられる。鞘木が部分的に遺存しているが、大刀の鞘のような表面の樹脂膜は確認できず、また飾り金具類も検出されていない。切先は欠損している。





第48図　金銀装大刀・鹿角装小刀

関の部分は若干欠けているが、復元は可能である。柄は鹿角製で、表面が遺存しているところもあるが、大部分は著しい錆に覆われているか又は破損しており、詳しい形や柄頭方面がどの程度伸びるのか、表面に彫刻があったか等については不明である。

錆と鞘木を含めた全長は現存値で47.2cm、刀身の全長は34.2cm、刃部長23.9cm、推定茎長10.3cmを測る。刃部の背の厚さは約4㎜で、幅は先端付近で2.0cm、刃身中央付近で2.2cm、関付近で2.5cmである。

鹿角装剣（第49図1）

金銀装大刀に隣接して、切先の位置が小刀の切先の位置と揃った状態で出土した。刀身はほぼ完全に遺存しているとみられる。鞘木が部分的に遺存しており、さらにその上に、樹脂を塗った皮革とみられるものが被せてあったようである（スクリーントーン部分）。樹脂のはがれている面には、鞘木の木目に対して斜め方向になる細かい条線が認められる。厚さは1㎜～2㎜あり、皮袋状のものであったと考えられる。この皮革とみられるものは一部、柄まで伸びている。柄は鹿角製であるが表面が残っているのは一部のみで、遺存状態は良くない。表面に彫刻等があったかは不明である。なお、皮袋状のものの上には一部、鞘とは別の木質の認められるところがある。

全長は30.8cm、刃部長24.2cm、茎長6.6cm、茎の厚さ4㎜を測る。また、刃部の幅と背の厚さは、それぞれ先端付近で1.5cm、4㎜、中央付近で2.0cm、5㎜、関付近で2.6cm、3㎜である。

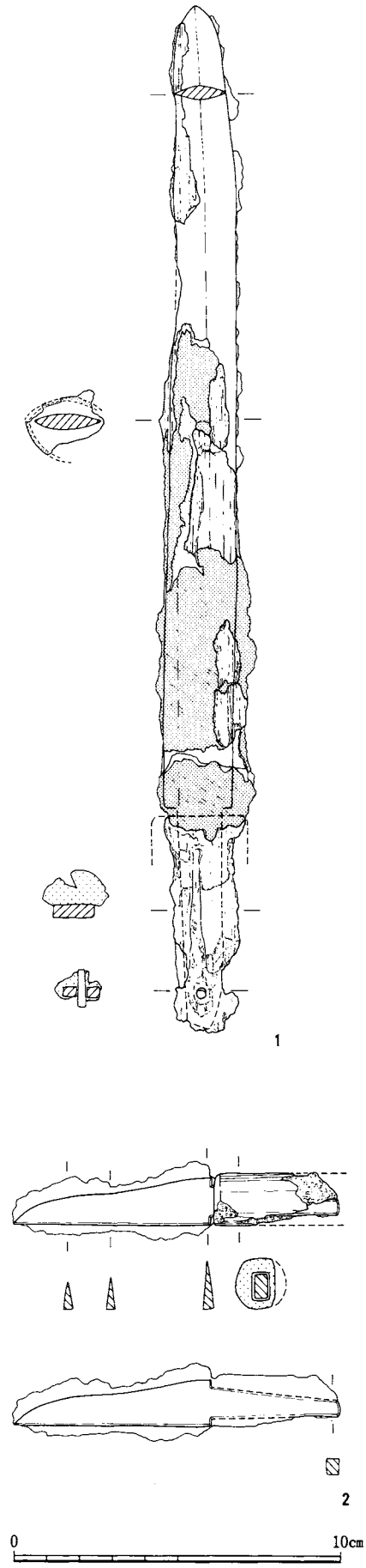
鹿角装刀子（第49図2）

鹿角装剣の柄頭に切先が隣接するような状態で出土した。刀身は切先から茎まで完全に遺存している。刃部は中央部が若干くびれる形を呈するようである。柄は鹿角製で、柄縁の部分は面取りされている。表面の彫刻の有無については、明らかでない。

全長は10.0cm、刃部長6.1cm、茎長3.9cm、茎の厚さ4㎜を測る。また、刃部の幅と背の厚さは、それぞれ先端付近で0.8cm、3㎜、中央付近で0.9cm、3㎜、関付近で1.4cm、3㎜である。

鉄鏃

木棺部中央付近にまとまって6本程度出土したが、遺存状態が極めて悪く、いずれも実測不能であった。



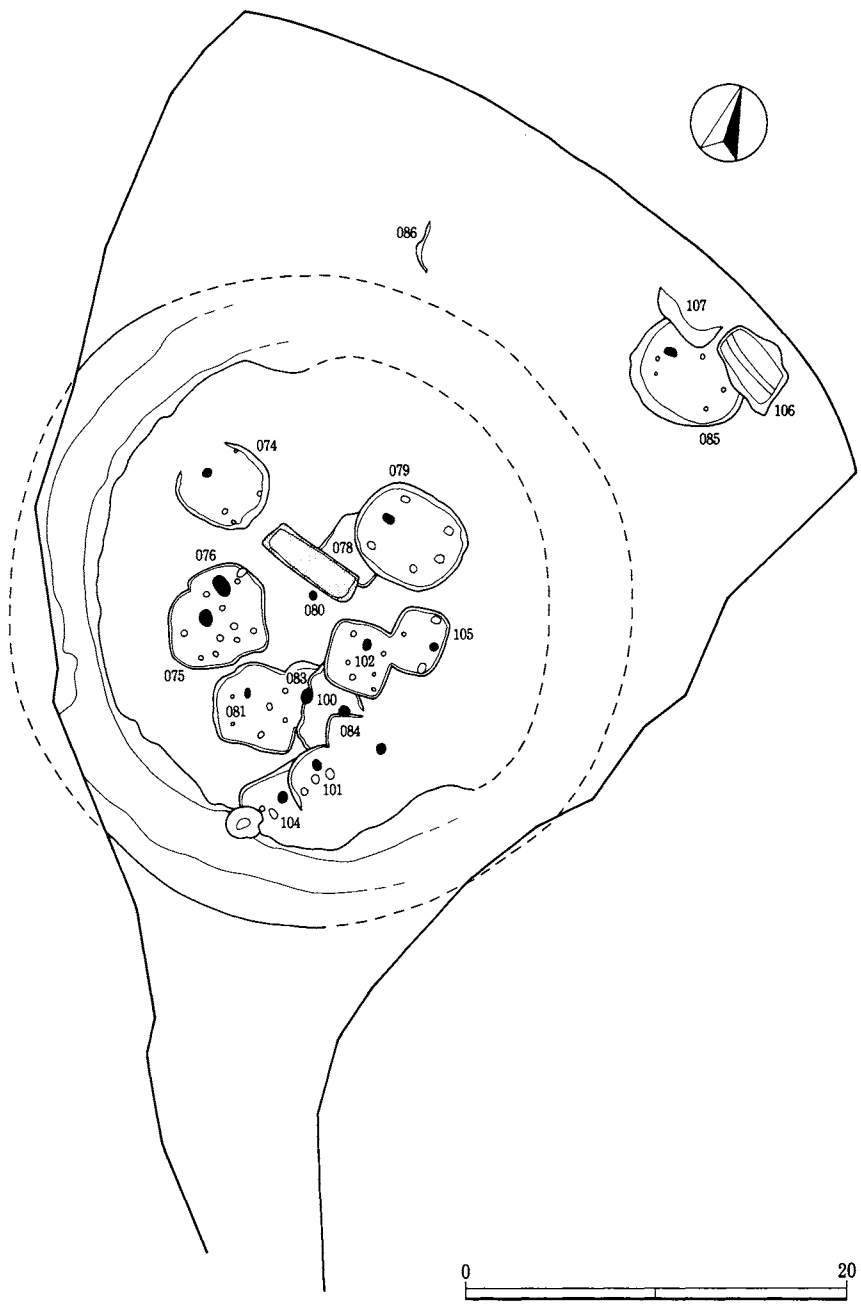
第49図　鹿角装剣・鹿角装刀子

059
097
096
094
098
093
091
092
099
090
089
087
069
070
068
088
071
067
066
065
109
064
062
063
072
054
047
053
061
050
052
049
051
048
057
058
056
039A
039B
046
044
042
043
040
038
012
011
037
036
045
035
032
023
021
030
031
029
028
026
025
027
034
033
015
016A
016B
019
020
014
013
010
017
018
009
003
004
006
007
008
005
001
002
0
20 m

第50図　遺構配置図（1）

第3節　住居跡と出土遺物

検出された竪穴住居跡は、合計81軒を数える。そのほとんどは、弥生時代後期から古墳時代中期までに属すると考えられる。ただし、それらの多くは互いに切り合い、さらに一部を流失し、詳細不明のものが少なくない状況である。1軒当たりの出土遺物内容も豊富とは言えず、個々の遺構の時期及び重複遺構の新旧関係の決定には、慎重を期さねばならない。したがって、ここでは個々の遺構について、時代ごとではなく、原則的には発掘調査時の遺構番号順に記載し、必要に応じて新旧関係等に関する所見を加えていくこととする。



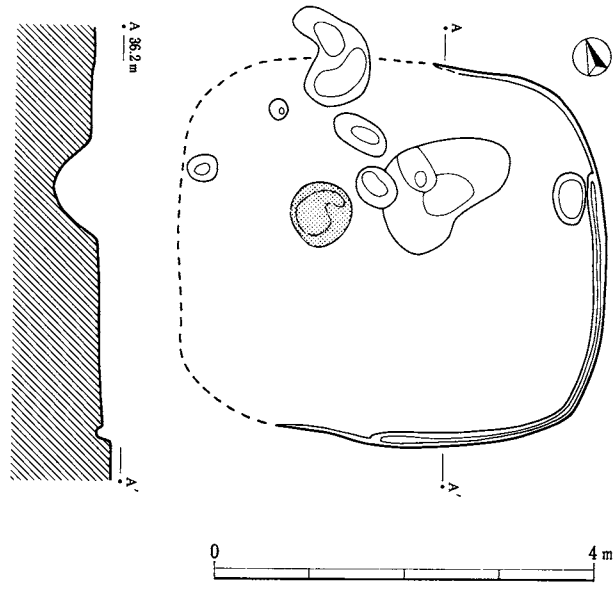
第51図　遺構配置図（2）

003号（第52図、図版８）

遺構：6D-15・16グリッド等に位置する。

東半分のみ遺存するが、プランは隅丸方形と推定され、南コーナー部分には遺存部位内で完結する周溝が検出された。遺存部の軸長は4.0ｍ、遺存する壁高は最大で６cmである。覆土は単一で、暗褐色土が堆積していた。床面からは何個かのピットが検出されたが、いずれも深さ20cm内外であり、機能を特定できるものはない。炉は、辛うじて検出されたものの、ほとんど焼けておらず、焼土の分布が見られたのみである。

遺物：実測可能な遺物は、出土していない。

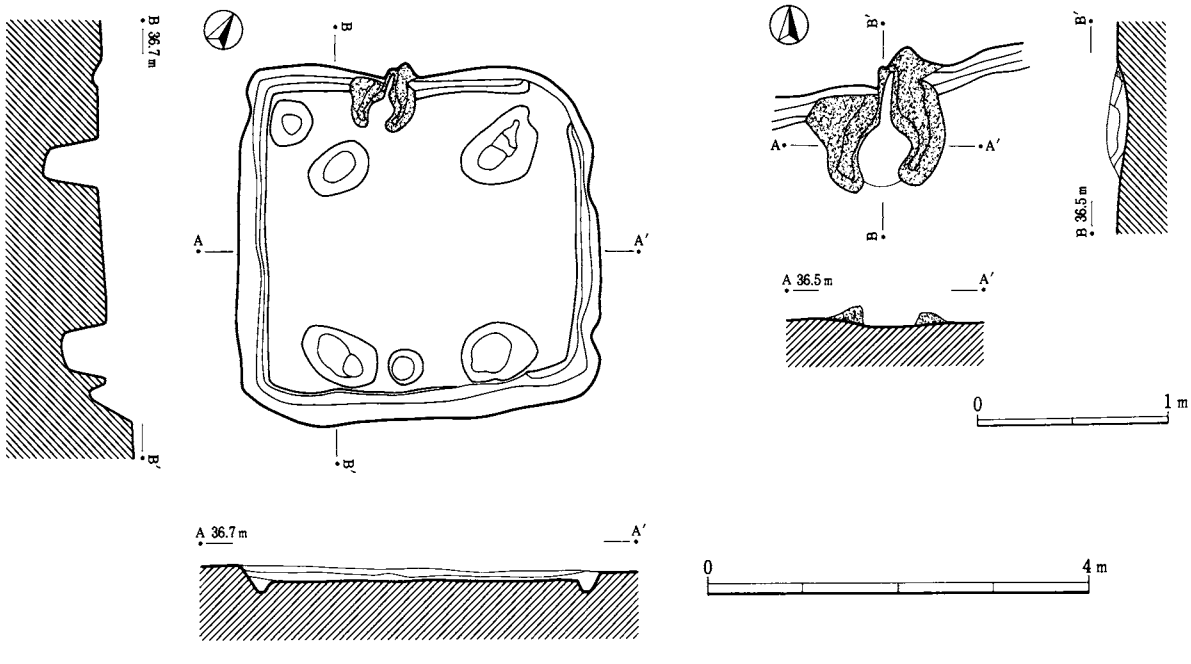


第52図　003号実測図

004号（第53・54図、図版９）

遺構：6D-37・47グリッド等に位置する。

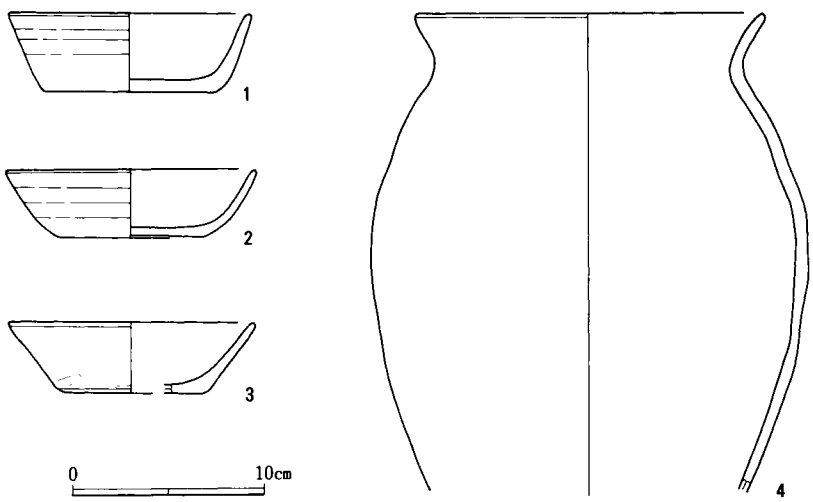
若干隅が丸くなる部分もあるが、ほぼ正方形のプランである。主軸方位は、N-34°-Wである。北コーナーの一部分を除いて、しっかりとした掘り方の溝が巡っている。軸長は3.8ｍを測る。壁は斜めに立ち上がり、壁高は最大で20cmを測る。覆土は２層に分けられ、上層から暗褐色土層、炭化粒を少量含む黒褐色土層が堆積していた。ピットは主柱穴とみられるものが４個、梯子穴とみられるもの、貯蔵穴とみられ



第53図　004号実測図

るものがそれぞれ1個ずつ検出された。柱穴とみられるものの深さは、いずれも50cm～60cmを測り、梯子穴とみられるものと貯蔵穴とみられるものはそれより浅く、それぞれ約20cm、約30cmである。床面は遺構中央部付近が硬化していた。カマドは北東壁に設けられていたが、掘り方も浅く、袖の遺存状態もあまり良くない。

遺物：4点が実測可能であった。1～3は土師器の杯である。いずれもロクロにより調整されているが、1と2は焼成が甘く、器面がかなり磨耗していて外面底部付近の調整痕ははっきりしない。1には回転ヘラケズリ、2には手持ちヘラケズリが施されているようである。3には、外面底部に手持ちヘラケズリ痕が観察される。4は土師器の甕である。口縁は比較的直線的に外側に開き、胴部はあまり張り出さず長胴気味である。外面胴部にはヘラケズリが施されているようだが、全体的にナデ調整が行われており、ヘラケズリ痕ははっきりしない。



第54図　004号出土土器

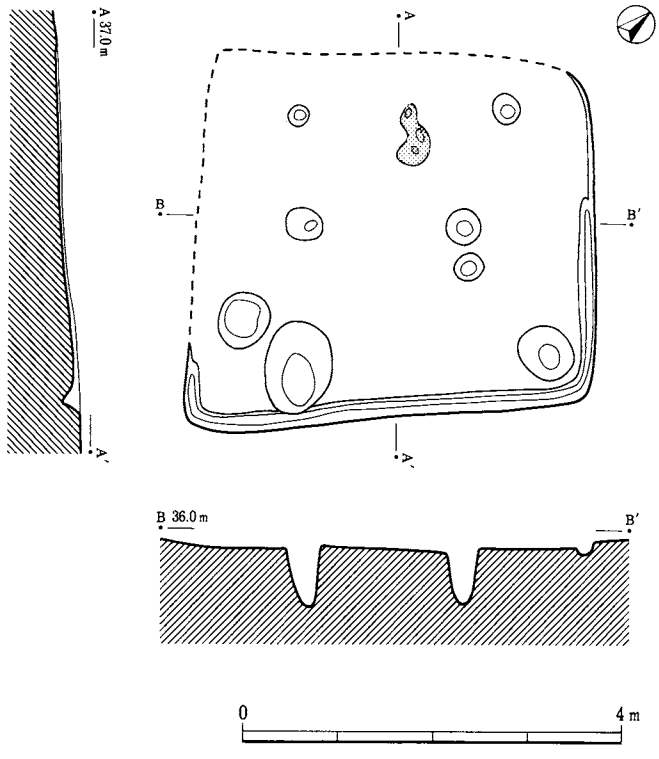
009号（第55図、図版9）

遺構：6D-22・32グリッド等に位置する。

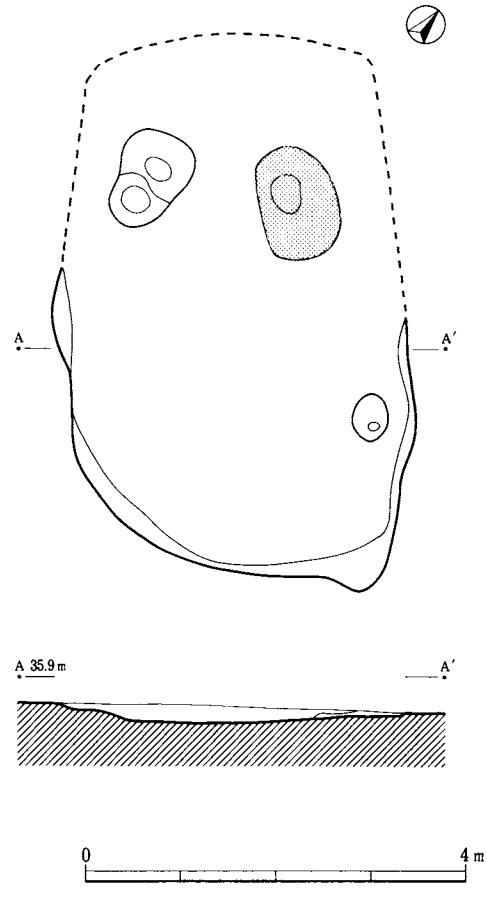
東半分のみの遺存である。壁際には、遺存部位内でほぼ完結する周溝が検出された。プランは正方形に近い方形と推定され、軸長は長軸で4.3m、短軸で推定3.9mである。床面の確認面からの深さは最大で5cmである。覆土は単一で、暗褐色土であった。床面からは、8個のピットが検出されている。中央部の2本と東コーナー部のものはやや深く、60cm前後を測るが、その他は10cm～20cm内外の深さである。

炉は不整形を呈し、掘り方も極めて浅く、炉床もほとんど焼けていなかった。

遺物：実測可能な遺物は、出土していない。



第55図　009号実測図



第56図　010号実測図

010号（第56図、図版９）

遺構：5D-79・5E-70グリッド等に位置する。

南半分のみの遺存である。北半分は015・016A・016B号と重複関係をもつようである。プランは確定できない。遺存部の軸長は、3.7ｍ、床面の確認面からの深さは、最大で16cmである。覆土は２層に分けられるが、いずれもローム粒を多量に含む黒褐色土と暗褐色土である。ピットは南側のものは深さ約60cm、北側のものは30cmほどを測るが、機能は確定できない。炉は焼土が少量認められるのみである。

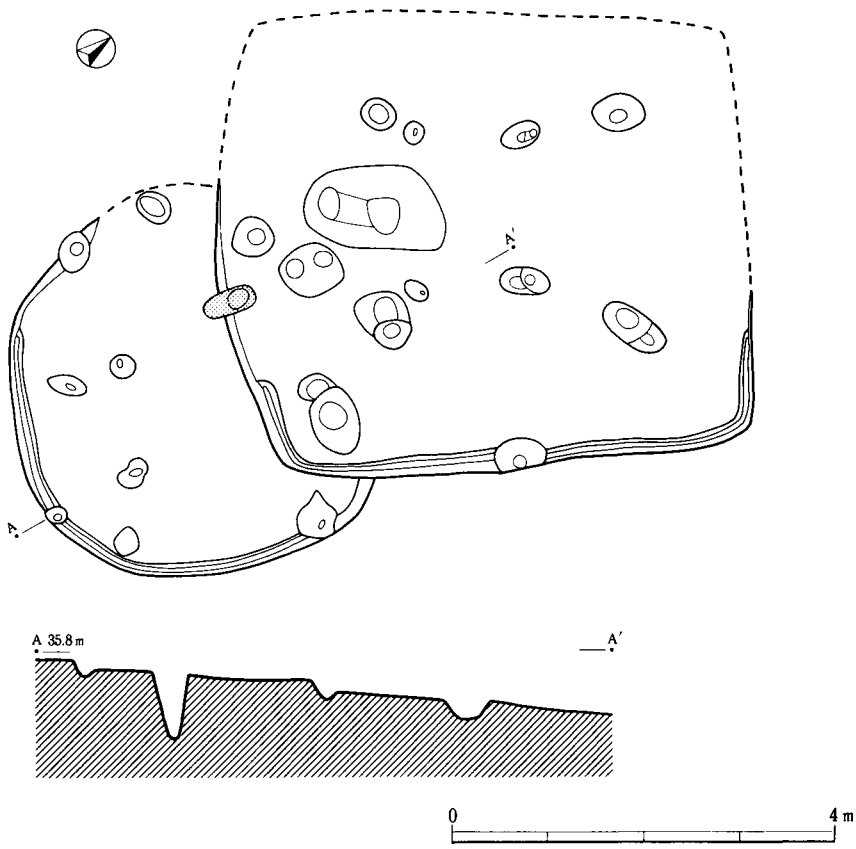
遺物：実測可能な遺物は出土していない。

013・014号（第57図、図版10）

遺構：013号は5D-95・96グリッド等に、014号は5D-75・85グリッド等に位置する。

いずれも東半分のみの遺存であるが、014号の方が新しいと判断される。プランは013号が円形、014号が方形と推定され、その規模は推定で013号が径4.1ｍ、014号が5.7ｍ×4.7ｍである。遺存する壁の高さは、013号、014号ともに最大で12cmである。覆土はそれぞれ単一で、013号には黒褐色土、014号には暗褐色土が堆積していた。ピットは、014号には主柱穴とみられるもの、補助柱穴とみられるもの、その他貯蔵穴などと考えられるものが何個か検出されたが、炉は検出できなかった。013号のピットは、明確に柱穴と特定できるものはない。ただし、014号との境界線上に焼土分布の見られるピットが１つ確認されており、これが013号の炉であったと考えられる。

遺物：いずれも実測可能なものは出土していない。



第57図　013・014号実測図

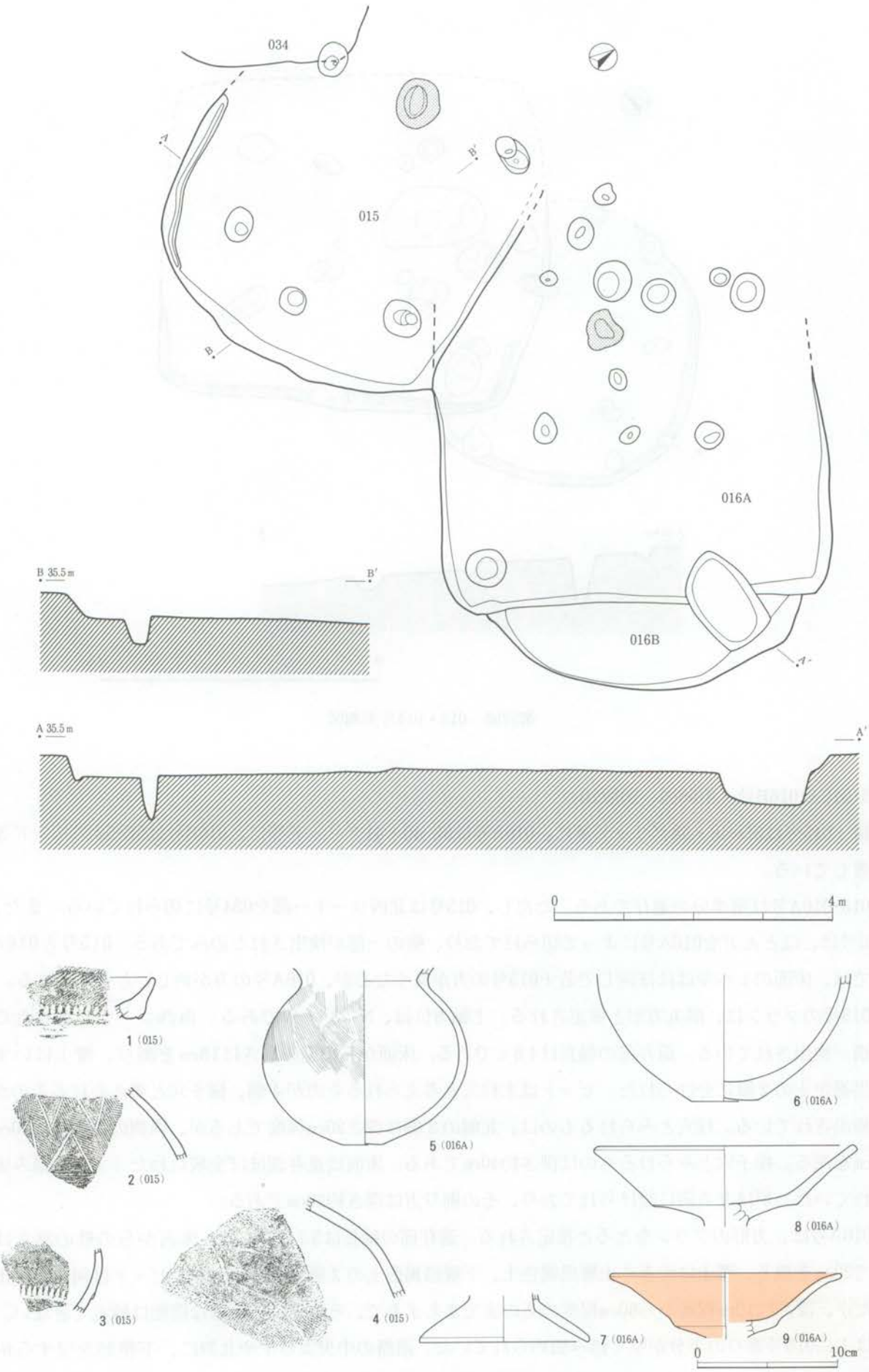
015•016A•016B号（第58図、図版10）

遺構：015号は5D-48・58グリッド等に、016A号は5E-40・41グリッド等に、016B号は5E-52グリッド等に位置している。

015•016A号は南半分の遺存である。ただし、015号は北西コーナー部を034号に切られている。また、016B号は、ほとんどを016A号によって切られており、壁の一部が検出されたのみである。015号と016A号とでは、床面のレベルはほぼ同じで若干015号の方が低くなるが、016A号の方が新しいと考えられる。

015号のプランは、隅丸方形と推定される。主軸方位は、N-23°-Wである。南西コーナー部付近には周溝が検出されている。遺存部の軸長は4.8mである。床面からの壁の高さは18cmを測り、覆土はいずれも黒褐色土の2層に分けられた。ピットは主柱穴と考えられるものが4個、梯子穴と考えられるものが1個検出されている。柱穴とみられるものは、北側の2個は深さ20cm程度であるが、南側のものは約70cm～80cmを測る。梯子穴とみられるものは深さ約40cmである。床面は遺存部ほぼ全域にわたって良く踏み固められていた。炉は北方向に設けられており、その掘り方は深さ約20cmである。

016A号は、方形のプランをとると推定される。遺存部の軸長は5.7mである。床面からの壁の高さは最大で20cmを測る。覆土は大きく上層黒褐色土、下層暗褐色土の2層に分けられる。ピットは何本も検出されたが、深さは10cm程度から60cm程度のものまでまちまちで、それぞれの明確な機能は特定できない。床面は主に015号寄りの半分が堅く踏み固められていた。遺構の中央よりやや北側に、不整形を呈する炉が設けられている。



第58図　015・016A・016B号実測図・出土土器

016B号は、円形又は楕円形プランと推定されるがその規模は不明である。床面はしまりがなく、ピット・炉等も検出されていないが、016A号の範囲内で検出されているピットのいずれかが016B号のものであった可能性もある。

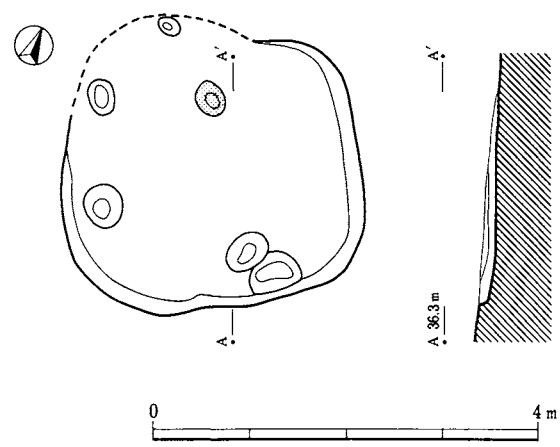
遺物：015号で4点、016A号で5点実測可能であった。016B号では実測可能な遺物は出土していない。

1・2・4は壺の破片である。1は口縁部で折返し口縁の外面に細かいＬＲ縄文が2段施され、下端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。内面は赤彩されている。2は、縄文施文後、沈線で山形に区画している。施文部以外には赤彩が施されている。3は鉢の口縁部破片とみられるが、口唇部を欠く。縄文が羽状に施され、下端部には布巻棒状工具による押捺が施される。施文部以外の外面と内面は赤彩されている。4は、拓影図上部と下部に縄文が施文され、Ｓ字状結節文が見られる。施文部以外はミガキが施され、赤彩されている。5は小型の甕であり、外面は上半部にハケ調整を施した後、最大径付近を横に、さらに下半部を斜め方向に削っている。底面は胴部下端のケズリの影響を受けたまま、かなり不整形を呈している。ハケの単位は5本/cmである。6は、甕又は壺と思われるが、外面はヘラケズリ後、軽くミガキが施されている。底部も同様であるが、底面はかなり不整形を呈している。7～9は高杯である。9は内外面ともに赤彩されている。8も9同様赤彩されていた可能性があるが、器面の磨耗が著しく、明らかでない。

017号（第59図、図版11）

遺構：5E-47・48グリッド等に位置する。

北西コーナー部が欠失しているが、ほぼ隅丸正方形のプランである。規模は、3.2ｍ×2.7ｍを測る。確認面からの深さは約20cmを測り、覆土は上層黒褐色土、下層暗褐色土の2層に分けられる。ピットが何個か検出されたが、いずれも深さ10cm内外で、機能が明確になるものはない。床面は、遺存部ほぼ全域にわたって踏み固められていた。炉は中央部北寄りに検出されたが、掘り方は極めて浅い。



第59図　017号実測図

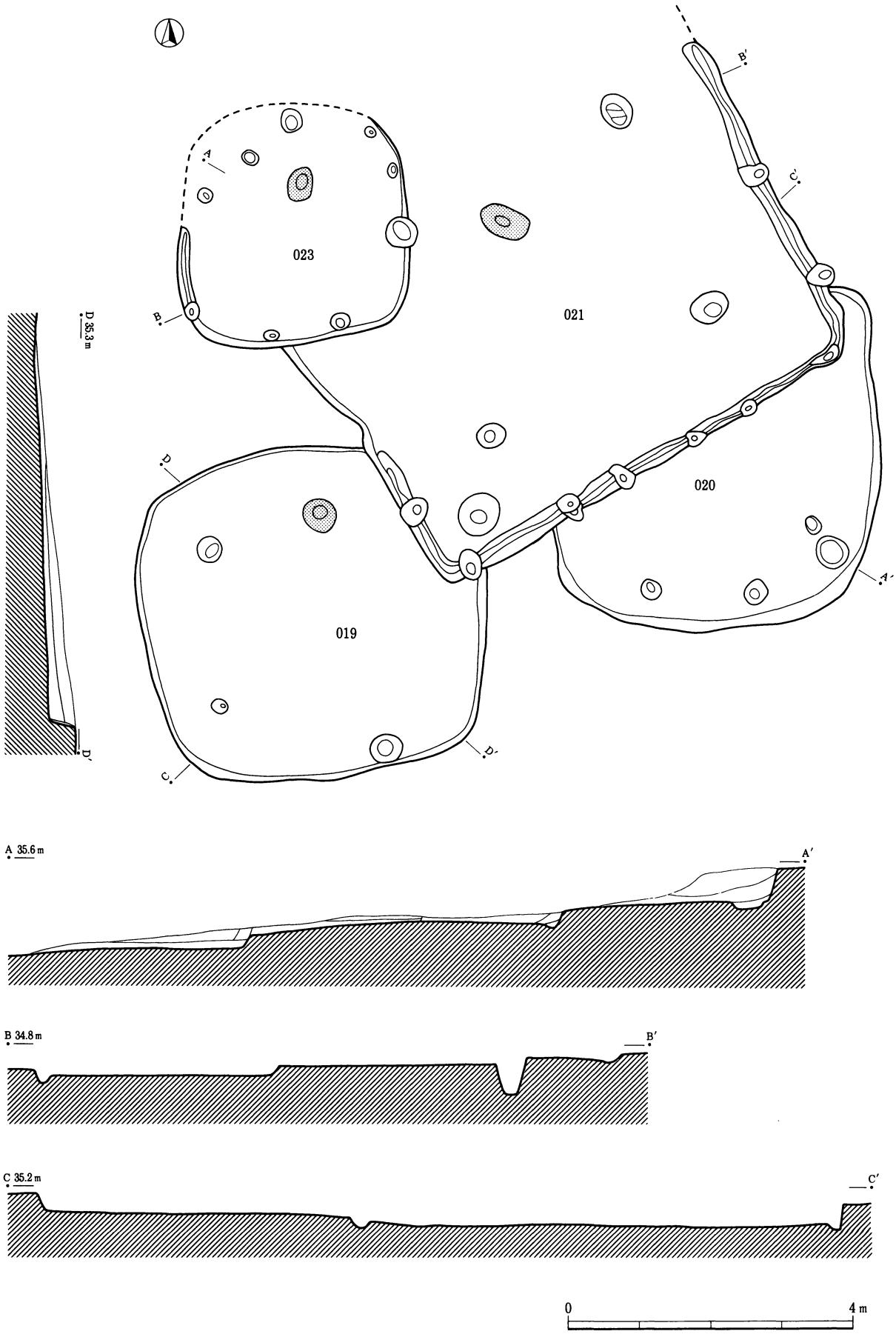
遺物：実測可能な遺物は出土していない。

019・020・021・023号（第60～63図、図版11）

遺構：019号は5E-13・14グリッド等に、020号は5E-16・17グリッド等に、021号は4E-96・5E-06グリッド等に、023号は4E-93・94グリッド等に位置している。

4軒が切り合っているが、一番新しいと判断されるのは最も北側に位置する023号であった。次に新しいのは021号で、019号と020号を切っている。

019号は、北東コーナー部を021号に切られており、各辺は膨らみ気味であるものの、概ね隅丸正方形を呈すると考えられる。軸長は4.9ｍ×4.7ｍを測り、ほぼ垂直に立ち上がる壁の高さは最大で約40cmである。覆土は2層に分けられ、上層から黒褐色土層、暗褐色土層であった。ピットは確実に019号に伴うと考えられるものは3個である。炉の東側に所在するピットは、019号のピットである可能性もあろう。ただしその深さは、炉の西側の2個の柱穴と考えられるものがそれぞれ20cm～30cm程度であるのに対して、021号のほかの周溝内ピットとほぼ同じ40cm程度を測る。最も南に位置するピットは深さ20cm程度であるが、



第60図　019・020・021・023号実測図

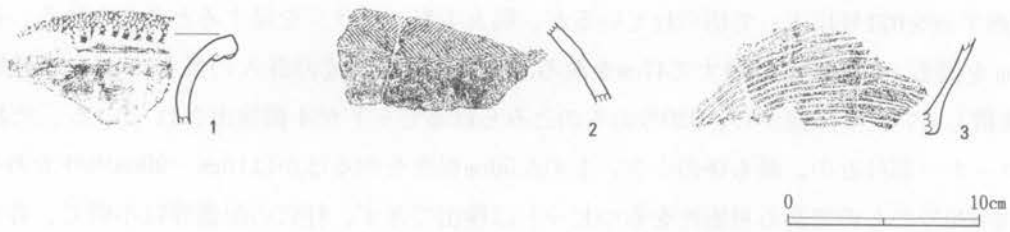
機能は確定できない。床面は全面にわたって堅く踏み固められていた。炉は中央部北寄りに位置している。

020号は、北西半分を021号によって切られているが、隅丸方形のプランを呈すると考えられる。遺存部分の軸長は4.5ｍを測る。壁の高さは最大で47cmを測る。覆土はローム粒の混入の具合によって分層可能な暗褐色土が堆積していた。床面から、020号のものとみられるピットが４個検出されている。それらの深さは、南東コーナー部付近の、最も径の小さいものが50cm程度を測るほかは10cm～20cm内外である。021号の範囲内にも020号のものである可能性をもつピットは検出できず、柱穴の配置等は不明で、各ピットの機能も明らかでない。床面は021号に切られる中央部付近が特に硬化していた。炉は検出できなかった。

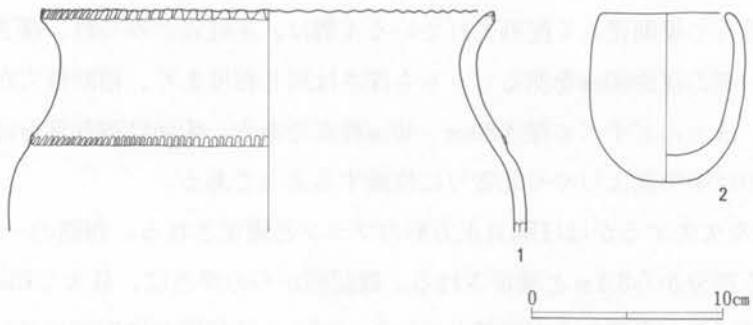
021号は、北側の壁を欠失するが、正方形ないし方形と推定されるプランである。西側の一部を除く遺存部分の壁際には、ピットを伴う周溝が巡っている。遺存部分の軸長は5.1ｍを測り、遺存する壁の高さは最大で15cmである。覆土は、それぞれ混入するローム粒の具合によって幾つかに分層できるが、壁際には暗褐色土が、中央部付近には黒褐色土が堆積していた。ピットは周溝内のものを除くと５個検出されている。壁のラインに添って規則正しく配列されている４個は、主柱穴とみられ、深さはいずれも50cm～60cmを測る。南コーナー部の径約60cmを測るピットも深さは同じ程度あり、補助柱穴か貯蔵穴などとみられる。周溝内ピットは、ほとんどすべて深さ30cm～40cm程度である。床面は遺存部分ほぼ全域にわたって踏み固められていた。炉は中央部よりやや北寄りに位置するようである。

023号は、北側の壁を欠失するがほぼ隅丸正方形のプランと推定される。西壁の一部に周溝が確認された。軸長は、遺存する部分から3.4ｍと推定される。確認面からの深さは、最大で25cmである。覆土はローム粒の混入具合で分層可能な黒褐色土が堆積していた。ピットは何個か検出されているが、いずれも径・深さともに10cm～20cm内外であり、機能ははっきりしない。炉は中央部やや北寄りに設けられているようである。

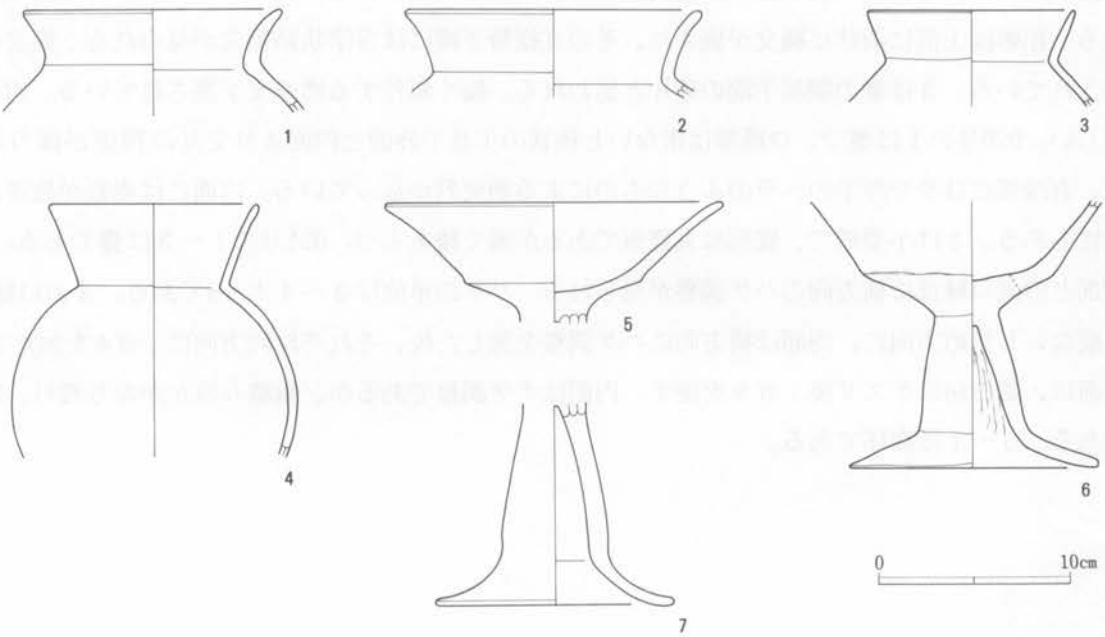
遺物：019号で３点、020号で２点、021号で７点実測可能であった。023号からは実測可能な遺物は出土していない。019号の１は壺の口縁部破片である。口唇部には縄文ないし擬縄文が施されており、下端部には布巻棒状工具による押捺が見られる。施文部以外の外面と内面に赤彩が施されている。２も壺の破片とみられる。拓影図上部に羽状に縄文が施され、その文様帯下端にはＳ字状結節文が見られる。施文部以外は赤彩されている。３は甕の胴部下端の破片と思われる。緩く斜行する撚糸文が施されている。内面の剥落が著しい。020号の１は甕で、口縁部は指ないし棒状の工具で外面と内面より交互に押捺が繰り返されており、有段部にはやや厚手のヘラのようなものによる刺突列が巡っている。内面には赤彩が施されていた可能性もある。２は小型壺で、底部は丸底風であるが弱く稜をもつ。021号の１～３は甕である。１は、外面胴部と内面口縁部に横方向のハケ調整が見られる。ハケの単位は３～４本/cmである。４の口縁部は、外面は縦ないし斜め方向に、内面は横方向にハケ調整を施した後、それぞれ同方向にミガキを加えている。胴部外面は、横方向にケズリ後ミガキを施す。内面はナデ調整であるが、輪積み痕がかなり残り、器面も凹凸である。５～７は高杯である。



第61図　019号出土土器



第62図　020号出土土器

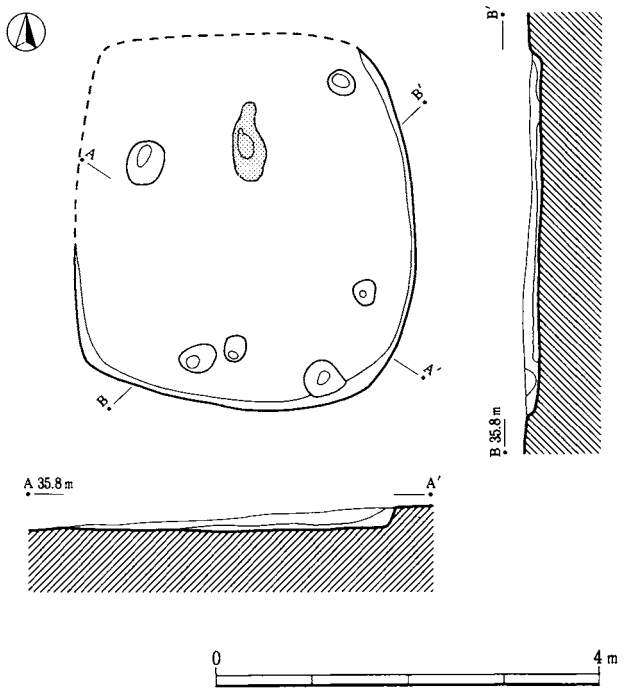


第63図　021号出土土器

025号（第64図、図版12）

遺構：4F-90・5F-00グリッド等に位置する。

北西コーナー部が欠失している。プランは隅丸方形ないし楕円形になるようである。遺存部の軸長は3.4ｍを測る。壁の高さは最大で約20cmを測る。覆土は大きく2層に分けられ、上層より黒褐色土、暗褐色土となる。上層南端部に一部、青灰色粘土ブロックの層が認められた。遺存部ほぼ全面にわたって堅く締まっている床面からは、ピットが何個か検出されており、これらは主柱穴4個、補助柱穴1個、梯子穴1個であるとみられる。深さは南西コーナー部の2個がそれぞれ約100cm、60cmを測るほかは、20cm前後である。炉はやや不整形を呈しており、中央部北寄りから検出された。



第64図　025号実測図

遺物：実測可能な遺物は出土していない。

029・031号（第65・66図、図版13）

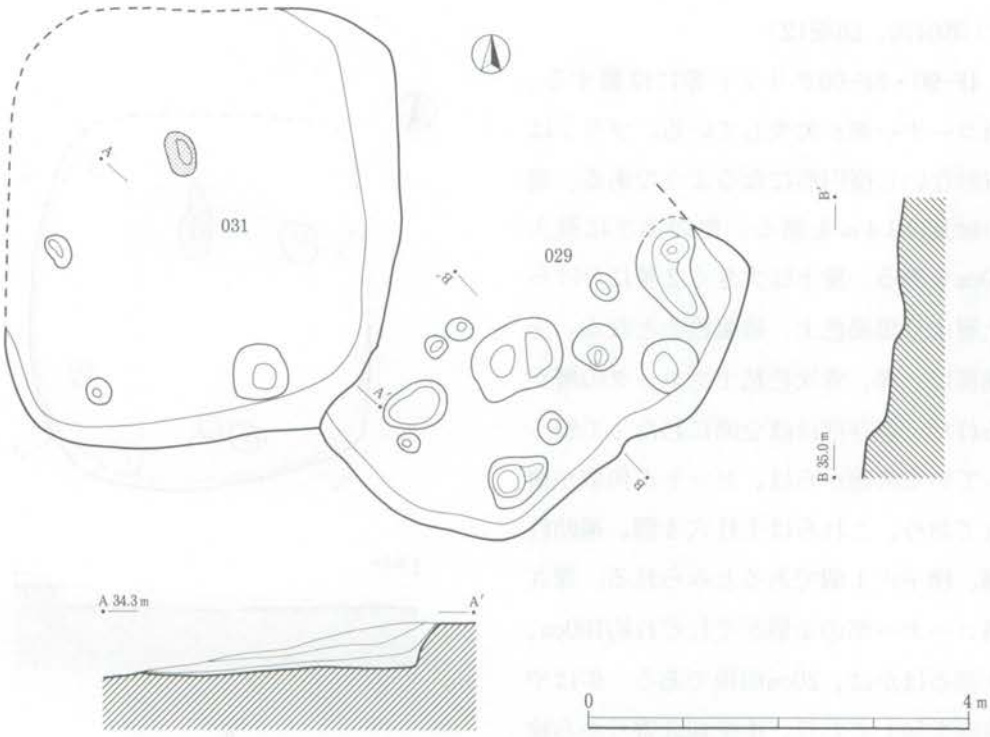
遺構：029号は4E-67・77グリッド等に、031号は4E-56・66グリッド等に位置する。

いずれも北西部分を流失しているが、031号が029号を切るとみられる。

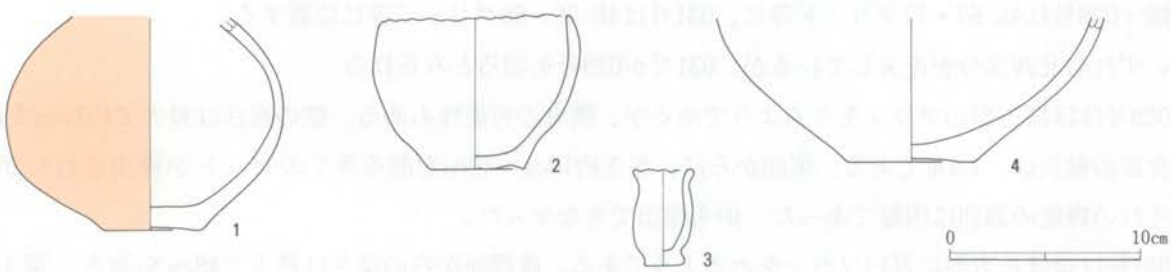
029号はほぼ方形のプランをとるようであるが、隅丸の可能性もある。壁の高さは最大で約15cmを測る。遺存部の軸長は、4.4ｍである。床面からは、深さ約10cm～40cmを測る多くのピットが検出されたが、それぞれの機能の識別は困難であった。炉も検出できなかった。

031号はほぼ正方形に近いプランをとるようである。確認面からの深さは最大で48cmを測る。覆土は3層に分けることができ、上から黒褐色土、暗褐色土、焼土粒を少量含む暗褐色土であった。踏み固められた床面からはピットが3個検出されているが、いずれも深さ10cm～20cmで、これらが柱穴と梯子穴に相当するのかは確定できない。炉は北寄りの床面遺存部分の際で検出されたが、掘り方は極めて浅い。

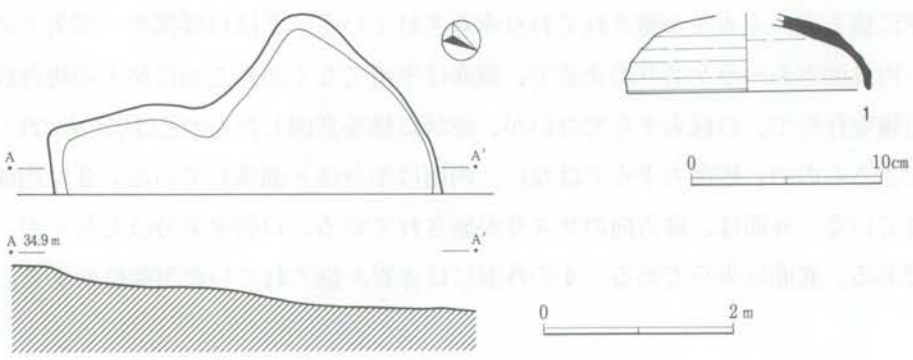
遺物：029号からは実測可能な遺物は出土していない。031号で4点実測可能であった。1は壺で、器面が磨滅しているが、外面は丁寧に横方向のミガキが施されており赤彩されている。2は口唇部を一部欠くのみでほとんど完形であるが、内外面ともヘラケズリのままで、器面は平滑でなくあちこちに粘土の接合痕が残されている。全体的に粗雑な作りで、口縁も平らでないが、波状口縁を意図したものとは思われない。かろうじて立たせることはできるものの、底面も平らではない。内面は半分ほど剥落している。3は内面に輪積み痕がはっきり残されている。外面は、縦方向のケズリが施されている。口唇を半分ほど欠くが、口縁はやや波状になるようである。底面は平らである。4の外面には赤彩が施されていた可能性がある。



第65図　029・031号実測図



第66図　031号出土土器



第67図　030号実測図・出土土器

030号（第67図、図版13）

遺構：4F－40・50グリッドに位置する。

遺構の大半は調査区外となる。遺存部分の軸長は4.1ｍを測るが、壁高はほとんどない。

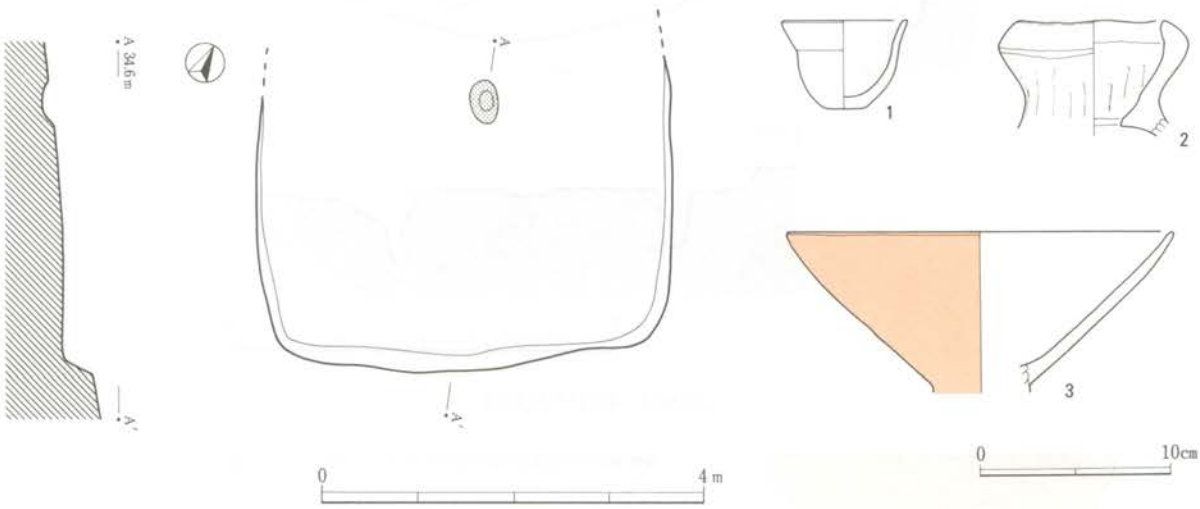
遺物：１点のみ実測可能であった。１は須恵器の蓋で、外面天井部は回転ヘラケズリされる。

032号（第68図、図版13）

遺構：4E-82・92グリッド等に位置する。

遺構の北側を欠失するが、正方形ないし長方形のプランになると推定される。遺存部分の軸長は、4.4ｍ、壁高は最大で約30cmを測る。覆土は上下２層に分けられ、いずれも暗褐色土層であった。ピットは全く検出されていない。炉は、床面遺存範囲の際の部分で検出された。

遺物：３点実測可能であった。１の外面は概ね横方向にミガキが施されており、赤彩されていた可能性もある。内面は若干磨滅する。２は炉器台で、基本的にナデ調整によって仕上げられているが、外面の最大径付近はヘラで面取りしているようである。内面にはヘラあて痕が明瞭に残されている。３は高杯で、外面全体と内面の口縁付近のミガキの間にハケ調整の跡が見える。ハケの単位は10本/cmである。内面は赤彩されていた可能性がある。



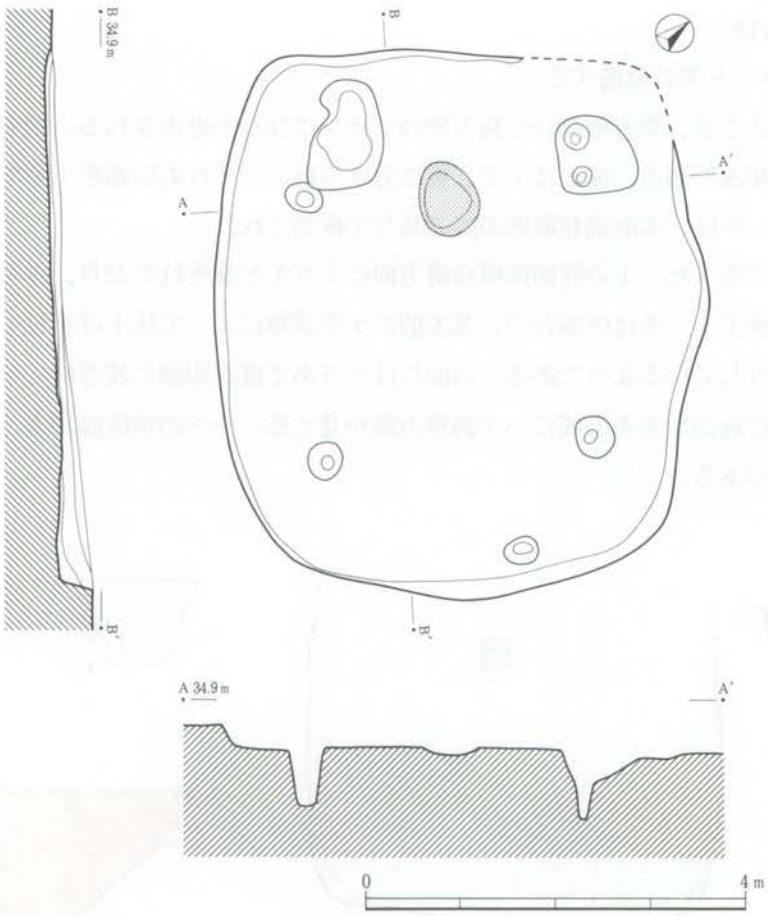
第68図　032号実測図・出土土器

033号（第69・70図、図版14）

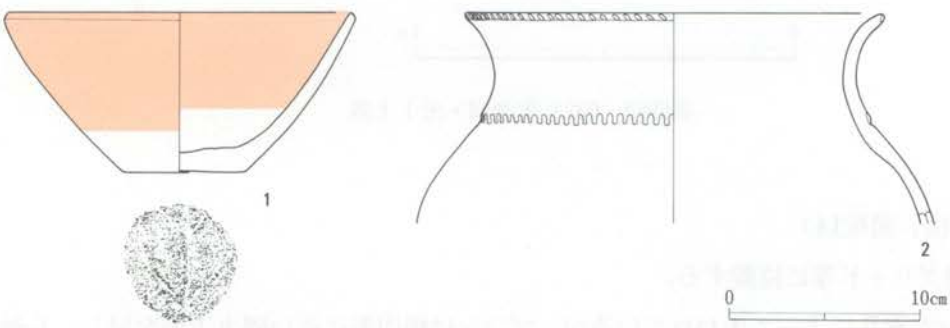
遺構：5D-27・28グリッド等に位置する。

北コーナー部分が攪乱によって失われているが、プランは楕円形に近い隅丸方形を呈し、長軸は5.7ｍ、短軸は5.2ｍを測る。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、壁高は最大で38cmを測る。覆土は３層に分けられ、上から黒褐色土、焼土粒・炭化粒を少量含む黒褐色土、焼土粒・炭化粒を多く含む暗褐色土となっている。ピットは、深さ60cm程度を測る主柱穴とみられるものが４個検出され、深さ約20cmを測る梯子穴とみられるものが１個検出された。炉は中央部やや北西に位置しており、炉床は非常に良く焼けて硬化していた。床面は、炉の周辺から遺構の南東半にかけて特に踏み固められていた。また、床面全体にわたって炭化材や焼土の分布が認められ、焼失住居であると考えられる。

遺物：２点実測可能であった。１は鉢で、内外面ともに横方向に丁寧にミガキが施されており、外面底部には木葉痕が残されている。口唇部は丁寧に面取りされ、平らである。内外面とも赤彩されている。２は甕で、器面が磨耗し、口唇部もごく一部しか遺存していないが、口唇部には斜めに、有段部には縦に棒状工具による刻み列が巡らされているようである。



第69図　033号実測図



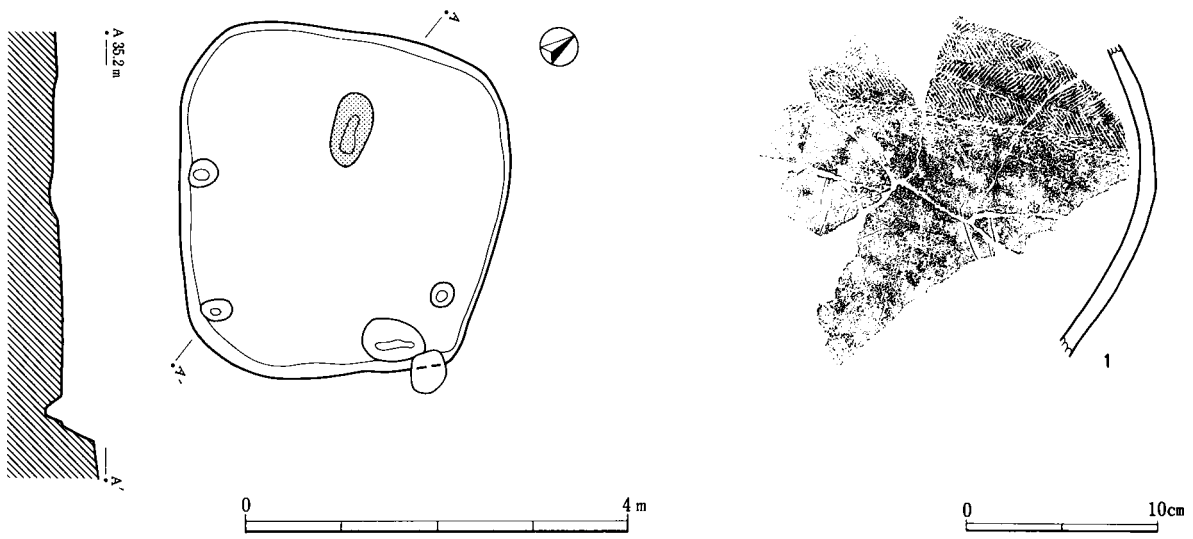
第70図　033号出土土器

034号（第71図、図版14）

遺構：5D-46・56グリッド等に位置する。

北辺の上部がかなり削平されており、また東コーナー部分は015号と重複するようであるが、壁はほぼ全周検出することができた。隅丸正方形に近いプランである。015号との新旧関係は明らかではない。規模は1辺約3.5ｍを測る。壁高は最大で30cmである。覆土は、ローム粒の混入の具合によって2層の黒褐色土に分けられた。ピットは壁際又は壁際近くで検出されたが、いずれも深さ20cm内外であり、機能は明確でない。床面はほぼ全面にわたって堅く踏み固められている。炉は中央部北寄りに設けられており、中心部は焼けて硬化していた。

遺物：実測可能なものは１点のみであった。１は壺で、縄文部の下端にＳ字状結節文が見られる。施文部以外は赤彩されている。



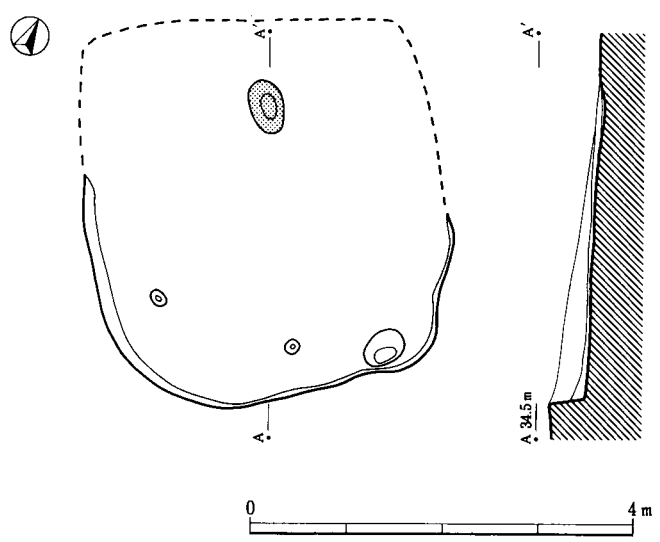
第71図　034号実測図・出土土器

036号（第72図、図版14）

遺構：4D-99・5D-09グリッド等に位置する。

南半分のみの遺存である。隅丸方形ないし楕円形のプランと考えられる。遺存部分の軸長は3.8ｍを測る。壁高は最大で約45cmである。覆土は大きく２層に分けられ、ローム粒の混入具合の異なる黒褐色土層である。ピットは３個検出されたが、いずれも深さ15cm内外である。床面は遺存部全体にわたって踏み固められている。炉床はあまり焼けていなかった。

遺物：実測可能な遺物は出土していない。



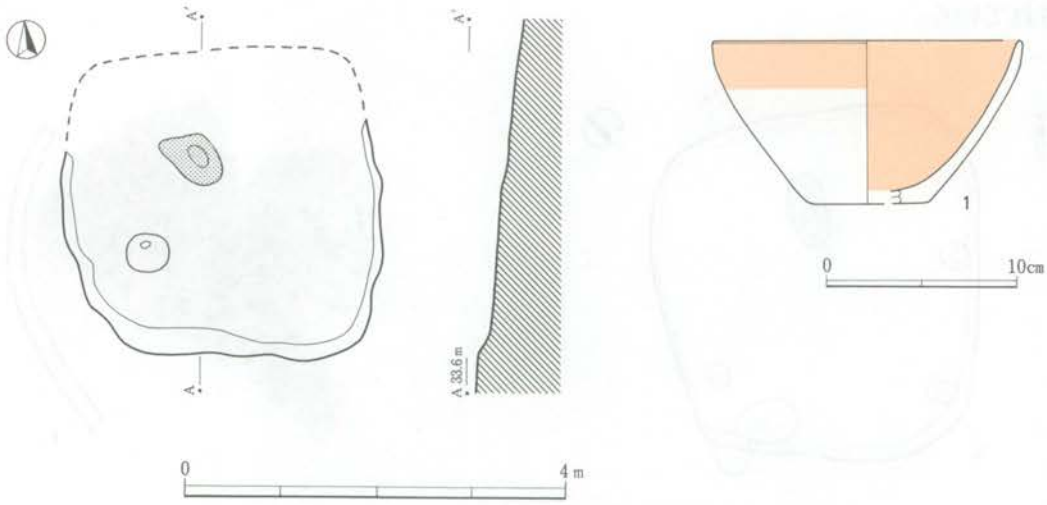
第72図　036号実測図

037号（第73図、図版15）

遺構：4D-77・78グリッド等に位置する。

北辺を欠失する。隅丸正方形のプランと推定される。遺存部分の軸長は3.4ｍ、壁高は最大で約10cmである。覆土は２層に分けられ、上層は暗褐色土、下層は黒褐色土、いずれも焼土粒をやや多く含むものであった。ピットは径約50cm、深さ15cm程度のものが１個検出されたのみである。炉床は良く焼けて硬化していた。

遺物：実測可能なものは１点のみであった。１は鉢で、器面がかなり磨耗し、口唇部もはっきりしないが、全体的に丁寧にミガキが施されていたようで、外面の一部と内面は赤彩されていたようである。

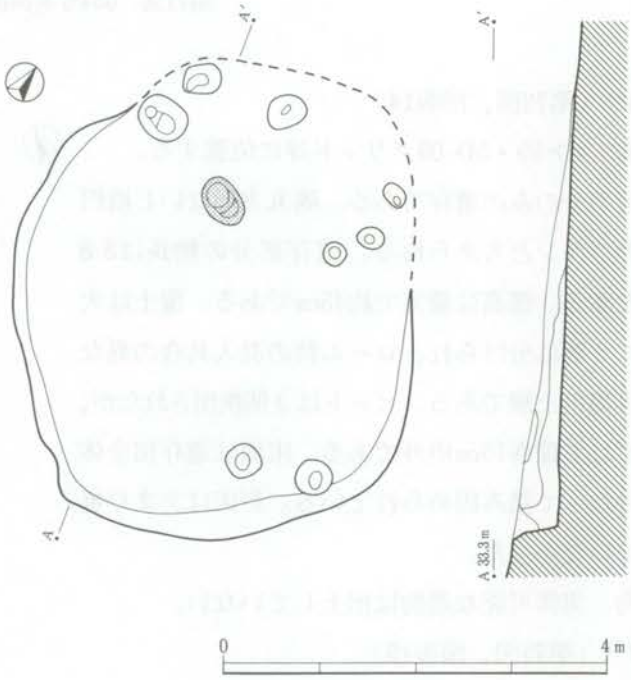


第73図　037号実測図・出土土器

038号（第74図、図版15）

遺構：4D-54・64グリッド等に位置する。

北コーナー部を欠失している。隅丸方形ないし楕円形のプランと推定される。遺存部分の軸長は4.1ｍ、壁高は最大で約50cmで、覆土は4層に分けられた。上層より焼土ブロック層、黒褐色土層、暗褐色土層と堆積しているが、南辺の上層には、ローム粒を多く含む暗褐色土層の堆積が見られる。床面は暗褐色粘土で貼り床されていた。柱穴は、床面の北側に集中するように、やや不規則な配置で検出されている。北東コーナー部付近の径の小さなひとかたまりの3個は、深さも10cm程度と浅い。最も深いのは北西端に位置するもので、40cm程度を測る。そのほかはいずれも20cm～30cm程度の深さである。各々の機能は明らかでない。炉は中央部北寄りに位置しており、炉床は良く焼けて赤変、硬化していた。



第74図　038号実測図

遺物：実測可能な遺物は出土していない。

039A・039B号（第75図、図版15）

遺構：039A号は5C-09・5D-00グリッド等に、039B号は5D-01・11グリッド等に位置する。

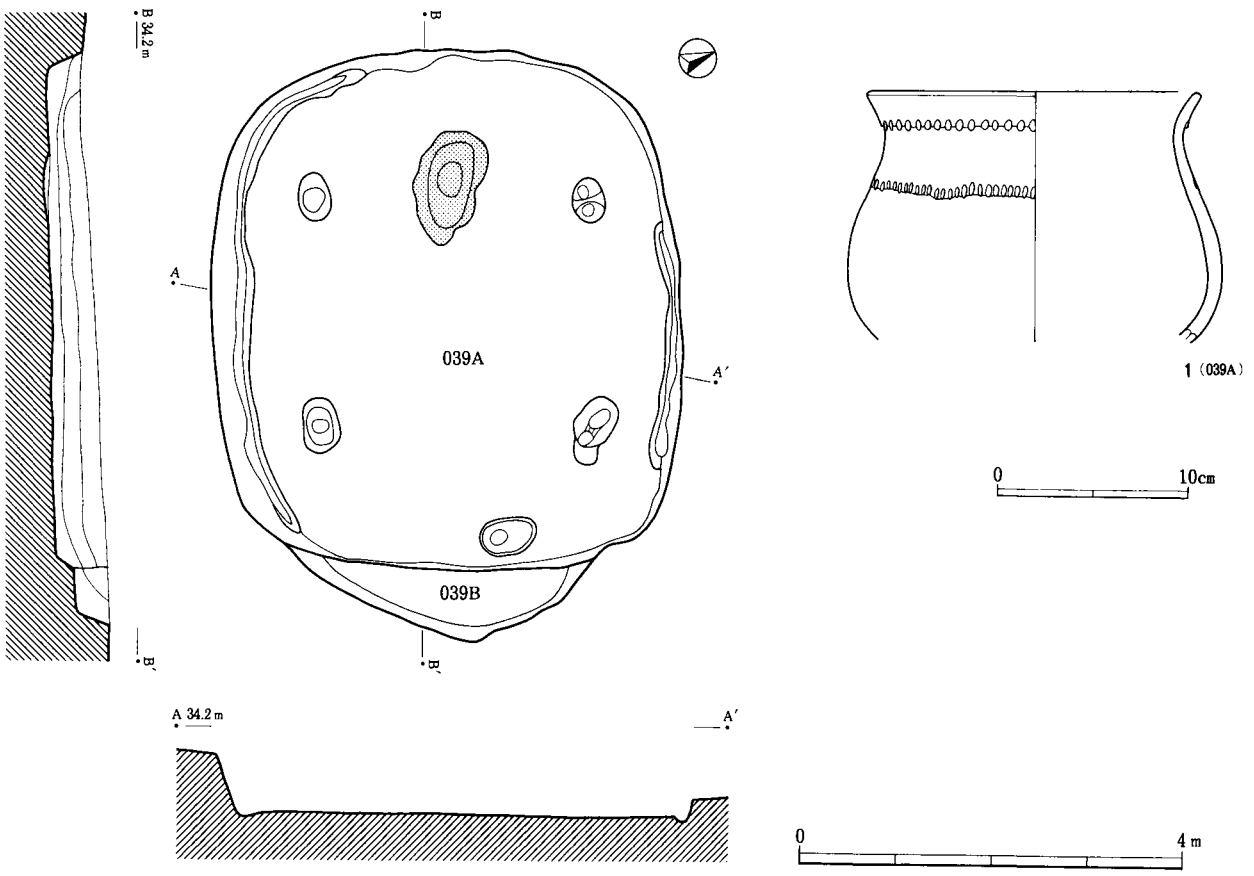
039A号の方が039B号より新しい。

039A号は、各辺がやや膨れるものの概ね隅丸方形プランを呈し、北辺と南辺の一部に周溝が検出されている。主軸方位は、N-73°-Wである。プランの規模は、5.4ｍ×4.9ｍを測る。検出面からの深さは、

最大で55cmである。覆土は3層に分けられ、上層からローム粒を多く含む暗褐色土層、炭化粒・焼土粒を少量含む暗褐色土層、炭化材片、焼土を多量に含む黒褐色土層となっている。ピットは、深さ50cm～60cmの柱穴と考えられるものが4個、やや浅く深さ20cm程度の梯子穴と考えられるものが1個検出されている。全面にわたって堅く踏み固められている床面からは、炭化材や焼土が多量に出土しており、焼失住居と考えられる。中央部西寄りにやや不整形を呈する炉が設けられている。炉床は良く焼けて硬化していた。

039B号は大半を欠いており、プラン等は不明である。確認面からの深さは約30cmである。覆土は2層に分けられ、上層から暗褐色土層、黒褐色土層となる。柱穴・炉等は検出できなかった。

遺物：039A号より1点実測可能であったのみで、039B号では実測可能な遺物は出土していない。1は甕で、棒状工具による刻み列が2列巡る。口唇部はやや平坦で、角張り気味である。やや小型の甕である。



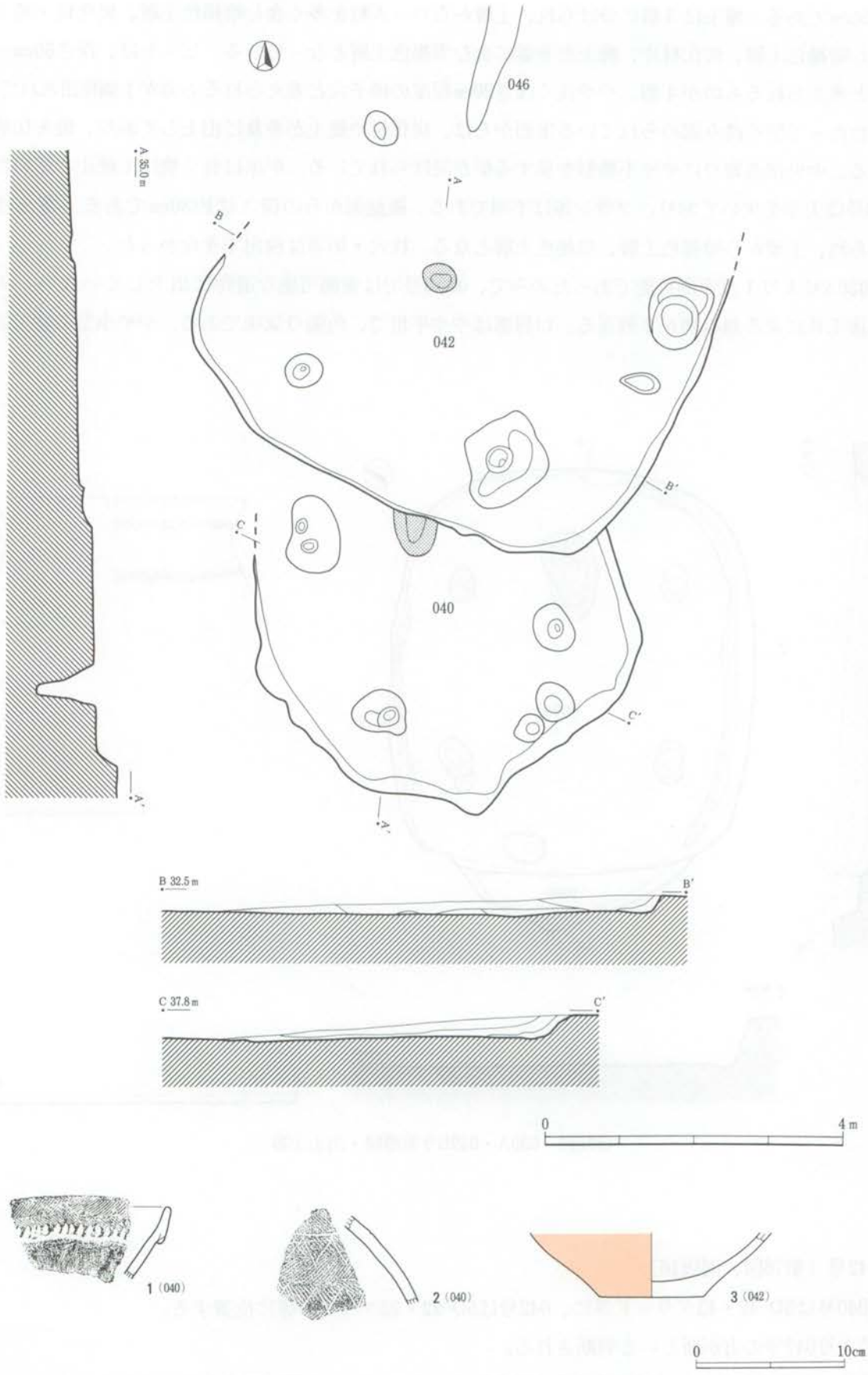
第75図　039A・039B号実測図・出土土器

040・042号（第76図、図版16）

遺構：040号は5D-42・43グリッド等に、042号は5D-22・23グリッド等に位置する。

040号より042号の方が新しいと判断される。

040号は、北側を流失し、さらに042号に切られている。プランは概ね隅丸方形を呈すると考えられ、遺存部分の軸長は5.1mを測る。壁高は最大で32cmである。覆土は3層に分層できた。ピットは床面から柱



第76図　040・042号実測図・出土土器

穴とみられるものが4個と、梯子穴とみられるものが2個検出されている。柱穴とみられるもののうち、北東コーナー部のものは、位置的に042号の柱穴と重複している可能性があるが、040号の床面からの深さは、いずれも50cm前後を測る。これらのほかの2個のピットはやや浅く、深さ30cm～40cmである。また、床面は遺存部分のほぼ全面にわたって硬化していた。炉は中央部北側に位置しているが、042号に切られている。

042号も北側を流失しており、さらに一部を046号に切られるようである。プランは隅丸正方形ないし方形と考えられる。遺存部分の軸長は6.5m、壁高は最大で22cmを測る。床面の高さは、040号より15cmほど低い。覆土は、壁に沿って暗褐色土が堆積し、混入するローム粒の量によって3層に分層することのできる黒褐色土層が更に堆積していた。床面から検出されたピットは5個で、西側の2個は深さ60cm～70cmを測り、柱穴と考えられる。南コーナー部のものは、前述のように040号の柱穴と同一の場所に穿たれた可能性がある。東側の2本については、北寄りのものは、深さ約30cmであり、柱穴の可能性がある。南寄りの小さなものは、深さも10cm程度と浅く、梯子穴と考えられる。炉はほぼ中央部に検出されている。

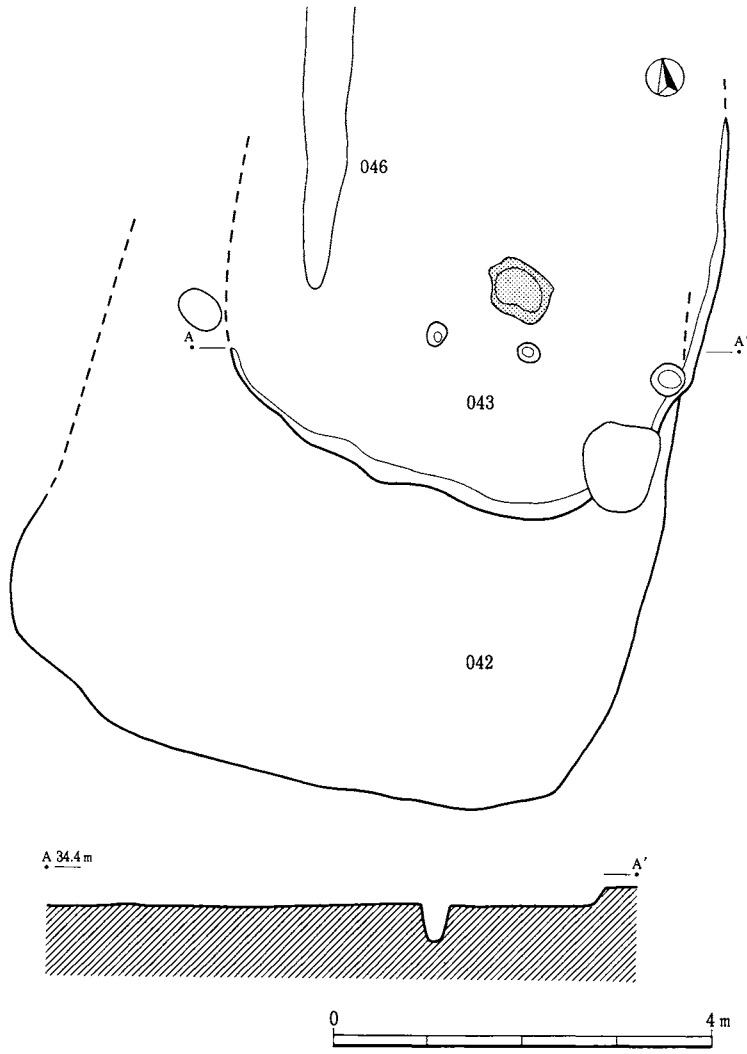
遺物：040号で2点、042号で1点のみ実測可能であった。040号で出土した1と2は共に壺の破片である。1は、折返しの口縁部に羽状に縄文が施され、その下端部に布巻棒状工具による押捺が見られる。口唇部はやや平坦で、縄文が施されるようである。施文部以外の外面と内面は赤彩されている。2は、縄文を羽状に施文後、沈線で鋸歯文を描く。3は壺の底部で、外面は丁寧にミガキが施され、赤彩されている。底面にも、木葉痕を磨り消すようにミガキが施される。

043号（第77図、図版16）

遺構：5D-13・14グリッド等に位置する。

042号北半の床面下約10cmほどのところで、床面と壁が検出された。北半分は流失し、さらに西側の一部は046号に切られるようである。プランは明らかではないが、隅丸方形と推定することが可能である。東西方向の推定軸長は、5.1mである。覆土は単一で、黒褐色土であった。床面からは遺構に伴うと考えられるピットが3個検出されたが、いずれも小規模なもので、柱穴と推定できるものはない。炉は遺構の中央部ないしやや南東寄りに設けられていたようで、炉床は、中心部のみよく焼けて赤変していた。床面は、炉の周辺部のみが硬化していた。

遺物：実測可能な遺物は出土していない。



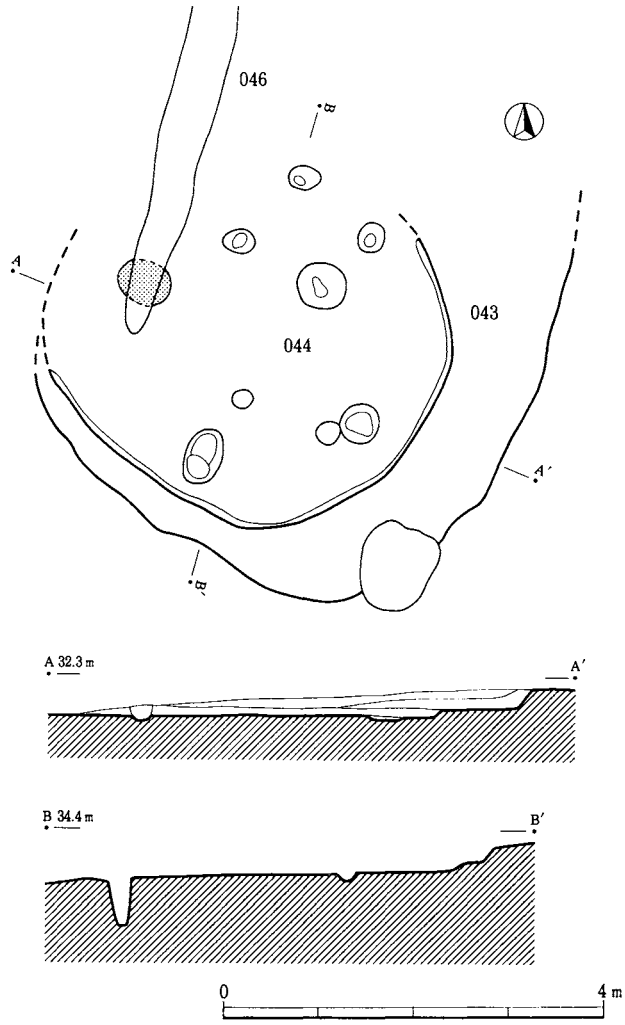
第77図　043号実測図

044号（第78図、図版16）

遺構：5D-04・14グリッドに位置する。

043号の床面下8cmほどのところで、床面と壁が検出された。北西部分を流失し、さらに046号に切られているが、プランは隅丸方形ないし不整円形と推定される。東西方向の推定軸長は3.7mである。覆土はローム粒の混入の度合いに応じて、3層の黒褐色土に分けることができた。検出されたピットは6個で、やや不規則な配置を示しており、機能は明確にはできないが、南東部の1個は、梯子穴の可能性がある。深さは5cm程度である。また、その西側のものと北側のものは、深さは20cm～30cmほどであるが径が大きく、柱穴である可能性もある。そのほか北部に位置する3個は、東から深さ約10cm、50cm、40cmを測る。床面は、主に西半分で硬化していた。遺構の西側に設けられた炉は、046号によって切られていた。

遺物：実測可能な遺物は出土していない。



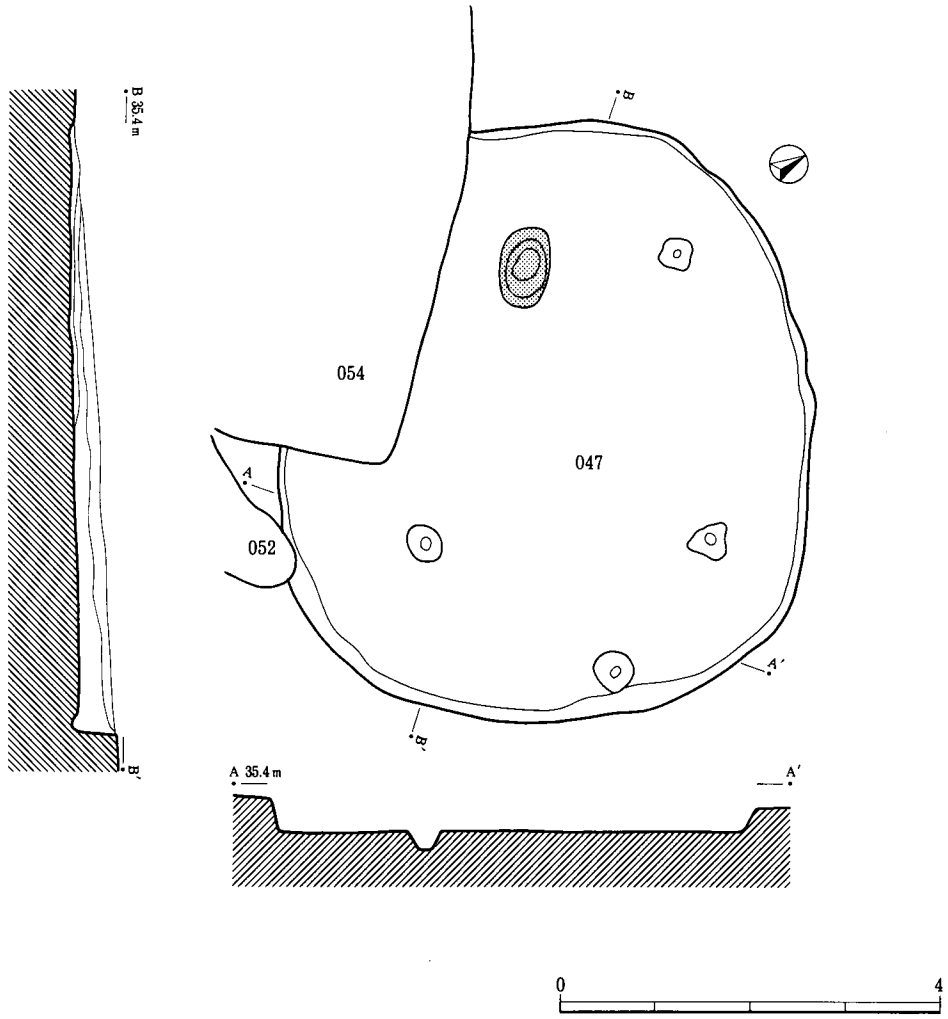
第78図　044号実測図

047号（第79図、図版16）

遺構：5D-72・82グリッド等に位置する。

西コーナー部を054号と052号のカマドによって切られている。プランは楕円形を呈し、長軸6.3ｍ、短軸5.6ｍを測る。主軸方位は、N-71°-Wである。壁高は、北側に行くほど削平されて低くなるが、最も遺存度の高い南側の壁で38cmを測る。覆土は3層に分けられた。最下層に黒色土が堆積し、その上に、褐色土の混入具合によって分層可能な黒褐色土層が堆積していた。ピットは4個検出されており、それぞれ60cm程度の深い掘り方をもつ柱穴3個と、10cm程度の深さの梯子穴1個と推定されるが、西側の柱穴は、054号によって切られてしまったのか、検出できなかった。床面は、西側半分を中心に踏み固められていた。炉は中央部北西方向に設けられ、深くしっかりとした掘方であった。

遺物：実測可能な遺物は出土していない。



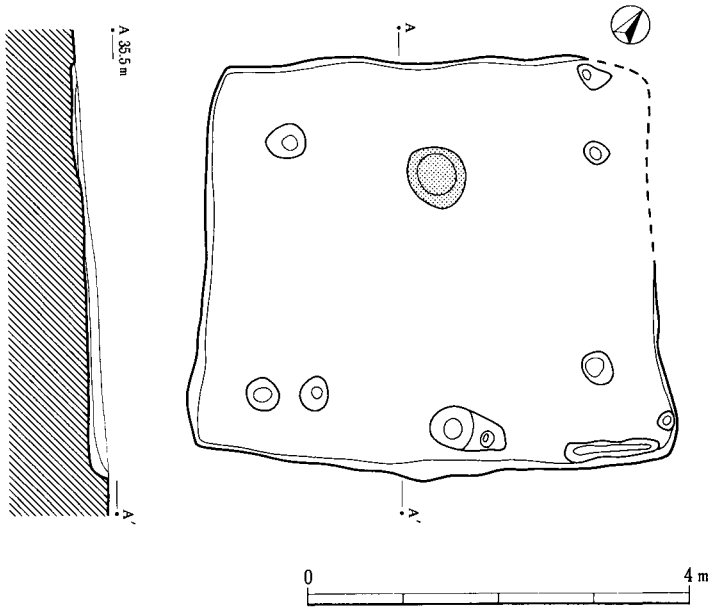
第79図　047号実測図

048号（第80図、図版17）

遺構：6C-36・37グリッド等に位置する。

北コーナー部分の壁が検出されていないが、横長の方形プランである。主軸方位は、N-41°-Wである。規模は長軸4.9m、短軸4.3mを測る。東コーナー部分の一部にのみ周溝が確認されている。壁高は最大で18cmである。覆土は2層に分けられ、上層には黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積していた。ピットは何個か検出されており、その配置から主柱穴、補助柱穴、梯子穴などと考えられるものもあるが、深さは、北コーナー部に位置する1個が40cm程度を測るほかは、壁際のものも含めてすべて10cm～20cmほどである。炉は中央部北寄りに設けられており、その周辺から遺構南半分にかけての床が硬化していた。

遺物：実測可能な遺物は出土していない。



第80図　048号実測図

049・050・051・053・054・072号（第81～83図、図版17・18）

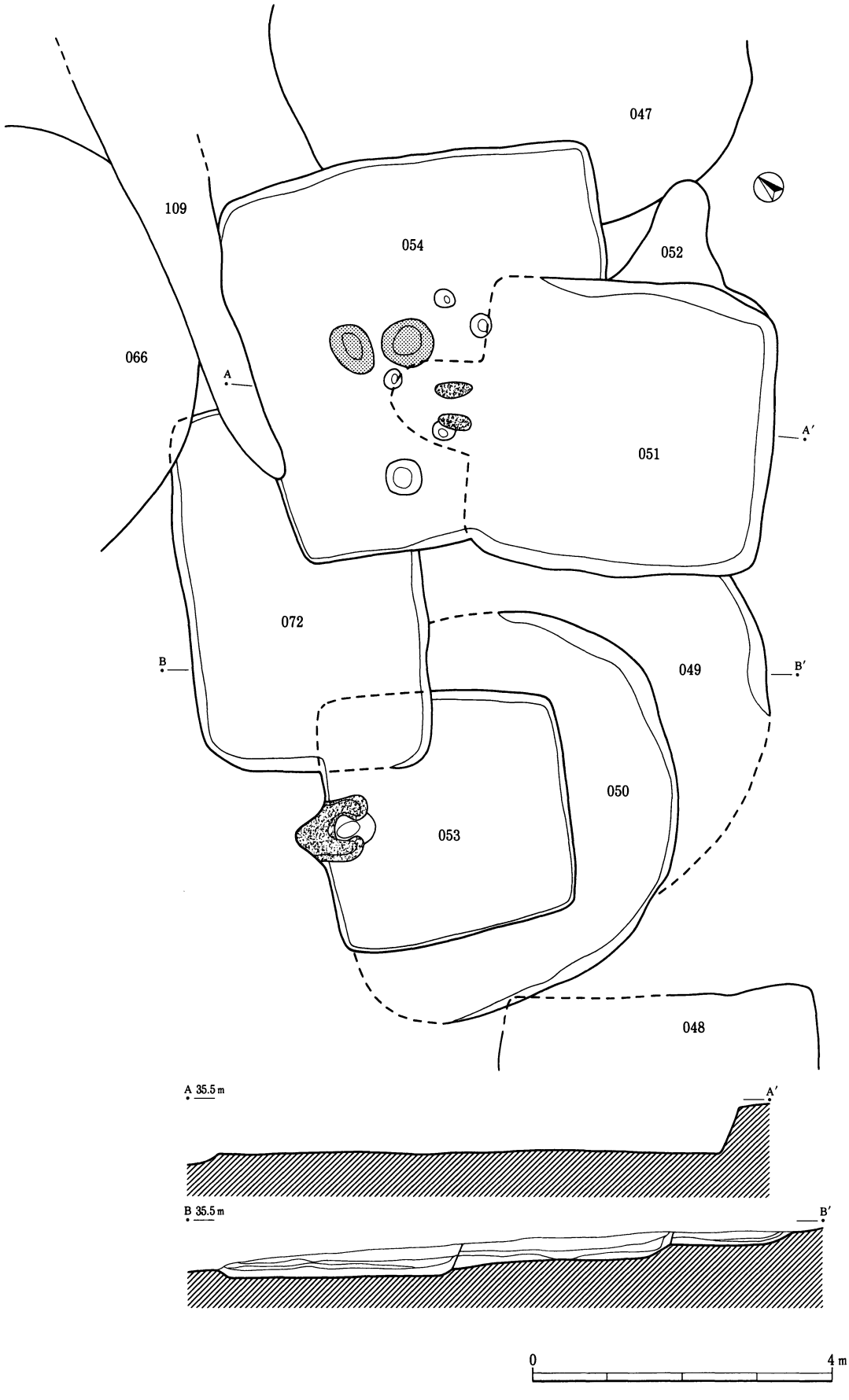
遺構：049号は6C-19・6D-10グリッド等に、050号は6C-18・19グリッド等に051号は5D-90・6D-00グリッド等に、053号は6C-08・18グリッド等に、054号は5D-80・90グリッド等に、072号は5C-98・99グリッド等に位置している。

何軒もの遺構が複雑に切り合っており、それぞれのプランや新旧関係のすべてを明確にすることはできなかった。

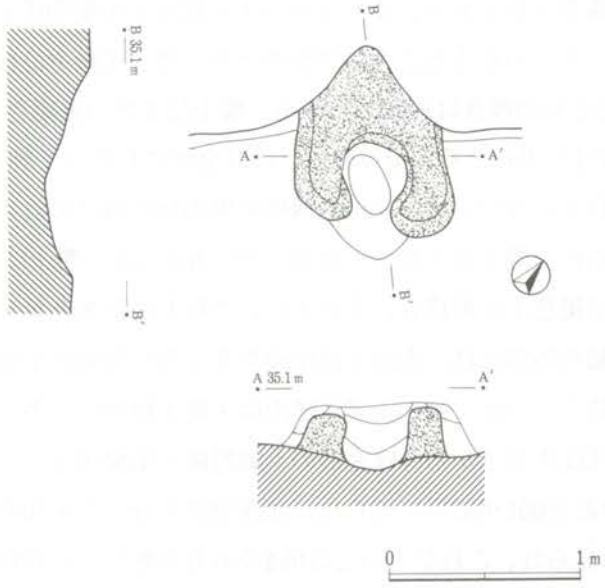
049号は、051・054・072号といった遺構に切られ、さらに南側を攪乱ピット等によって失っているため、東方面の壁と床面のごく一部が検出されたにすぎない。確認面からの深さは約20cmである。覆土は、ローム粒の混入具合によって3つに分層できる暗褐色土であった。ピットや炉等は検出されなかった。

050号は、049号よりも新しいようだが、053号と072号とに大きく切られ、また北側は削平されて壁が検出されず、プランははっきりしない。床面レベルは049号より約20cm低い。覆土はローム粒の含み具合によって3層に分層可能な暗褐色土である。ピットや炉等は検出されなかった。

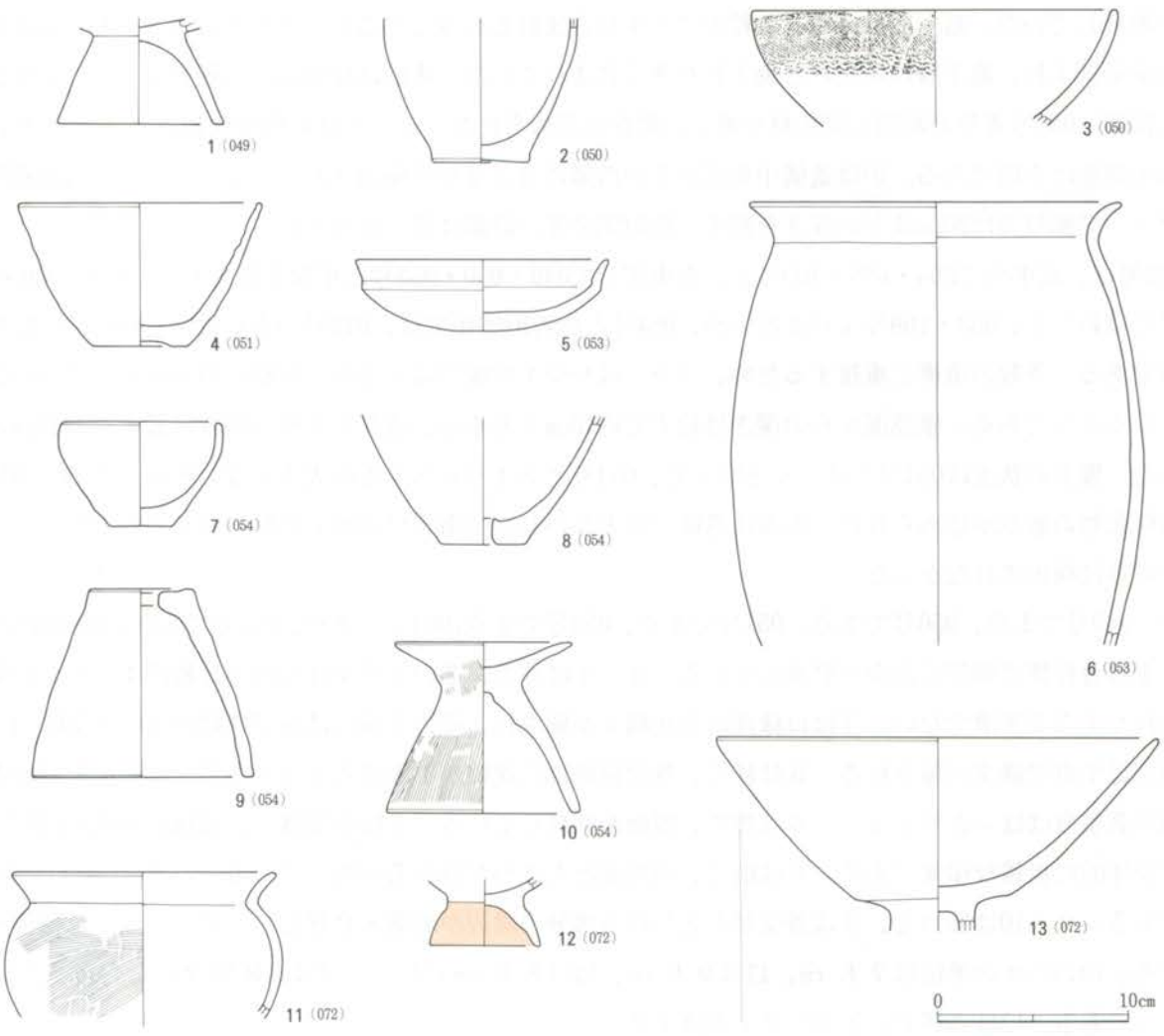
051号は、054号と重複する北西壁が検出できなかったものの、北西壁にカマドをもつとみられる正方形プランの住居である。主軸方位はN-40°-Wである。054号よりも新しいと判断される。また、床面下からは、カマド部分以外は051のプラン内にすっぽりと収まってしまう052号が検出されている。遺存部分の軸長は3.9mを測る。斜めに立ち上がる壁の高さは、最大で約60cmである。覆土は4層に分けられ、最下層に山砂と焼土を含む灰白色粘土層が堆積し、その上の壁際にはローム粒をやや多く含む暗褐色土層が、さらに、焼土を少量含む暗褐色土と炭化材を少量含む暗褐色土が順次堆積していた。中央部の3層の層厚はほぼ等しい。床面は、遺構中央部と南コーナー部、南西壁際と、部分的に踏み固められていたが、ピットは検出されていない。カマドは北西壁中央部分に構築されていたとみられるが、大部分が壊され、構築材と考えられる山砂などが床面に堆積したようである。カマドと考えられる部分には、袖の残骸がわずかに認められるのみであった。



第81図　049・050・051・053・054・072号実測図



第82図　053号カマド実測図



第83図　049・050・051・053・054・072号出土土器

053号は、050号を切って構築されており、また北コーナー部分で重複関係をもつ072号よりも新しいと考えられる。北西壁にカマドをもつ正方形に近い方形のプランで、主軸方位はN-52°-Wである。規模は、3.7ｍ×3.3ｍである。確認面からの深さは約20cmである。覆土は２層の黒褐色土で、下層には炭化材が少量含まれていた。床面は072号と重複する部分以外は、ほぼ全面にわたって硬化しているのが確認されている。ピットは全く検出されていない。カマドは北西壁中央部分に設けられていたようだが、遺存状態はあまり良くなく、火床部付近にも焼土はそれほど分布していなかった。覆土は、袖内側の火床部直上にローム粒・山砂をやや多く含む暗褐色土が堆積し、その上にいずれも山砂を多量・焼土を少量含む黒褐色土、暗褐色土が堆積していた。袖の外側には、床面上に山砂を多く含む黒褐色土が、そしてその上にやはり山砂を多く含む暗褐色土が堆積していた。袖の上部には山砂・焼土粒をやや多く含む黒褐色土の堆積が見られた。なお、袖の外側脇のほぼ床面上からほぼ完形の土師器杯（第83図５）が伏せた状態で出土している。

054号は、南コーナー部付近を051・052号に切られ、北西辺の半分ほどを109号に切られる。また、西コーナー付近で072号との重複も見られ、これについては054号の方が新しいと判断したが、その新旧関係はやや微妙であると言える。また、北東辺～東コーナー部で047号を、南西辺の一部で049号を切るようである。全体のプランはほぼ正方形になると考えられる。遺存する部分で軸長5.2ｍを測る。床面のレベルは051号とほぼ同じで、確認面からの深さは最大で約60cmである。覆土は混入物によって３層に分層可能な暗褐色土が堆積していた。最上層にはローム粒がごく少量含まれるのみであるが、その下はローム粒に加え焼土粒も少量含まれ、最下層は炭化材と焼土粒が多く含まれていた。床面は中央部のみ硬化しており、床面上からは051・052号寄りの範囲で炭化材や焼土の散在が認められた。ピットは何個か検出されているが、いずれも機能は不明である。炉は遺構中央部とその西隣に合計２か所検出されている。どちらもほぼ楕円形のプランで掘り方は20cmほどの深さを測る。新旧関係等の詳細は明らかでない。

072号は、北半分で054・066・109号と、南東部分で049・050・053号と重複関係をもつ。049・050・066号よりは新しく、053・109号よりは古いが、054号との新旧関係では、072号の方が古いと判断したものの、微妙である。多数の遺構と重複するため、プランはやや不明瞭ではあるが、縦横辺長の比差の大きい長方形になるようである。確認面からの深さは最大で約40cmであるが、遺存する壁の高さは最大でも15cmほどである。覆土の状況は054号とほとんど同じで、054号とあまりレベル差の大きくない床面からは、054号同様炭化物の散在が認められた。床面は遺構の中央ないしやや南寄りの部分が踏み固められていた。ピットや炉等は検出されなかった。

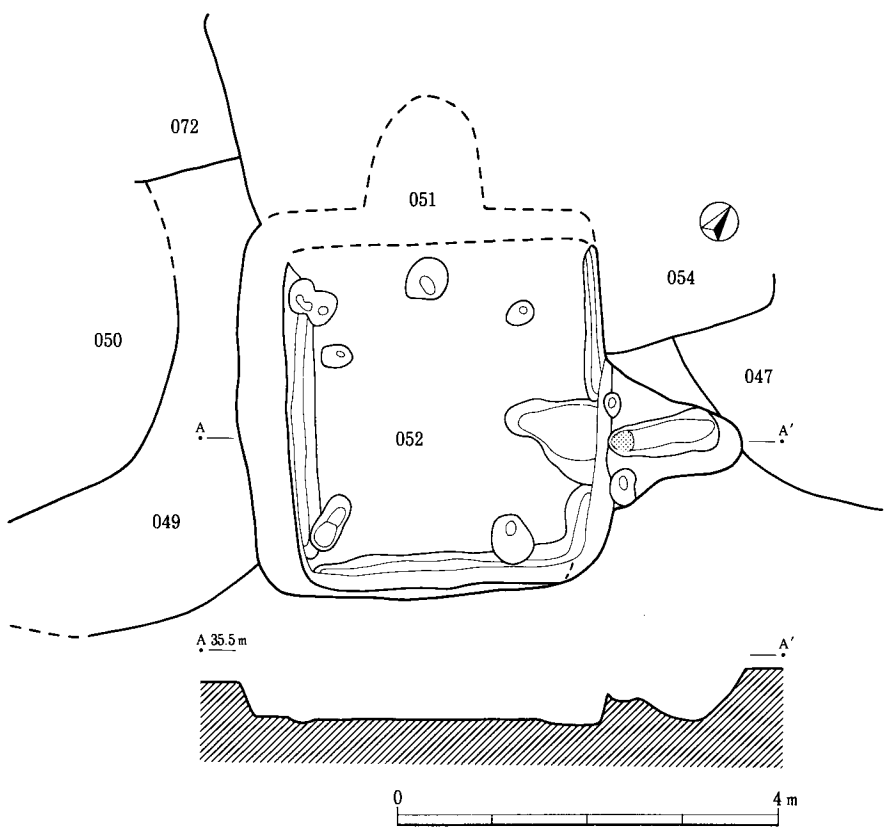
遺物：049号で１点、050号で２点、051号で１点、053号で２点、054号で４点、072号で３点実測可能であった。１は台付甕の脚部で器面が磨滅している。２～４は鉢で、２のミガキは器面の比較的柔らかい段階で行われたようで平滑でない。３は口縁部に羽状縄文が施され、その下端にはＳ字状結節文が３段見られる。口唇部は平坦で縄文が施される。５は杯で、外面屈曲部に沈線が１本巡るようである。器面の磨耗が進んでおり調整痕ははっきりしない。６は甕で、器面が磨耗している。７は小型鉢で、口縁は比較的波打っていて全体的に粗雑な印象である。８は甑で、内外面ともにハケ目が若干残っている。ハケの単位は10本/cmである。９・10は器台で、９は器受部と思われる部分の縁辺が剥落・磨耗している。内面には輪積み痕が残る。10のハケの単位は７本/cm、11は９本/cm、12は８本/cmである。12は高杯形ないし台付甕形になるようである。13は高杯で、器面が若干剥落する。

052号（第84図、図版17）

遺構：5D-91・6D-01グリッド等に位置する。

051号の貼り床下から検出された。051号よりも若干規模は小さく、カマドの方向が異なるようだが、遺構の中心と軸の方向は051号とほぼ同一である。北西壁を失うが、ほぼ正方形のプランで、南コーナーの一部分を除いて、遺存する壁際には周溝が巡っている。遺存する軸長は3.4ｍを測る。051号との床面レベルの差は、５cmほどである。床面は遺存部分ほぼ全域にわたって踏み固められており、この床面からピットが何個か検出された。主柱穴とみられる、四隅に位置するものは、南東コーナー部のものが深さ50cmを測るほかはすべて30cm～40cm前後の深さである。それら以外は10cm～20cmの深さであり、機能は特定できない。カマドとみられる施設は北東壁中央部分に存在しており、床面の掘込みや袖の芯を立てたと考えられるピット一対などが確認されている。ただし、床面の掘り方から煙道部方向に向かってなだらかに上昇するのではなく、住居の壁の立上がりがある程度生きているような点、床面の掘込み部がほとんど焼けていないにもかかわらず、壁の外の、かなり高いレベルで火床部が検出されている点など、051号のカマドとするよりは全く別の遺構と考えた方が妥当な点も指摘できる。

遺物：実測可能な遺物は出土していない。



第84図　052号実測図

056・057・058号（第85・86図、図版18）

遺構：4C-56・57グリッド等に位置する。

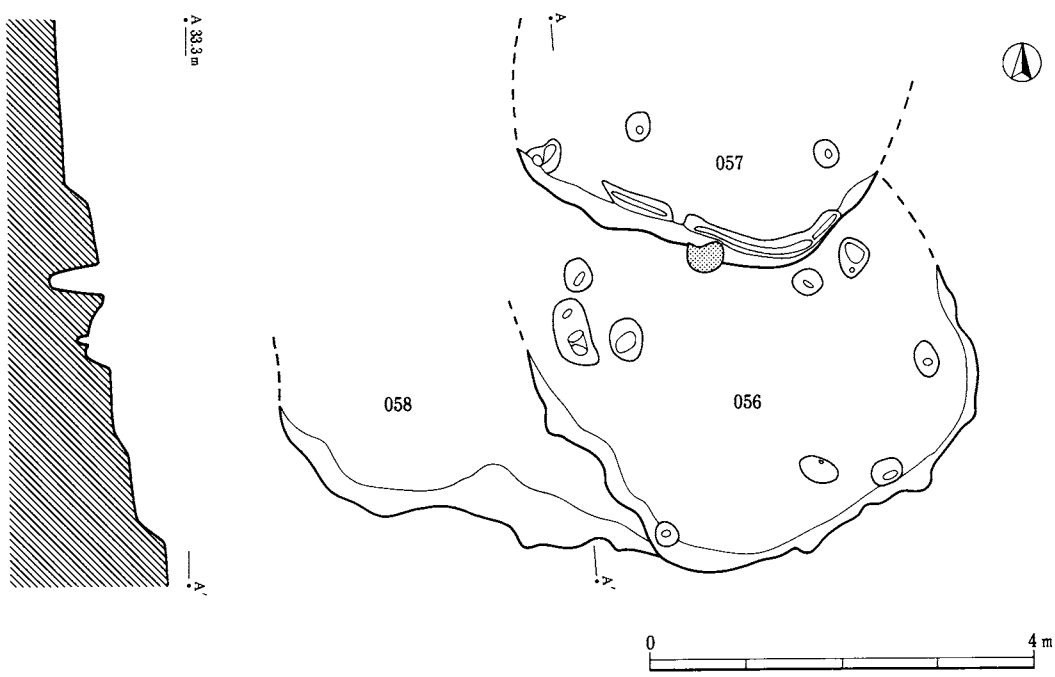
急斜面部で3軒が重複しており、いずれも北部を流失している。056号と057号では057号の方が新しく、056号と058号とでは056号の方が新しい。

056号のプランは隅丸方形を呈するとみられ、遺存部分の軸長は、4.2ｍ、壁高は最大で45cmを測る。覆土はローム粒の混入具合により上下2つの黒褐色土層に分けられる。ピットは、主柱穴、補助柱穴、梯子穴などとみられるものが何個か検出されているが、深さは北西端のものが約50cmを測るほかはいずれも20cm内外である。床面はほぼ全面にわたって硬化していた。炉は057号に切られている。

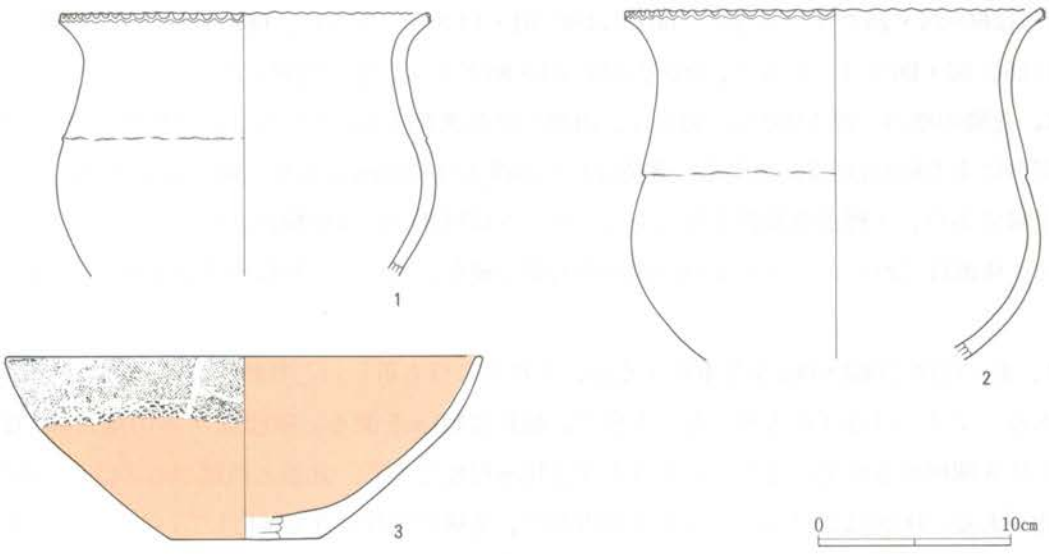
057号のプランも隅丸方形を呈するようである。南壁には周溝が検出されている。056の床面からは、約20cm低くなる。覆土は2層に分けられ、上層から黒褐色土層、暗褐色土層であった。ピットは3個検出された。中央寄りの2個は、それぞれ東から深さ約50cm、20cmを測り、柱穴とみられるが、壁際のものの機能は不明である。炉は検出できなかった。

058号は、南側の壁が確認されたのみであり、プランも明確にならない。壁高は約30cmである。覆土は3層に分けられ、最上層は黒色土、その下にはローム粒の混入具合によって2層に分層可能な黒褐色土が堆積していた。ピットや炉は検出されていない。

遺物：056号からの3点のみ実測可能であった。058号からは遺物は出土せず、また057号からも実測できる遺物は出土していない。1・2は甕である。1の口唇部には、正面から棒状工具による押捺が連続的に施されている。輪積み痕はなでられてはいるものの、残存する。2の口唇部は、1よりやや上部から、指又は棒状工具によって押捺されている。輪積み痕は段状にはっきりしている。3は鉢で、口縁部に羽状に縄文を施し、最下段には網目状撚糸文が見られる。口唇部にも縄文が施される。施文部以外は、内外面とも赤彩されている。



第85図　056・057・058号実測図



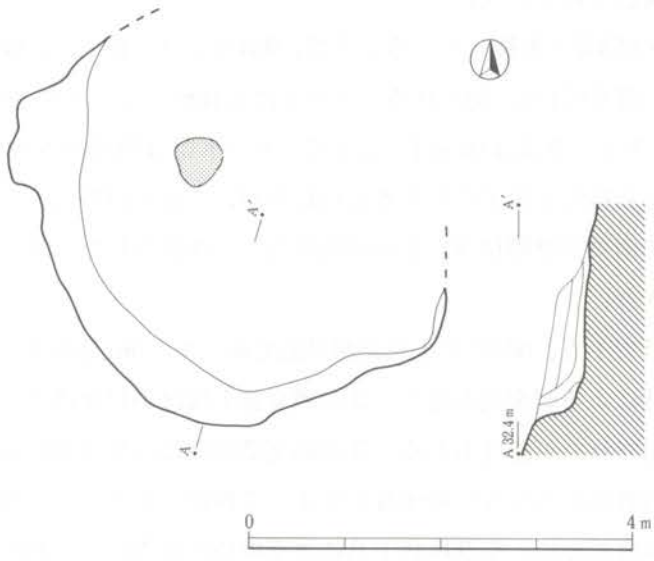
第86図　056号出土土器

059号（第87図、図版18）

遺構：4B-29・39グリッド等に位置する。

急斜面に所在し、南西部のみの遺存である。プランははっきりしない。壁高は最大で約40cmである。覆土は、壁際にロームと黒褐色土の混合層が堆積し、その上にロームの混入具合によって2層に分層可能な黒褐色土層が堆積、そして最上層には黒色土層が見られた。遺存部分の床面は踏み固められていたが、ピットは確認できなかった。中央部付近に焼土の分布する部分があり、炉であると考えられるが、明確な掘込みは確認できない。

遺物：全く出土していない。



第87図　059号実測図

061・062・063・064・065号（第88～90図、図版19）

遺構：061号は6C-24・25グリッド等に、062号は6C-04・14グリッド等に、063号は6C-05・06グリッド等に、064号は5C-86・96グリッド等に、065号は5C-84・85グリッド等に位置している。

061号は、北側の壁の一部を062号に切られ、西側の壁を調査区外にもつが、ほぼ円形プランと推定できる。遺存部分による軸長は3.3ｍを測る。確認面からの深さは約20cmである。覆土は、大きく分けて上層が黒褐色土層であり、下層は暗褐色土層である。ピットは壁添いに５個検出されたが、いずれも深さ10cm程度である。床面はこれらのピットより内側の中心部で硬化していた。炉は中央部北西寄りに位置している。

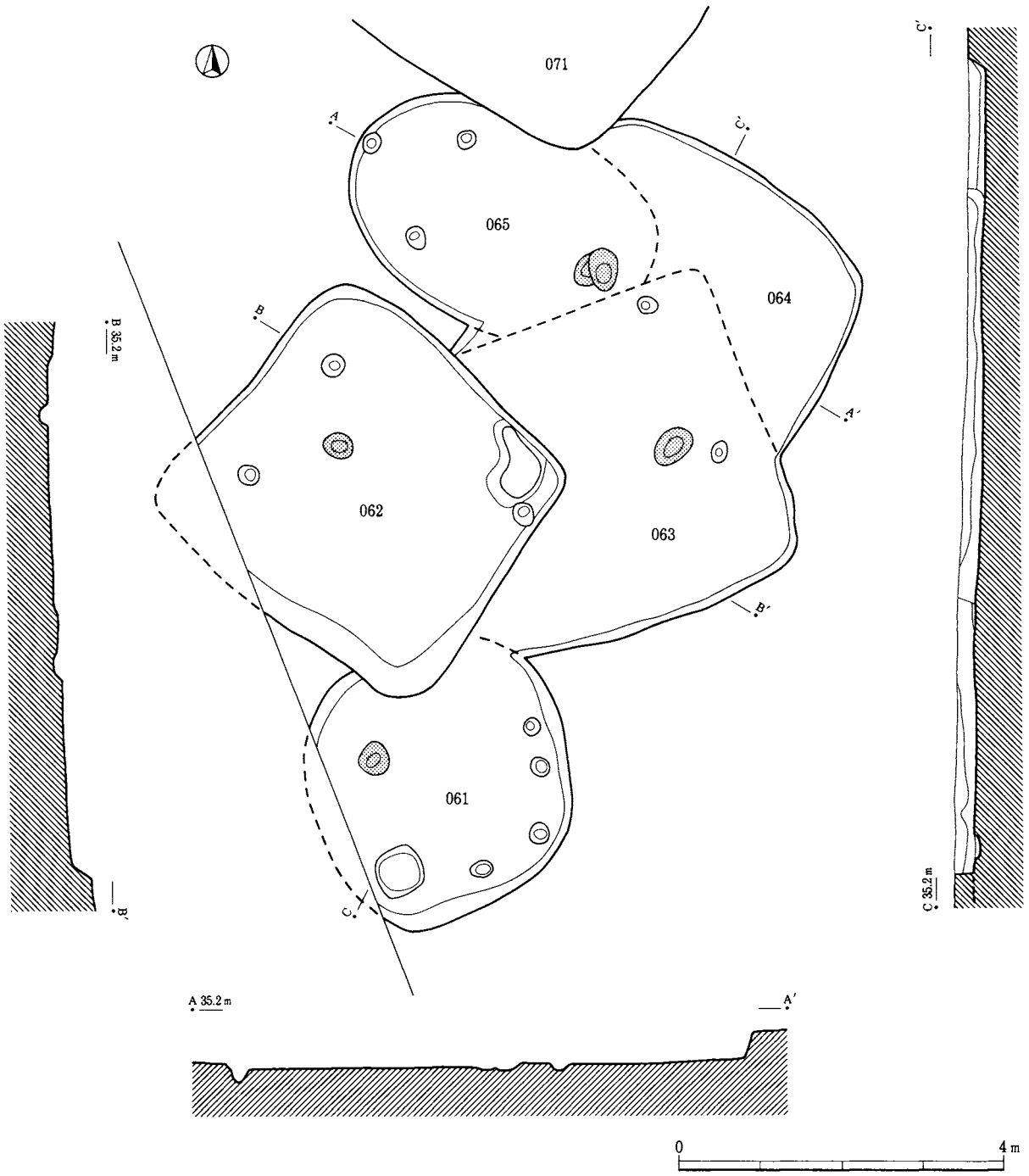
062号は、東～南側で063・061等と重複するが、それらよりも新しいと判断される。西コーナー部は調査区外である。プランはほぼ正方形に近い方形で、軸長は4.0ｍを測る。確認面からの深さは約20cmである。ピットは３個検出されているが、いずれも深さ10cm程度である。北部と西部のものはその位置から柱穴の可能性がある。床面はこれらのピットより内側の、遺構中央部付近で硬化していた。また、東コーナー部付近に、比高差５cm程度ではあるが堤状の高まりが見られた。炉は中央部よりやや北西寄りに検出された。

063号は、西側を062号に切られ、北側は064・065号と重複していて壁を確認できなかったが、064・065号より新しいと判断した。方形又は隅丸方形プランになるものと考えられる。ほぼ垂直に近い角度で立ち上がる壁の高さは、最大で約30cmである。覆土は２層に分けられ、上層に黒褐色土が、下層に暗褐色土が堆積していた。ピットは、064号と重複する範囲内に２個検出されたが、いずれも深さ10cm～20cmで、機能もはっきりしない。床面は、南壁際付近を除くほぼ全域で硬化していた。炉は中央部東寄りに検出されている。

064号は、063・065号と、床面のレベル差をほとんどもたずに重複しているが、それらよりも古いと判断される。プランは方形ないし隅丸方形を呈すると推定される。壁の高さは、最大で約30cmである。覆土は、黒褐色土が堆積していたが、混入物によって２層に分けることができる。上層はローム粒・焼土粒・炭化物を少量含んでおり下層は焼土粒・炭化材を少量含んでいた。床面はそれほど踏み締められてはいなかった。ピットや炉等は確認されていない。

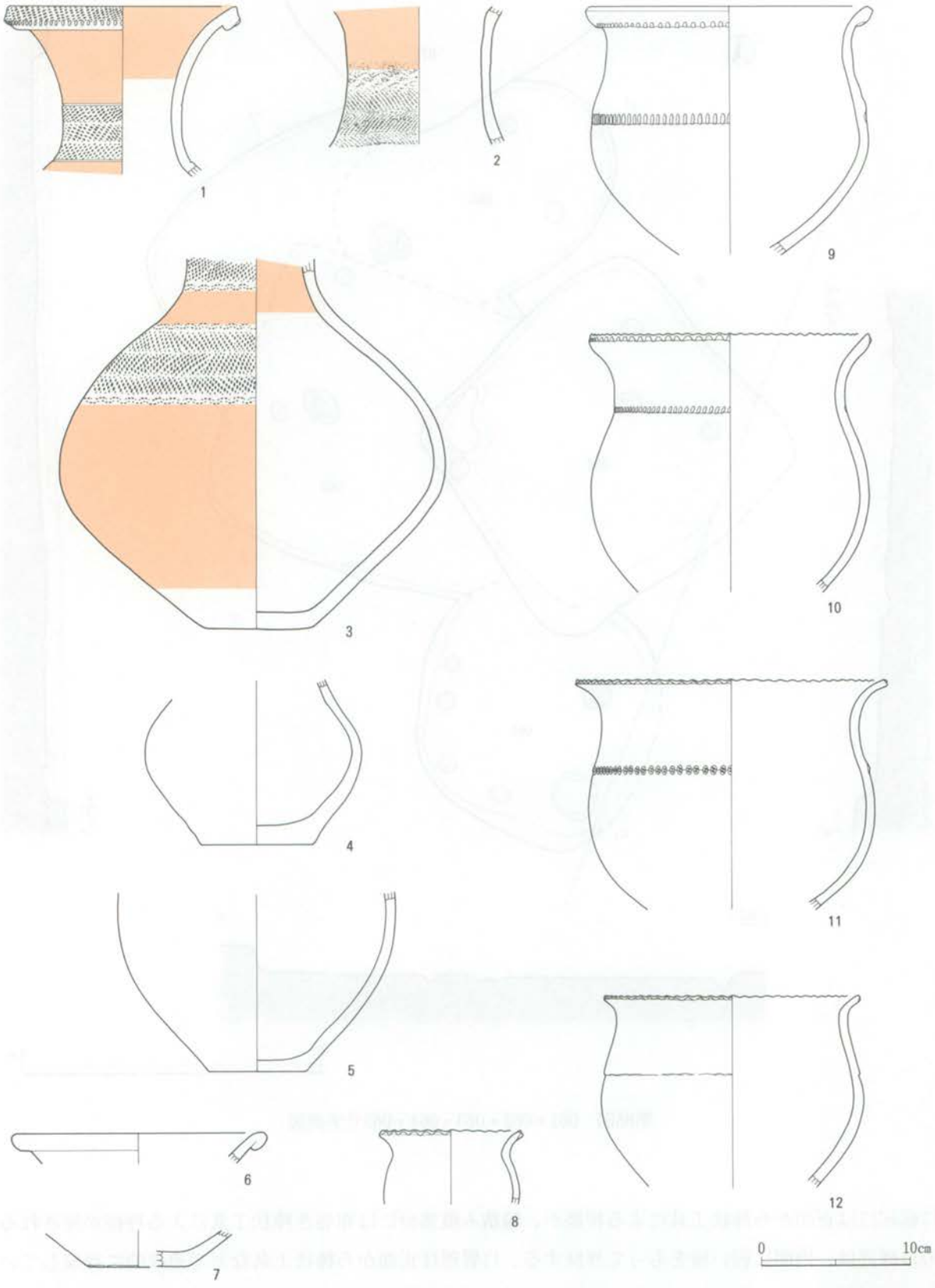
065号は、南東側で064・063号と重複しているようで、064号よりは新しく、063号よりは古いと判断される。また、北側の壁の一部を071号に切られる。プランは小判形になると考えられ、その規模は復元値で長径4.0ｍ、短径2.3ｍである。壁高は10cmほどである。ピットは３個検出されたが、いずれも深さ10cm～20cmである。その配置から柱穴と梯子穴とも考えられるが、これら以外の柱穴に相当するピットは検出されていない。炉は遺構の南東部壁際付近に２か所切り合って検出された。古い方が064号のものである可能性もあるが、確認できない。

遺物：061号で９点、062号で１点、064号で４点実測可能であった。061号の１～４は壺である。１は、口縁の下端部に布巻棒状工具による刺突列が巡る。２の縄文部上端は網目状撚糸文である。下部の割れ口は著しく磨耗しており、転用された可能性もある。３の縄文部端部にはＳ字状結節文が２段ずつ見られる。８は小型甕で、口唇部は内外面から交互に指頭などによって押捺されている。９～12は甕である。９は折返し口縁の下端部と輪積み痕部分に、布巻棒状工具による押捺が施される。10の口唇部は内面側・外面側から交互に棒状工具で押捺が施されており、輪積み痕部はヘラ状工具による刺突が連続的に見られる。11

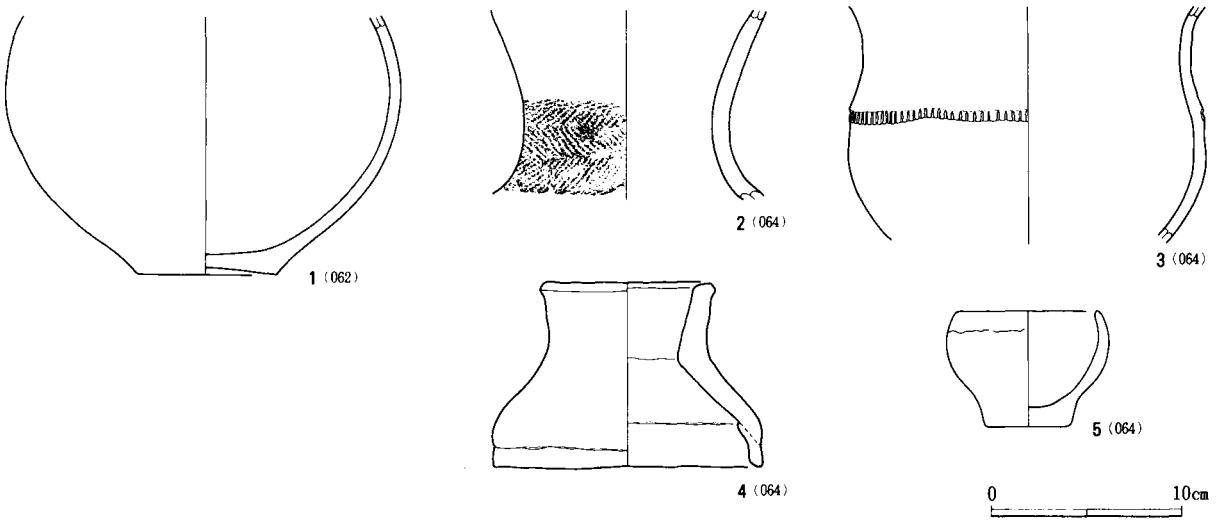


第88図　061・062・063・064・065号実測図

は口縁部には正面から棒状工具による押捺が、輪積み痕部分には布巻き棒状工具による押捺が施される。12の口縁部は、内面に弱い稜をもって外反する。口唇部は正面から棒状工具などで連続的に押捺しているようだが、雑である。064の2は壺で、縄文部上端に2段のS字状結節文が見られる。混和剤の白色スコリアや雲母粒が目立ち、異質な印象である。3は甕で、輪積み痕部には、ヘラ状ないしハケ状の工具による連続的な刺突が比較的狭い間隔で施されている。4は器台で、全体がナデ調整によって仕上げられているが、概して雑で、器受部、裾部は擬口縁のようでもある。



第89図　061号出土土器



第90図　062・064号出土土器

066・067・068・070号（第91～94図、図版19・20）

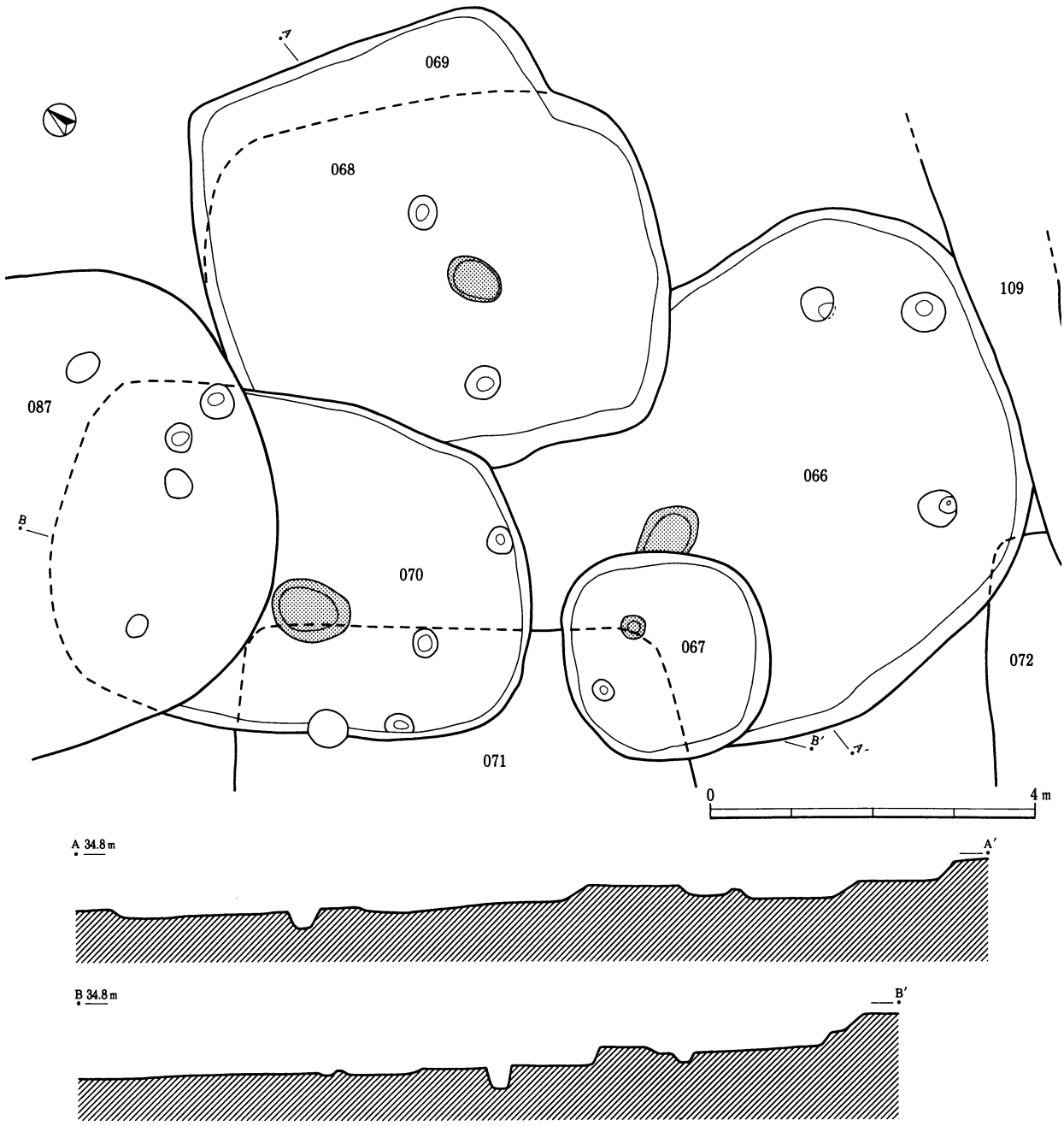
遺構：066号は5C-68・69グリッド等に、067号は5C-67・77グリッド等に、068号は5C-48・49グリッド等に、070号は4C-46・56グリッド等に位置している。

066号は、西側を北からそれぞれ068・069・070・071・067号に切られ、さらに東側の壁を109号に、南側の壁の一部を072号に切られているが、プランは楕円形であったと推定できる。主軸方位はN-81°-Wである。遺存部分で、短径5.7ｍを測る。斜めに立ち上がる壁の高さは、最大で約25cmである。覆土は大きく2層に分けられ、上層に黒褐色土が、下層に暗褐色土が堆積していた。ピットは東側に集中して3個検出され、深さは北から50cm、30cm、40cmほどを測る。北と南のピットは上端と下端で中心位置がややずれるものの、柱穴と考えることができる。また、残る1個は梯子穴と考えられるかもしれないが、柱穴に関しては西側に想定される2個は検出されていない。炉は中央部西寄りに検出されたが、半分ほど067号によって切られていた。

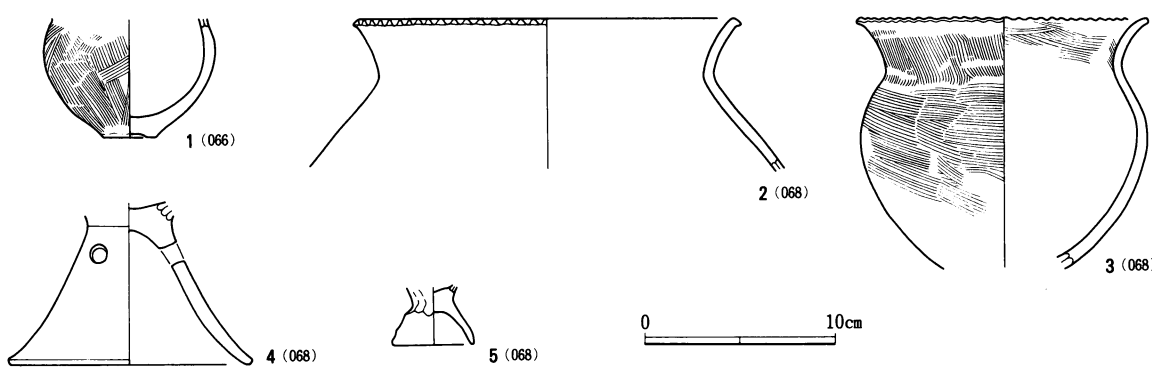
067号は、066号を切って構築され、西側約半分が071号と重複している。071号より古いと判断される。ほぼ正円形のプランで、軸長は2.6ｍを測る。壁の高さは最大で36cmである。ピットは深さ10cmほどのものが1個検出されたのみである。中央部北寄りから径約30cm、深さ5cm足らずの、焼土の堆積する掘込みが確認されているが、これは、炉と考えられる。

068号は、西コーナー部を070号に切られており、069号との重複により北側の壁が確認されなかったものの、隅丸方形プランと推定される。壁の高さは、最大で約30cmである。覆土は3層に分けられ、ローム粒の混入具合によって異なる暗褐色土が順次堆積していた。この床面から検出されたピットは2個で、いずれも深さ20cm程度を測る。炉はほぼ中央部か若干東寄りに検出された。

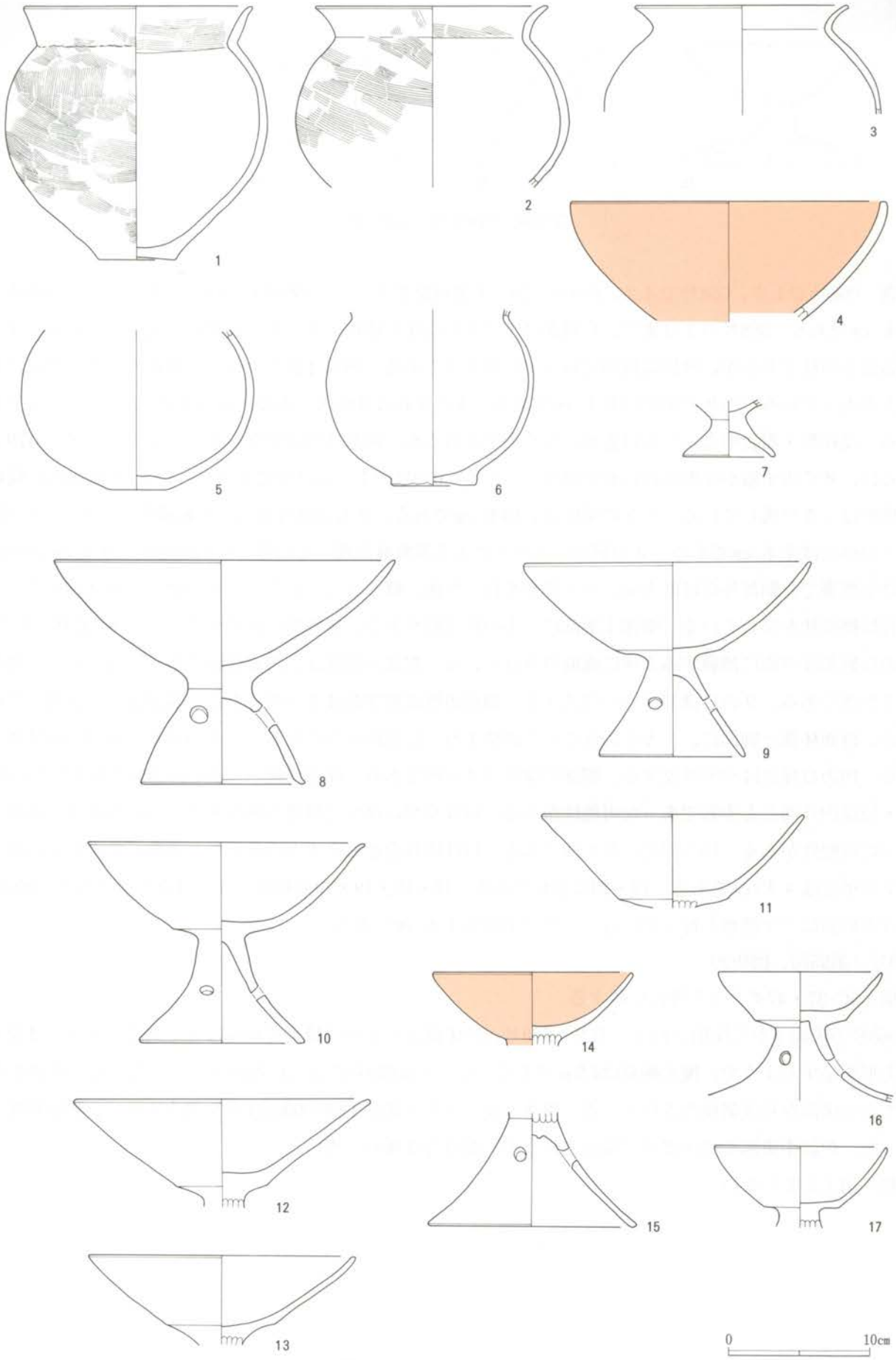
070号は、東側で068・066号を切り、北側で087号、南側で071号と重複関係をもつ。087号よりは新しく、071号より古いと判断される。プランは、はっきりしないが小判形に近いとみられる。わずかに遺存する西側の壁の一部によると、壁の高さは27cmである。床面からはピットが不規則な配置で5個検出されているが、機能は確定できない。炉は中央部やや西寄りで検出されている。



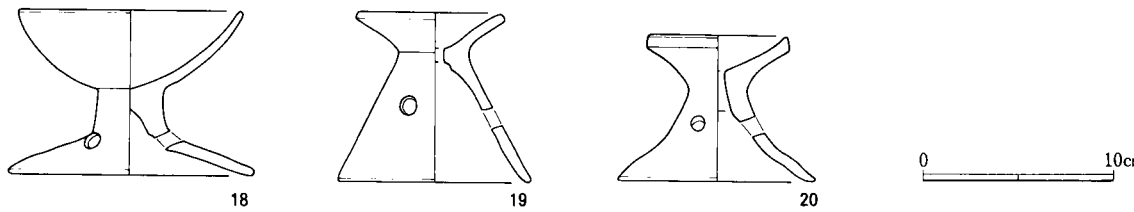
第91図　066・067・068・070号実測図



第92図　066・068号出土土器



第93図　070号出土土器（1）



第94図　070号出土土器（2）

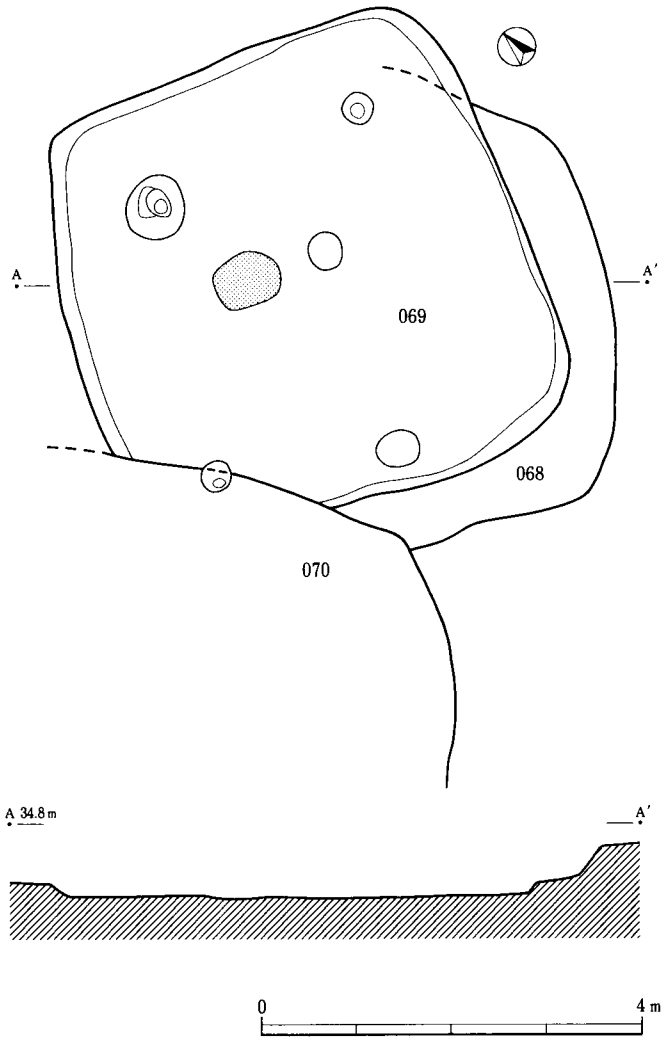
遺物：066号で1点、068号で4点、070号で20点実測可能であった。066号の1は小型甕で、ハケの単位は9本/cmである。068号の2は甕で、口唇部は上下から交互に棒状工具によって押捺が施されている。3の口唇部も同様であるが、押捺は指頭で行っているようである。胴部外面下半はハケ調整後、不定方向にミガキが入っている。ハケの単位は8本/cmである。4の穿孔は3か所である。5は手捏ねのミニチュアである。高杯形・器台形ないし台付甕形になるのであろうか。頸部は指頭で襞をよせて絞っている。070号からは、多くの土器が完形に近い形で出土している。070号の1～3は甕である。1は、頸部外面に輪積み痕をはっきり残している。ハケの単位は、10本/cmである。2も頸部外面に若干輪積み痕を残している。ハケの単位は7本/cmである。3の胴部にはハケによる調整痕が残っている。ハケの単位は8本/cmである。6は小型甕で、胴部外面は縦方向にハケ調整を行った後、軽くなでている。ハケの単位は8本/cmで、ハケ目は擦痕状を呈している。胴部下半部に大小の粘土粒が少量、無秩序に付着する。7～18は高杯である。8の口唇部は内面に傾斜するように面取りされている。裾部の端部は、内面に稜をもって外を向く。穿孔は3か所である。9の口縁部はやや内湾する。脚部の焼成前穿孔は3か所である。器面は若干磨滅しているが、外面杯部と脚部に、ミガキの前にハケ調整を行った痕跡が見られる。ハケの単位は6本/cm程度である。10の口縁部はやや外反する。脚部の穿孔は4か所である。杯部内面の底部のみ器面が磨滅している。11・12は内外面とも赤彩であった可能性がある。14はややいびつで粗雑な感がある。15の外面は、赤彩であった可能性がある。15の穿孔は3か所である。17は内外面ともミガキの前にハケ調整が施されている。ハケの単位は4本/cmである。19・20は器台である。16・18・19・20の脚部の穿孔は3か所である。20は、ミガキの前にハケ調整を行っている。ハケの単位は7本/cmである。

069号（第95図、図版20）

遺構：5C-37・47グリッド等に位置する。

068号の床面下から検出されているが、068号との床面レベル差は最大で10cmほどである。プランは隅丸正方形を呈するようで、復元軸長は4.9mである。ピットは070号に切られる西コーナー部付近のものも含めてこの床面から3個検出されている。深さは北コーナー部の1個が60cmほどを測るほかは、30cm程度であった。炉は中央部やや西寄りに検出されたが、掘り方は極めて浅い。

遺物：出土していない。



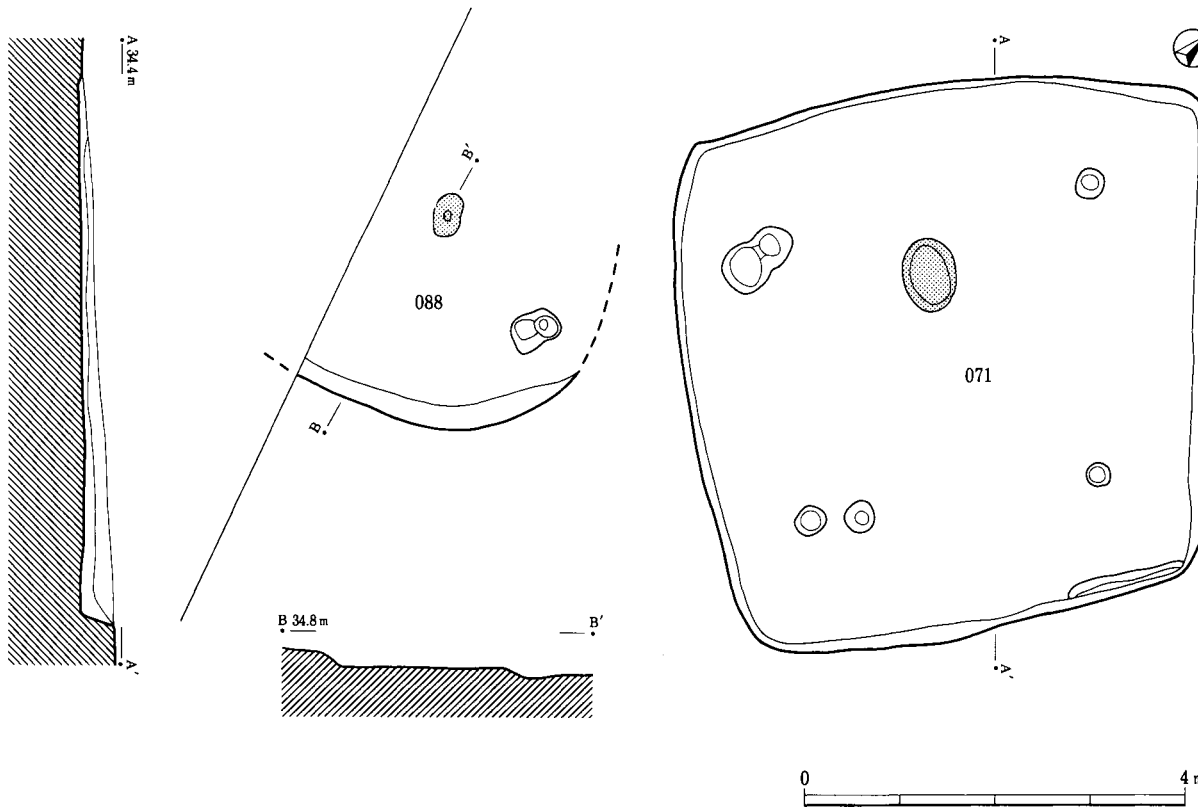
第95図　069号実測図

071・088号（第96・97図、図版21・24）

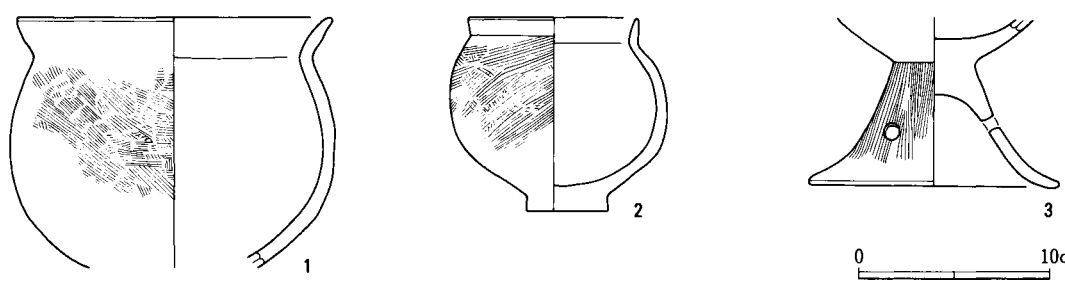
遺構：071号は5C-65・75グリッド等に、088号は5C-82・83グリッド等に位置する。

071号は、東コーナーと北コーナーでそれぞれ067・070号と重複しているが、これらの遺構の上に貼り床して構築されているもので、これらよりも新しいと判断される。確認面からの深さは、最大で約30cmとなっている。東コーナー部で一部周溝が確認されている。プランは正方形に近い方形を呈し、規模は5.9m×5.6mを測る。覆土は2層に分けられ、上層から黒褐色土層、暗褐色土層となっていた。ピットは、柱穴と考えられるものが検出されている。いずれも深さ20cm程度である。炉は中央部北寄りに検出された。床面は炉の周りを中心に踏み固められていた。また、炭化材が散在していた。

088号は北側がかなり削平され、また東側が調査区外となるが、南側の壁の一部とピットが1個、そして炉が確認された。壁高は最大で15cmほど、プランは不明である。なお、一部が071号と重複する可能性も指摘できる。ピットは20cmほどの深さを測る。床面はあまり堅緻ではない。



第96図　071・088号実測図



第97図　071号出土土器

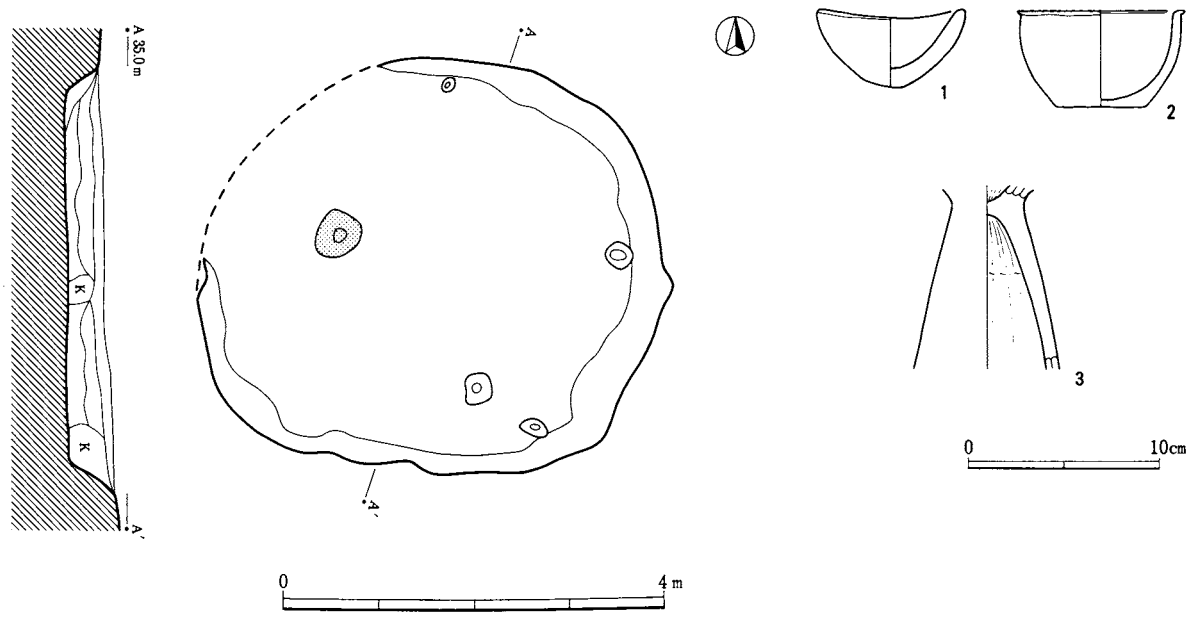
遺物：071号の3点が実測可能であった。088号からは遺物は出土していない。1は甕で、外面は胴部下半は概ね横方向のヘラケズリ、上半はハケ調整である。ヘラケズリよりもハケ調整の方が後になるようである。ハケの単位は8本/cmである。2は小型甕で、口縁部はわずかに外反するように、ほぼ垂直に立ち上がる。胴部外面にはハケ調整が施されているが、下端部から底部にかけては縦方向のヘラケズリによってハケ目が消されている。ハケの単位は10本/cmである。内面は大きく剥落している。3は高杯で、大きく剥落しているものの杯部外面にもハケ調整痕が認められる。ハケの単位は10本/cmである。

074号（第98図、図版21）

遺構：1B－80・81グリッド等に位置する。1号墳墳丘下から検出されている。

北西部分を失うが、これは1号墳築造時に削平されたものと考えられる。ほぼ円形ないし楕円形のプランを呈し、規模は長軸推定5.0ｍ、短軸4.3ｍである。確認面からの深さは約45cmを測る。覆土は土質やローム粒の混入具合によって4層に分けられるが、いずれも暗褐色土層であった。ピットは主に壁際から検出されているが、いずれも10cm～20cmの深さである。床面は遺存部分全面にわたって堅く踏み固められており、中央部西寄りから検出された炉も良く焼けていた。

遺物：3点実測可能であった。1は手捏ね土器である。口唇部を初め、器面の随所に細かな亀裂がみられる。2は小型鉢で、口唇部は内面側に稜をもたせ外面側に折り曲げるようにしている。3は高杯で、外面は縦にヘラケズリを行った後、器面が乾燥した段階で横方向に磨いている。内面にはシボリ目が残存する。



第98図　074号実測図・出土土器

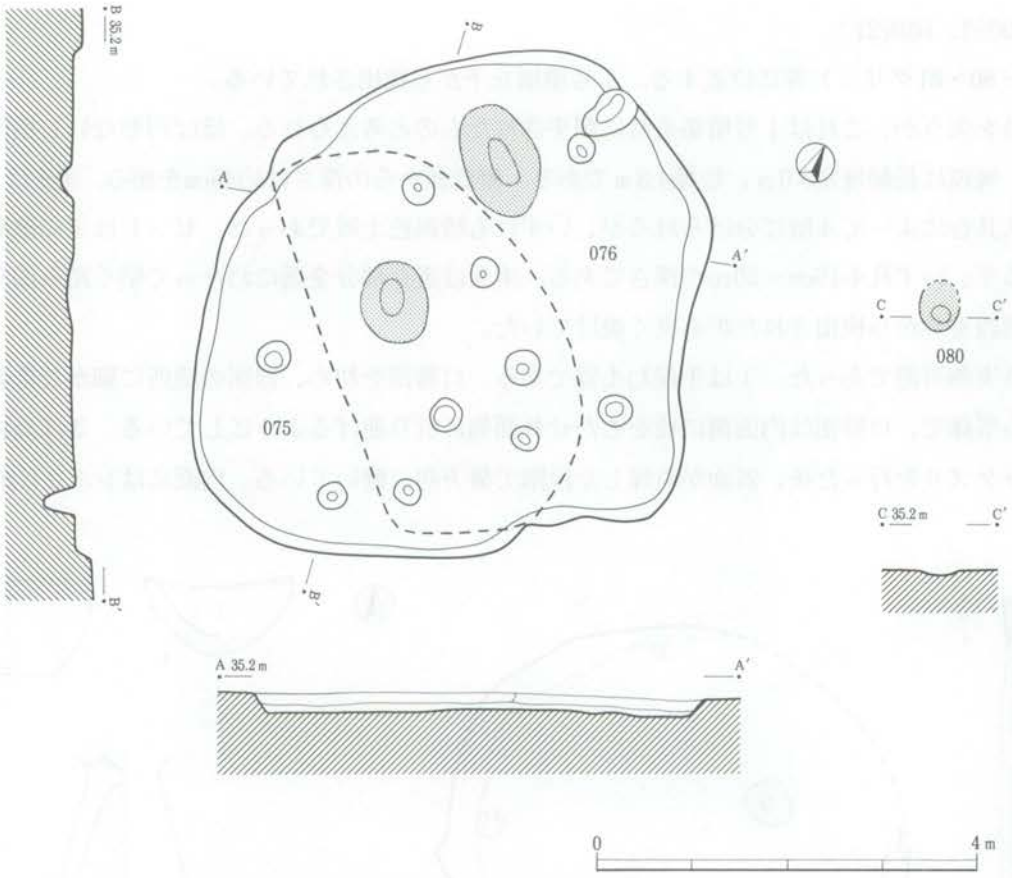
075・076・080号（第99・100図、図版21）

遺構：075号は2B-20・21グリッド等に、076号は2B-11・12グリッド等に、080号は2B-03グリッド等に位置している。いずれも1号墳墳丘下から検出された。

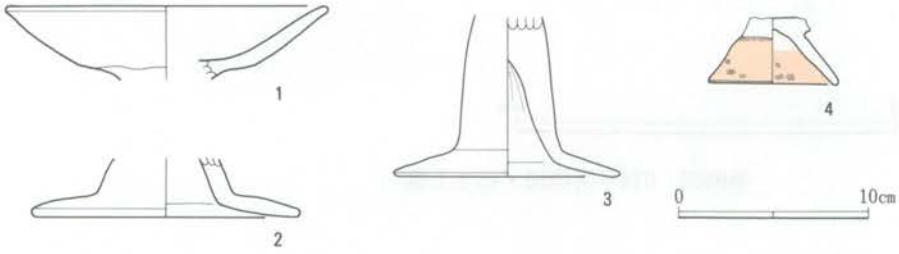
075号と076号は床面レベルがほぼ同じで、重複する部分の壁は互いに検出できず、新旧関係も不明である。壁だけを追うと1軒のようにも見えるが、プランは、075号は卵形ないし隅丸方形、076号は隅丸方形を呈すると考えられる。ただし、どちらもやや不整形である。確認面からの深さは約20cmである。覆土は土質やローム粒の混入具合などから3層に分層することができたが、いずれもしまりのない暗褐色土であった。ピットはいずれも深さ10cm～20cmのものであるが、それぞれの柱穴と梯子穴などと考えられる。1か所ずつ検出された炉は、どちらも10cm程度の掘込みをもつ。

080号は、炉のみかろうじて検出されたもので、詳細は不明である。

遺物：076号からの4点のみ実測可能であった。4のハケの単位は8本/cmである。



第99図　075・076・080号実測図



第100図　076号出土土器

078・079号（第101図、図版22）

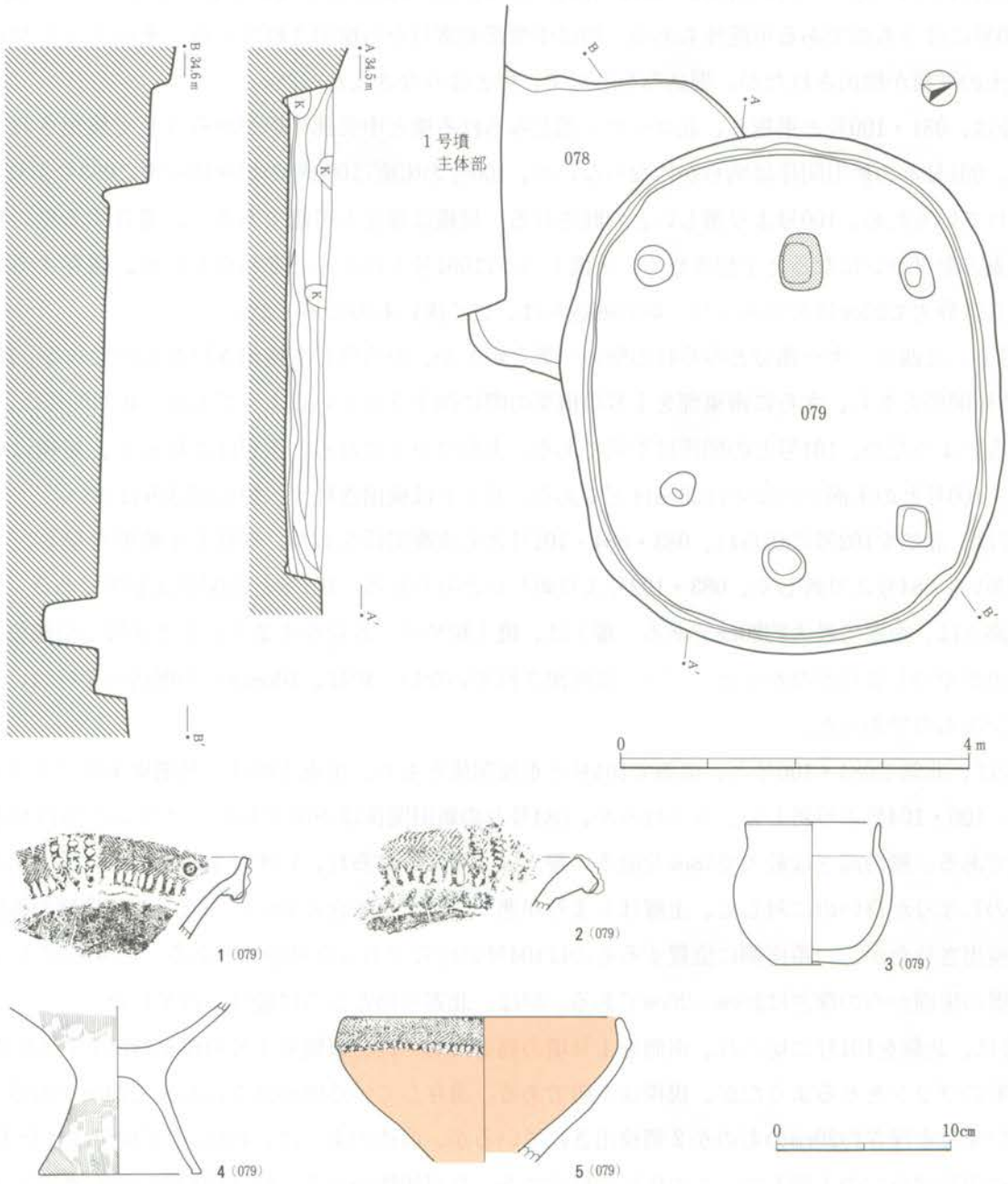
遺構：078号は1B-84・94グリッド等に、079号は1B-85・86グリッド等に位置する。いずれも1号墳墳丘下から検出された。078号と079号の新旧関係は不明である。

078号は、隅丸正方形ないし方形のプランと推定されるが、東半分は床面レベルの低い079号と重複し、南西部は1号墳の主体部に切られていて、はっきりしない。遺存部の軸長は3.4ｍを測る。確認面からの深さは23cmほどであり、覆土はローム粒の混入具合によって3層に分層可能な暗褐色土であった。ピットや炉は検出されていない。

079号は、楕円形を呈し、全周にわたって周溝が巡らされている。主軸方位は、N-68°-Wである。規模は、長径5.9ｍ、短径5.0ｍ、確認面からの深さは55cmほどを測る。覆土は、若干の攪乱層が入るものの、

混入物の状況によって分層される6層の暗褐色土層が面的に堆積していた。概ね下層ほど焼土や炭化物を多く含む傾向にあり、床面直上は、一面に焼土層が広がっている状態であった。焼失住居であると考えられる。検出されたピットは深さ60cmほどの主柱穴と考えられるものが4個、深さ10cm程度の梯子穴とみられるものが1個である。炉は中央部西寄りで検出されている。掘り方の深さは約15cmである。

遺物：出土した土器は、079号からの5点のみ実測可能であった。1・2は壺の口縁部破片である。1は3本1単位の棒状浮文上と縄文部下端部に縄文原体の押捺が施される。拓影図右上には上に細い竹管状工具端部を押捺した円形付文が貼付される。2も同様であるが、棒状浮文の上の押捺は細い棒状工具による。1・2・5は口唇部にも縄文が巡り、施文部以外は赤彩がある。5は鉢で、縄文下端部は縄文原体の押捺である。4は台付甕で、ハケの単位は8本/cmである。



第101図　078・079号実測図・出土土器

081・083・084・100・101・104号（第102・103図、図版22・26）

遺構：081号は2B-42・43グリッド等に、083号は2B-24・34グリッド等に、084号は2B-36・46グリッド等に、100号は2B-35・45グリッド等に、101号は2B-55・56グリッド等に、104号は2B-54・64グリッド等に位置している。いずれも1号墳墳丘下から検出された。

081号は、発掘時には3軒重複の住居跡として調査されたが、整理時に検討を行った結果、プランが不整形を呈するものの、1軒として取り扱うこととした。また、新旧関係は明らかではないものの、東側では1軒ないし2軒の住居跡（083・100号）と重複するようである。遺存する壁の高さは最大で38cmを測る。覆土は、土質によって分層可能な、ローム粒や焼土粒を含む暗褐色土が3層、順次堆積していた。最上層は土のしまりがなく、焼土を比較的多く含んでいた。ピットは、083号と重複する範囲内のものも含めて6個検出されている。いずれも10cm～20cmの深さで、柱穴が4個と梯子穴が1個と考えられる。残り1個は、083号に伴うものである可能性もある。炉は中央部北寄りから検出されている。そのすぐ北側に隣接して焼土の堆積が検出されたが、掘込みをもたず、炉とはみなさなかった。

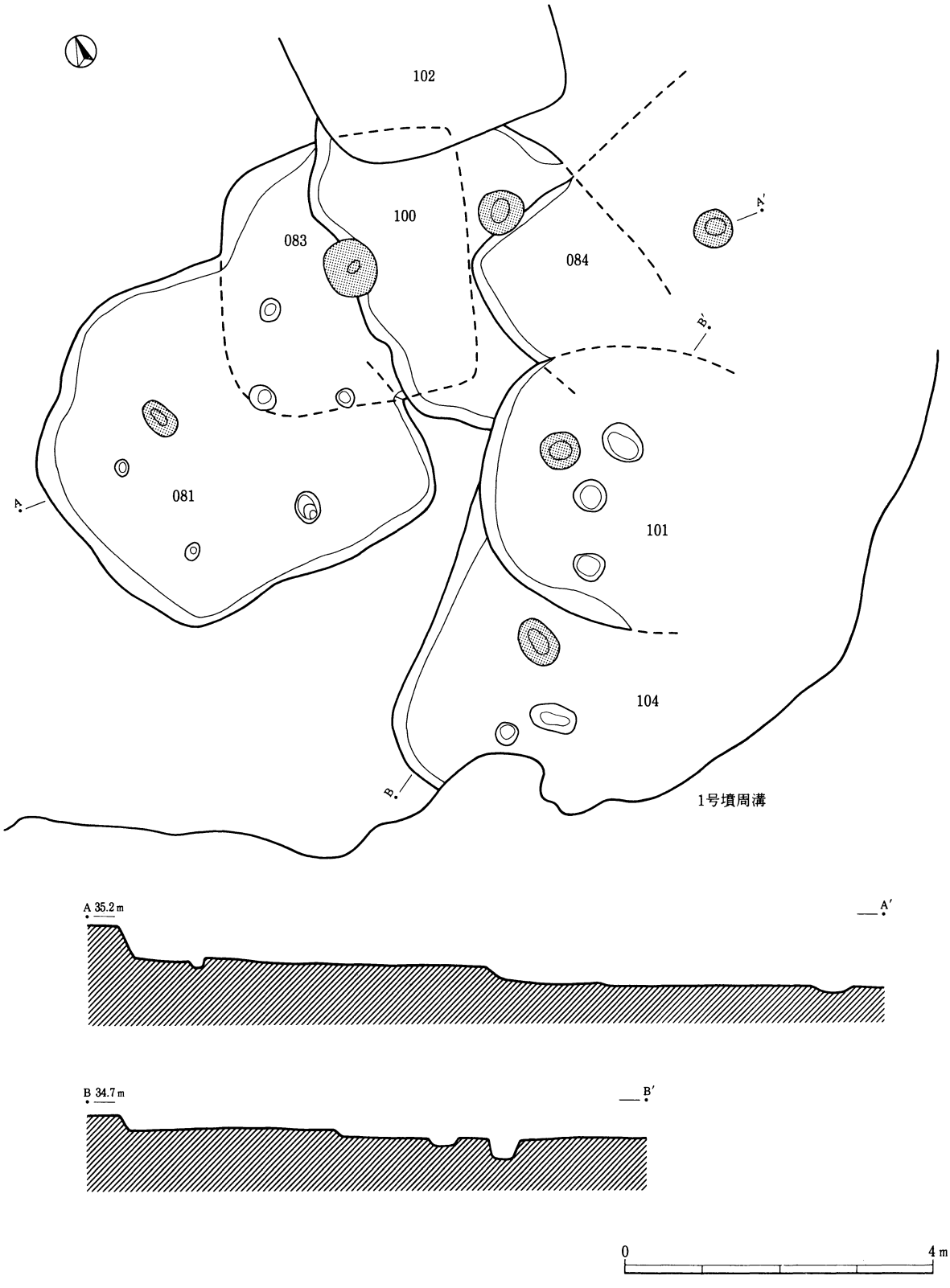
083号は、081・100号と重複し、北コーナー部とみられる壁と中央部の炉がかろうじて検出されたものである。081号との新旧関係は明らかにならないが、100号の床面は083号の炉を切らずに083号より下から検出されているため、100号より新しいと判断される。規模は推定不可能であるが、遺存する壁の形態から、隅丸方形プランになると予想される。床面レベルは081号とほとんど変わらないが、遺存する北側の壁の高さは最大で20cmほどであった。炉の掘込みは、ごく浅いものであった。

084号も、北西コーナー部分とみられる壁の一部と炉とが、かろうじて検出されたものである。100・101号と重複関係をもち、さらに南東部を1号墳構築の際に削平されているようである。新旧関係は、100号よりは古いようだが、101号との関係は不明である。方形プランになると予想はされるが、規模は明らかでない。100号との床面レベル差は20cmほどである。ピットは検出されず、炉も掘込みは浅い。

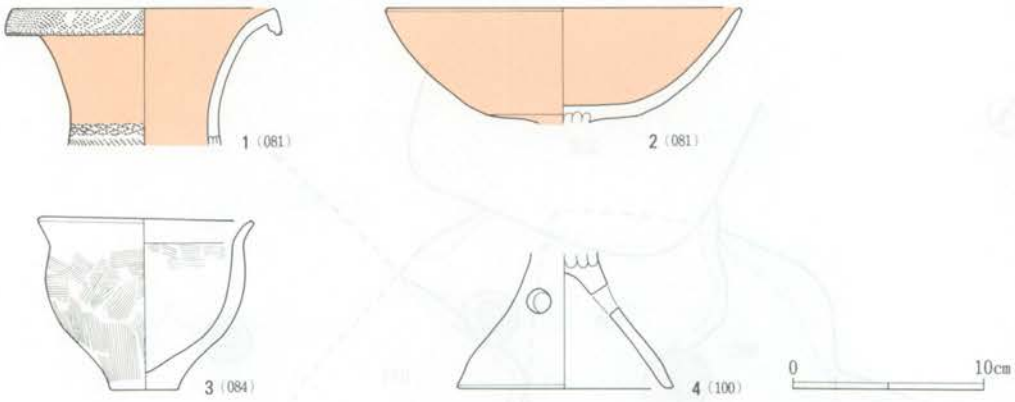
100号は、北部を102号に切られ、083・084・101号とも重複関係をもち、形状も不整形を呈し、不明な部分が多い。084号より新しく、083・102号より新しいとみられる。101号との関係は不明である。遺存する壁の高さは、南壁で最大約20cmである。覆土は、焼土粒やローム粒を少量含む上下2層の暗褐色土で、上層の方がややしまりがなかった。ピットは検出されていない。炉は、10cmほどの掘込みを持つ、ほぼ円形プランのものであった。

101号は、北側で084・100号と、南側で104号と重複関係をもち、南東方面は1号墳構築時に大きく削平される。100・104号より新しいとみられるが、084号との新旧関係は不明である。プランは楕円形を呈するようである。壁の高さは最大で28cmを測る。覆土は2層に分けられ、いずれも暗褐色土であったが、下層は土のしまりが良いのに対して、上層はしまりが悪く、炭を少量含んでいた。ピットは遺構の範囲内では3個検出されたが、一番南側に位置するものは104号の柱穴であった可能性がある。いずれにしても、この遺構の床面からの深さは10cm～20cmである。炉は、北寄りのところに設けられていた。

104号は、北側を101号に切られ、南側を1号墳の周溝に切られ、東側も1号墳構築時に削平されている。隅丸方形のプランをとるようだが、規模は不明である。遺存している壁の高さは最大で24cmを測る。ピットは、いずれも深さ約20cmのものが2個検出されているが、前述のように、101号内で検出された1個と104号内の円形プランの1個とで、この住居の柱穴であった可能性がある。炉は101号との境界線近くで検出されている。10cmほどの掘込みをもつ、楕円形プランである。



第102図　081・083・084・100・101・104号実測図



第103図　081・084・100号出土土器

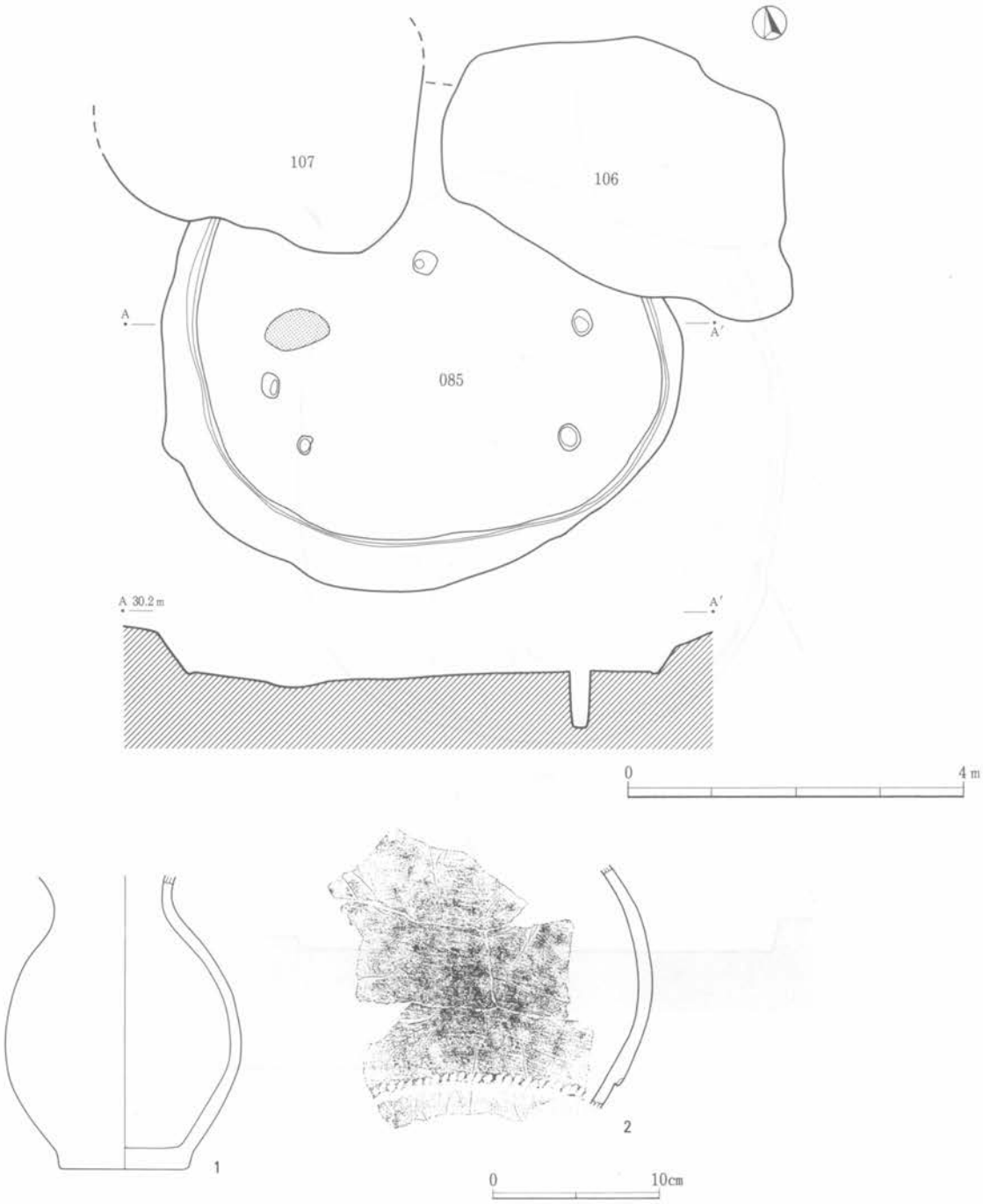
遺物：081号から2点、084号から1点、100号から1点のみ実測可能であった。1は壺で、口縁部には斜縄文が施され、その下端部には細い棒状工具による押捺が下から連続して施されている。図下端にも縄文が見られ、それを区切っているのは網目状撚糸文である。施文部以外の内外面は赤彩されている。2は高杯で、内面底部付近には横方向にヘラナデを施した時のヘラあて痕が残存する。ミガキは内外面とも縦方向に行われている。3は小型甕で、底部はヘラケズリのままで、立たせると一度で安定しない。内面下半のハケ目は主に横方向のミガキによって磨り消される。ハケの単位は7本/cmである。4は高杯の脚部で、穿孔は3か所であるが、その配置は半面に偏っており、あたかも4か所目を穿孔し忘れたかのようである。

085号（第104図、図版23）

遺構：1C-21・22グリッド等に位置する。調査区の最北端に所在する住居跡である。

北側を106・107の2つの土坑に切られ、さらに流失もしているが、ほぼ正円形のプランになると推定される。遺存部分による軸長は6.2mを測る。緩めの角度で立ち上がる壁の高さは、最大で48cmほどである。壁際には、比較的浅くて幅の狭い周溝が巡っている。覆土は、最下層に焼土や炭を多く含む黒褐色土があり、その上に炭・焼土・ローム粒を少量含む暗褐色土、その上にローム粒を含む暗褐色土、そして最上層にしまりのない暗褐色土が堆積していた。床面には、炭化材や焼土が散在していた。検出されたピットは、いずれも径は20cm前後のものであるが、南側の2個は深さ70cmを測り、柱穴とみられる。残りは深さ20cm～30cmである。東側に位置するものは、梯子穴の可能性がある。炉は、中央部西寄りに検出された。

遺物：2点のみ実測可能であった。1は壺で、外面は縦方向のミガキで仕上げられ、無文である。器面は若干磨滅しているが、遺存部分はほとんど壊れていない。上部割れ口はやや磨耗している。2は甕で、輪積み痕を段状に残し、その上に布巻棒状工具による押捺を施す。内面の方がやや粗いものの、内外面ともに横方向にミガキが施されている。外面の、輪積み痕より上の部分は赤彩されている。



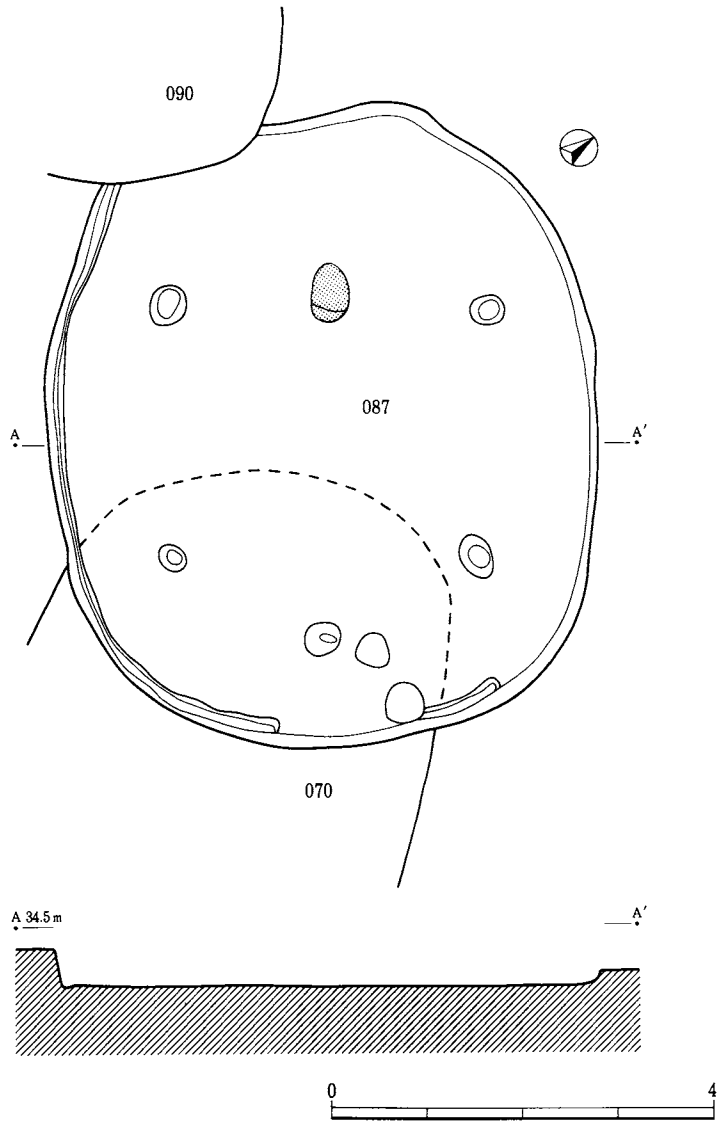
第104図　085号実測図・出土土器

087号（第105・106図、図版23）

遺構：5C-44・45グリッド等に位置する。

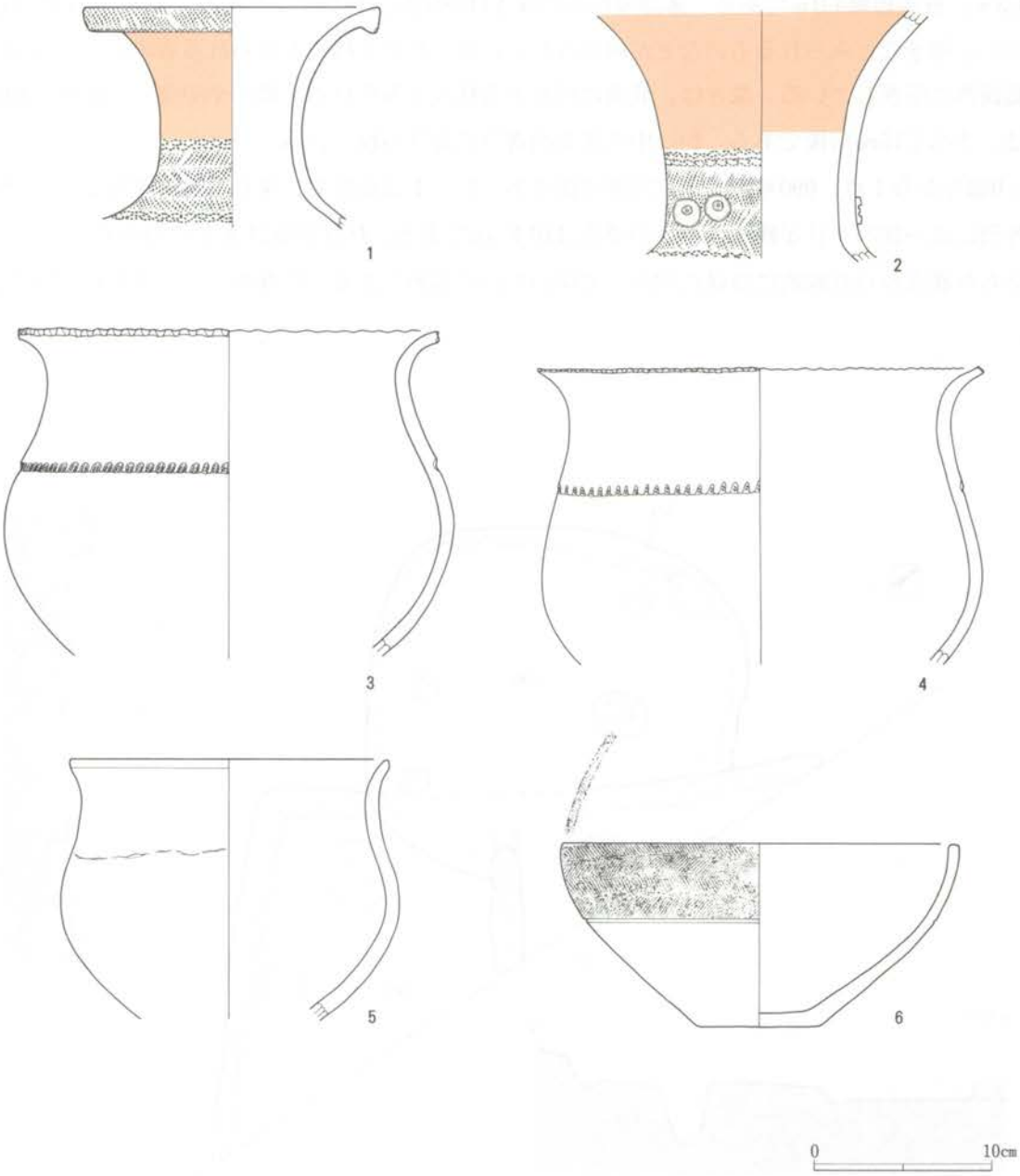
西側で090号と、南側で071号と重複するが、いずれもこの遺構より新しい。

楕円形のプランで、規模は、長径6.7ｍ、短径5.9ｍを測る。主軸方位は、N-49°-Wである。壁の高さは最大で40cmである。遺構北半分の壁際に、一部途切れるものの周溝が巡っている。ピットは5個検出されているが、規則的に配列され、それぞれ柱穴4個と梯子穴1個と推定される。柱穴とみられるピットはいずれも深さ70cm前後を測るものであり、梯子穴と推定されるものは、深さ10cm程度である。炉は中央部北西寄りに設けられており、その南東側の壁には粘土が貼られていた。



第105図　087号実測図

遺物：8点実測可能であった。1・2は壺である。1は口縁部に斜縄文が施され、その下端部には布巻棒状工具による押捺が比較的狭い間隔で施される。頸部の羽状縄文は網目状撚糸文によって区切られる。2の羽状縄文は、3段のS字状結節文によって区画される。文様帯の上には竹管状工具の端部が押捺された円形付文が、2個1組として4単位貼付されている。割れ口の上端部・下端部ともにかなり磨耗しており、また外面の1/3ほどは器面がひどく磨滅している。3～5は甕である。3の口縁は上下から交互に棒状工具で押捺が施される。胴部の輪積み痕部分には、布巻棒状工具による押捺の列が巡る。内面の下半が磨滅している。4の口縁は、指頭又は棒状工具で専ら上部から連続的に押捺しているようである。胴部上半の輪積み痕部分にはハケ状工具による刺突が施されている。5は胴部上半に輪積み痕を残すが、概ねナデと粗いミガキによって磨り消されており、段状になっているのは部分的である。内面下半部は磨滅・剥落している。6は鉢で、口縁部の羽状縄文の下端部は、沈線によって区画される。口唇部にも縄文が施される。



第106図　087号出土土器

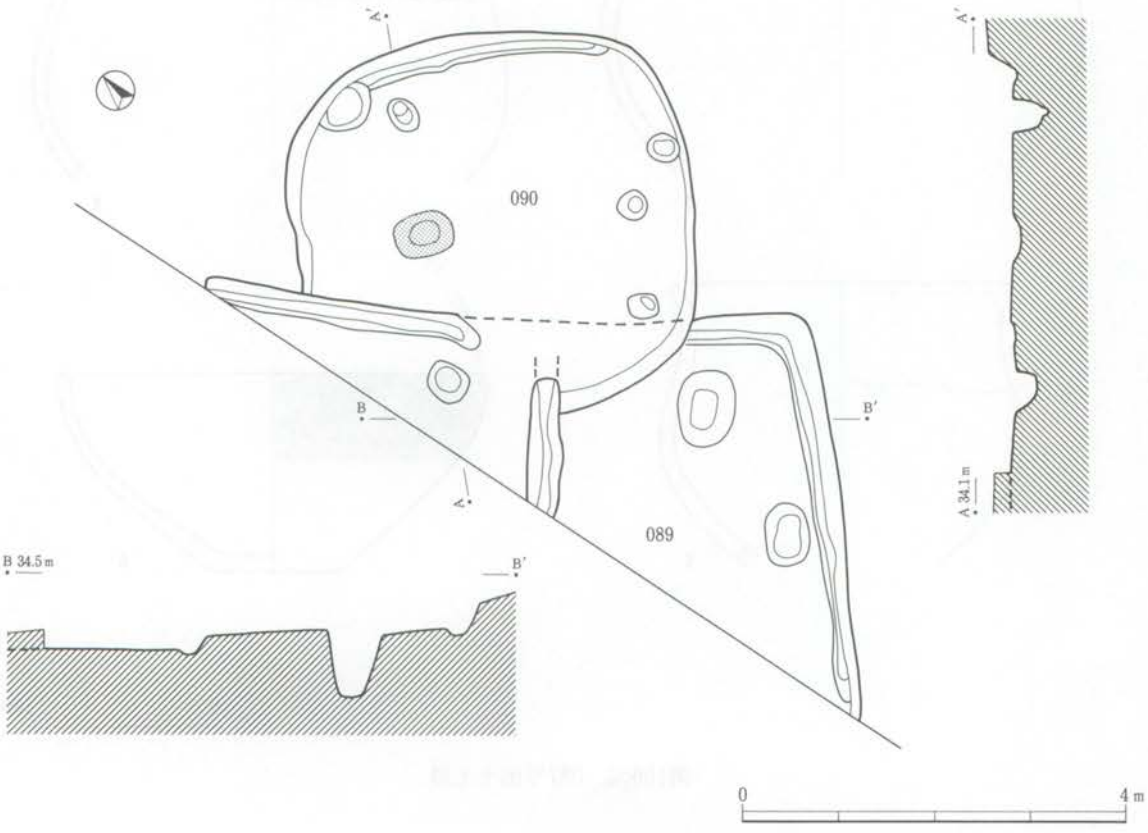
089・090号（第107図、図版24）

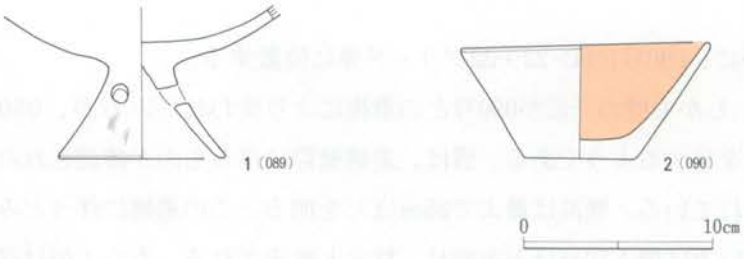
遺構：089号は5C-42・52グリッド等に、090号は5C-22・32グリッド等に位置する。

089号は大部分が調査区外にあり、しかも壁の一部が090号との重複により失われているが、090号より新しいと判断される。プランは方形を呈するようである。溝は、遺構壁際に巡るものが確認されたほか、仕切り溝と考えられるものも検出されている。壁高は最大で25cmほどを測る。この遺構に伴うとみられるピットは南東部の2個で、径の大きい方は深さ70cmほどを測り、柱穴と推定される。もう1個は深さ30cmほどである。炉等は検出されなかった。

090号は隅丸方形ないし楕円形を呈するようである。北東側の壁際に周溝が検出されている。規模は、長軸4.3ｍ、推定短軸4.0ｍである。確認面からの深さは089号とほぼ同じである。ピットは柱穴とみられるものと、梯子穴とみられるものなどが検出されている。ただし柱穴とみられるもののうち１個は、089号の範囲内に所在している。深さは、北側に所在する柱穴とみられる２個がやや深く、30cm～40cmを測るほかは、すべて15cm前後である。炉は中央部北西寄りに設けられている。

遺物：089号から１点、090号から１点実測可能であった。１は高杯で、穿孔は対面するように２か所ある。脚部外面には一部ハケ目が残る。ハケの単位は10本/cmである。杯部内面は著しく剥落している。２は鉢で、平らな底面から直線的に口縁に向かって開いていく器形である。内外面ともミガキ仕上げで、無文である。





第107図　089・090号実測図・出土土器

091・094・096・098号（第108図、図版24・25）

遺構：091号は5C-01・11グリッド等に、094号は4C-80・90グリッド等に、096号は4C-70・71グリッド等に、098号は4C-81・91グリッド等に位置している。調査区境界線間際で、幾つもの遺構が重複しているため、それぞれの新旧関係やプランなどを詳細に把握することは困難である。

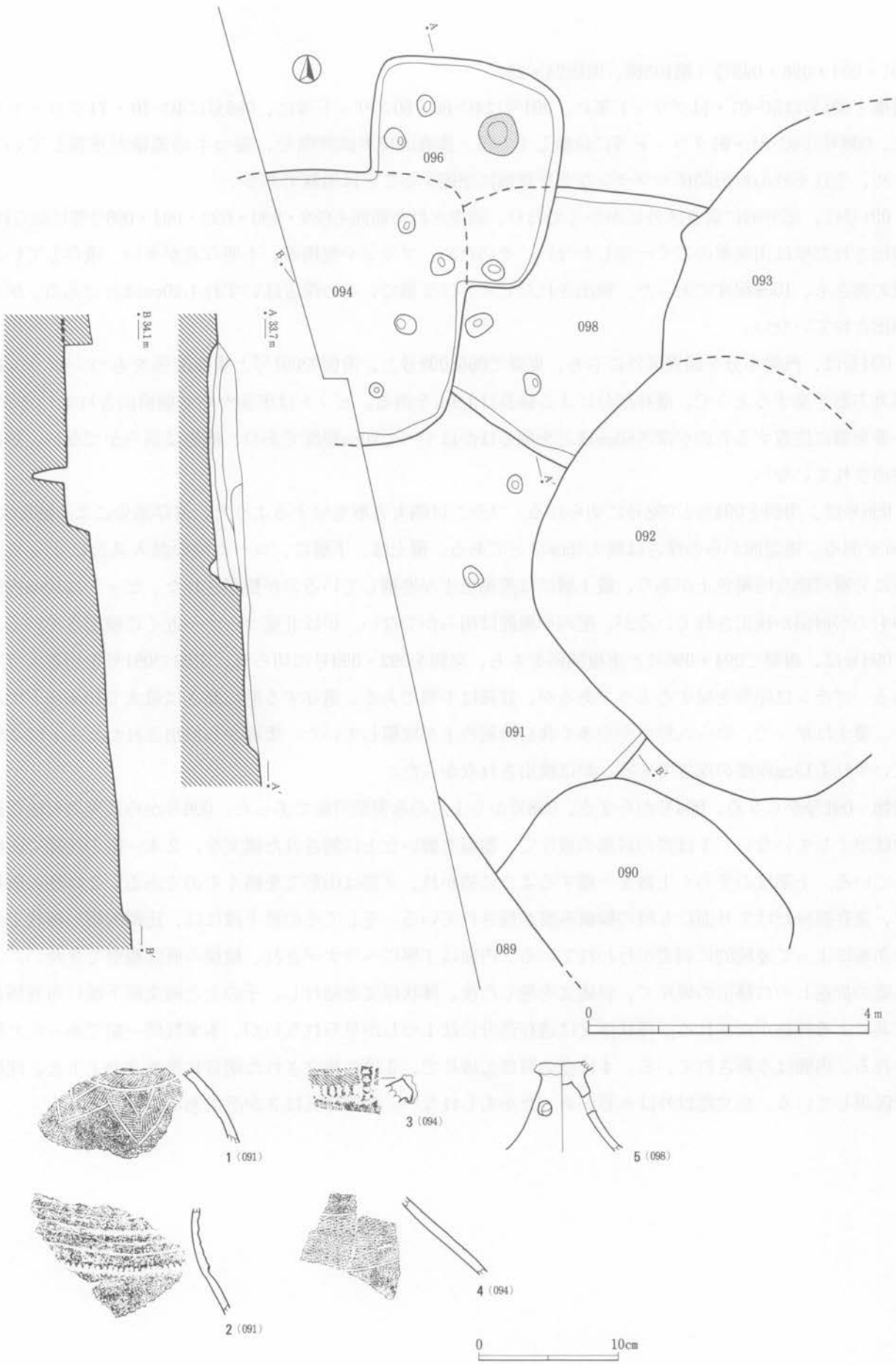
091号は、部分的に調査区外にかかっており、調査された範囲も089・090・092・094・098号等に切られ、検出された壁は南東部のごく一部しかない。そのため、プランや規模等、不明な点が多い。遺存していた壁の高さも、10cm程度であった。検出されたピットは2個で、その深さはいずれも20cmほどである。炉は検出されていない。

094号は、西側半分を調査区外にもち、東側で096・098号と、南側で091号と重複関係をもつ。プランは隅丸方形を呈するようで、遺存部分による軸長は3.9mを測る。ピットは床面から4個検出されているが、一番南側に位置するものが深さ50cmほどを測るほかはすべて20cm程度であり、機能は明らかでない。炉は検出されていない。

096号は、南側を094号と098号に切られる。プランは隅丸方形を呈するようで、遺存部分による軸長は3.2mを測る。確認面からの深さは最大45cmほどである。覆土は、下層に、ローム粒の混入具合によって2層に分層可能な暗褐色土があり、最上層には黒褐色土が堆積しているのが観察された。ピットは10cm内外のものが何個か検出されているが、配列や機能は明らかでない。炉は北東コーナー近くに検出さている。

098号は、西側で094・096号と重複関係をもち、東側を092・093号に切られ、南側で091号を切るようである。プランは卵形を呈するようであるが、詳細は不明である。遺存する壁に高さは最大で10cmほどである。覆土は単一で、ローム粒をやや多く含む暗褐色土が堆積していた。床面から検出されたピットは2個でいずれも15cm程度の深さである。炉は検出されなかった。

遺物：091号から2点、094号から2点、098号から1点のみ実測可能であった。096号からは実測可能な遺物は出土していない。1は壺の肩部の破片で、器面を磨いた上に施された縄文を、2本一組の沈線で区画している。上部はおそらく土器を一周するように描かれ、下部は山形文を描くものである。2は甕の破片で、遺存部分だけで外面に5段の輪積み痕が残されている。そしてその最下段には、比較的細い棒状工具の先端によって連続的に刺突が行われている。内面は丁寧にヘラナデされ、輪積み痕は観察できない。3は壺の折返しの口縁部の破片で、斜縄文を施した後、棒状浮文を貼付し、その上と縄文部下端に布巻棒状工具による押捺がなされる。棒状浮文は遺存部分には1つしか見られないが、本来数個一組であったと思われる。内面は赤彩されている。4は壺の肩部の破片で、3段に施文された網目状撚糸文の上下を、沈線で区画している。施文部以外は赤彩があったかもしれない。5の穿孔は3か所である。



第108図　091・094・096・098号実測図・出土土器

092・093・099号（第109・110図、図版24・25）

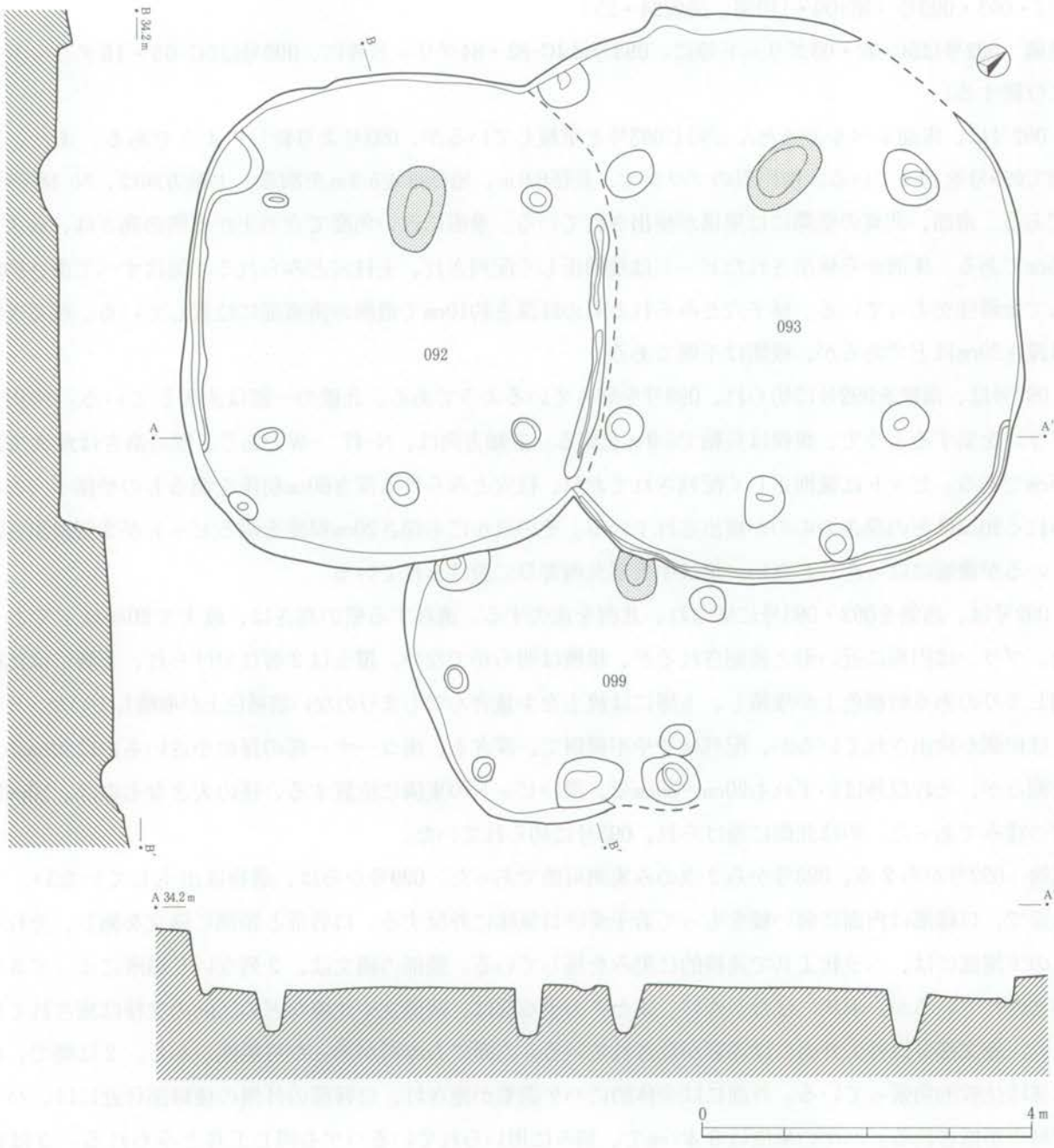
遺構：092号は5C-02・03グリッド等に、093号は4C-83・84グリッド等に、099号は5C-05・15グリッド等に位置する。

092号は、床面レベルのほとんど同じ093号と重複しているが、093号より新しいようである。また、東側で099号を切っている。楕円形のプランで、長径6.0ｍ、短径推定5.3ｍを測る。主軸方向は、N-48°-Wである。南西、北東の壁際には周溝が検出されている。垂直に近い角度で立ち上がる壁の高さは、最大で65cmである。床面から検出されたピットは規則正しく配列され、主柱穴とみられる4個はすべて深さ約50cmで企画性をもっている。梯子穴とみられるものは深さ約10cmで遺構の南東部に位置している。残る1個は深さ20cmほどであるが、機能は不明である。

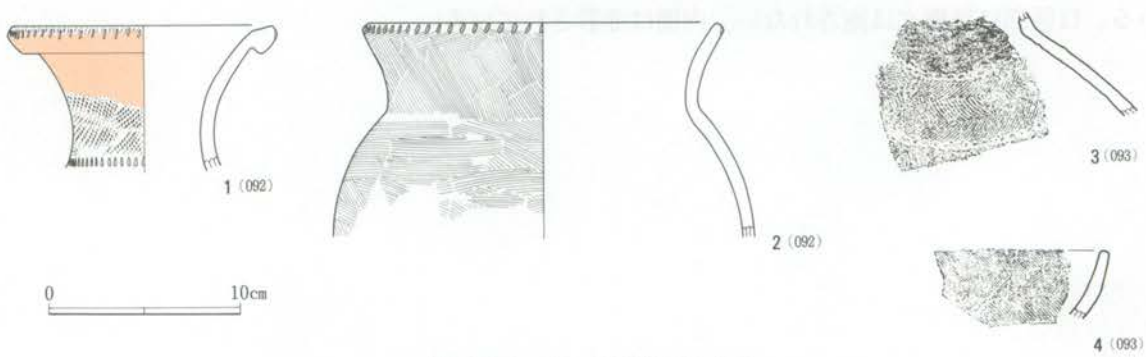
093号は、南側を092号に切られ、099号を切っているようである。北壁の一部は流失している。楕円形プランを呈するようで、規模は長軸で6.9ｍを測る。主軸方向は、N-47°-Wである。壁の高さは最大で約35cmである。ピットは規則正しく配列されており、柱穴とみられる深さ60cm前後を測るものや梯子穴とみられる20cmほどの深さのものが検出されている。そのほかにも深さ20cm程度を測るピットが2個検出されているが機能ははっきりしない。炉は中央部北西寄りに設けられている。

099号は、西側を092・093号に切られ、北側を流失する。遺存する壁の高さは、最大で20cmほどであった。プランは円形に近い形と推測されるが、規模は明らかでない。覆土は2層に分けられ、下層には比較的しまりのある暗褐色土が堆積し、上層には焼土を少量含んでしまりのない暗褐色土が堆積していた。ピットは何個か検出されているが、配列はやや不規則で、深さも、南コーナー部の径の小さいものは50cmほどを測るが、それ以外はいずれも20cm～30cmで、深いピットの東隣に位置する、径の大きなものは、10cmほどの窪みであった。炉は北側に設けられ、093号に切られていた。

遺物：092号から2点、093号から2点のみ実測可能であった。099号からは、遺物は出土していない。1は壺で、口縁部は内面に弱い稜をもって若干受け口気味に外反する。口唇部と頸部に縄文を施し、それぞれの下端部には、ヘラ状工具で連続的に刻みを施している。頸部の縄文は、2列ないし場所によって3列施文されているが、羽状にはならない。またその上端部は、結節文や沈線などの区画の文様は施されていない。施文部分以外の外面には赤彩がなされている。内面にも赤彩があった可能性がある。2は甕で、口唇部は比較的角張っている。外面には全体的にハケ調整が施され、口唇部の外側の稜線部付近には、ハケで刻みが施される。ハケの単位は8本/cmで、刻みに用いられているハケも同じ工具とみられる。3は壺の肩部の破片で、羽状の縄文部の上下端部にＳ字状結節文が2段ずつ見られる。施文部以外は赤彩されていた可能性がある。内面は著しく剥落している。4は鉢の口縁部の破片と考えられる。羽状の縄文が施されている。口唇部には縄文は施されない。内面は赤彩されている。



第109図　092・093・099号実測図



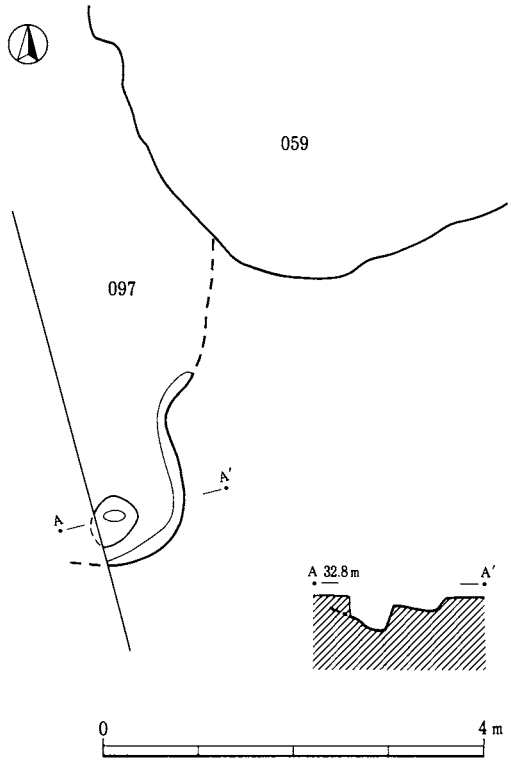
第110図　092・093号出土土器

097号（第111図、図版18）

遺構：4B-48・58グリッド等に位置する。

西側のほとんどを調査区外に有し、北側を流失、さらに059号と重複関係をもつとみられ、遺存部分はわずかな壁とピットが1個のみである。プランは明らかでない。壁高は最大で10cmほどである。ピットの深さは20cmほどであるが、機能は不明である。炉は検出されなかったが、ピットの北側床面に焼土の分布があり、炉の痕跡と考えることもできる。

遺物：出土していない。



第111図　097号実測図

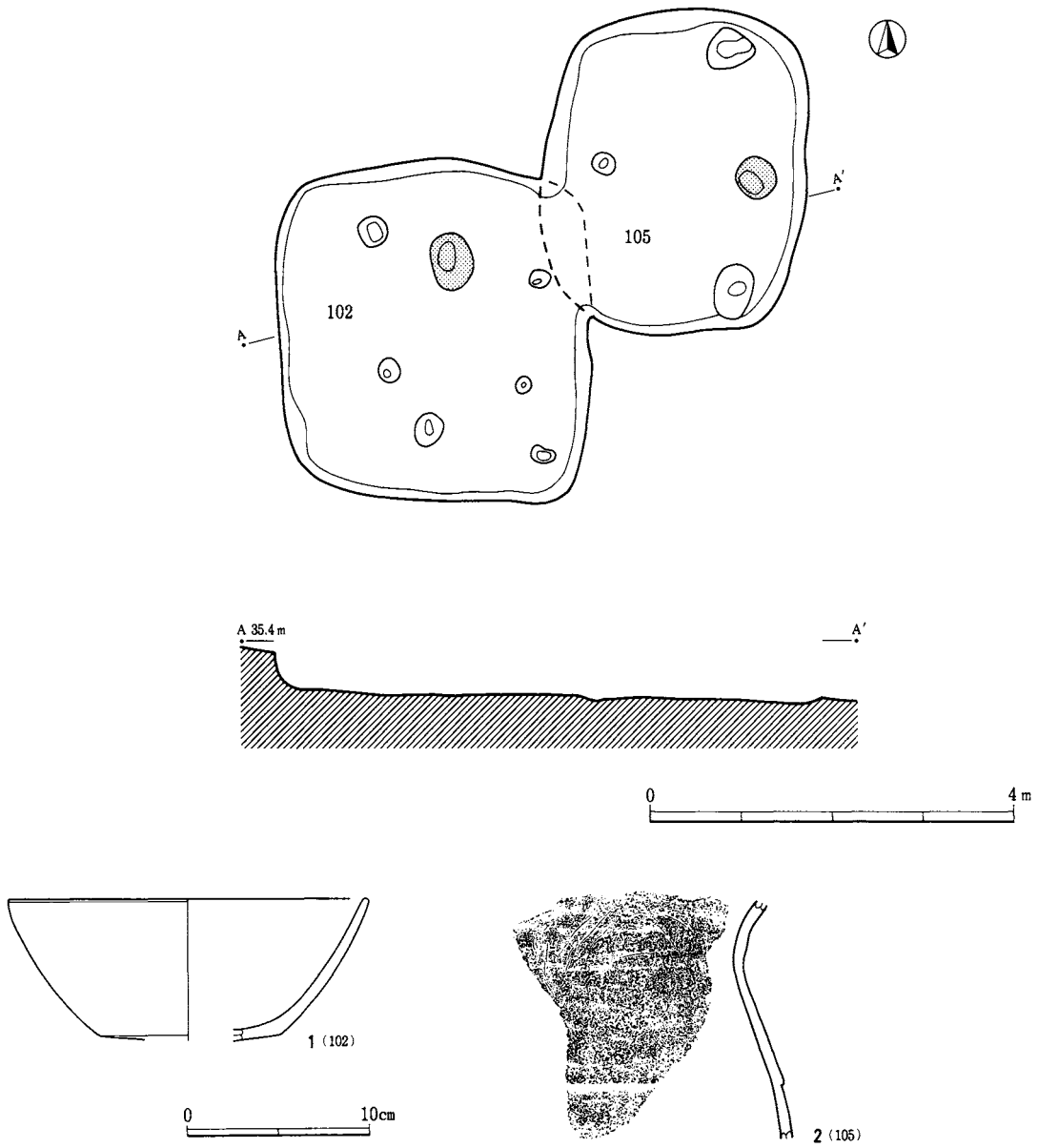
102・105号（第112図、図版26）

遺構：102号は2B-15・25グリッド等に、105号は2B-06・16グリッド等に位置する。いずれも1号墳墳丘下から検出された。

102号は、北東コーナー部で重複する105号と床面レベルはほぼ同一であるが、105号より古いようである。また、南西コーナー部で083号・100号とも重複関係をもつが、これらよりも新しいとみられる。プランは隅丸正方形を呈している。軸長は約3.6mを測る。壁高は最大で35cmほどである。覆土は、まず壁際に、壁が崩れたものとみられる層が堆積しており、その上にいずれも暗褐色の3つの土層が堆積していた。そのうち最下層には、焼土粒や炭化物が少量含まれていた。ピットはやや不規則な配置で6個検出されている。いずれも深さ10cm内外である。炉は中央部北寄りに設けられている。

105号は南西コーナー部を欠くが、隅丸方形のプランと考えられる。規模は、長軸3.6ｍ、短軸2.9ｍを測る。壁高は最大で20cmほどである。覆土はいずれも暗褐色土の３層に分層できた。検出されたピットは３個で、東側の径の大きな２個は深さ約35cmを測り、残りの１個は10cm程度である。炉は東側に設けられている。

遺物：102号と105号とで１点ずつ実測可能であった。１は杯部下端に稜をもつ高杯と考えられる。内外面とも丁寧なナデ調整によって仕上げられている。２は甕の破片で、遺存部分の外面は全面的にミガキ仕上げで無文である。遺存部分下部には、輪積み痕が段状に残されている。内面は丁寧にヘラナデされ、輪積み痕は観察できない。外面は遺存部全体にわたって赤彩されていたようである。なお、上部割れ口は磨耗している。



第112図　102・105号実測図・出土土器

第4節　土坑と出土遺物

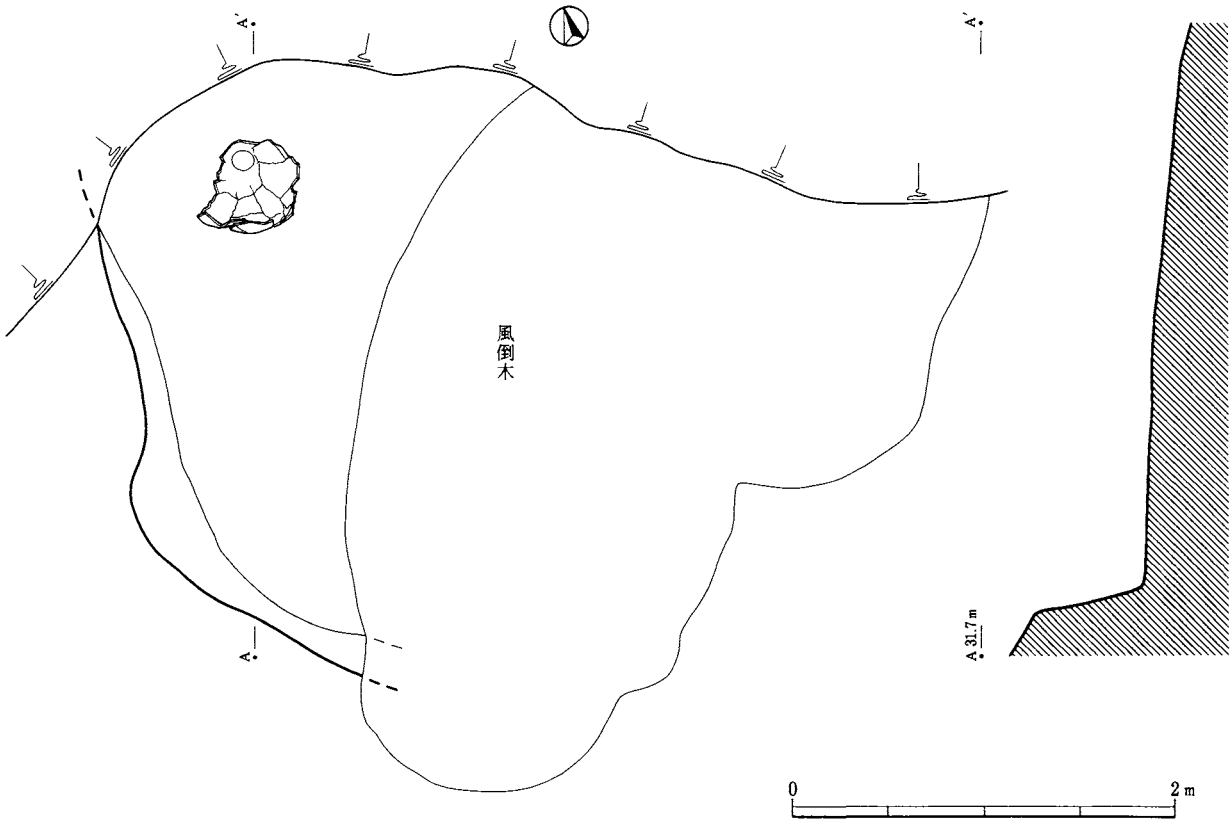
土坑は9基検出されている。1基を除いて、いずれも時期や機能は不明である。なお、何基も重複していると考えられるものや、「竪穴状遺構」として調査されたものも含まれる。

086号（第113・114図、図版23）

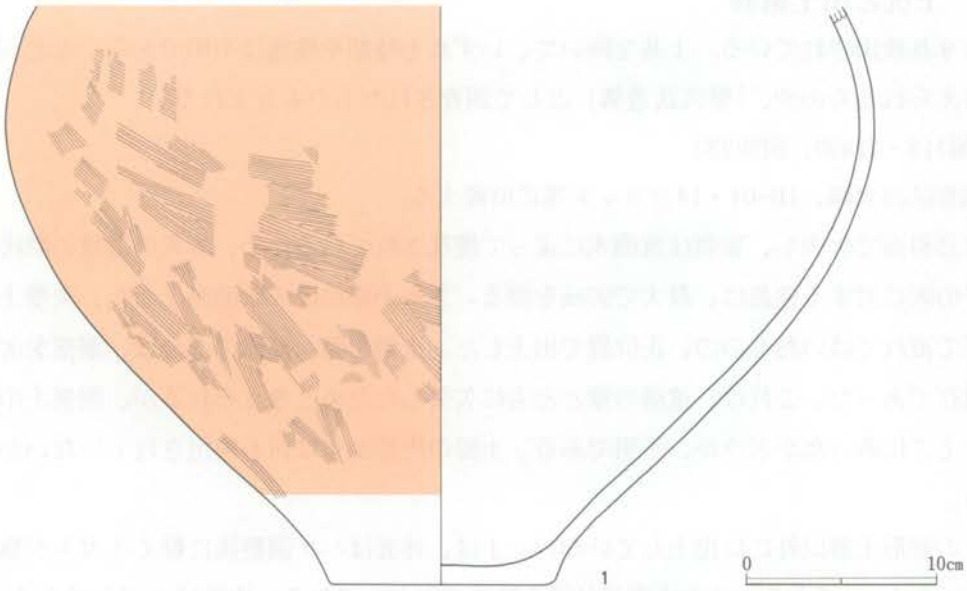
遺構：調査区の北端、1B-04・14グリッド等に位置する。

北側は急斜面で欠失し、東側は風倒木によって攪乱されているため、本来の遺構の形状は不明であるが、ほぼ水平の床に対する壁高は、最大で90cmを測る。急斜面際のほぼ床面直上から、大型土器の下半部が、若干土圧で潰れてはいたものの、正位置で出土した。土器の斜面部側の部分は、胴部を欠損し、底部付近のみの遺存であった。これは、遺構の壁とともに欠失したためと考えられるが、胴部上半以上についてはもともとそこにあったかどうか、不明である。土器の内部からは何も検出されていないが、壺棺墓の可能性がある。

遺物：1の壺形土器以外には出土していない。1は、外面はハケ調整後に軽くミガキが施されている。ハケの単位は8本/cmである。その後底部付近を除き赤彩がなされる。内面はミガキである。内面の底部は大きく剥落している。



第113図　086号実測図



第114図　086号出土土器

018号（第115図、図版11）

017号の東隣、5E-49・59グリッドに位置する。プランは不整楕円形を呈し、東側にごく緩い段をもつ。規模は、上端で長径2.0ｍ、短径1.7ｍを測る。底面はほとんど平坦にならない。確認面からの深さは、最も深いところで60cmである。覆土は３層に分けられ最上層に黒褐色土、下層はローム粒の混入具合によって２層に分層可能な暗褐色土であった。

遺物は出土していない。

026号（第115図、図版12）

4E-89・99グリッド等に位置する。欠失している025号の北壁付近に隣接しており、あるいは重複関係をもっていたかもしれない。上端形は不整長方形とでもいうべきものだが、下端形をみると幾つかの土坑が複雑に切り合ったものである可能性もある。いずれにしても、上端形による規模は長軸3.4ｍ、短軸1.5ｍほどを測る。確認面からの深さは最も深いところで約60cmである。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

027号（第115図、図版12）

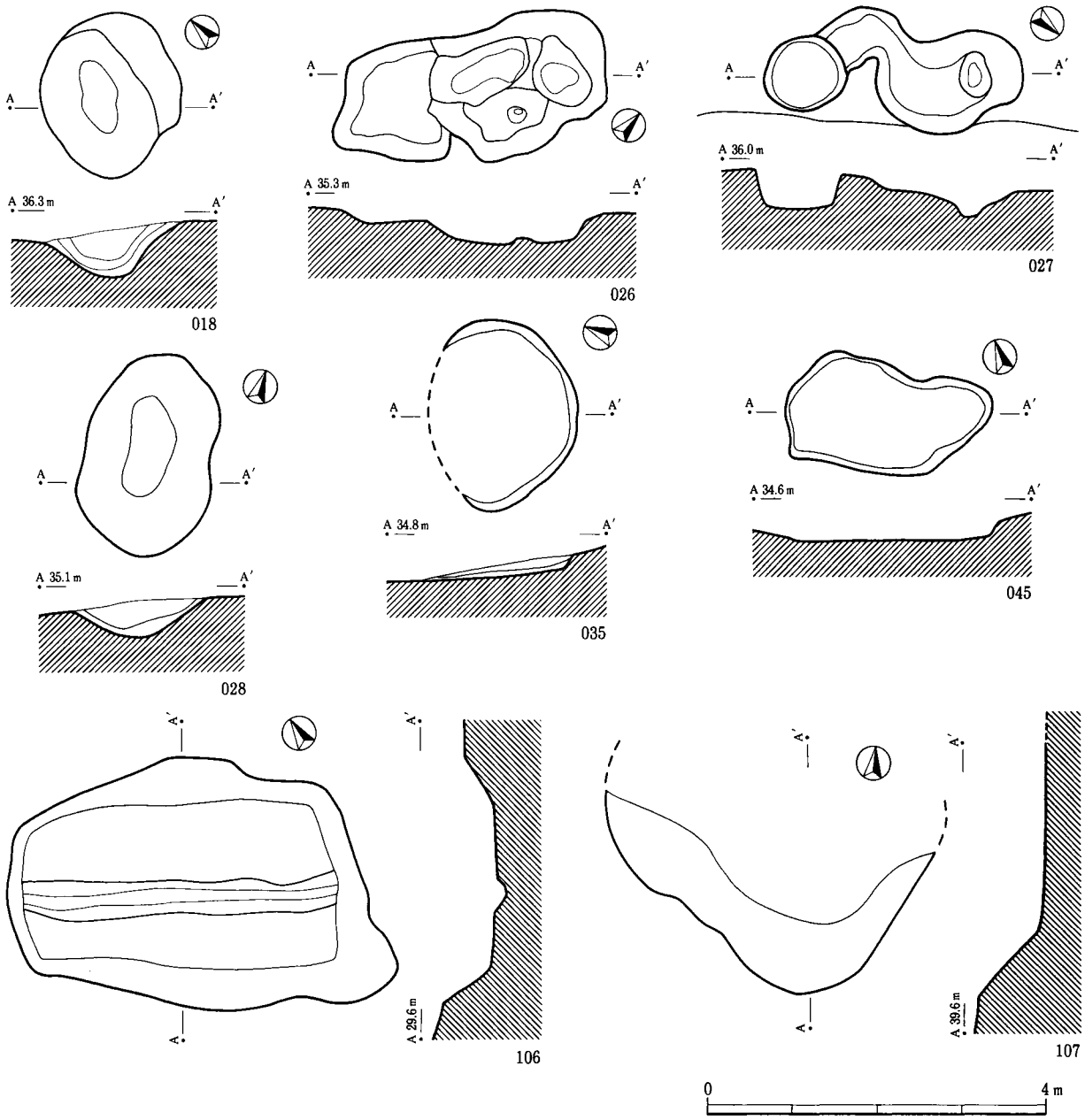
4F-92・5F-02グリッド等に位置する。025号の東側で、調査区の境界線間際である。上端形は、逆Ｓ字状に蛇行する溝のようなものであるが、北端部に底面の平坦な部分があり、この部分は円形土坑として独立したものと見なすべきかもしれない。確認面からの深さは、北側で46cm、南側で35cmを測る。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

028号（第115図、図版13）

4F-60・70グリッド等に位置する。029号の東、030号の南に近接しており、東側は調査区の境界線間際である。やや不整な楕円形を呈し、底面もほとんど平坦にならない。長径2.8ｍ、短径1.5ｍ、最大の深さ54cmを測る。覆土は２層に分けられ、暗褐色土、黒褐色土の順で堆積しているのが観察された。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。



第115図　018・026・027・028・035・045・106・107号実測図

035号（第115図、図版13）

5E-01・11グリッド等に位置する。発掘時には、「竪穴状遺構」として調査されたものであるが、検討の結果、土坑としてここに掲載することとした。032・036号の南側に隣接している。北側を流失しているが、上端復元形は楕円形状を呈し、長径2.2ｍ、短径推定1.8ｍである。底面は平坦であり、最大で17cmの壁をもっている。覆土は２層の暗褐色土で、上層にはローム粒が多く含まれていた。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

045号（第115図、図版14）

5D-08・18グリッド等に位置する。035号同様、発掘時には「竪穴状遺構」と認識されていたものである。033号の北隣、036号の西隣で、これらに挟まれるように所在している。不整形を呈しているが、長軸

2.4ｍ、短軸1.2ｍを測る。底面はほぼ平坦で、高さ10cm程度の壁をもっている。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

106号（第115図）

調査区の最北端、1C-12・13グリッド等に位置している。南側は085号を切る。ほぼ長方形に近い形を呈しており、長軸は4.4ｍ、短軸は3.0ｍを測る。ほぼ平坦な底面の中央には、幅40cm、深さ８cmほどの溝が、長軸方向に設けられている。壁の高さは最大で72cmを測る。

遺物は全く出土していない。

107号（第115図）

1C-00・01グリッド等に位置している。106号の西隣で、106号同様に、南側で085号を切っている。ただし、北側は急斜面で壁等を検出できなかった。プランは、遺存部分が不整形を呈しており、明らかではない。底面はほぼ平坦となり、最大78cmの壁をもっている。

遺物は全く出土していない。

第５節　溝状遺構と出土遺物

溝状遺構は10条検出された。位置的には調査区の南半に偏っており、長軸方向は、斜面に対して直交するもの、平行にあるものなどが多いが、いずれも機能は明らかでない。

001号（第116図）

調査区の南東端に位置する。北東部は調査区外となるが、検出された溝状遺構中で最も規模の大きなものである。南端部でやや方向を変えているが、斜面に対して概ね平行である。検出部分における長さは20.8ｍ、幅は3.5ｍ、確認面からの深さは最大で約60cmである。覆土はローム粒の混入具合で４層に分層可能な暗褐色土であった。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

002号（第116図）

調査区の最南西端に位置し、西側は調査区外となる。東側で約90°南に折れるが、長さは、東西方向の部分で8.0ｍ、南北方向の部分で4.5ｍを測る。幅は平均的なところで2.0ｍほどである。深さは、東西方向に伸びるところで最大約40cm、南北方向のところで約20cmである。覆土は、ローム粒を多く含む暗褐色土が最下層に堆積しており、その上に、これよりローム粒の少ない暗褐色土が壁沿いに堆積、そしてその上に、やはりロームの混入具合によって２層に分層可能な黒褐色土が堆積していた。なおこの遺構は、発掘時は「方形周溝墓」として調査されたが、疑問の余地もあるため、ここでは溝状遺構とした。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

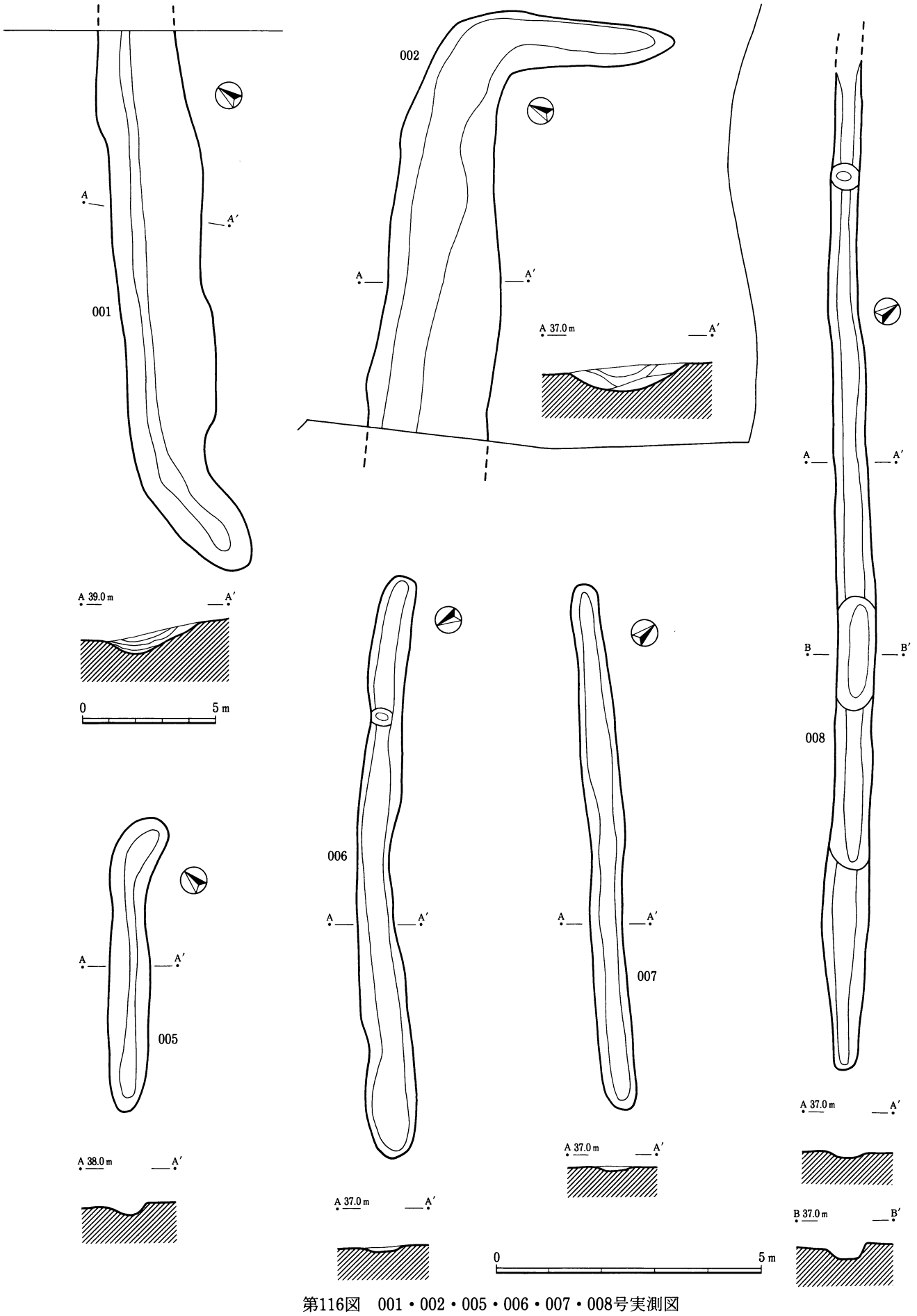
005号（第116図）

調査区の南東端、001号の西隣に、001号とほぼ同じ長軸方向で所在している。長さ約5.5ｍ、幅約0.7ｍ、深さ約25cmで完結している。

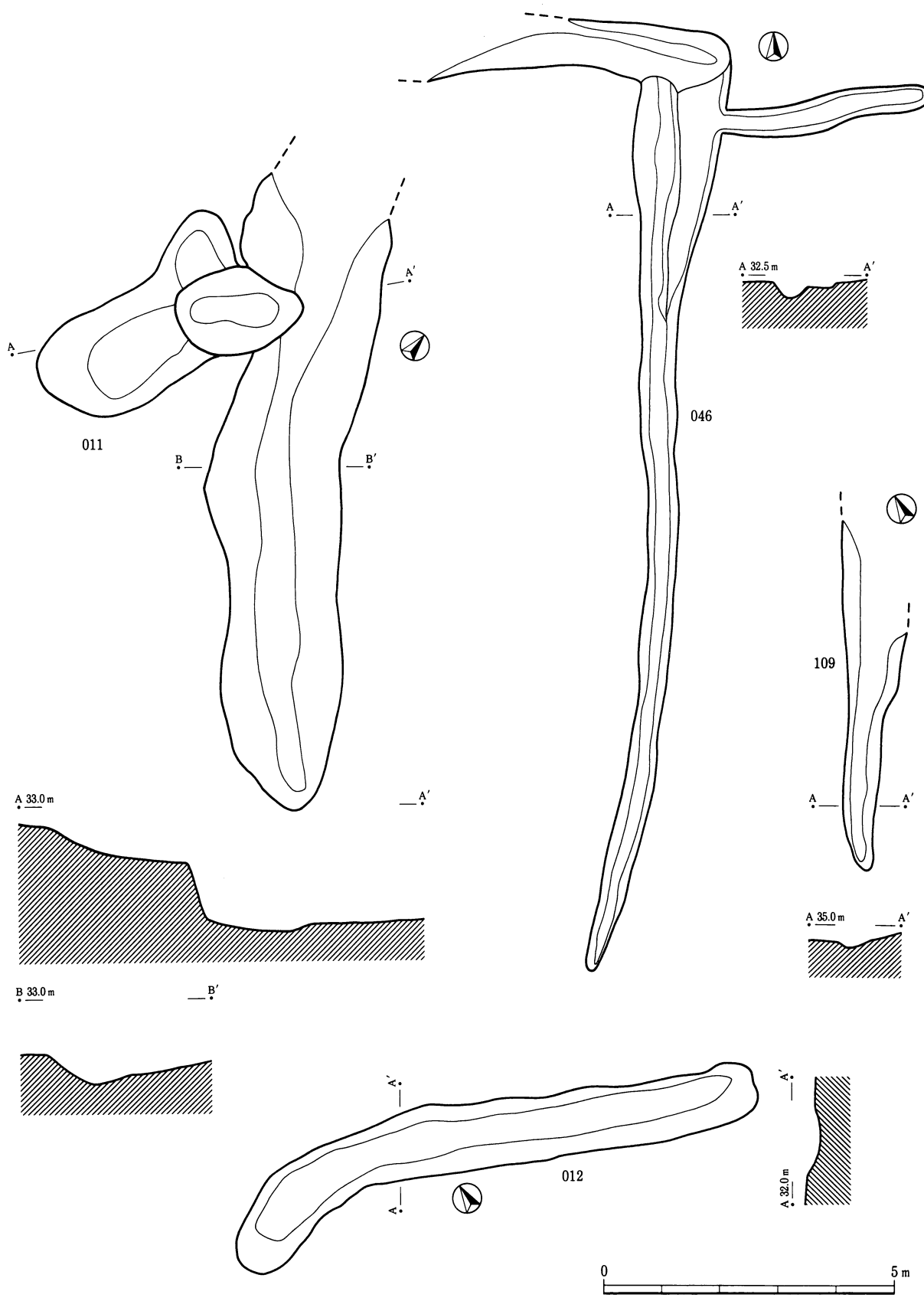
遺物は出土していない。

006号（第116図）

調査区南端やや東寄りで、検出されている。主軸方向は007・008号などとほぼ同じで、斜面に対して直交するような形である。長さ約11.0ｍ、幅約0.6ｍ、深さ約8cmで完結している。覆土は単一で、暗褐色土



第116図　001・002・005・006・007・008号実測図



第117図　011・012・046・109号実測図

であった。中央より南東部の底面に、深さ44cmの落込みが検出されている。

出土した遺物は、鉄釘（第120図２）１点と、時期決定の困難な小片のみである。

007号（第116図）

調査区南端西寄りで検出された。西隣の008号とはほとんど平行で、斜面に対してほぼ直交する。長さ約10ｍ、幅約0.6ｍ、深さ8cm程度で、完結している。覆土は単一で、暗褐色土であった。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

008号（第116図）

調査区南西端部で検出されているが、北端部は確認されない。007号と長軸方向や幅をほぼ等しくしているが、長さは遺存部分だけでもその倍近くあり、また、底面に段や落込みが認められている。遺存する長さは約19ｍ、幅約0.6ｍを測る。確認面からの深さは南から、端部付近で10cm、一段下がったところで13cm、最も窪んだところで23cm、一段上がって７cm、穴状の落込みで20cm、さらに上がって5cmを測る。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

011号（第117図）

4Eグリッドの急斜面部に所在する。基本的に斜面と直交するように構築されているようであるが、南西向きに枝分かれしている部分は、あるいは幾つかの土坑等が切り合っているのかもしれない。北端部は流失していて確認できなかった。遺存する部分の長さは10.5ｍ、幅は2.3ｍ、深さは平均50cmほどである。

遺物は全く出土していない。

012号（第117図）

011号の西隣、4Dグリッドで検出された。斜面に対してほぼ平行である。長さは約9.4ｍ、幅は約1.1ｍ、深さは25cmほどを測る。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

046号（第117図）

4Dグリッドに主に位置している。概ね南北方向に長く伸びているが、急斜面にかかる北端部で底面に段を生じ、T字形に分岐している。そして東方向へは3.7ｍほど行ったところで完結しているが、西方向の端部は流失していて不明である。南北方向の長さは16.2ｍ、幅は0.5ｍ～1.5ｍを測り、その南端部では043・044号などを切っている。深さは南へ行くほど浅くなり、北部で約20cm、南部で約10cmである。

土師器の小片が数点出土したが、いずれも時期決定は困難である。

109号（第117図）

5C・5Dグリッドに所在し、054・066・072号を切っているが、それらの遺構と重複している部分のみの遺存であり、北端部は検出されていない。遺存する長さは6.0ｍ、幅は0.6ｍ～1.0ｍ、深さは10cm程度を測る。046号と繋がっていた可能性もある。

遺物は出土していない。

第6節　遺構外出土遺物

1　土器

（1）縄文土器（第118図）

縄文時代の遺構は調査区内からは検出されていないが、縄文土器片が主に1号墳の墳丘部から出土している。ただし量はそれほど多くはなく、整理箱に1箱である。早期の土器が中心で、かなり器面が磨耗し、小さな破片が多い。ここでは27点を図示した。

早期前半撚糸文系土器（1～11）

1は口縁部端部から撚糸文が施文される。2の口唇部は面取りされている。撚糸文は口縁部端部から施される。3も口唇部端部から施文されており、撚糸の節は大粒である。4は器面の磨滅がかなり進行しており詳細は不明であるが、口唇部端部から撚糸文が施文されているようである。5の撚糸文の間隔は広く、節も大きめである。6は器面の磨耗が著しく、詳細不明である。7の撚糸文は、器面に比較的深くくい込んでいる。口唇部端部から施文されている。器壁は厚めである。10は底部に近い破片と思われる。撚糸文はかなり深く施文されている。11は器面が磨耗しているが、粒の大きめの撚糸文が施されているようである。

早期後半条痕文系土器(12～23)

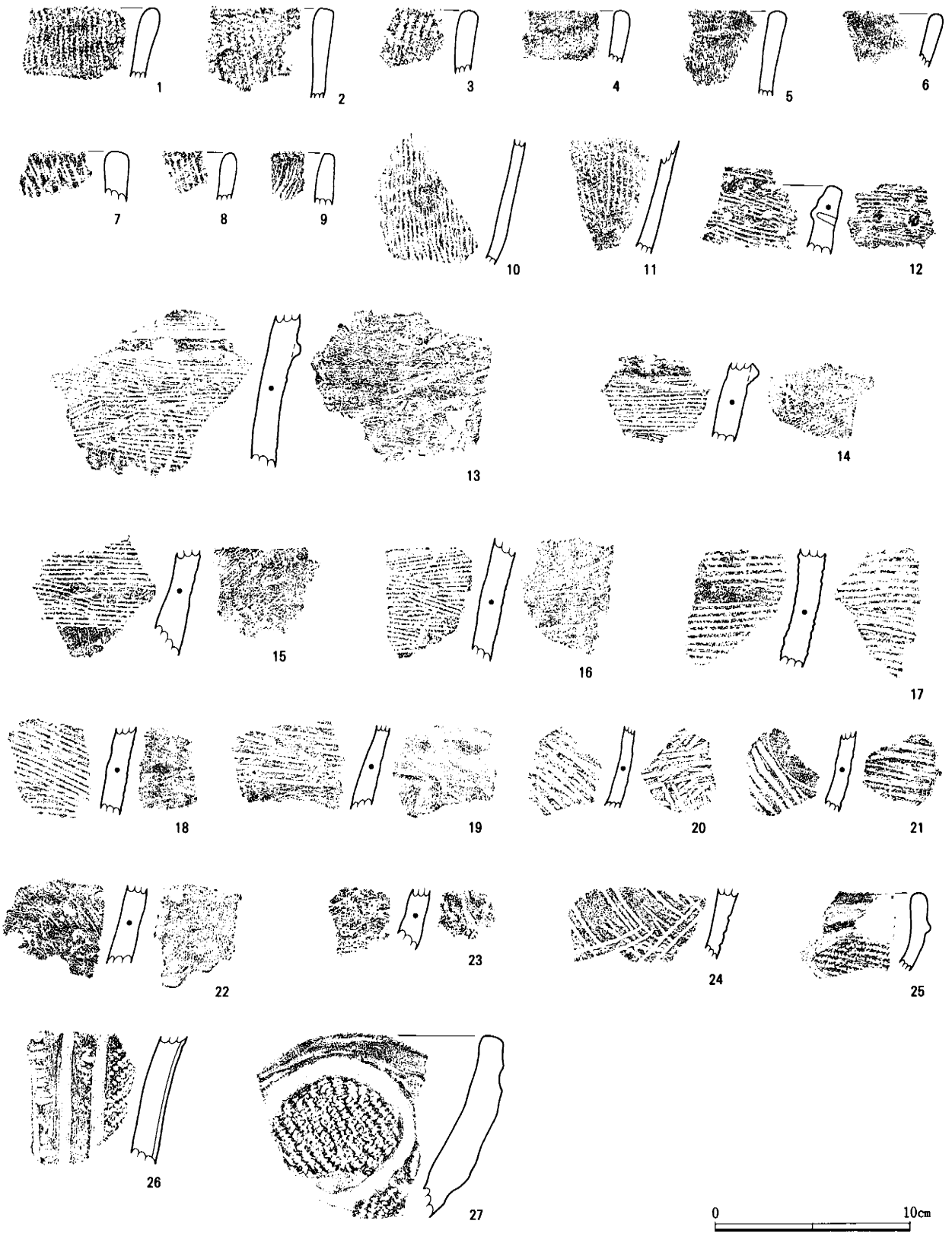
12は表裏とも条痕調整されており、面取りされている口唇部にも条痕文が施されている。その後未貫通の孔が遺存部に2か所、外面側から穿たれており、内面側にその部分が突出している。13の外面には横に隆帯が貼付され、条痕文が施される。内面には擦痕が見られる。14は13と同一個体であるかもしれない。隆帯上にも条痕文が見られる。15・16・18の内面は擦痕状の調整である。19の条痕調整は比較的器面の乾燥した段階で行われているかもしれない。22・23には擦痕状の調整が施される。

前期土器（24）

24の施文原体は、半裁竹管である。器面に対して深く鋭く施文されている。実測図上端は輪積み部で、擬口縁となっている。

中期土器（25～27）

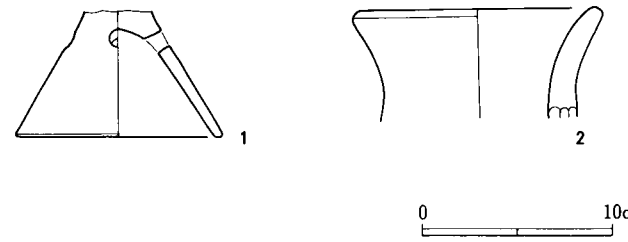
25の隆帯の両脇は、浅くなぞられている。縄文は沈線で区画されていたようで、その沈線もなぞり消されている。26は縄文施文後、少なくとも3本で1組の沈線を垂下させる。縄文は複節である。27は波状口縁となる。地文の縄文を指頭で区画する。施文部以外も指頭によるナデ調整によって仕上げられている。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

第118図　縄文土器

（2）土師器（第119図）

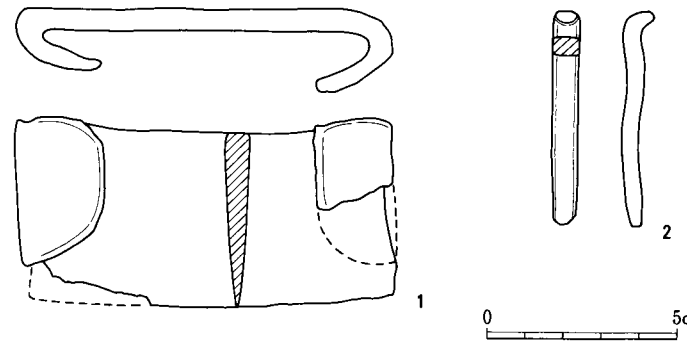
遺構外から出土した土師器は2点実測可能であった。1は高杯の脚部と考えられる。比較的上部に穿孔が4か所見られる。裾部は面取りしてある。外面が磨滅・剥落している。2の口唇部は一部欠損しているが、その部分も磨耗している。壺の口縁部と考えたが、全体がナデ調整よって仕上げられており、また器壁も厚くやや粗雑な印象である。



第119図　グリッド出土土器

2　金属製品（第120図）

1は鉄製鋤先で、6Dグリッドから出土した。一部破損しているが、刃部はほぼ直線状である。長さは4.5cm、刃幅は復元値で10cm、現存の重さは107.98gである。2は鉄釘で、先端を若干欠損している。006号溝から出土した。現存の長さは5.3cm、幅は6mm、重さは4.44gである。

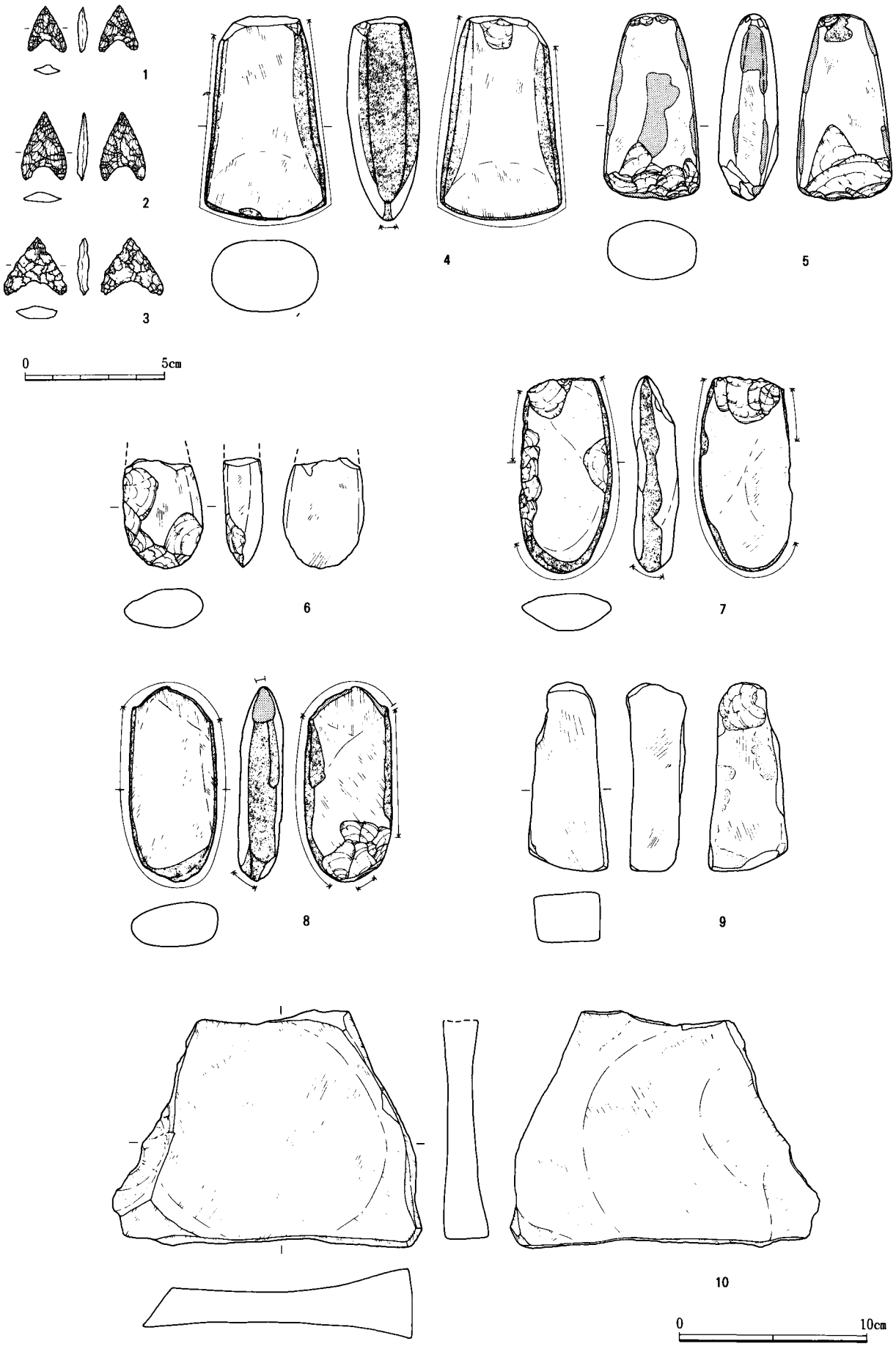


第120図　金属製品

3　石器（第121図）

すべて遺構覆土からの出土であるが、そのほとんどは遺構には伴わないと考えられる。

1～3はすべて黒曜石製の石鏃で、折損はない。1は094号から出土した。長さ1.8cm、厚さ0.4cm、重さ0.45gを測る。2は042号から出土した。長さ2.6cm、厚さ0.4cmである。3は1号墳墳丘中から出土した。長さ2.0cm、厚さ0.4cm、重さ1.03gである。4～6は磨製石斧である。4は側面と刃部に弱い敲打痕が観察される。長さは7.4cm、重さは492.90gを測る。5は側縁と中央部に擦痕のような細かいキズが観察される（実測図スクリーントーン部）。装着痕と思われる。刃縁は敲打・研磨によってやや平滑な面となっている。長さは6.8cm、243.15gを測る。6の基部は折損しており、現存の長さは3.8cm、重さは71.51gである。4は015号から、5は016A号から、6は1号墳墳丘中から出土している。7・8は敲石である。7は周縁に敲打痕がみられ、表面は良く擦れており、使い込まれている感がある。長さは7.0cm、重さは192.60gを測る。8も周縁部に敲打痕が観察される。長さは7.0cm、213.37gである。7は1号墳墳丘中から、8は087号から出土した。9は砥石である。全面的に擦痕が観察されるが、実測図裏面はあまり使用されていないようである。長さは6.8cm、168.82gである。016A号から出土した。10は石皿ないし砥石と考えられる。図正面の左側縁は古い折れ面である。この面と上面の折れ面以外には擦痕が見られる。長さ8.2cm、幅11.0cm、496.71gである。070号から出土した。



第121図　石　器

4　土製品（第122・123図）

1～37は管状土錘である。すべて1号墳又は墳丘下住居の079号からの出土である。遺構別に取り上げられた遺物ではあるが、レベル的には1号墳では主に旧表土面近くから、079号では覆土上層中から出土しており、両者で接合する例もみられることから、もともとは1か所にまとまっていたものと予想される。しかしながら、それが1号墳と079号といずれに伴うものであるかの判断が困難であるため、ここで一括して掲載することとする。なお、完形ないし完形に近く復元できたもののみここに図示したが、ほとんどが破損していて、修復を必要としなかったのは26～28の3点のみである。また、接合しない破片資料は、このほかに整理箱1箱分ある。出土した管状土錘は、長さには変異が見られるが、幅又は径、及び孔径にはそれほどバラつきは見られない。径は3.5cm内外、孔径は1.0cm内外におさまる。長さは長いもので10.3cm(1)、短いものでその約半分の4.4cm(34)を測る。重さは図示した中では1が最も重く、150.13gを測る。完形のもので最も軽かったのは28で、76.43gである。平均は110.54gである。

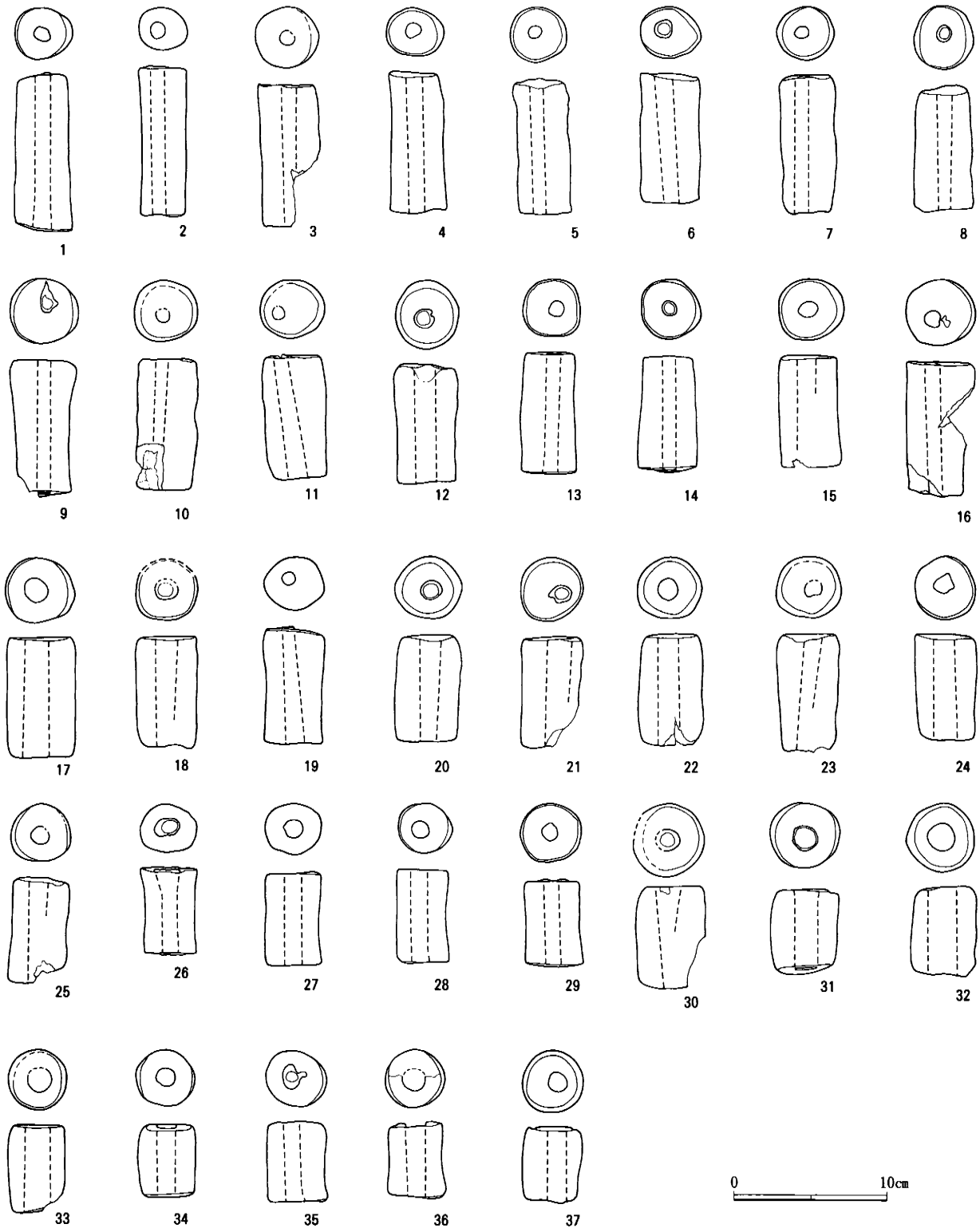
38は土製勾玉である。1号墳の墳丘下から出土した。丁寧に形作られ、穿孔は針のようなもので行われている。暗褐色を呈する。長さは2.3cm、幅・厚さは共に0.9cm、重さ2.25gを測る。39・41は土玉である。39は1号墳の墳丘中から、41は4Bグリッドからの出土である。39は、穿孔後、上下面を平らに削り取っている。径3.1cm×3.6cm、高さ3.1cm、孔径0.5cm、重さ43.67gを測る。41は上端部を一部欠損する。稜はほとんど見られないものの概ね算盤玉のような形状を呈しており、上端には水平方向の穿孔があったようである。表面は丁寧に磨かれ、全体に赤彩されている。径2.6cm、現存の高さ2.2cm、重さ14.05gを測る。40は、029号から出土している。正面形はほぼ正円形を呈し、断面形を見ると中央部ほど厚く、縁辺は鋭くなっている。全面的にナデ調整によって仕上げられ、完形であるが用途は不明である。径2.7cm×2.8cm、厚さ0.8cm、重さ5.55gを測る。

42は、033号の炉の北側に接して床面直上から出土した。幾つかの破片になっており、接合しても完形にならなかった。図の左側下端部と中央下半部に浅い窪みがあり、さらに右側上端部には削り取って設けたような、深めの窪みがある。そのほかは、曲面というよりは平坦面が幾つか切り合っているようである。支脚のようなものと考えられる。

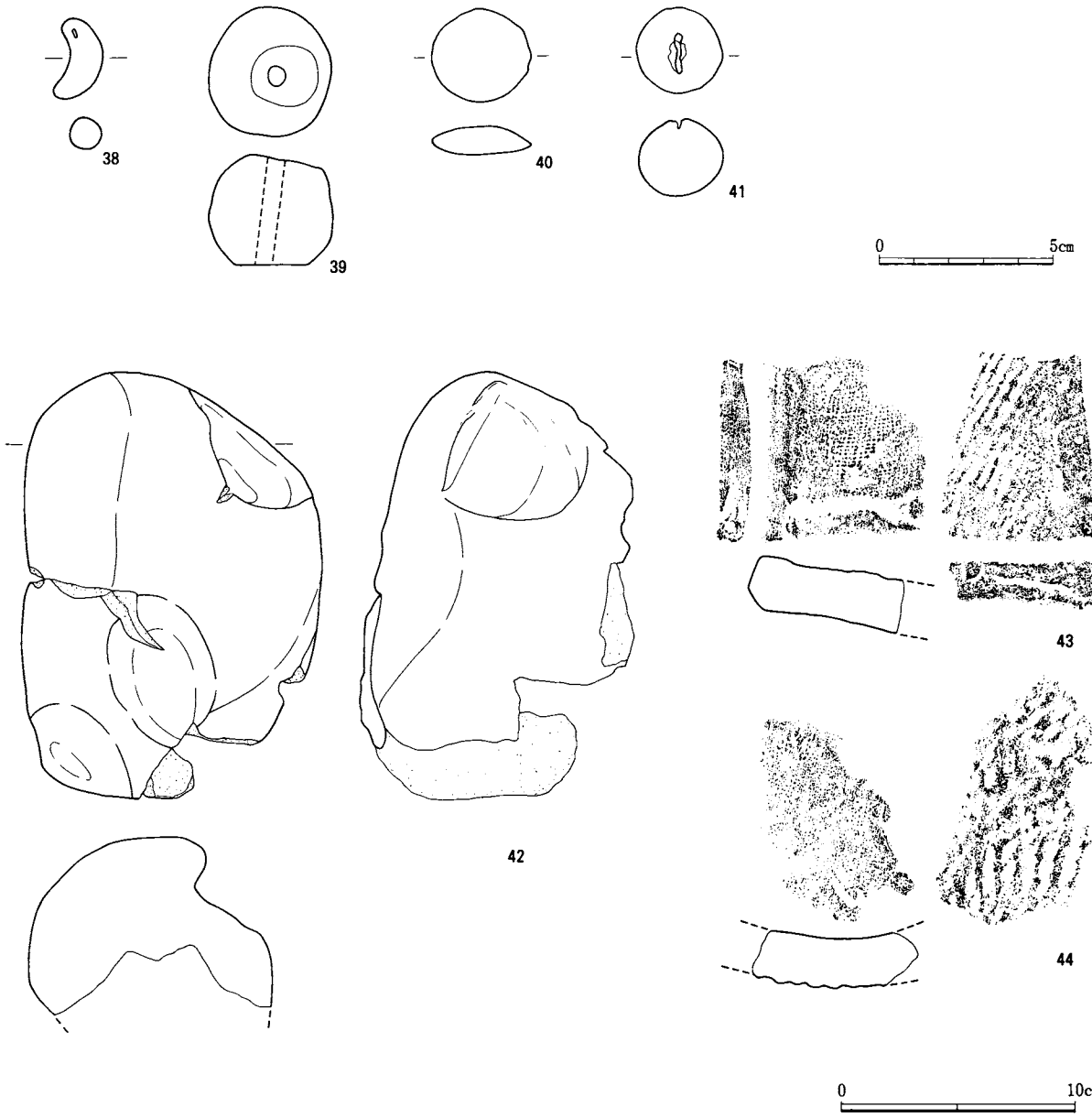
43・44は瓦である。43は004から、44は1号墳の墳丘中からの出土である。いずれも平瓦であるが、小片で表面や折れ面が磨耗している。43は側縁に対して斜行する縄目の叩き目が見られる。凹面には布目が残っている。赤橙色を呈している。44にも太い縄目の叩き目が見られる。暗灰褐色を呈している。

注1　田村　隆　1996『市原市武士遺跡1』（財）千葉県文化財センター

2　末永雅雄　1981『増補　日本上代の武器』木耳社


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
10cm

第122図　土製品（1）



第123図　土製品（2）

第17表　土器観察表

（単位：cm）（　）は復元値　〔　〕は現存値

良好◎
普通○
不良△

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調
1号墳	第45図1	須恵器杯	ほぼ完形	13.2		4.5	内外面ロクロ調整 外面底部回転ヘラケズリ	1㎜～5㎜の白色粒子を含む	○	灰色
1号墳	第45図2	須恵器杯	全体の1/2弱遺存	(15.0)		4.3	内外面ロクロ調整 外面底部回転ヘラケズリ	1㎜～2㎜の白色粒子、砂粒を少量含む	○	灰色
1号墳	第45図3	須恵器杯	全体の3/4遺存	13.6		4.9	内外面ロクロ調整 外面底部回転ヘラケズリ	2㎜～5㎜の白色粒子を少量含む	○	灰色
1号墳	第45図4	須恵器杯	全体の2/3遺存	12.3		4.3	内外面ロクロ調整 外面底部回転ヘラケズリ	1㎜～5㎜の白色粒子を含む	○	灰色
1号墳	第45図5	須恵器杯	ほぼ完形	12.3		4.7	内外面ロクロ調整 外面底部回転ヘラケズリ	1㎜～5㎜の白色粒子を含む	○	灰白色
1号墳	第45図6	須恵器杯	全体の1/2弱遺存	(13.0)		4.0	内外面ロクロ調整 外面底部回転ヘラケズリ	1㎜～5㎜の白色粒子を含む	○	暗灰色
1号墳	第45図7	須恵器蓋	全体の2/3遺存	14.8		4.3	内外面ロクロ調整 外面天井部回転ヘラケズリ	砂粒を少量含む	○	灰色
1号墳	第45図8	須恵器蓋	全体の3/4遺存	14.0		4.1	内外面ロクロ調整 外面天井部回転ヘラケズリ	1㎜～5㎜の白色粒子を含む	○	灰色
1号墳	第45図9	須恵器蓋	ほぼ完形	14.6		4.6	内外面ロクロ調整 外面天井部回転ヘラケズリ	2㎜～5㎜の白色粒子を少量含む	◎	灰色
1号墳	第45図10	須恵器蓋	完形	14.0		4.4	内外面ロクロ調整 外面天井部回転ヘラケズリ	2㎜～5㎜の白色粒子を少量含む	◎	灰色
1号墳	第45図11	須恵器蓋	口縁部2/3欠損	(16.2)		4.6	内外面ロクロ調整 外面天井部回転ヘラケズリ	2㎜～5㎜の白色粒子、砂粒を少量含む	◎	灰色
1号墳	第45図12	須恵器甕	口縁部の1/2弱遺存	(14.0)		〔9.0〕	外面ロクロ調整後櫛歯状工具による調整 内面ロクロ調整	白色粒子を少量含む	○	灰色
1号墳	第45図13	須恵器甕	全体の2/3遺存	17.4		29.1	内外面口縁部横ナデ、胴部から底部タタキ	密 砂粒を少量含む	◎	灰色
1号墳	第46図14	土師器杯	全体の2/3遺存	13.8		4.3	外面口縁横ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ 内面口縁部横ナデ、体部ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	赤褐色
1号墳	第46図15	土師器杯	口縁部の1/4遺存	(12.5)		3.4	外面口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ？ 内面口縁部横ナデ、体部ナデ？	密	○	赤褐色
1号墳	第46図16	土師器甕	口縁部の1/3遺存	(15.2)		〔5.7〕	外面口縁部ハケ後横ナデ、胴部ハケ 内面口縁部ハケ後横ナデ、胴部ヘラナデ	白色微細粒を少量含む	○	赤褐色～淡褐色
1号墳	第46図17	土師器甕	口縁部の1/2弱遺存	(15.6)		〔5.2〕	外面口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ？ 内面口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ	砂粒を少量含む	◎	淡褐色
1号墳	第46図18	土師器壺	頸部のみ遺存	(10.4)		〔7.6〕	外面口縁部ハケ、頸部ミガキ 内面口縁部ハケ後ミガキ、頸部ハケ後ナデ	砂粒を含む	△	赤褐色
1号墳	第46図19	土師器甕	胴部の3/4遺存		4.0	〔15.9〕	外面ハケ後ミガキ 内面ミガキ	砂粒を少量含む	○	淡褐色
1号墳	第46図20	土師器壺	胴部下半のみ遺存		8.3	〔10.8〕	外面胴部ハケ後ミガキ、底部木葉痕 内面ヘラナデ	赤色粒子を多量、砂粒を少量含む	○	赤褐色
1号墳	第46図21	土師器小型甕	口縁部の1/3遺存	(12.2)		〔5.7〕	外面口縁部ハケ後ナデ、胴部ハケ後ミガキ 内面口縁部ハケ後ミガキ、胴部ヘラナデ後ミガキ	砂粒を少量含む	○	外面明褐色 内面黒褐色
1号墳	第46図22	土師器台付甕	口縁部破片				外面横ナデ、ハケ 内面横ナデ	砂粒を少量含む 雲母片を少量含む	○	淡褐色

第17表　土器観察表

（単位：cm）　（　）は復元値　〔　〕は現存値

良好◎
普通○
不良△

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調
1号墳	第46図23	土師器台付甕	脚部の1/2遺存		(5.1)	〔3.1〕	外面ハケ 内面ミガキ	砂粒を少量含む	○	淡褐色
1号墳	第46図24	土師器甑	底部の1/2遺存		(6.0)	〔2.1〕	外面ヘラケズリ後ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を含む、2mm～3mm大の小石を少量含む	○	明褐色
1号墳	第46図25	土師器台付甕	底部の1/2遺存		(11.1)	〔6.7〕	外面ナデ 内面ヘラナデ	砂粒、白色微細粒を含む	△	赤褐色～黒褐色
1号墳	第46図26	土師器台付甕	脚部のみ遺存		8.0	〔6.8〕	外面脚部ハケ後ナデ、裾部ヨコナデ 内面甕部ヘラナデ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ	砂粒を多量に含む	○	黄褐色
1号墳	第46図27	土師器小型壺	胴部下半の1/2遺存		3.4	〔5.5〕	外面ヘラケズリ後ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	褐色～黒褐色
1号墳	第46図28	土師器鉢	口縁部の1/4遺存	(19.2)		〔8.8〕	外面ヘラケズリ後ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	暗褐色
1号墳	第46図29	弥生甕	口縁部破片				内外面ミガキ	砂粒、赤色粒子を含む	○	赤褐色
1号墳	第46図30	土師器高杯	頸部～脚部遺存			〔12.8〕	外面ハケ後ミガキ 内面杯部ミガキ、脚部ナデ	砂粒を多量に含む	○	赤褐色
1号墳	第46図31	土師器高杯	脚部のみ遺存			〔10.0〕	外面ハケ後ミガキ 内面脚部ナデ、裾部ハケ	砂粒を少量含む	○	赤褐色
1号墳	第46図32	土師器高杯	脚部のみ遺存			〔10.5〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	淡褐色
1号墳	第46図33	土師器高杯	脚部のみ遺存			〔9.7〕	外面ヘラケズリ後ミガキ 内面ナデ	砂粒を含む	○	赤褐色
1号墳	第46図34	土師器高杯	脚部のみ遺存			〔11.5〕	外面ヘラケズリ後ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	赤褐色
004	第54図1	土師器杯	全体の2/3遺存	(12.7)	9.0	4.0	内外面ロクロ調整 外面底部手持ちヘラケズリ？	砂粒、赤色粒子を含む	△	赤褐色
004	第54図2	土師器杯	ほぼ完形	13.0	7.4	3.5	内外面ロクロ調整 外面底部回転ヘラケズリ？	砂粒を少量含む	△	赤褐色
004	第54図3	土師器杯	口縁部の1/4遺存	(12.8)	(7.2)	3.6	内外面ロクロ調整 外面底部手持ちヘラケズリ	白色微細粒を含む 砂粒、赤色粒子を少量含む	○	黒褐色
004	第54図4	土師器甕	口縁部の1/3遺存	(18.0)		〔25.0〕	外面口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ 内面口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	暗褐色～黒褐色
015	第58図1	弥生壺	口縁部破片				外面縄文 内面ミガキ、口唇部縄文	砂粒を少量含む	○	赤褐色
015	第58図2	弥生壺	肩部破片				外面ミガキ後縄文、沈線 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	外面黒褐色～赤褐色 内面黒色
015	第58図3	弥生鉢	口縁部破片				外面ミガキ、縄文 内面ミガキ	砂粒を含む	○	赤褐色、黄褐色
015	第58図4	弥生壺	肩部破片				外面ミガキ後縄文 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	赤褐色、淡褐色
016A	第58図5	土師器小型甕	口縁部欠損		2.8	〔12.3〕	外面ハケ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	黒褐色
016A	第58図6	土師器甕	胴部下半のみ遺存		4.8	〔10.0〕	外面ヘラケズリ後ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	外面暗褐色～黒色 内面淡褐色

第17表　土器観察表

（単位：cm）　（　）は復元値　〔　〕は現存値

良好◎
普通○
不良△

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調
016A	第58図7	土師器高杯	裾部の1/2遺存		12.2	〔3.4〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む	△	褐色
016A	第58図8	土師器高杯	杯部の1/2遺存	(18.4)		〔5.8〕	外面ナデ、口縁部横ナデ 内面ナデ、口縁部横ナデ	砂粒を含む	○	明褐色
016A	第58図9	土師器高杯	杯部の1/2遺存	16.7		〔4.7〕	外面ナデ、口縁部横ナデ 内面ミガキ	砂粒を少量含む	○	赤褐色
019	第61図1	弥生壺	口縁部破片				外面ミガキ、縄文 内面ミガキ	砂粒を含む	○	淡褐色～赤褐色
019	第61図2	弥生壺	肩部破片				外面ミガキ後縄文 内面ヘラナデ	赤色粒子、砂粒を含む	○	赤褐色
019	第61図3	弥生甕	底部破片				外面撚糸文 内面ヘラナデ	砂粒を多量に含む 1㎜～2㎜の半透明～白色粒子を含む	○	淡褐色
020	第62図1	弥生甕	口縁部の2/3遺存	24.0		〔12.4〕	内外面ミガキ	砂粒を少量含む	○	外面黒褐色 内面明褐色
020	第62図2	土師器小型壺	ほぼ完形	6.9	3.2	8.7	内外面ナデ	砂粒を少量含む	△	暗褐色
021	第63図1	土師器甕	口縁の1/2弱遺存	(13.6)		〔5.4〕	外面ハケ、口縁部横ナデ 内面ナデ、口縁ハケ	砂粒を含む	○	暗褐色～褐色
021	第63図2	土師器甕	口縁の1/2弱遺存	(15.5)		〔4.6〕	内外面口縁ヨコナデ	砂粒を含む	○	明褐色
021	第63図3	土師器甕	口縁の1/2弱遺存	(10.9)		〔4.8〕	内外面口縁部横ナデ、胴部ナデ	砂粒を少量含む	○	暗褐色
021	第63図4	土師器壺	胴部下半欠損	10.9		〔3.4〕	内外面口縁部ハケ後ミガキ 胴部ヘラケズリ後ミガキ	砂粒を少量含む	○	暗褐色
021	第63図5	土師器高杯	杯部の2/3遺存	(17.9)		〔6.2〕	内外面ミガキ	砂粒を少量含む	○	明褐色～赤褐色
021	第63図6	土師器高杯	全体の3/4遺存		13.0	〔13.9〕	外面ミガキ、裾部ハケ後横ナデ 内面杯部ミガキ、脚部ナデ	砂粒を少量含む	○	赤褐色
021	第63図7	土師器高杯	脚部の2/3遺存		(12.4)	〔10.4〕	外面脚部ミガキ、裾部ハケ後ミガキ 内面脚部ナデ、裾部ハケ後横ナデ	砂粒を含む	○	赤褐色～黒色
030	第67図1	須恵器蓋	口縁の1/2遺存	(12.8)		〔4.0〕	ロクロ調整、外面天井部回転ヘラケズリ	白色微細粒を少量含む	○	灰白色
031	第66図1	土師器壺	胴部のみ遺存		5.1	〔11.0〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	赤褐色
031	第66図2	土師器鉢	ほぼ完形	9.8	5.0	7.9	内外面ヘラケズリ	砂粒を少量含む 黄褐色の粒子を含む	○	明褐色
031	第66図3	ミニチュア	ほぼ完形	3.1	2.2	5.0	外面ヘラケズリ 内面ナデ	砂粒を少量含む 赤色粒子を多量に含む	○	暗褐色
031	第66図4	土師器壺	底部のみ遺存		6.7	〔7.0〕	内外面ミガキ	砂粒を多量に含む	○	外面赤褐色 内面暗褐色
032	第68図1	ミニチュア	全体の2/3遺存	6.5	2.1	4.5	外面体部ミガキ、口縁横ナデ後ミガキ 内面体部ヘラナデ、口縁横ナデ後ミガキ	砂粒を少量含む	○	褐色
032	第68図2	土師器炉器台	器受部のみ遺存	7.7		〔5.6〕	外面ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む 赤色粒子を少量含む	○	褐色

第17表　土器観察表

（単位：cm）（　）は復元値　〔　〕は現存値

良好◎
普通○
不良△

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調
032	第68図3	土師器高杯	杯部の1/2遺存	20.4		〔8.2〕	外面ハケ後ミガキ 内面ミガキ	砂粒を少量含む	○	外面淡褐色 内面淡褐色～赤褐色
033	第70図1	土師器鉢	完形	17.9	6.4	8.3	内外面横ミガキ 外面底部木葉痕	砂粒を少量含む	◎	外面赤褐色～褐色 内面黒褐色～赤褐色
033	第70図2	弥生甕	頸部のみ遺存	(22.0)		〔11.0〕	内外面ナデ？	砂粒を少量含む	○	淡褐色
034	第71図1	弥生壺	胴部破片				外面ミガキ後縄文 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	明褐色～赤褐色
037	第73図1	土師器鉢	全体の1/2弱遺存	(16.3)	(6.0)	8.6	内外面ミガキ	砂粒を少量含む	△	淡褐色～赤褐色
039A	第75図1	弥生甕	口縁部の1/2遺存	17.1		〔14.0〕	内外面横ミガキ 口縁部横ナデ	砂粒を少量含む	○	淡褐色～黒色
040	第76図1	弥生壺	口縁部破片				外面口縁部縄文とミガキ 内面ミガキ口唇部縄文	赤色粒子、砂粒を少量含む	○	黄褐色、赤褐色
040	第76図2	弥生壺	胴部破片				外面縄文、沈線 内面ミガキ	砂粒を含む	○	暗赤褐色
042	第76図3	土師器壺	底部のみ遺存		7.0	〔4.5〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む 黄褐色粒子を含む	○	赤褐色
049	第83図1	土師器台付甕	脚部のみ遺存		8.8	〔5.0〕	外面ナデ 内面甕部ナデ、脚部ヘラナデ	赤色粒子、黄褐色粒子を多量に含む	○	赤褐色
050	第83図2	土師器小型鉢	全体の1/2弱遺存		5.0	〔7.5〕	内外面ミガキ	砂粒を多量に含む	○	外面明褐色 内面黒褐色
050	第83図3	弥生鉢	口縁の1/3遺存	(19.4)		〔6.1〕	外面口縁部縄文、体部ミガキ 内面ミガキ、口唇部縄文	赤色粒子を少量含む	○	淡褐色
051	第83図4	土師器小型鉢	全体の1/3遺存	(12.6)	5.0	7.5	内外面体部ヘラケズリ、口縁横ナデ	砂粒を多量に含む	○	赤褐色
053	第83図5	土師器杯	ほぼ完形	13.2		3.7	外面体部ヘラケズリ後ナデ？口縁部横ナデ 内面体部ヘラナデ、口縁部横ナデ	砂粒を含む	○	赤褐色～黒褐色
053	第83図6	土師器甕	胴部下半欠損	19.6		〔23.4〕	外面胴部ヘラケズリ、口縁部横ナデ 内面胴部ヘラナデ、口縁部横ナデ	砂粒を多量、赤色粒子を含む	△	明褐色
054	第83図7	土師器小型鉢	全体の3/4遺存	8.3	3.4	5.4	外面ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	明褐色
054	第83図8	土師器甑	底部のみ遺存		4.4	〔6.6〕	外面ハケ後ナデ 内面ハケ後ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	外面黒色 内面暗褐色
054	第83図9	土師器器台	全体の1/2弱遺存	11.6	(5.4)	9.8	外面ナデ？ 内面ナデ	砂粒を少量含む	○	褐色
054	第83図10	土師器器台	ほぼ完形	9.4	10.2	8.8	外面ハケ後ナデ 内面器受部ナデ、脚部ヘラナデ	砂粒を少量含む スコリア粒を少量含む	○	褐色～黒褐色
056	第86図1	弥生甕	口縁の1/3遺存	(19.0)		〔13.8〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ後ミガキ	砂粒を少量含む	○	外面暗褐色 内面淡褐色
056	第86図2	弥生甕	全体の1/2遺存	(21.7)		〔18.3〕	内外面ミガキ	赤色粒子を含む	○	暗褐色
056	第86図3	弥生鉢	全体の1/3遺存	(25.0)	8.0	9.5	外面体部ミガキ？後縄文 内面ミガキ	赤色粒子を多量に含む	○	外面淡褐色 内面赤褐色

第17表　土器観察表

（単位：cm）（　）は復元値　〔　〕は現存値

良好◎
普通○
不良△

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調
061	第89図1	弥生壺	胴部欠損	15.2		〔11.4〕	内外面ミガキ	砂粒を少量含む	○	淡褐色
061	第89図2	弥生壺	頸部のみ遺存			〔9.4〕	外面ミガキ後縄文 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	赤褐色
061	第89図3	弥生壺	口縁部欠損		6.7	〔24.7〕	外面ミガキ後縄文 内面頸部ミガキ、胴部ヘラナデ？	砂粒を少量含む	○	赤褐色
061	第89図4	土師器壺	胴部下半のみ遺存		11.0	〔7.4〕	外面ミガキ 内面ナデ	砂粒を少量含む 赤色粒子を多量に含む	○	淡褐色
061	第89図5	土師器甕	胴部下半のみ遺存		6.6	〔11.8〕	内外面ミガキ	砂粒を含む 赤色粒子を含む	○	外面淡褐色 内面明褐色
061	第89図6	土師器甕	口縁部1/4遺存	(16.8)		〔2.0〕	外面ナデ？ 内面ミガキ？	砂粒を少量含む 赤色粒子を含む	△	淡褐色
061	第89図7	土師器甕	底部の2/3遺存		6.9	〔2.4〕	外面ナデ 内面ミガキ	砂粒を少量含む	○	外面褐色 内面黒褐色
061	第89図8	土師器小型甕	口縁の1/2遺存	9.7		〔4.9〕	外面ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	淡褐色
061	第89図9	弥生甕	口縁の1/2遺存	18.6		〔16.7〕	内外面ミガキ？	砂粒を少量含む 赤色粒子を少量含む	△	淡褐色
061	第89図10	弥生甕	全体の2/3遺存	18.6		〔17.2〕	内外面ミガキ？	砂粒を含む 赤色粒子を少量含む	○	明褐色
061	第89図11	弥生甕	全体の2/3遺存	(20.8)		〔15.3〕	内外面ミガキ	砂粒を少量含む 赤色粒子を少量含む	△	淡褐色
061	第89図12	弥生甕	全体の1/2遺存	17.2		〔12.8〕	内外面ミガキ	砂粒を含む	○	褐色
062	第90図1	土師器甕	胴部下半2/3遺存		7.3	〔13.5〕	外面ヘラケズリ後ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒、赤色粒子を含む	○	黒褐色
064	第90図2	弥生壺	頸部のみ遺存			〔10.0〕	外面ミガキ後縄文 内面ミガキ？	白色スコリアを多量に含む 砂粒を含む、雲母粒を少量含む	○	明褐色
064	第90図3	弥生甕	胴部上半の1/2遺存			〔12.5〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ後ミガキ	赤色粒子を多量に含む	○	黄褐色
064	第90図4	土師器器台	全体の1/4遺存	(8.8)	(14.0)	9.6	外面ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を含む 白色微細粒を含む	○	明褐色
064	第90図5	土師器小型鉢	全体の1/3遺存	(7.4)	4.4	6.0	外面ヘラケズリ後ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	褐色
066	第90図1	土師器小型甕	胴部の2/3遺存		2.7	6.0	外面胴部ハケ、底部ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	淡褐色
068	第90図2	土師器甕	口縁の1/3遺存	(19.9)		〔7.8〕	外面ナデ 内面ミガキ	赤色粒子を少量含む	◎	暗褐色
068	第92図3	土師器小型甕	口縁の1/3遺存	15.2		13.0	外面ハケ後ミガキ 内面口縁部ハケ、胴部ミガキ	砂粒を少量含む	○	黄褐色～黒褐色
068	第92図4	土師器高杯	脚部の2/3遺存		12.6	〔8.3〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を含む 赤色粒子を含む	○	暗褐色
068	第92図5	ミニチュア	脚部のみ遺存		(4.3)	〔2.9〕	外面ナデ 内面ヘラナデ	赤色粒子、砂粒を少量含む	○	淡褐色

第17表　土器観察表

（単位：cm）　（　）は復元値　〔　〕は現存値

良好◎
普通○
不良△

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調
070	第93図1	土師器甕	全体の2/3遺存	(16.1)	5.5	18.0	外面口縁部横ナデ、胴部ハケ、底部ナデ 内面口縁部ハケ後横ナデ、胴部ナデ	砂粒を含む	○	外面黒褐色 内面褐色
070	第93図2	土師器甕	口縁の1/3遺存	(16.6)		〔13.0〕	外面口縁部ハケ後横ナデ、胴部ハケ 内面口縁部ハケ、胴部ミガキ	砂粒を少量含む	○	黒褐色
070	第93図3	土師器甕	口縁の1/4遺存	(15.1)		〔7.8〕	外面口縁横ナデ、胴部ハケ後横ナデ 内面口縁横ナデ、胴部ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	暗褐色
070	第93図4	土師器鉢	口縁の1/3遺存	(22.0)		〔8.4〕	内外面ミガキ	赤色粒子を多量に含む	○	赤褐色
070	第93図5	土師器壺	胴部下半の3/4遺存		4.2	〔11.2〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を多量に含む 赤色粒子と2㎜～3㎜の小石を含む	○	赤褐色～黒褐色
070	第93図6	土師器小型甕	胴部下半のみ遺存		5.7	〔12.4〕	外面ハケ後ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	褐色
070	第93図7	土師器高杯	脚部のみ遺存		6.5	〔3.9〕	外面ヘラケズリ後ミガキ 内面杯部ナデ、胴部ヘラナデ、裾部横ナデ	砂粒を多量に含む	○	淡褐色
070	第93図8	土師器高杯	完形	24.0	11.4	15.7	外面ミガキ 内面杯部ミガキ、脚部ナデ？裾部横ナデ	砂粒を含む	○	淡褐色
070	第93図9	土師器高杯	完形	20.3	10.3	13.5	外面杯部ハケ後ミガキ 内面杯部ミガキ、脚部ナデ	砂粒を含む 赤色粒子を含む	○	赤褐色
070	第93図10	土師器高杯	ほぼ完形	19.6	11.5	14.0	外面口縁部横ナデ、杯部・脚部ミガキ 内面杯部ミガキ、脚部ナデ、裾部横ナデ	砂粒、赤色粒子を含む	◎	赤褐色
070	第93図11	土師器高杯	杯部の3/4遺存	18.6		〔6.5〕	内外面ミガキ	砂粒を少量含む	○	赤褐色
070	第93図12	土師器高杯	杯部のみ遺存	20.7		〔7.6〕	内外面ミガキ	砂粒を含む 赤色粒子を含む	○	赤褐色
070	第93図13	土師器高杯	杯部の3/4遺存	18.8		〔6.2〕	内外面ミガキ	砂粒を含む 2㎜～5㎜の小石を含む	○	赤褐色
070	第93図14	土師器高杯	杯部の2/3遺存	14.0		〔5.2〕	内外面ミガキ	砂粒を含む スコリア粒を多量に含む	△	赤褐色
070	第93図15	土師器高杯	脚部の1/2遺存		(14.8)	〔8.0〕	外面ミガキ 内面脚部ナデ、裾部横ナデ	砂粒を多量に含む 赤色粒子を含む	○	赤褐色
070	第93図16	土師器高杯	全体の1/2遺存	(11.5)		〔9.0〕	外面ミガキ 内面杯部ハケ後ミガキ、脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部ハケ	砂粒、赤色粒子を少量含む	○	淡褐色～黒色
070	第93図17	土師器高杯	杯部のみ遺存	12.1		〔5.7〕	外面ミガキ 内面ハケ後ミガキ	砂粒を少量含む 赤色粒子を多量に含む	○	淡褐色
070	第94図18	土師器高杯	全体の3/4遺存	11.5	(12.8)	8.6	外面ミガキ 内面杯部ミガキ、脚部ハケ後ナデ	砂粒を含む	○	淡褐色
070	第94図19	土師器器台	完形	7.6	10.2	8.9	外面器受部ミガキ？脚部ミガキ 内面器受部ミガキ、脚部ヘラナデ	砂粒を多量に含む	○	淡褐色
070	第94図20	土師器器台	全体の2/3遺存	7.2	(10.3)	7.7	外面器受部ハケ後ミガキ、口縁横ナデ、脚部ミガキ 内面器受部ハケ後ミガキ、脚部ハケ後ナデ	砂粒を含む	○	明褐色
071	第97図1	土師器甕	口縁部の1/2弱遺存	(16.3)		〔13.0〕	外面口縁部ハケ後横ナデ、胴部上半ハケ、胴部下半ヘラケズリ 内面口縁部ナデ、胴部ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	褐色
071	第97図2	土師器小型甕	ほぼ完形	9.0	4.3	10.1	外面口縁部横ナデ、胴部上半ハケ、下半～底部ヘラケズリ 内面口縁部横ナデ、胴部ミガキ	砂粒を含む	○	赤褐色

第17表　土器観察表

（単位：cm）　（　）は復元値　〔　〕は現存値

良好◎
普通○
不良△

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調
071	第97図3	土師器高杯	脚部の2/3遺存		(13.0)	〔8.8〕	外面杯部ハケ、裾部横ナデ 内面杯部ミガキ？脚部ナデ	砂粒、白色微細粒少量含む	○	淡褐色～赤褐色
072	第83図11	土師器小型甕	口縁の1/2弱遺存	(13.8)		〔8.0〕	外面口縁部横ナデ、胴部ハケ 内面口縁部ハケ後横ナデ、胴部ミガキ	砂粒を少量含む	○	赤褐色～黒色
072	第83図12	ミニチュア	脚部の1/2遺存		(5.7)	〔3.5〕	外面ハケ後ナデ 内面杯部ヘラナデ、脚部ハケ	砂粒を少量含む	○	黒褐色～赤褐色
072	第83図13	土師器高杯	杯部の3/4遺存	(23.3)		〔10.1〕	内外面ミガキ	赤色粒子を多量に含む	○	赤褐色～淡褐色
074	第98図1	手づくね	全体の1/2遺存	(8.0)		4.0	内外面ナデ	砂粒、白色微細粒を含む	○	褐色
074	第98図2	土師器小型鉢	全体の1/3遺存	(6.6)	(2.6)	5.0	内外面ミガキ	赤色粒子を多量に含む	○	淡褐色
074	第98図3	土師器高杯	脚部の1/2遺存			〔9.6〕	外面ミガキ 内面ナデ	砂粒を含む	○	明褐色
076	第100図1	土師器高杯	口縁部1/3、裾部1/3遺存	(16.7)	(13.5)		外面口縁部横ナデ、杯部ヘラケズリ後ナデ、裾部横ナデ 内面口縁部横ナデ、杯部ミガキ、裾部横ナデ	砂粒を少量含む	○	明褐色
076	第100図2	土師器高杯	裾部1/2遺存		(13.8)	〔3.0〕	内外面横ナデ	砂粒を少量含む	○	明褐色
076	第100図3	土師器高杯	脚部の2/3遺存		(11.9)	〔8.3〕	外面脚部ヘラケズリ後ミガキ、裾部横ナデ 内面脚部ヘラナデ、裾部横ナデ	砂粒を少量含む	○	淡褐色
076	第100図4	ミニチュア	脚部の3/4遺存		6.8	3.4	外面ハケ後ミガキ 内面杯部ヘラナデ、脚部ハケ	砂粒、赤色粒子を含む	△	淡褐色
079	第101図1	弥生壺	口縁部破片				外面縄文、ミガキ 内面ミガキ、口唇部ミガキ	砂粒、赤色粒子を含む	○	赤褐色、黄褐色
079	第101図2	弥生壺	口縁部破片				外面縄文、ミガキ 内面ミガキ	砂粒、赤色粒子を含む	○	赤褐色、淡褐色
079	第101図3	土師器小型甕	全体の2/3遺存	(7.7)	4.5	8.0	外面ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	淡褐色
079	第101図4	土師器台付甕	脚部のみ遺存		9.4	〔9.6〕	外面ハケ 内面甕部ヘラナデ、脚部ハケ後ナデ	砂粒を含む	○	赤褐色
079	第101図5	弥生鉢	口縁部の1/4遺存	(16.1)		〔8.2〕	外面ミガキ、口縁部、口唇部縄文 内面ミガキ	砂粒を含む	○	外面赤褐色 内面黄褐色
081	第103図1	弥生壺	口縁部の2/3遺存	13.7		〔7.2〕	外面ミガキ後縄文 内面ミガキ	砂粒を少量含む	○	赤褐色、黄褐色
081	第103図2	土師器高杯	杯部の2/3遺存	(18.6)		〔6.1〕	内外面ミガキ	砂粒を少量含む	○	赤褐色
084	第103図3	土師器小型甕	完形	10.9	3.4	8.9	外面口縁部横ナデ、胴部ハケ、底部ヘラケズリ 内面口縁部横ナデ、胴部上半ハケ後ミガキ、下半ミガキ	砂粒、白色微細粒を少量含む	◎	暗褐色
085	第104図1	弥生壺	口縁部欠損		7.5	〔17.4〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	黒褐色～赤褐色
085	第104図2	弥生甕	胴部破片				内外面ミガキ	砂粒、赤色粒子を少量含む	○	外面赤褐色 内面黒褐色
086	第114図1	土師器壺	胴部下半1/2遺存		11.6	〔30.3〕	外面ハケ後ミガキ 内面ミガキ	赤色、黄褐色粒子を多量に含む	○	赤褐色

第17表　土器観察表

（単位：cm）　（　）は復元値　〔　〕は現存値

良好◎
普通○
不良△

遺構番号	挿図番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	色調
087	第106図1	弥生壺	口縁のみ遺存	16.7		〔10.5〕	外面ミガキ後縄文 内面ミガキ	黄褐色粒子を多量に含む	○	赤褐色
087	第106図2	弥生壺	口縁部のみ遺存 （口唇部欠損）			〔14.0〕	外面ミガキ後縄文 内面ヘラナデ後ミガキ	砂粒を少量含む 赤色粒子、黄褐色粒子を多量に含む	○	赤褐色～淡褐色
087	第106図3	弥生甕	口縁の1/3遺存	（23.7）		〔18.4〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ後ミガキ	赤色粒子を多量に含む	○	赤褐色
087	第106図4	弥生甕	口縁の1/3遺存	（24.8）		〔17.0〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ後ミガキ	砂粒を少量含む	○	赤褐色～黒色
087	第106図5	弥生甕	口唇部、底部欠損	（17.9）		〔14.5〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ後ミガキ	砂粒を含む	○	褐色
087	第106図6	弥生鉢	全体の1/3遺存	（22.3）	6.9	10.3	外面ミガキ、口縁部、口唇部縄文 内面ミガキ	赤色粒子、白色微細粒を少量含む	○	褐色
089	第107図1	土師器高杯	脚部の2/3遺存		（8.6）	〔7.8〕	外面杯部ミガキ？脚部ハケ後ミガキ 内面ミガキ、脚部ハケ後ナデ	砂粒を少量含む	○	赤褐色
090	第107図2	土師器鉢	全体の2/3遺存	13.3	5.8	5.9	外面ミガキ、底部ナデ 内面ミガキ	砂粒を含む	○	明褐色～赤褐色
091	第108図1	弥生壺	肩部破片				外面ミガキ後縄文、沈線 内面ナデ	砂粒を含む	◎	赤褐色～淡褐色
091	第108図2	弥生甕	頸部破片				外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を多量に含む	○	褐色
092	第110図1	弥生壺	口縁部の1/2遺存	13.4		〔8.2〕	外面口縁部横ナデ、頸部ナデ後縄文 内面口縁横ナデ、頸部ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	明褐色
092	第110図2	土師器甕	口縁部の1/2遺存	（18.4）		〔11.0〕	外面ハケ 内面ミガキ	砂粒を少量含む	○	赤褐色
093	第110図3	弥生壺	肩部破片				外面ミガキ、縄文 内面ナデ	砂粒を含む 赤色粒子を多量に含む	○	赤褐色～淡褐色
093	第110図4	弥生鉢	口縁部破片				外面縄文 内面ミガキ	赤色粒子と砂粒を含む	○	外面淡褐色 内面赤褐色
094	第108図3	弥生壺	口縁部破片				外面縄文 内面ミガキ	砂粒を含む	○	赤褐色
094	第108図4	弥生壺	肩部破片				外面ミガキ、縄文、沈線 内面ヘラナデ	砂粒を含む 黄褐色～白色粒子を多量に含む	○	淡褐色
098	第108図5	土師器高杯	脚部の1/2遺存			〔6.3〕	外面ミガキ 内面杯部ミガキ、脚部ヘラナデ	砂粒を含む	○	淡褐色
100	第103図4	土師器高杯	脚部のみ遺存		11.2	〔7.0〕	外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	淡褐色
102	第112図1	土師器高杯	杯部の1/3遺存	（19.8）	9.7	7.4	内外面ナデ	砂粒を含む	○	黄褐色
105	第112図2	弥生甕	頸部破片				外面ミガキ 内面ヘラナデ	砂粒を含む	○	赤褐色
不明	第119図1	土師器高杯	脚部のみ遺存		10.9	6.7	外面ミガキ？ 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む	○	黄褐色
4B	第119図2	土師器壺	口縁部のみ遺存	12.5		〔5.0〕	外面ナデ 内面ヘラナデ	砂粒を少量含む	△	淡褐色

第3章　古市場（1）遺跡・（2）遺跡

第1節　古市場（1）遺跡の遺構と遺物

1　発掘区の基本層序（第124図）

古市場（1）遺跡の基本層序は、Ⅰ層の現耕作土及び埋土、Ⅱ層の泥炭層、Ⅲ層の鉄分の多い砂層、Ⅳ層の青灰色系の砂層に大別される。Ⅰ層中には植物繊維を多く含むⅠa層と、土地改良のために昭和初期に混入された貝殻片（キサゴ）を含むⅠb層が見られる。Ⅲ層の泥炭層は黄褐色の色調を示す砂層部分（Ⅲa層）と暗黄褐色の色調を示す砂層部分（Ⅲb層）に細分される。

Ⅰ層からⅣ層に至る層序はT.P.（東京湾基準海面）値から判断すれば全体として上部沖積層砂質土に相当し、Ⅳ層の青灰色系砂層も村田川氾濫時の再堆積土層であると考えられる。

また、遺跡の北端と南端では層序全体がやや高めで、遺跡中央部で若干沈み込みが見られ、Ⅲb層又はⅣ層中に自然貝層が見られる。

2　検出された遺構（第125図）

確認調査区

C10トレンチ

北西から南東方向に延びる溝状遺構が確認された。溝の規模は幅約1ｍ、深さ10cm～20cmで極めて浅い。

E12トレンチ

北西から北東方向に延びる溝状遺構が確認された。特に東に向かって扇状に大きく広がりを見せる。規模は幅が1.5ｍ～2ｍ以上で、掘込みは浅く約20cmほどで1b層が覆土の主体となる。

F6トレンチ

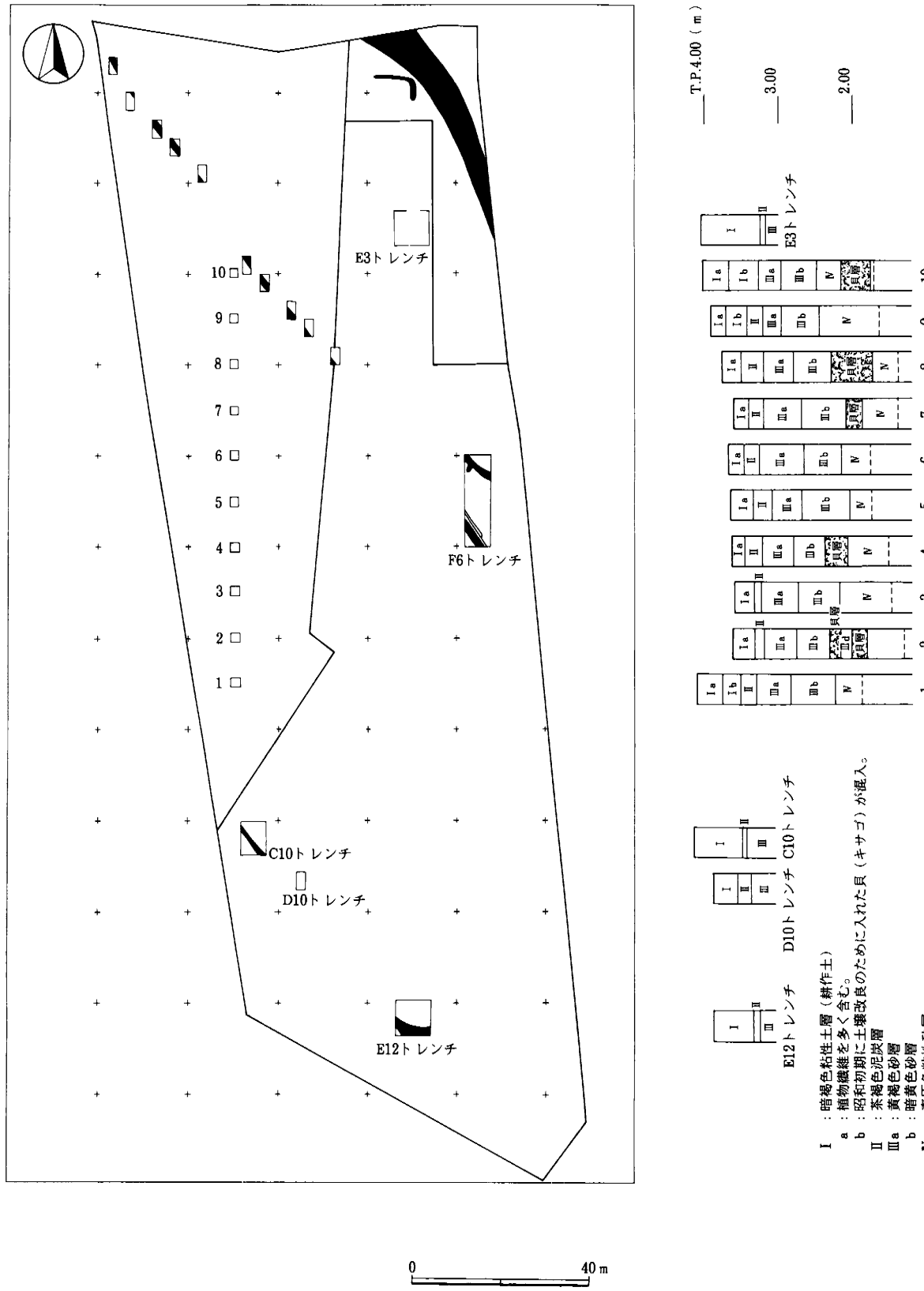
北西方向から南東方向に延びる溝状遺構が確認された。規模は幅約60cm、深さ約25cmを測る。また、F6トレンチ内には約10cm～15cmほどのわずかな高まりを示す畦畔状の遺構も確認されている。この畦畔状遺構は遺跡の北西方向すなわちB1からD4グリッド内の確認調査トレンチにおいて確認されたものと一連のものであると考えられるが、区画の単位を示すほどの広がりは確認できない。表土（現耕作土）から10cm～20cmほどで確認されており、層序では1b層及び1c層相当であり、時期的には比較的新しく、近世以降と考えられる。

平成2年度本調査区

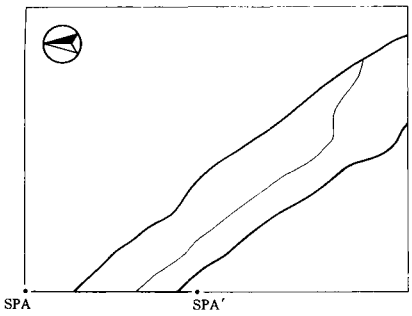
上層確認調査の際に検出された溝状遺構について、E1グリッドを中心にその周辺に発掘区を拡張し溝状遺構の範囲を確認した後、2か所をトレンチにより溝底まで掘り下げた。

溝状遺構の規模は広いところで約7.5ｍ、深さ約1ｍで南東から北西に向かって徐々に広がりを見せる。幅は比較的広く、溝は少なくとも3回形成された痕跡を残している。最も古い溝の覆土は4a層暗青灰色土層が最下層となるが、一端4a層堆積後に3層・2b層を覆土とする溝が形成され、その後2a層及び1b層・1c層堆積後1a層を覆土とする溝が形成されている。

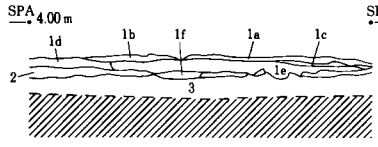
いずれにしても付近は低湿地特有の暗褐色土層中での溝プランの検出であり、もう少し上方から掘込み



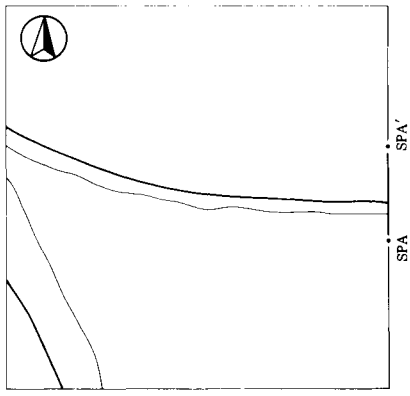
第124図　古市場（1）遺跡の遺構配置図及び基本層序



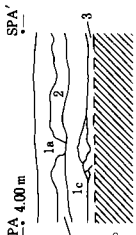
C10トレンチ



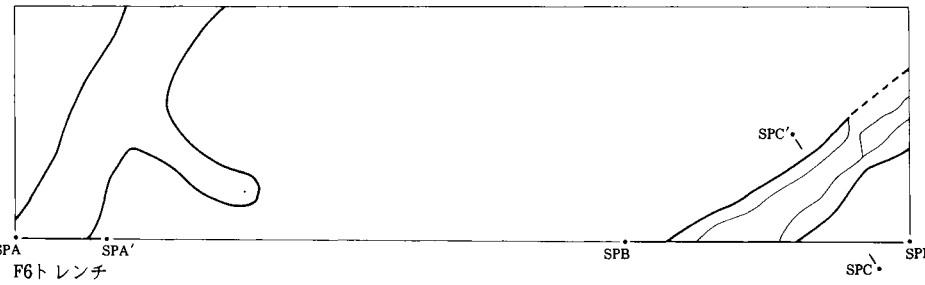
1a:暗褐色土層　耕作土。ほとんど黒色に近い。
1b:暗褐色土層　ブロック状に灰色砂を含む。
1c:暗灰褐色土層　1a層と灰色砂の混入したもの。
1d:暗褐色土層　黒色土に近い2層の植物遺体を包含層に含む。
1e:黄灰色砂層　黒色土ブロックを含む。
1f:灰褐色砂層　灰褐色の砂質土泥灰層と、1e層の混入したものと思われる。
2 :褐色土層　泥灰層と思われる。植物遺体を多量に含む。
3 :褐色砂土層　泥灰層の影響を受けた、灰褐色砂質と思われる。植物遺体を含む。



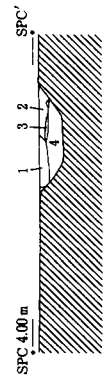
E12トレンチ



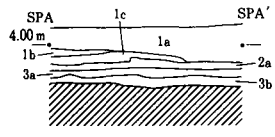
1a:暗褐色土層　耕作土。
1b:褐色土層　明褐色土の混入が著しい。
1c:暗褐色土層　黒色に近く、白色砂粒を多く含む。
2 :灰褐色砂質　泥炭ブロックを含む。
3 :褐色土層　暗褐色土ブロックを多く含む。泥炭質で軟弱。植物遺体を多量に含む。

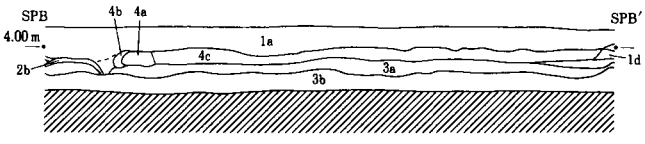


F6トレンチ

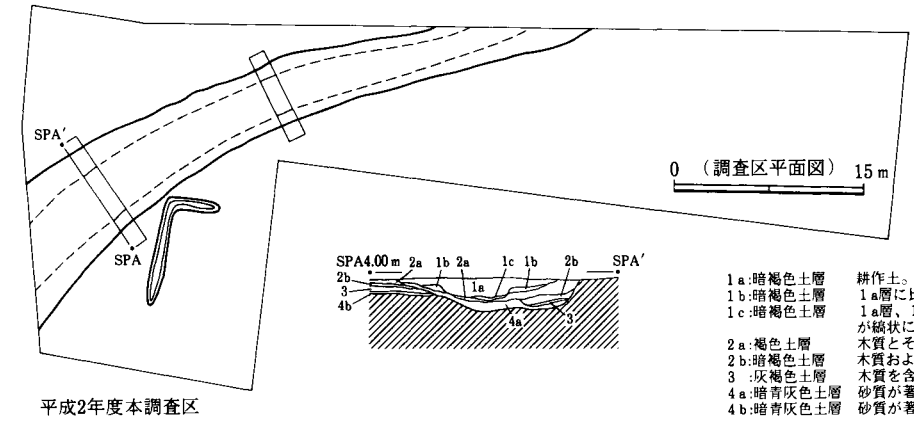


1:暗灰褐色砂土層　黄色砂ブロックを含む。
2:暗褐色土層　褐色腐植土を含む。
3:褐色土層　泥炭層。植物遺体が互層をなす。
4:灰褐色砂質土層　植物遺体をわずかに含む。





1a:暗褐色土層　耕作土。
1b:灰褐色粘土層　1a層ブロックを含む。
1c:暗褐色土層　植物遺体をわずかに含む。
2a:褐色土層　泥炭層と思われる。
2b:暗褐色土層　泥炭層であるが植物遺体の包含量は少ない。
3a:灰色砂層　2a層ブロックをわずかに含む。シルト質。
3b:灰褐色砂層　白灰色砂ブロックを含む。
4a:暗褐色土層　暗灰砂ブロックを含む。
4b:橙灰色砂層　1a層ブロックを含む。
4c:暗灰褐色土層　少量の1a層ブロックを含む。



0 （調査区平面図） 15 m

平成2年度本調査区

0 （土層観察図） 7.5 m

1a:暗褐色土層　耕作土。
1b:暗褐色土層　1a層に比べてやや暗い色調。
1c:暗褐色土層　1a層、1b層に比べて黒色に近い色調となり、木質が縞状に混入する。
2a:褐色土層　木質とその腐植土が互層をなす。
2b:暗褐色土層　木質および腐植土を含み、1層に比べて砂粒を含む。
3 :灰褐色土層　木質を含む。
4a:暗青灰色土層　砂質が著しい。
4b:暗青灰色土層　砂質が著しく、灰色砂を部分的に含む。

0 （トレンチ平面図） 2 m　0 （土層観察図） 1 m

第125図　遺構平面図及び土層観察図

が始まっていた可能性もある。

また、本調査区内にはこのほかＬ字状に屈曲する浅い溝も検出されているが、掘込みも浅く性格は不明である。

なお、平成３年次に行われた茂原街道沿いの補足調査においても溝状遺構が検出された[1]。

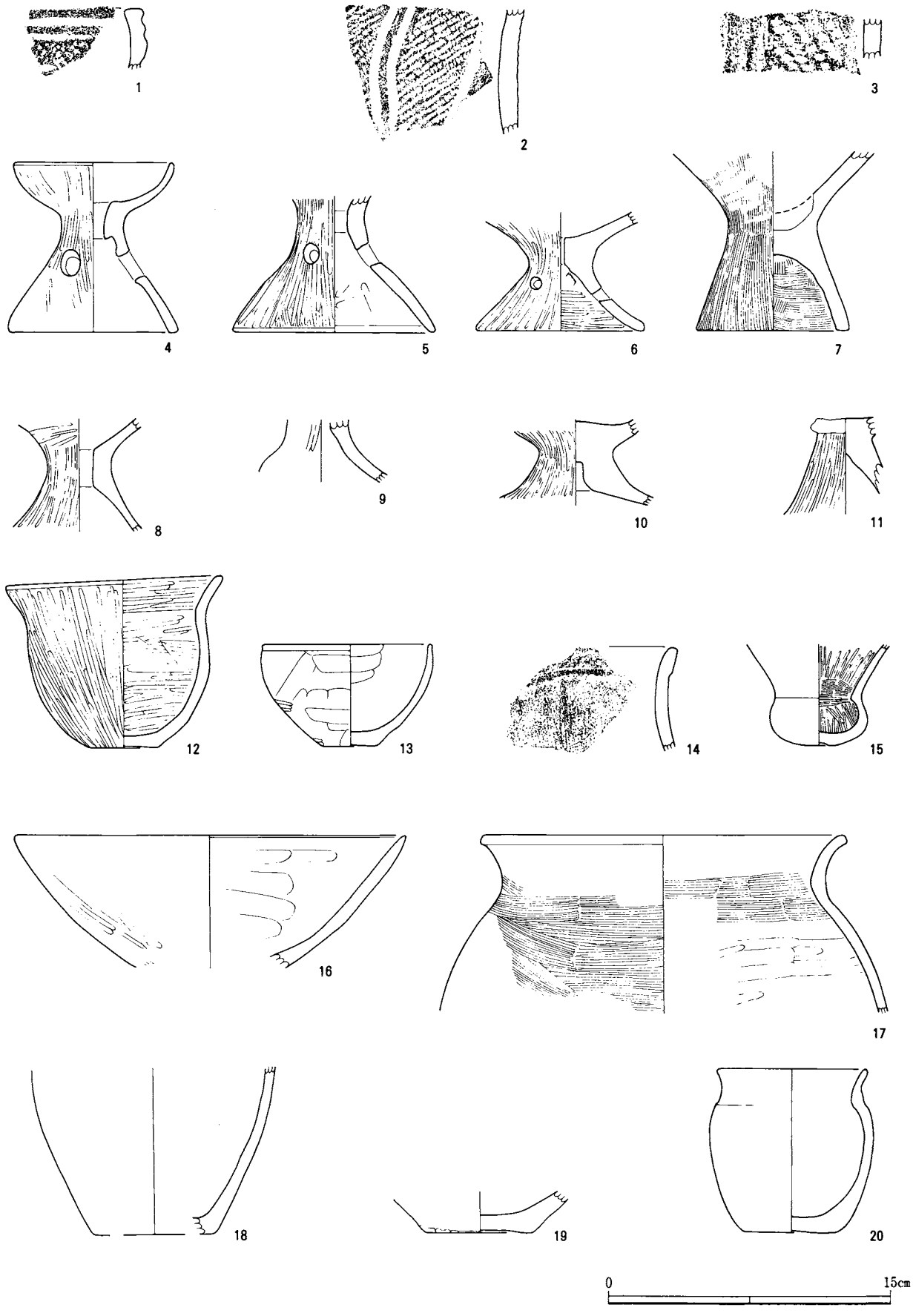
3　出土遺物

縄文時代（第126・127図、図版36・37）

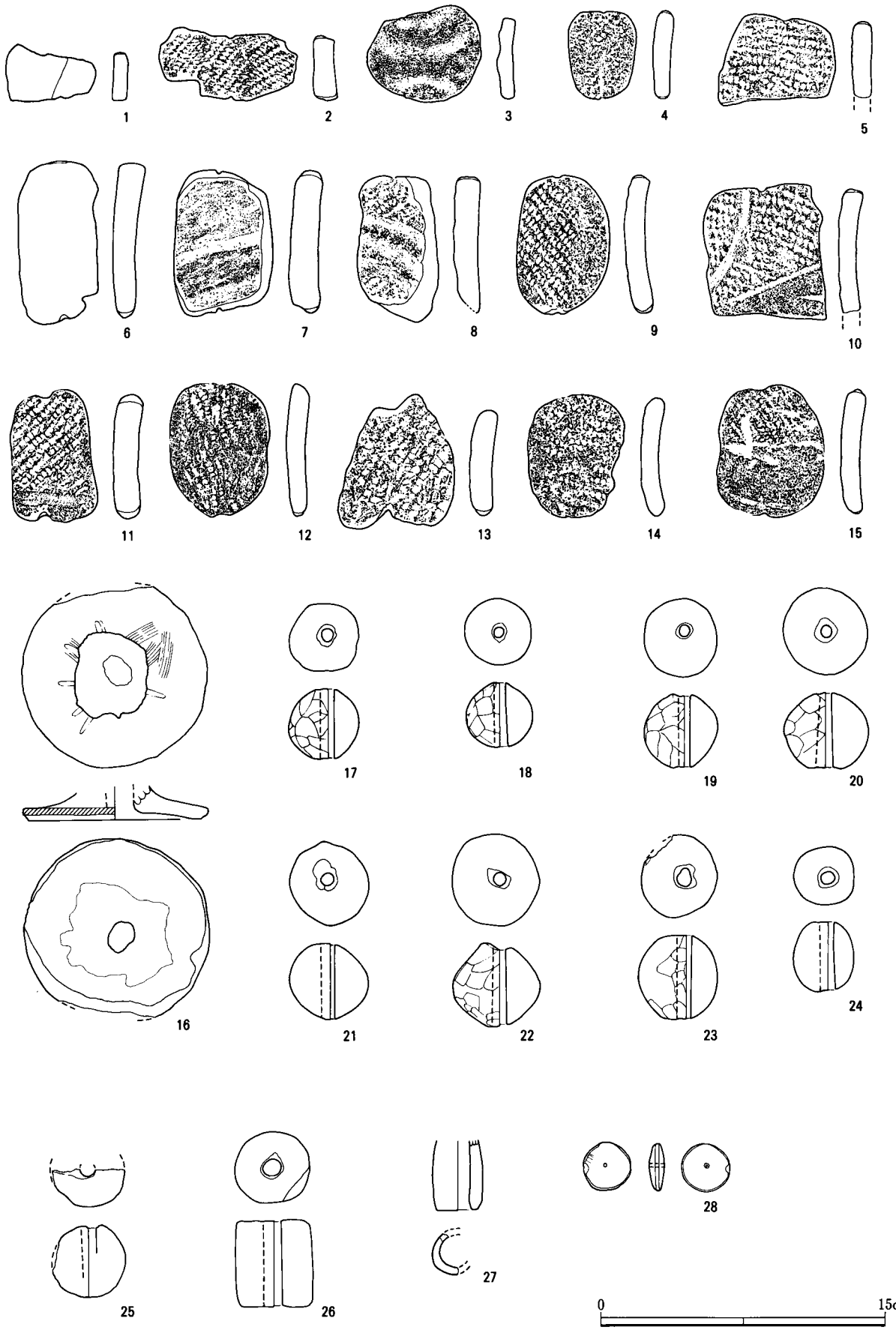
第126図１～３は中期加曽利Ｅ式土器である。いずれもＤ２グリッドＩｂ層上面の出土である。第127図1～15は土器片錘である。1～3は相対する二長辺のほぼ中央に切込みを入れた土器片錘で、4～15は相対する二短辺のほぼ中央に切込みを入れた土器片錘である。土器片の断面は面取りされており、形も角の取れたものとなっている。いずれもＤ４グリッドＩａ層・Ｉｂ層中の出土である。

古墳時代以降（第126～129図、第24表、図版36～38）

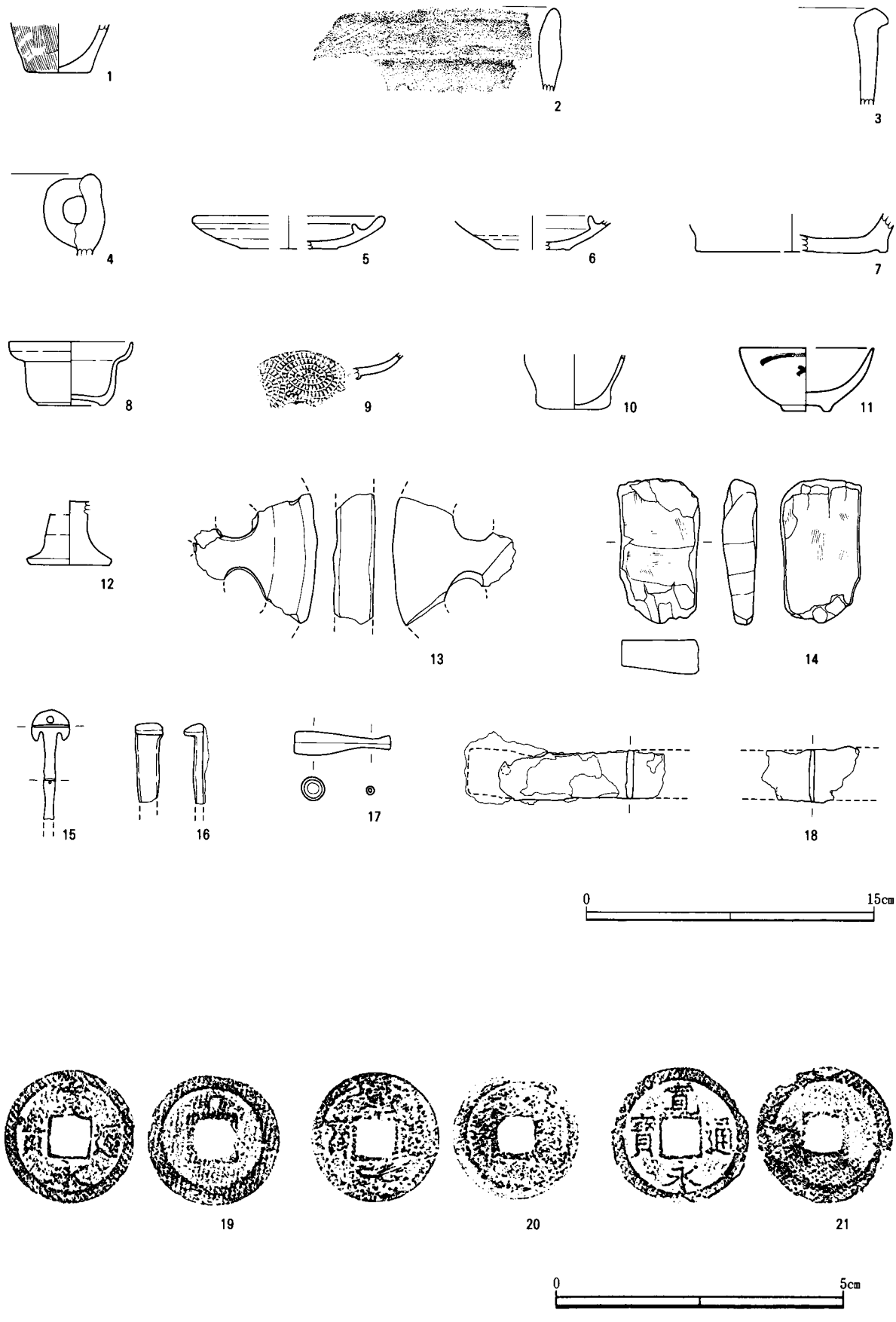
第126図4は器台で、外面は器受部から脚部に向かって丁寧なミガキ調整痕が見られる。5の器台は器受部を欠損しており脚部のみの遺存である。外面は縦位の繊細なミガキ調整痕が見られる。6の器台も器受部の大半を欠損している。わずかに残る器受部から脚部に向かって外面に丁寧なミガキ調整痕及び脚部内面に横位のミガキ痕が見られる。7は台付甕の脚部で、内外面ともハケ調整痕が見られる。8は器台である。器受部の大半と脚部のほぼ1/2を欠損している。わずかに残る器受部には斜位のミガキ調整痕が、脚部には縦位のミガキ調整痕がそれぞれ見られる。9～11は高杯で、杯部と脚部の大半を欠損している。外面にはいずれも縦位のミガキ調整痕が見られる。12は小型甕で外面は縦位のミガキ調整痕、内面は横位の丁寧なミガキ調整痕が見られる。13は土師器の椀である。外面に斜位又は横位のヘラケズリ痕と内面口縁部付近に横位のヘラケズリ痕が見られる。14は口唇部に複合口縁状の段を有する素文の土師器壺の口縁部片である。15は土師器の小型坩で口縁部を欠損している。外面は磨耗が激しいが内面には丁寧なミガキ調整痕が見られ、胴部と口縁部の屈曲部を中心に横位のハケ目が見られる。第127図16は高杯又は器台の脚部を再利用した円盤状土製品で、直径約9.6cmを測る。中央部分は鋭利な利器によるそぎ取り痕を残すが用途は不明である。17～25は土玉である。いずれも外面にヘラ状工具で削って器形及び器面を調整した痕跡を明瞭に残している。26は管状土錘で長径3.9cm、短径3.7cm、長さ4.4cm、重量81.7gを測る。このタイプのものは1点のみ検出された。27も管状の土錘である。他の土玉や土錘に比べて中央の孔の径が大きい作りとなっている。28は小型円盤状土製品で長径2.5cm、短径2.4cm、厚さ0.8cm、内孔径0.2cmを測り、ほぼ正円形を呈する。紡錘車のような用途が考えられるが中心部分の孔が極めて細い。第126図16は全体に黒色処理された土師器の鉢である。外面はナデ調整後のミガキ調整痕が見られ、内面は横位の強いナデ調整痕が見られる。17は甕で外面には丁寧なハケ調整痕が見られ、内面には胴部に横位のヘラ削り痕を残し、口縁部付近には横位の丁寧なハケ調整痕が見られる。18・19はいずれも甕であるが器面の磨耗が著しい。20は小型甕である。底部付近を中心に胴部1/5ほどの遺存であるが磨耗が著しく調整痕等は確認できない。これらの遺物のうち、第126図５・９・11・13～17・19、第127図18～20・24・26は平成２年度本調査区Ｅ１グリッドの溝状遺構の１ａ層・１ｂ層で出土したものである。そのほかは、第126図４・第127図16がＦ４グリッド、第126図６～８・10がＥ２グリッド、12がＥ３グリッド、18がＢ５グリッドから出土した。



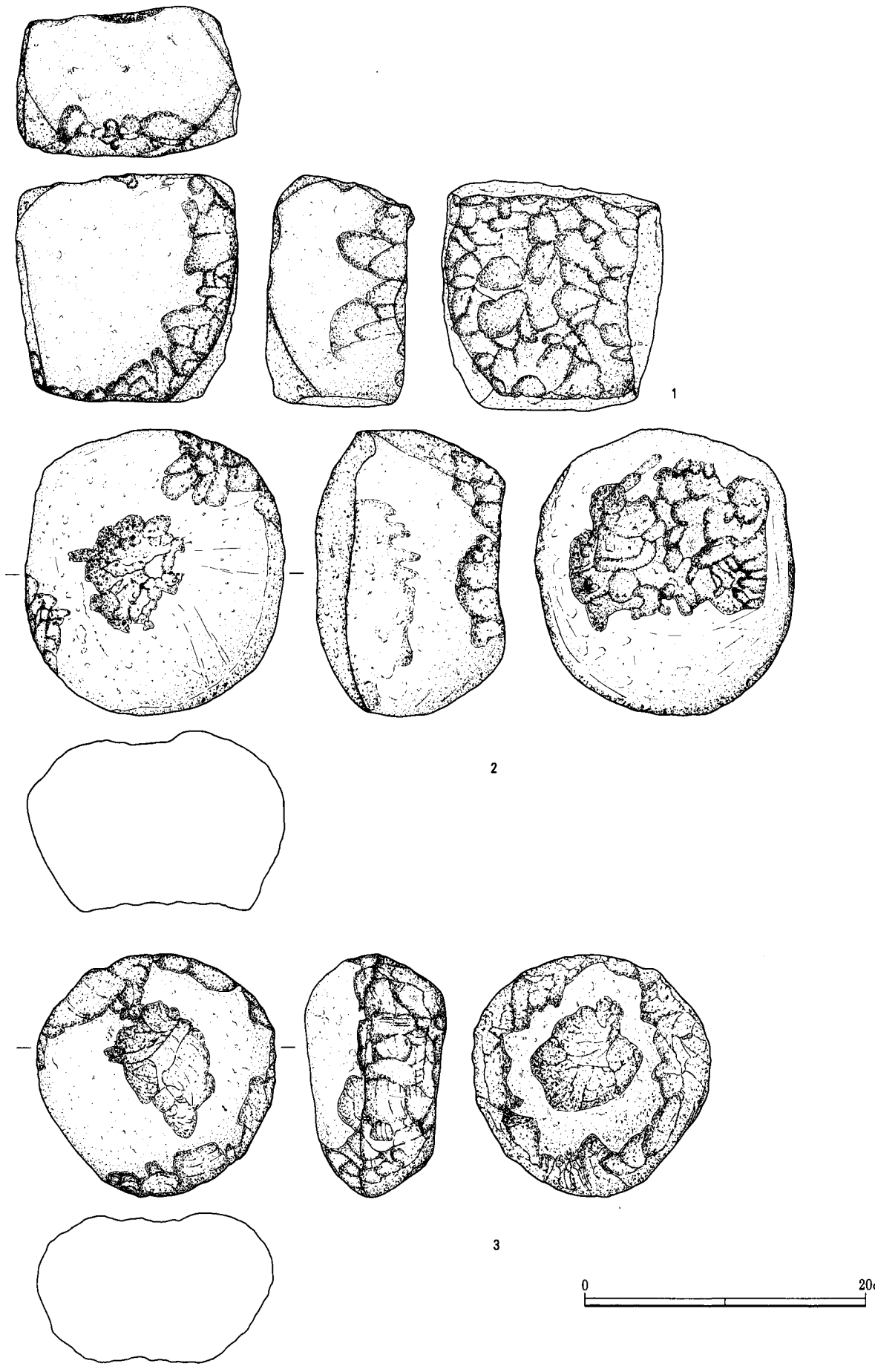
第126図　土　器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
15cm

第127図　土製品



第128図　土製品、石製品、鉄製品、銭貨



第129図　石　塔

図の17・21～23・25の土玉は、それぞれF3・E2・E1・E3・C1グリッドから出土したものである。第128図1は手捏土器である。2は広口の鉢である。3は甕である。4は内耳付きの素焼きの焙烙である。5・6は灯明皿である。7は小型の甕の底部である。D11グリッドのⅡ層中から出土した。9は伊万里の小鉢片である。10は手捏土器である。11は陶磁器の碗である。12は仏飯器である。14は砥石である。15は鉄製品であるが飾り金具様の極めて薄い作りとなっており、用途は不明である。16は鉄釘である。17はキセルの吸口である。18は鉄器である。種別や用途は不明であるが、目釘の痕跡が確認できることから工具の類の可能性もある。第128図に挙げた遺物は、7以外はすべて平成2年度本調査区南端部分のⅡ層中から出土したものである。19・20・21はいずれも寛永通宝である。19はE2グリッド、20はF3グリッドから出土し、21は表採一括資料である。

第129図1～3は石塔の構成部材で、いずれも表採一括資料である。1は立方体に面取りを行った砂岩質の石材で、小型の五輪塔の地輪部分と考えられる。上面は自然面を残すが下面はノミ状の工具でほぼ水平に面取りしている。2は丸味のある円礫の自然面を利用し、さらに形を整えるため角部の面取りを丁寧に行っている。小型の五輪塔の水輪部分である。上面の調整は中央部分をわずかに窪める程度であるが、下面は凹面状に窪めている。3も丸味のある円礫を利用し、周辺は形を整えるための面取りを行っており、上下両面の中央部分は自然面よりもやや窪めて安定しやすい形状に整えている。2と同様小型の五輪塔の水輪部分である。

古市場（1）遺跡の泥炭層から採集された植物種子では、トチ・ジャノヒゲ・ヤブツバキ・シラカシ又はアラカシ・コナラが検出された[2]。

第24表　古市場（1）遺跡銭貨計測表

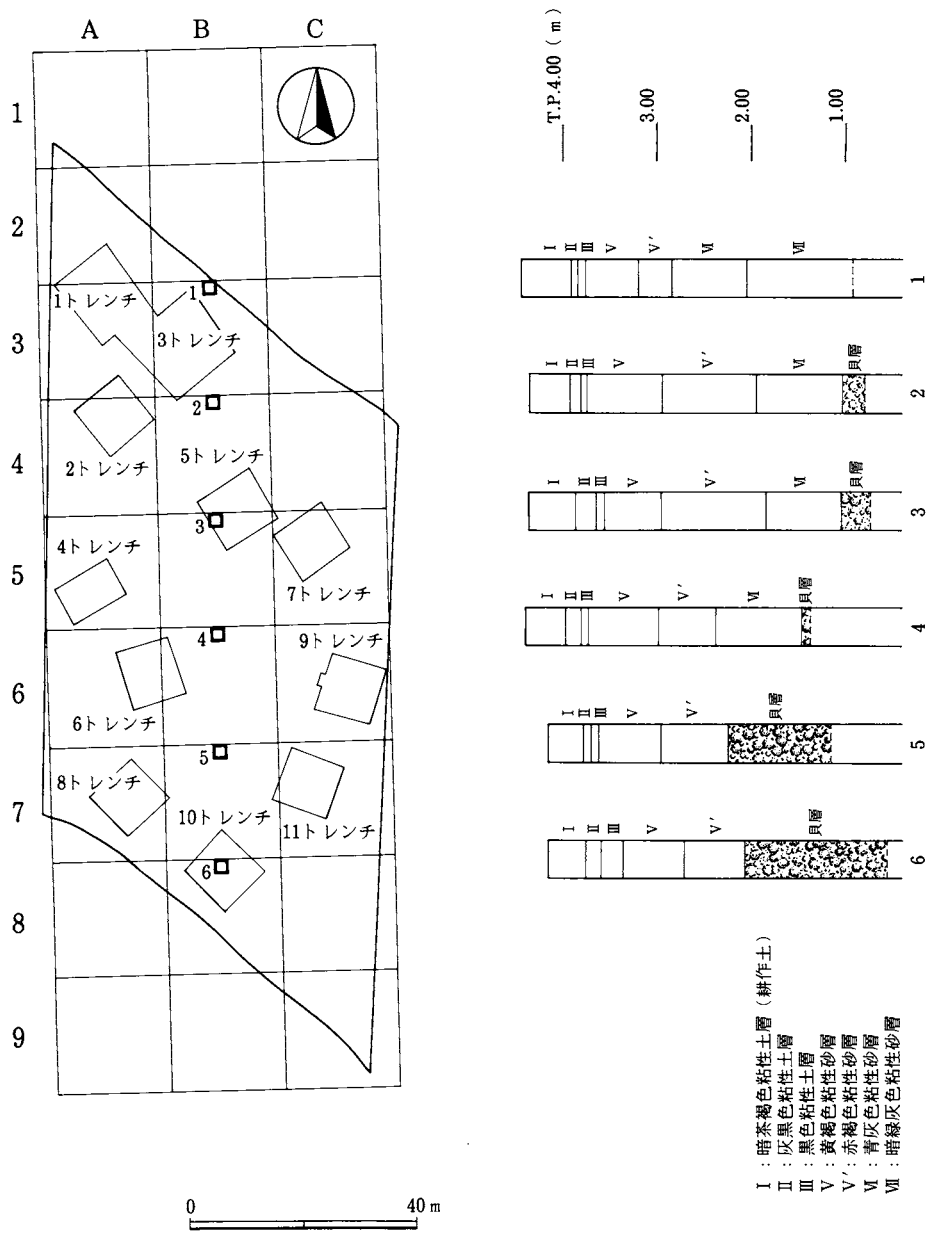
挿図番号	名　称	出土地点	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内郭外径(mm)	内郭内径(mm)	外縁厚(mm)	文字面厚(mm)	重量(g)
128－19	寛永通宝	E2グリッド	23.4	19.4	7.7	6.9	0.9	0.8	1.82
128－20	寛永通宝	F3グリッド	22.8	19.2	7.8	6.4	1.0	1.0	2.38
128－21	寛永通宝	表採	24.2	19.8	7.8	6.5	1.2	1.0	2.15

第２節　古市場（２）遺跡の遺構と遺物

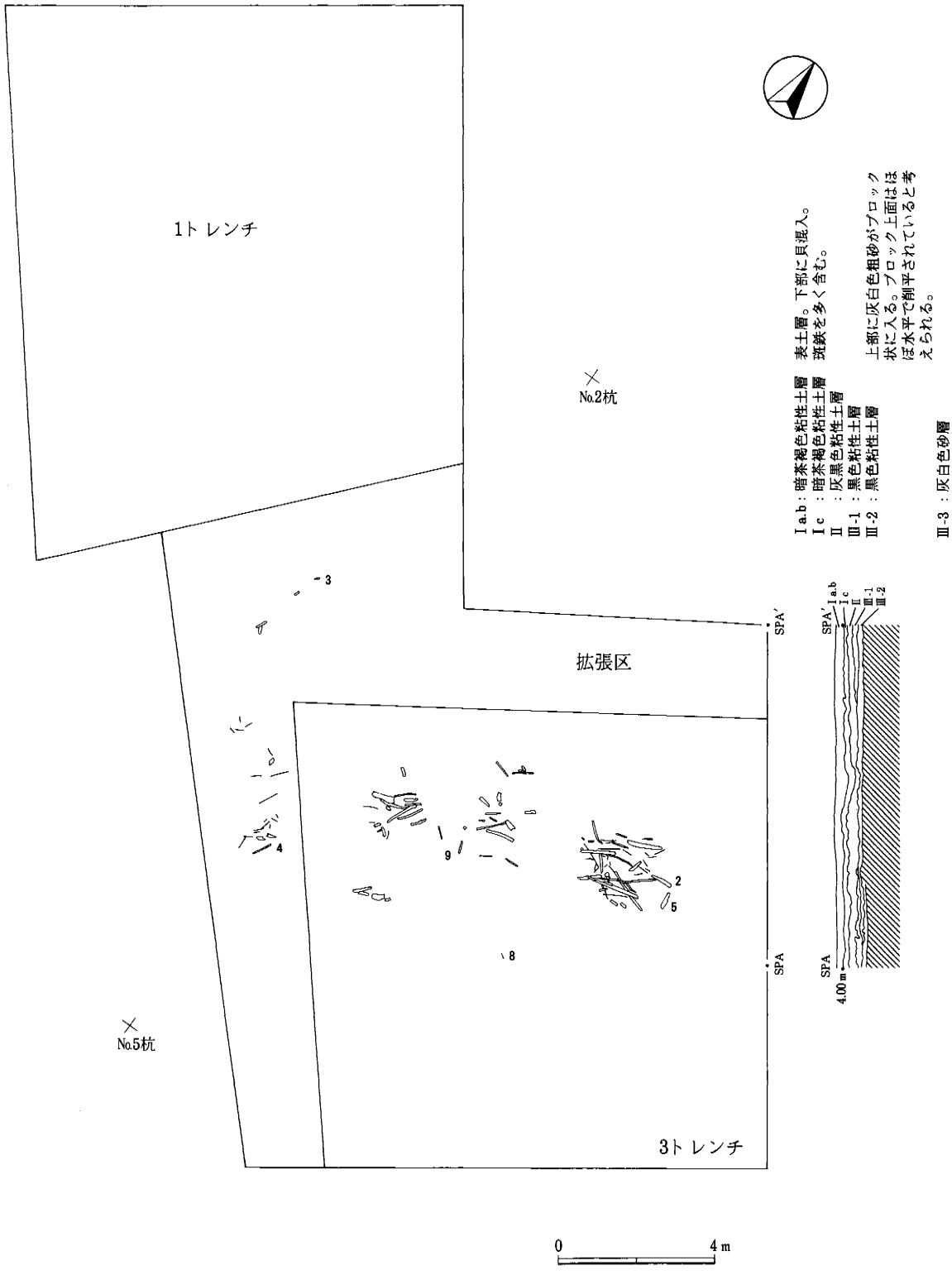
１　発掘区の基本層序（第130図）

古市場（２）遺跡の基本層序は、Ⅰ層の暗茶褐色粘性土層、Ⅱ層の灰黒色粘性土層、Ⅲ層黒色粘性土層、Ⅴ層黄褐色粘性砂層、Ⅴ'層赤褐色粘性砂層、Ⅵ層青灰色粘性砂層、Ⅶ層暗緑灰色粘性砂層に大別され、Ⅴ'層またはⅤ層下部において自然貝層が見られる。

Ⅰ層はⅠa層、Ⅰb層、Ⅰc層に細分され、Ⅰa層は現耕作土、Ⅰb層は土地改良用に混入された貝殻（キサゴ）を含む昭和初期の堆積層、Ⅰc層は斑鉄を多く含む堆積層でこうした地質は旧水田面に多く見られる傾向がある。Ⅲ層の黒色粘性土層は黒色粘性の土壌部分（Ⅲ-1層）と灰白色の粗砂ブロックを混入する部分（Ⅲ-2層）に細分される。Ⅴ層以下の層序では上位の泥炭質の土壌に変わり灰色系の砂層へと変化が



第130図　古市場（2）遺跡の発掘区及び基本層序



第131図　木製品・木材出土状況図

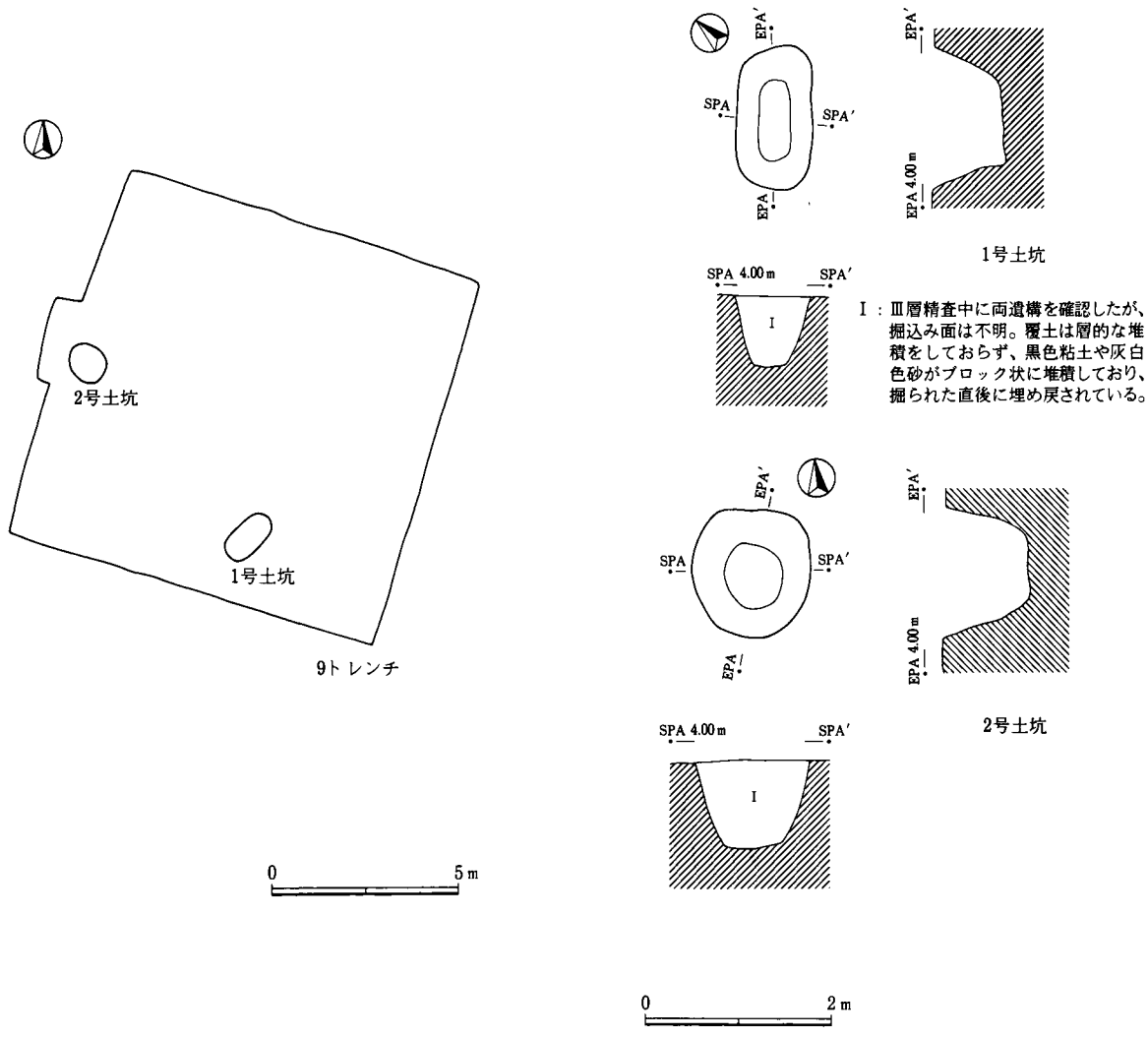
見られる。また、遺跡の北端から南端に向けて下部層序の相対的標高値が徐々に上昇しており、特に自然貝層は遺跡南端付近で急激な上昇値を示すとともに1m前後まで堆積の厚みを増している。

古市場（1）遺跡と古市場（2）遺跡の層序の関係は、（1）遺跡のⅠ層はそのまま（2）遺跡のⅠ層に相当する。（1）遺跡のⅡ層泥炭層は、（2）遺跡のⅡ層・Ⅲ層の灰黒色又は黒色の粘性土層に相当するものと考えられる。（1）遺跡のⅢ層の鉄分を多く含む砂層は、（2）遺跡のⅤ層・Ⅴ'層の黄褐色又は赤褐色の粘性砂層に相当するものと考えられる。（1）遺跡のⅢ層下部～Ⅳ層中と（2）遺跡のⅤ層・Ⅴ'層・Ⅵ層下部に自然貝層が見られることはこのことを裏付けている。

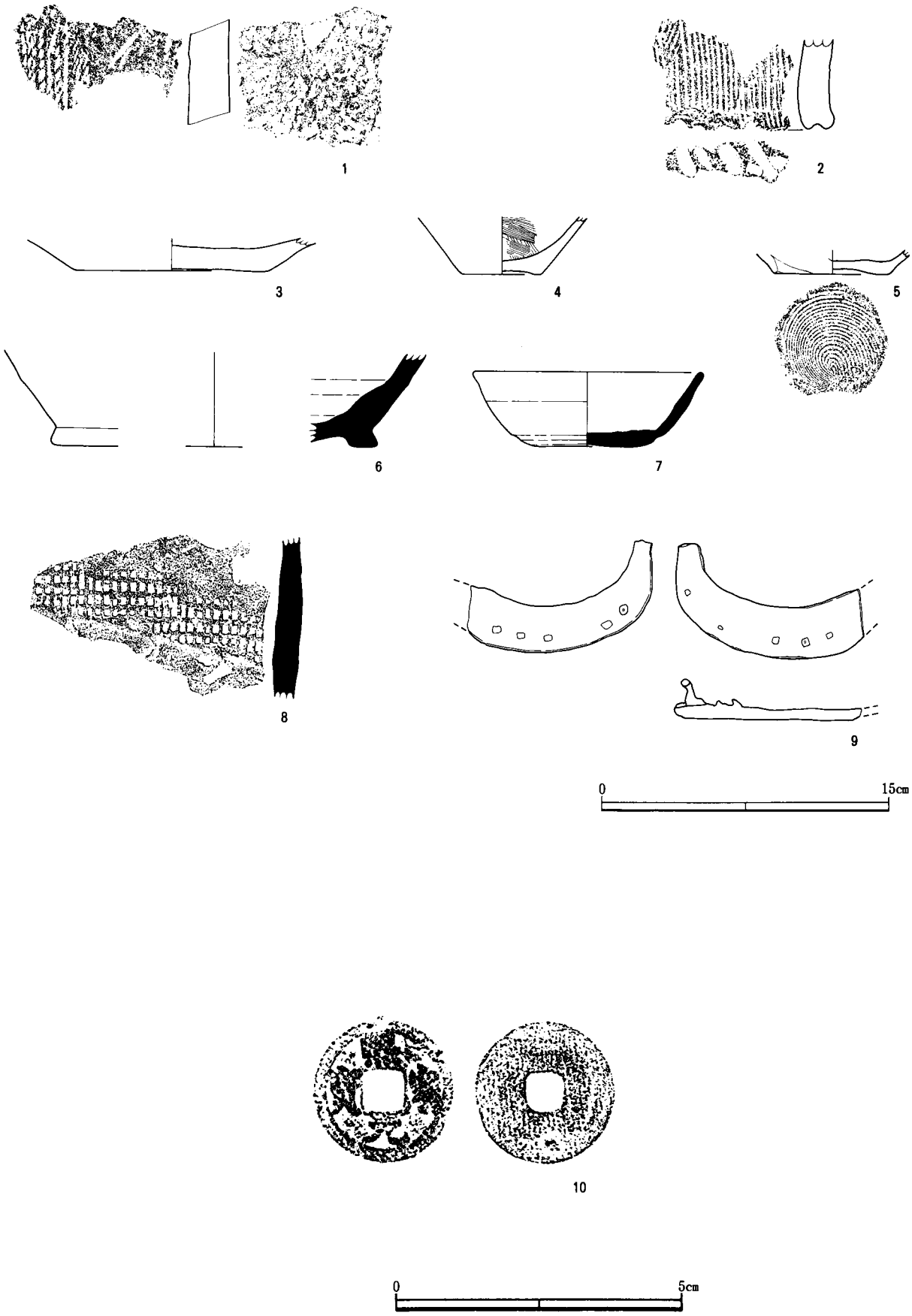
2　検出された遺構

木製品及び木材集中地点（第131図）

3トレンチにおいて大量の木製品及び流木が集中する地点を確認し、1トレンチ方向へと拡張区を設定し広がりの範囲を確認した。流木や木材片に混じって明らかに人為的な加工痕の見られる木製品も検出された。出土の層位はほぼ水平でⅢ層である。



第132図　遺構配置図及び遺構平面図・土層観察図



第133図　古市場（2）遺跡出土遺物

1号土坑（第132図）

9トレンチ南端に位置し隅丸方形の平面形を呈し、規模は長軸約1.8ｍ、短軸約0.8ｍ、深さ約1ｍを測る。覆土は黒色粘土や灰白色砂がブロック状に堆積しており、層序も一様で他の土壌の混入もみられないことから、土坑掘削後あまり時間をおくことなく埋め戻されたものとみられる。

2号土坑（第132図）

9トレンチ西端に位置し円形の平面形を呈し、規模は直径約1.6ｍ、深さ約1ｍを測る。

覆土は黒色粘土や灰白色砂がブロック状に堆積しており、層序も一様で他の土壌の混入も見られないことから、1号土坑同様に土坑掘削後あまり時間をおくことなく埋め戻されたものとみられる。

また、1号土坑、2号土坑ともにⅢ層面で検出されており、時期的には木製品及び木材集中地点の検出された層位と同レベルである。

1号土坑、2号土坑ともに覆土は一気に堆積したことをうかがわせており、水田の水抜き用の穴との見方もできる。

3　出土遺物

土器・土製品・金属製品（第133図、第25表、図版39）

第133図1は平瓦の破片である。縄目の叩き目が残されている。3トレンチⅢ層下部から出土した。2は円筒埴輪の底部付近で、種類及び大きさの推定は不可能である。3トレンチⅢ層から出土した。3・4は甕の底部付近である。5は杯の底部付近で回転糸切り痕が明瞭に残る。6は須恵器壺の底部付近である。7は須恵器杯で、体部は回転ヘラケズリされる。8は須恵質の甕である。3・7は3トレンチ、4は11トレンチ、5は2トレンチ、6は7トレンチ、8は1トレンチから出土した。いずれも層位的にはⅡ層～Ⅲ層上面にかけてである。9は蹄鉄で、表採一括資料である。10は3トレンチⅢ層出土の宋銭で、熙寧元宝である。

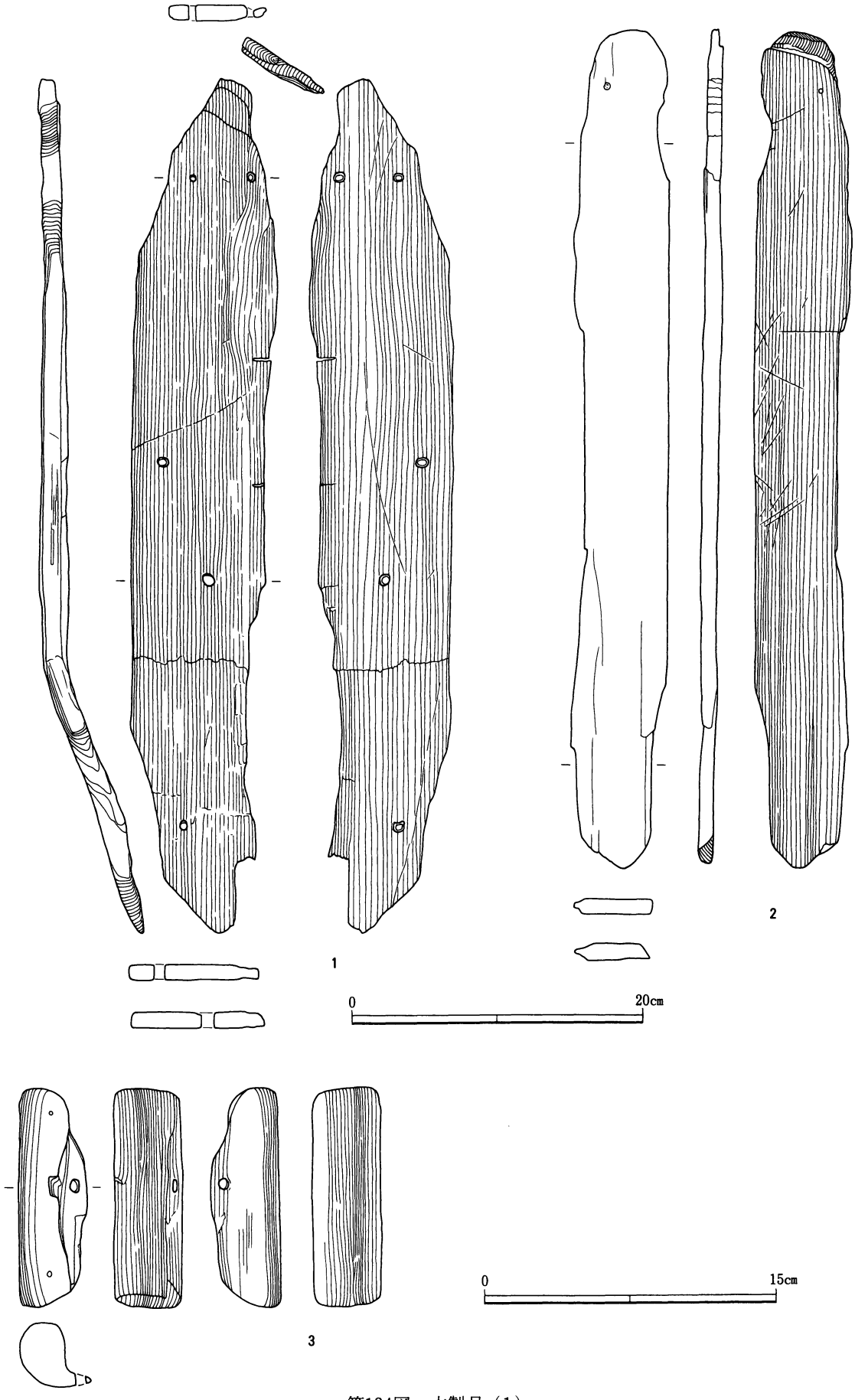
第25表　古市場（2）遺跡銭貨計測表

挿図番号	名　称	出土地点	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内郭外径(mm)	内郭内径(mm)	外縁厚(mm)	文字面厚(mm)	重量(g)
133－10	熙寧元宝	3トレンチ	24.8	20.1	8.1	7.0	1.1	1.0	3.28

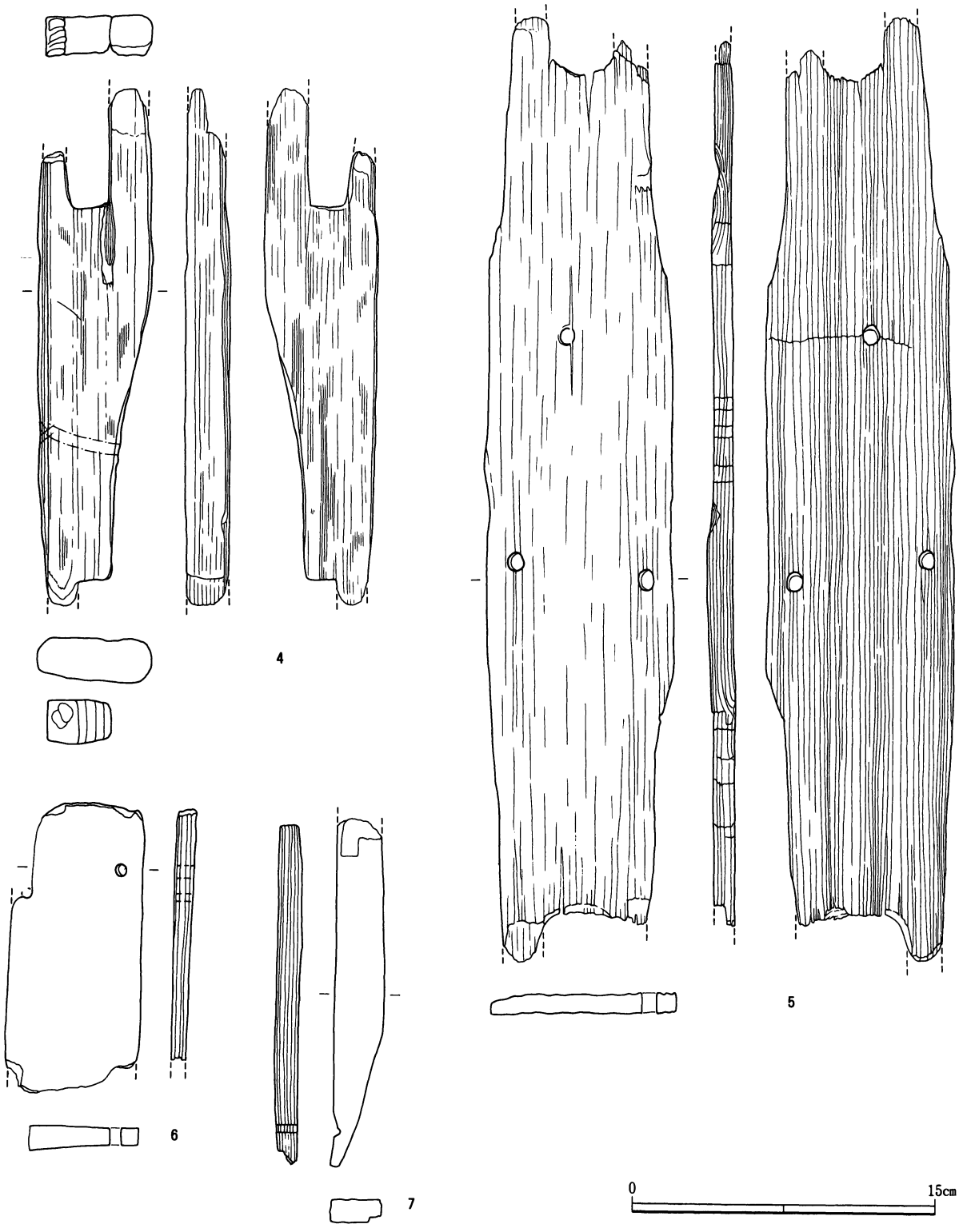
木製品（第134～136図、図版40・41）

古市場（2）遺跡では（1）遺跡に比べて出土した遺物の量は少量にとどまっているが、3グリッドを中心に木材の集中地点が確認され、数点の注目すべき木製品が検出された（第131図中の出土木材の平面分布の中の番号は第134図～第136図の挿図番号と同一である）。このため、1グリッドとの間に拡張区を設定して木材の分布範囲の確認を行った。木材の多くは樹木の幹や枝の類であるが、それらの木材とともに明らかに人為的な加工痕のある木製品が検出された。

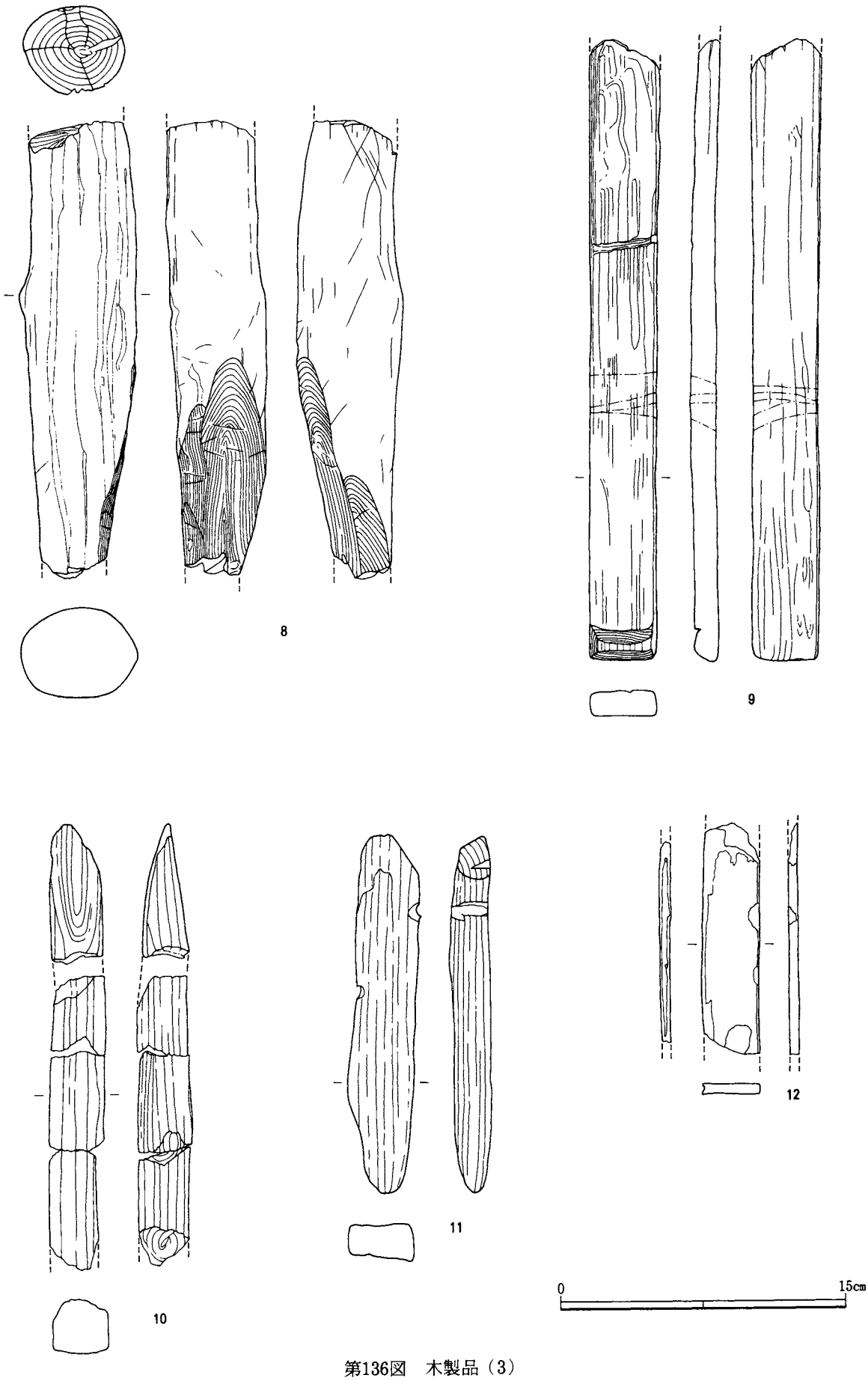
第134図1はスギの板材を加工した木製品である。全長58cm、幅9.6cm、厚さ1.8cm。穿孔位置が平行に並ぶものとずれるものがあり、苗代踏みに用いる大足の桟木部材片の可能性もある。「く」字状に屈曲しているが、本来は平らな板状であったものと考えられる。2もスギの板材又は曲物の底板を利用した木製品



第134図　木製品（1）



第135図　木製品（2）



第136図　木製品（3）

だが、穿孔は一か所のみで用途は不明である。全長56.8cm、幅6.6cm、厚さ0.9cmを測る。3は全長11.1cm、幅3.6cmの断面L字形の穂摘具である。1トレンチ・3トレンチの間の拡張区から出土したものである。目釘孔が2か所確認できるので、恐らく鉄製の刃部が伴うものと考えられるが、木部のみの出土である。類似の資料は市原条里制遺跡市原地区からも検出されている[3]。第135図4はホゾ孔状の抉りを有する木製品で、用途は不明だが他の木製品の支えないしは継ぎ手のような用途が推測され、細くくびれた部分にはひも状のものを巻き付けた形跡がうかがわれる。全長25.2cm、幅5.7cm、厚さ22.5cmを測る。5は全長46.2cm、幅9.5cm、厚さ0.9cmのスギの柾目材を加工したものである。短辺側にはU字状に削ぎ込みが確認され、これを円孔部分で欠損したものと考えると大足の梯子状の枠板のうち横枠板の可能性も考えられる。6も板材に穿孔を1か所有するが用途は不明である。7は細い板材の一部分のみで穿孔部分から半裁されており、あるいは使用途中で欠損したものとも考えられる。用途は不明である。第136図8は杭で、鉈様の鋭利な刃物で杭先を調整している。9は全長32.4cm、幅3.5cm、厚さ13.5cmの板状の木製品で一端に削ぎ込み部分がある。また、中央部分に布状のものを巻いた痕跡も見られるが用途は不明である。

2～5・8・9は3Bグリッド及びその拡張区の同一層序すなわちⅢ層出土のものである。1・6については一括取上げ資料であるが人的な加工痕を有する。出土レベルは不明であるが、同一地点での検出で、他の木材片や木製品と一連の集積中にあったので、同一層位からの出土であると考えられる。

注1　大谷弘幸　1993「茂原街道に隣接した溝跡について」『研究連絡誌』第38号　(財)千葉県文化財センター

2　石川茂雄　1995『原色植物種子写真図鑑　SEED/FRUITS OF JAPAN』石川茂雄図鑑刊行委員会
木村陽二郎　1991『図説草木名彙辞典』柏書房

3　大谷弘幸　1996「穂摘み具の変遷と稲の穂首刈り－市原条里制遺跡出土の鉄製穂摘み具から－」『研究連絡誌』第46号　(財)千葉県文化財センター

第4章　まとめ

第1節　今富新山遺跡

1　旧石器時代

（1）石器群の概要

今富新山遺跡の旧石器時代の資料は、本文で説明したが、ここで改めてまとめとして考察してみることにする。石器群の概要は以下のとおりである。

① 出土石器は449点。集中地点は5ブロック検出された。

② 資料はすべて同時期に使用されたものと思われる。

③ 石器の生活面は、Ⅴ層～Ⅳ層下部の時期と思われる。

④ ブロックの接合関係は、各ブロック間で頻繁に接合する。

⑤ 器種組成では、ナイフ形石器・角錐状石器・磨石がこの石器群の特徴を示している。

⑥ 礫群は、剥片・剥片石器類と平面・垂直分布ともにほぼ重複して分布する。

⑦ 石材構成は、頁岩A・凝灰岩・ホルンフェルスを主体とする。このほかにわずかではあるが緑色凝灰岩（グリーンタフ）と黒曜石が含まれる。

⑧ 母岩は多種の母岩で構成され、各母岩は5点以下のものがほとんどである。

⑨ 石核の割合が高く4.9％（22点）、多種で少量の母岩を消費していることがうかがわれる。

（2）器種組成（第137・138図）

①ナイフ形石器（1～3）

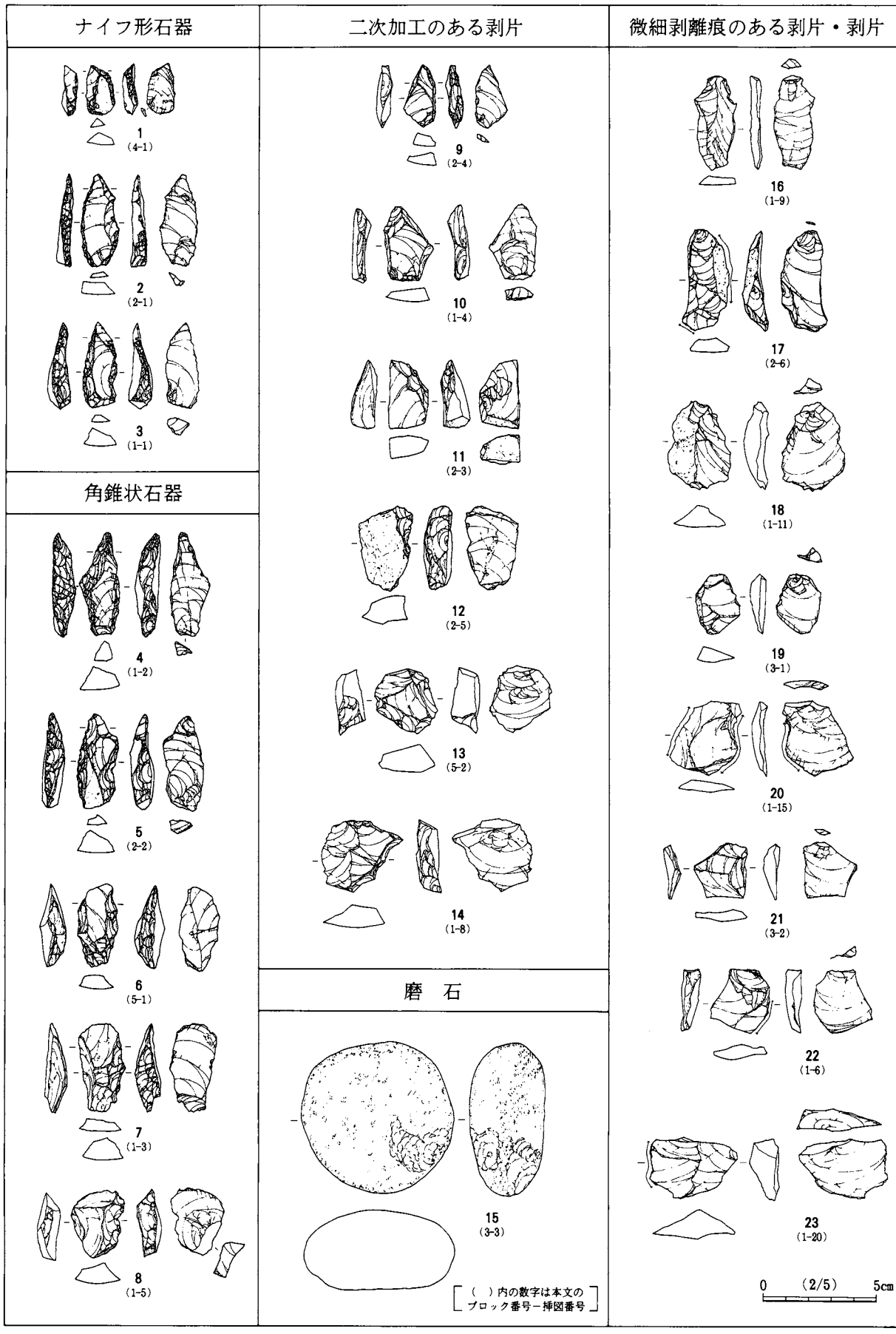
一側縁と基部にブランティング加工のあることが特徴である。縦長の剥片を素材として、長軸を主要剥離方向からほんのわずか斜めに設定している。打面をわずかに残している。大きさは、小型のものも含まれる。すべて単独母岩である。

②角錐状石器（4～8）

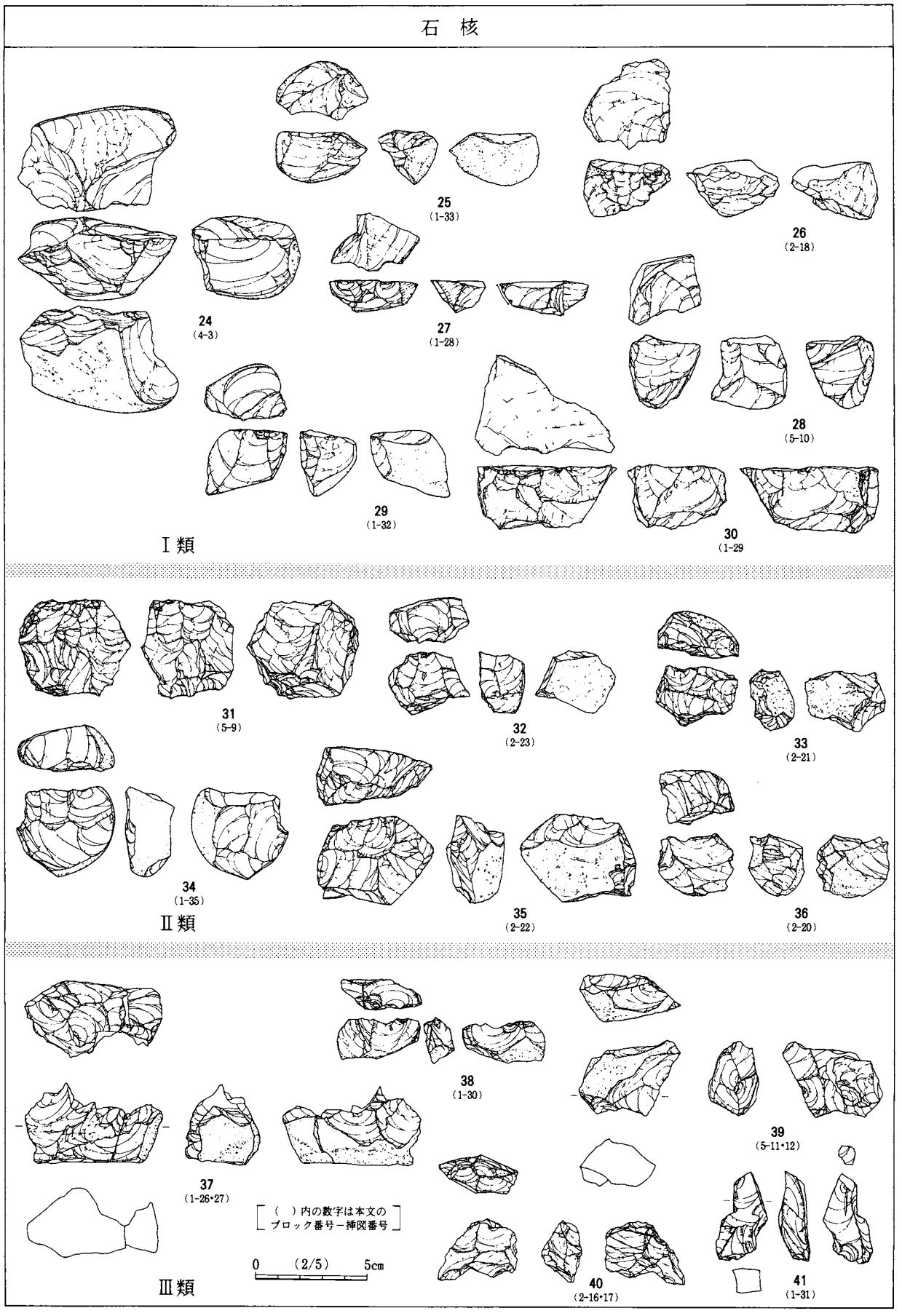
やや厚みのある幅広の剥片を素材としている。素材の用い方を長軸と主要剥離方向との関係で見ると、一致するもの（4・5）、やや斜めのもの（7）、直行するもの（6・8）があり、多様な素材の用い方がされている。調整加工は、素材の両側縁、あるいは、一側縁を折断して成形し、比較的荒い加工を施している。背面からの調整加工のある錯交剥離のものも見られる（4）。器体の形状は、一側縁が張り出す形状のもの（4・5）、側縁の丸みのあるもの（6）など多様である。尖頭部の形態は、錐状に作出するもの（4・5）、広がるもの（6～8）がある。単独母岩（4・5）と数点で構成される母岩（6～8）のものがある。

③磨石（15）

多孔質安山岩の偏平な円礫を素材とし、全面を研磨している磨石が1点出土している。側縁は全周に敲打されている。偏平な円礫を素材として、側縁を敲打により成形し、全面を研磨することにより、平面形状が正円形を呈する磨石を作り上げているものと思われる。この形態の磨石は、Ⅳ下・Ⅴ層段階で特徴的に出土している。



第137図　今富新山遺跡旧石器器種組成（1）



第138図　今富新山遺跡旧石器器種組成（2）

④二次加工のある剥片（９～14）

素材の形状は、横長幅広の不定形な剥片を用いるものが多い。調整加工は、折断した後に、比較的荒い調整加工を行うものが主体を占める。これらの素材の用い方や調整加工は、角錐状石器（４～８）に見られた特徴と一致するものである。

⑤微細剥離痕のある剥片・剥片（16～23）

剥片の形状は、横長幅広で不定形なものが主体を占める。わずかに縦長のものがあるが（16・17）、背面は多方向の剥離で構成されており、両側縁は平行ではなく、石刃と呼べるものはない。打面は、ほとんどのものが平坦打面で、打面調整は行われていない。微細剥離痕は、剥片の末端部の鋭利な部位に残される（17・20・23）。折断されている剥片も多く見られる（17・21・22）。

⑥石核（25～41）

石核が22点（4.9％）で出土点数の割には多く出土している。これらの石核は、大きく分けてⅠ類からⅢ類に分類される。

Ⅰ類（25～30）　分割礫を素材として、分割面を打面に設定し、剥片を剥離する。打面の転移はほとんどない。下端部からの石核調整が見られるものがわずかにある（26）。剥離の進行は、正面で終結し、裏面には自然面を大きく残すものが多い（24・25・29）。大形のものが比較的多い。剥離面から、縦長剥片をわずかに剥離しているが、横長剥片を主に剥離していることが観察される。

Ⅱ類（31～36）　打面転移が頻繁に行われ、残核の形状はサイコロ状を示す。自然面を部分的に残す（32～36）。剥離面から、横長の剥片を主に剥離していることが観察される。

Ⅲ類（37～41）　180度打面を転移し、交互剥離を頻繁に行う。残核の形状はチョッパー状を示す。素材の形状は、分割礫（37～39）や剥片（40・41）があり、大きさや形状が多様である。Ⅰ類・Ⅱ類に比べて小形のものが主体を占める（38・40・41）。剥離面から、横長剥片を主に剥離し、Ⅱ類に比べると小形で横長幅広の剥片を剥離していることが観察される。

⑦礫

礫の本石器群に占める数量的割合は、極めて高い（61.7％）。熱を受けており、破損したものも多い。各ブロックに、石器と平面・垂直分布ともに重複する。これらの礫は、礫群としてとらえられる。礫は円礫を主体とし、長さが20㎜～50㎜、重量が２ｇ～50ｇ程度の小形のものである。石材は、石英岩111点、砂岩77点、石英ハン岩68点、ホルンフェルス13点、凝灰岩６点、チャート２点で構成される。

（３）石器製作技術

①剥片生産技術

剥片生産技術は３類に分類され、石核の分類と対応する。すなわち、剥片生産技術Ⅰ類は石核Ⅰ類、剥片生産技術Ⅱ類は石核Ⅱ類、剥片生産技術Ⅲ類は石核Ⅲ類にそれぞれ対応する。打面調整はなく、頭部調整がわずかに行われている。打面転移は頻繁に行われる。縦長の剥片は、わずかに生産されるが、石刃と呼べるものはなく、横長剥片を主に生産している。横長剥片は、打面部が幅広のものが多い。

②二次加工技術

折断が頻繁に行われている。調整加工は、切断面を打面として行うものが多く、比較的荒い加工である。石器群全体では、このような二次加工でほぼ占められる。二次加工のある剥片と角錐状石器の二次加工技術は類似しており、共通の二次加工技術と言える。それに対して、ナイフ形石器の二次加工技術は、微細

で急角度のブランティング加工であり、石器群の中では、異質な加工技術である。

（４）母岩消費について

① 母岩と器種との対応関係

角錐状石器・二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片・剥片・石核は数点で構成される母岩から作られているのに対して、ナイフ形石器は単独母岩で構成されるという特徴がある。この二つの際立った特徴は、二次加工技術にも同様のことが言えた。

②原石の形状の推定復元

石核の形状においては、自然面を大きく残すものが多かった。自然面の形状から、石材別に原石の形状を推定復元して見ると以下のようになる。頁岩A・頁岩Bは10cm前後の亜角礫、黒曜石・チャートは大きさは不明だが亜角礫、凝灰岩は10cm～15cmの円礫、ガラス質黒色安山岩は10cm前後の円礫、ホルンフェルス・トロトロ石・緑色凝灰岩は15cm～20cmの円礫がそれぞれ原石として用いられたと推定される。

③剥片生産技術と母岩消費

剥片生産技術は、石核の大きさ（母岩の大きさ）と密接に関連していると推定される。石核の大きさは、石核の分類と対応させると、大きいものから順番に記述すると、石核Ⅰ類→石核Ⅱ類→石核Ⅲ類になる。石核の大きさや石核の剥離の進行と自然面の占める割合などから、母岩消費の過程をおおまかに推定すると、初期段階は剥片生産技術Ⅰ類（石核Ⅰ類）、次に剥片生産技術Ⅱ類（石核Ⅱ類）、最終段階は剥片生産技術Ⅲ類（石核Ⅲ類）の順に母岩を消費したものと思われる。

④礫群の礫の採取方法について

本遺跡の位置する袖ヶ浦台地は、地質的には立川面に当たり、ローム層の下位に成田層が堆積する。東関東自動車道の地質調査では、立川面の縁辺に位置する今富付近では、成田層上部の姉崎砂礫層が地表面に露出しており、礫の大きさは５㎜～30㎜の円礫が主体であったと報告されている[1]。遺跡において検出された礫も、遺跡の近辺に位置する台地の縁辺の姉崎砂礫層が露出している場所から礫を採取し、遺跡に持ち込んだ可能性が高い。ちなみに、縄文時代早期後半において、この地域で礫群を伴う遺跡が非常に多いが、礫の入手方法も同様な方法が採られたと推定される[2]。礫以外の剥片・剥片石器類の母岩の入手については、判然としないが、姉崎砂礫層の礫の石材構成においては良質のチャートやメノウが含まれる。

（５）石器製作体系について

①遺跡内での石器製作

遺跡で検出された母岩の構成は、５点以下で構成される母岩がほとんどであった。石核の占める割合が高く、接合が数資料見られた。遺跡に多種で少量の母岩を持ち込んで、遺跡内で必要に応じて石器を生産したものと思われる。上述の母岩と器種の対応関係で検討したように、遺跡内で必要に応じで生産された石器は、主に角錐状石器をはじめ、二次加工のある剥片、横長剥片であったと推定される。ただし、すべてが遺跡内で生産されたものではなく、持ち込まれたものも当然あると思われる。それに対して、ナイフ形石器は、製品の形で遺跡内に持ち込まれたものであった。

②移動生活の中での石器製作

母岩消費に関しては、初期の段階から最終段階のものまで、各段階の石核や剥片が偏りなく少量ずつ遺跡に残されていた。このような母岩消費の各段階の石器が含まれることは、頻繁に移動生活し、最小限の道具（石器）を携えて移動し、必要に応じて各遺跡で石器製作を行った行為の累積と考えることが可能で

ある。また、母岩消費の各段階のもので構成されているもう一つの要因として挙げられることは、移動生活の中で、常に母岩を供給できるシステムがあったと推察されることである。このシステムがないと、母岩消費は最終段階のもののみで構成されることになる。本石器群において、剥片の出土点数の割には、石核の出土点数が多いことが特徴として挙げられ、また、石核も石核Ⅰ類のように母岩消費の初期段階と想定されるものも多く含まれていた。母岩供給の一つの方法として、まだ剥片が生産できるような石核（石核Ⅰ類）を遺跡にストックしておき、他の遺跡に移動し、他の遺跡でも同様にストックする。母岩が不足すると、ストックしておいた遺跡に回帰して母岩を消費するというように、母岩が枯渇しないような方法が、本遺跡においても採用されていたと推察される。

（６）石器群の位置付けと問題点

本遺跡の特徴的な石器は、ナイフ形石器・角錐状石器・磨石であった。剥片生産技術は、打面転移を頻繁に行い、主に横長幅広の剥片を生産していた。二次加工技術は、折断により成形加工し、比較的荒い調整加工が施されていた。石器製作技術から、ナイフ形石器は搬入品であり、角錐状石器は本遺跡においても生産された可能性があることが推察された。

これらの石器群の特徴をもとにして、石器群の位置付けを行うことにする。この石器群の中で最も指標になる角錐状石器の特徴を改めてまとめると以下の点が挙げられる。

①遺跡内で製作の痕跡がある。 ②石器群の組成の主体をなす。 ③形態は多様である。 ④縦に長い形状を呈するものが多い。 ⑤大きさは大型品と小型品がある。 ⑥石材は頁岩A、凝灰岩、チャート、ホルンフェルスで構成され、多様な石材を用いる。

角錐状石器がⅤ～Ⅳ下層段階の石器群を特徴付けている。亀田氏は、角錐状石器の形態変遷をⅠ期からⅢ期の3段階に区分しているが[3]、これに従えば本石器群はⅡ期の特徴とほぼ一致する。角錐状石器形態変遷Ⅱ期は、柏ヶ谷長ヲサ遺跡[4] 第Ⅸ文化層（Ｂ２Ｌ下部）、下戸塚遺跡[5] 第1文化層（Ⅴ層上部）、東早淵遺跡[6] 第４地点第1文化層を指標とする。下総台地の類例としては、Ⅴ～Ⅳ層下部に生活面をもつ取香和田戸遺跡（空港№60遺跡）[7] 第４文化層L地点・H地点、香山新田新山遺跡（空港№10遺跡）[8]G・H・I・L・Mブロック、神田山Ⅱ遺跡[9]、武士遺跡[10] 第５文化層が挙げられる。

多孔質安山岩製で楕円形礫を全面研磨した磨石は、相模野台地や武蔵野台地においてⅤ～Ⅳ層下部段階に特徴的に見られる石器である[11]。これらは、数点まとまって集石状に出土する。類似した磨石が出土した遺跡としては、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅷ文化層（Ｂ２Ｌ中部）・第Ⅸ文化層（Ｂ２Ｌ下部）、小平市西之台B遺跡[12]（Ⅴ層上部）などが挙げられる。下総台地においては、井戸向遺跡[13] S－24ブロック（Ⅴ～Ⅳ層下部）から大きさに斉一性のある安山岩と砂岩が４点出土しているが、類例は非常に少ない。ただし、本遺跡においても1点のみの出土であり、注意を払って分類しないと見逃してしまう可能性がある器種である。今後は、下総台地においても、多孔質安山岩製の磨石が出土した例がないかどうかの検討が必要であろう。また、出土層位は下層になるが、馬場遺跡[14] のⅥ層直上から、多孔質ではないが安山岩製の偏平な円形の礫の側縁を敲打したものが１点出土しており、素材と形態において共通点が見られる。しかしながら、馬場遺跡のものは側縁の敲打による潰れが顕著であり、今富新山遺跡のものはそれほど顕著ではない。層位的には異なるが、礫石器の形態的な変遷について、今後検討が必要になろう。

本石器群の編年的な位置については、下総台地における田村・橋本編年ではⅡb期[15]、相模野台地における諏訪間編年では段階Ⅴ[16]、亀田氏の角錐状石器の形態変遷ではⅡ期[17] にそれぞれ位置付けられる。

2　弥生時代以降の集落

今富新山遺跡で検出された住居跡は、炉などごく一部のみのものも含めて合計81軒を数える。ただし、時期の明らかにならない住居跡が全体の4割を超えている。時期の推定できる住居跡をここで挙げてみると、まず弥生時代に属すると考えられる住居跡は19軒（015・019・020・033・034・039A・040・050・056・061・064・079・081・085・087・091・093・094・105号）ないし21軒（プラス037・090号？）、古墳時代前期に属すると考えられる住居跡は6軒（049・054・066・070・071・072号）ないし17軒（プラス031・032・042・062・068・084・089・092・098・100・102号？）、古墳時代中期に属すると考えられる住居跡は3軒（016A・021・076号）ないし4軒（プラス074号？）、奈良・平安時代に属すると考えられる住居跡は3軒（004・051・053号）ないし4軒（プラス052号？）である。縄文時代以前については、遺物は出土したものの、遺構等は検出されておらず、不明である。いずれにしても集落としては弥生時代後期から古墳時代前期を主体とするものであったと言えよう。

住居跡は比較的平坦な調査区南半部に集中する傾向にあるが、尾根部に当たる調査区北半部の1号墳墳丘下にも、複雑な切り合い関係をもつ住居跡群が検出されている。恐らく調査区南半部を中心として、主に東西方向、北西方向に拡がりを見せるものであったのだろう。また、当遺跡の住居跡は全体的に確認面からの深さが浅く、斜面側の部分を失っているものが多いが、これは自然流失というよりは、1号墳の墳丘中から住居跡群出土のものと同様の遺物が夥しい量で出土していることなどを考慮すると、1号墳築造時にある程度削平が行われた結果であると考えたほうが妥当であろう。また、1号墳周溝部から住居跡が1軒も検出されなかったのも、古墳を造る際に完全に削り取られてしまった可能性が高いと考えられる。ただ、当遺跡の住居跡群では、弥生時代に属すると考えられる住居跡の方が古墳時代以降のものより大きく深く、柱穴などもしっかりしており遺存度が高いという傾向を指摘することができる。

この集落のその後については、第1章で述べたように、今富新山遺跡の北側に隣接し、15m～25mほど低い段丘上に立地する今富遺跡で、やや新しい古墳時代から奈良時代にかけての集落が営まれていたのが確認されている[18]。奈良・平安時代には、そのさらに北側の低地に、掘立柱建物跡群の検出された村上遺跡[19]や、郡衙跡、郡寺跡などと推定される遺跡が存在しており、時代を経るに従って集落の中心が北側の低地に移っていった様子を窺うことができよう。

3　1号墳とその被葬者

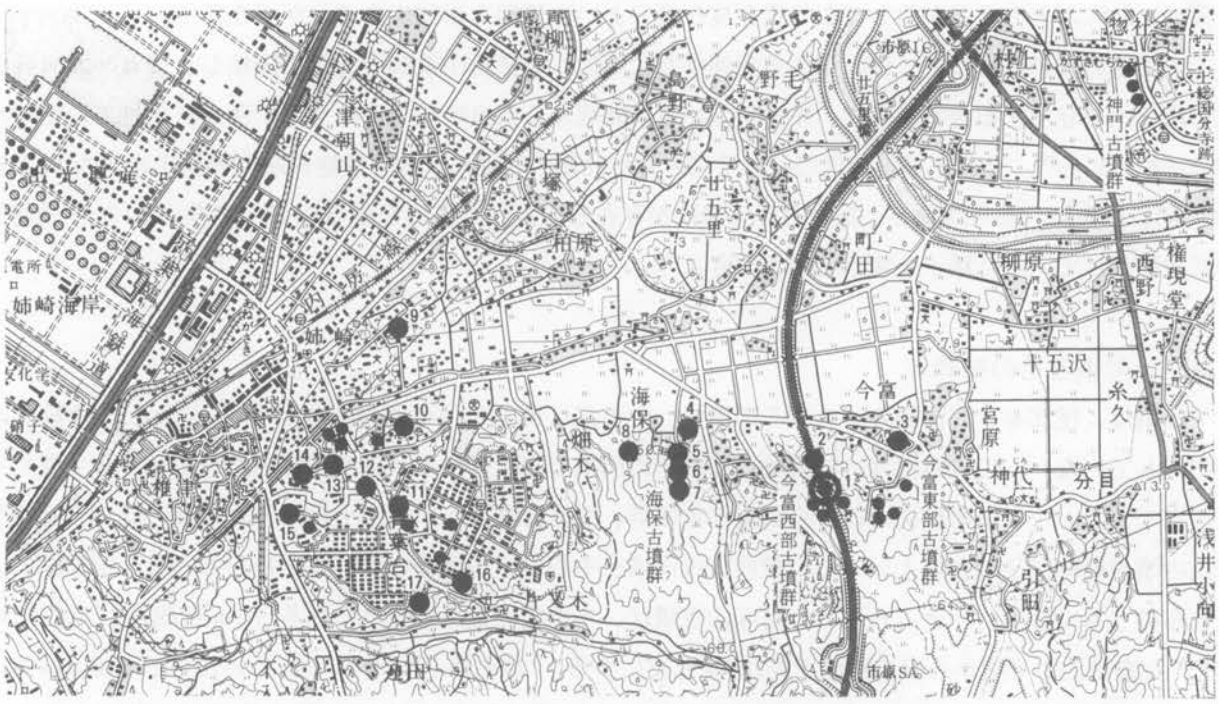
1号墳は、径26m、周溝幅5mを測る円墳で、中央部に長さ5.5mの墓壙が1か所存在する。埴輪は全く出土していない。この古墳は、位置的には中小の円墳で構成される今富西部古墳群の1つとして捉えることができる。1号墳の周辺には、今富東部古墳群、海保古墳群といった小規模の古墳群のほか、姉崎天神山古墳や姉崎二子塚古墳といった大型前方後円墳を中心とする姉崎古墳群が存在している（第139図）。これらのうちで最も古いとみられる今富塚山古墳は、4世紀の築造と考えられる110mを測る前方後円墳で[20]、今富新山1号墳から直線距離で約700m北東にある。最も新しいとみられる古墳は、約2.8km西にある六孫王原古墳[21]、北約200mにある長老塚古墳[22]で、墳丘の形はそれぞれ前方後方形、方形と異なるが、いずれも7世紀の築造と考えられる。

1号墳の築造年代については、古墳の年代を示す遺物がほとんど周溝部出土の須恵器のみといってよい状況であるが、これは底面からやや浮いているため、直ちに築造年代を示すとみなすわけにはいかないだ

ろう。少なくとも何らかの古墳祭祀に伴って供献されたものとみることはできるものの、築造は須恵器の年代よりやや古くなる可能性がある。須恵器はMT85・TK43型式に比定され、6世紀後半の年代を示すものであるが、内部施設から剣が出土していること、大刀の年代が、確定はできないものの6世紀前半代の可能性ももっていることなどを考慮すれば、少なくとも6世紀前半までは考え得る範囲と言えるだろう。しかし今富新山1号墳の築造年代については、今のところ、概ね6世紀中頃～後半にかけてと捉えておくのが妥当と思われる。

1号墳の墓壙からは、副葬品として刀剣類ばかりが出土している。その中で最も注目されるのが金銅装の飾り金具をもつ銀装の大刀であるが、装飾付大刀については、全国的に見ると主に後期の前方後円墳で出土する傾向があるという。しかしその数は極めて少なく、柄頭のみや部分的な金具のみの出土例を含めても、全国の古墳総数に対して0.2%にも満たない。それは、主要な古墳のみに限っても5%弱にすぎないという[23]。今富新山1号墳の場合、装飾付大刀といっても、柄縁と鞘尻に部分的に銀製、金銅製の飾りがつくのみのものではあるが、県内で出土した例を探してみると、1996年までの段階で15古墳という数字である[24]。これは、数では群馬県と並んで全国一であるが、県内の例を見渡してみるとやはり装飾付大刀を出土する古墳は、すべて前方後円墳に限られるようである。

装飾付大刀を出土した古墳は、今富新山1号墳の周辺では、6世紀代とみられるものでは、姉崎山王山古墳、原1号墳などがあり、いずれも姉崎古墳群を構成するそれぞれ70m、80mの前方後円墳である。姉崎山王山古墳は今富新山1号墳から約3.4km西に位置しており、後円部の粘土槨を持つ埋葬施設からは、銀装の環頭大刀1口をはじめ木装大刀3口、金銅製冠・耳環・胡録などの副葬品が出土している。環頭大



1．今富新山1号墳　2．長老塚古墳　3．今富塚山古墳　4．内出古墳　5．海保1号墳　6．海保2号墳　7．海保3号墳　8．海保大塚　9．姉崎二子塚古墳　10.姉崎天神山古墳　11.原1号墳　12.鶴窪古墳　13.釈迦山古墳　14.姉崎山王山古墳　15.富士見塚古墳　16.堰頭古墳　17.六孫王原古墳

第139図　姉崎古墳群の主な古墳（1:50,000）

刀は柄頭から鞘尻まで銀や金銅でおおわれた精巧な造りのもので、朝鮮武寧王陵出土のものとの類似性が指摘されているものである[25]。原1号墳では、後円部の木棺直葬とみられる埋葬施設から、鐔がつき銀製の柄縁金具の一部が残存する大刀が1口出土している[26]。

一方調査例は少ないものの、周辺の中小円墳の主体部で出土した副葬品を見てみると、例えば姉崎古墳群内では5世紀の径25mを測る富士見塚古墳で、直刀1口、鉄鏃21本のほか、金銅装胡録や小型倣製鏡、鹿角装刀子などが出土している[27]。また、木戸窪古墳では直刀片、刀子片、耳環などが検出されたという[28]。海保古墳群では、いずれも4世紀の築造と考えられているが、径10mの海保1号墳から直刀片と鉄剣片が、径29mの海保3号墳では鉄剣、ガラス小玉、勾玉などが出土している[29]。そのほか市原市内では、7世紀の築造とされる径22m前後の南向原2号墳で直刀、耳環、金銅製釧、鉄鏃などが、6世紀の築造とされる径25m前後の同3号墳では、2か所ある主体部からそれぞれ直刀・鉄鏃、刀子・鉄鏃が出土している[30]。終末期古墳と考えられる大厩2号墳では、2か所の主体部からそれぞれ鉄鏃、直刀・耳環・鉄鏃が出土している[31]。今富新山1号墳と築造時期の異なるものもあり、単純に比較はできないが、このように周辺の中小円墳では、大刀は出土していても金や銀の装飾をもつものは皆無である。

今富新山1号墳では、金銅装の飾り金具を持つ銀装の大刀のほかに鹿角装の小刀、同じく鹿角装の剣、鹿角装の刀子も検出されており、この内容は中小円墳としてはかなり充実していると言え、殊に大刀に関しては、前方後円墳の副葬品にも匹敵するものである。

この大刀に関しては、そのほか注目すべき点として、小刀を伴っているという点が挙げられよう。柄頭が脱落し、鞘尻が遊離していたにもかかわらず、大刀と小刀は完全に癒着した状態で出土しており、偶然と考えるのはやや不自然である。当時何らかの器具によって両者が固定されていた蓋然性が高いと言えるが、現状ではそれがどのようなものであったのか確認できない。ともあれこのような例は、朝鮮半島に求めることができる。例えば韓国慶州市天馬塚古墳では、出土した環頭大刀7口のうち、1口にのみ鞘の佩表に同じ形式の「副刀」が添えられていた。ちなみにほかの6口が三彙大刀であるのに対して、それのみは鳳凰文であるという[32]。今のところこのような形での副葬例は、国内では見つけるのが困難であるが、愛媛県川之江市の東宮山古墳の横穴式石室から、相似形をなす大小2つの三葉環頭柄頭が出土しており[33]、これは大刀と小刀がセットで副葬されていたものである可能性が高い。

今富古墳群は、未だ調査されていないものが多く不明な点が多いが、すべて中小の円墳で構成されているとみられる。4世紀には今富塚山古墳という大型の前方後円墳を生んだが、その後は後の上海上国造家の墓と考えられる姉崎古墳群に対して、常に副次的な位置を占めていたようである。今富古墳群の集団は、姉崎古墳群の首長の統率下の地域首長であったことは確かであろうと考えられる。今富新山1号墳は、周辺の中小円墳の中では大きい方であり、副葬品を見ても、その被葬者は首長に直属するかなりの有力者であったとみられる。もしも大刀と小刀との副葬方法が朝鮮式のものであると積極的にみるとすれば、例えば中央から遣わされた、何らかの技術を携えた渡来人であった可能性もあるだろう。もちろん、それについては、大刀と小刀の断定しきれない副葬形式のみに依るのは危険であるが、朝鮮の葬法に則り副葬しているということは、在地首長とは異なる渡来系氏族の思想が反映されたものと解釈できるのではないだろうか。また、今富新山1号墳とほぼ同じ6世紀代の姉崎古墳群の首長墓には、朝鮮からの舶載品とも考えられる環頭大刀をもつ姉崎山王山古墳がある。しかしその副葬の仕方には、今富新山1号墳のような状況は見られない。これは、中央首長から威信材として下賜されたものなのであろう。物は単に移動するが、

その思想は人を介さねば伝わらないものである。とすれば、今富新山1号墳の被葬者は朝鮮の葬制の一部を継承した、渡来系技術者の系譜を引く者であると考えられるのではないだろうか。

第2節　古市場（1）遺跡・（2）遺跡

古市場（1）遺跡及び古市場（2）遺跡は旧村田川の氾濫原上にあり、今回の調査では集落等直接生活の痕跡を示す遺構は検出されなかった。しかし、包含層中の畦畔状遺構や水田の水抜き用と思われる土坑、層序中のキサゴの堆積といった状況から低湿地を利用した生産遺跡としての性格を有している。

平成2年度本調査区の溝状遺構は、幅、深さ等を考慮すれば流路である可能性が高い。方位から見ると北西から南東に向けて幅が広がり緩やかな弧を描いており、現在の村田川が旧茂原街道のさらに南側にあることを考えると、村田川の河口付近に流れ込んでいたものと考えられる。この流路の堆積が数次にわたるものであることも土層観察から確認された。覆土中から検出された遺物はいずれも出土レベルが高く、特に1a層が現在の耕作土と考えられることや、1b・1c両層も近現代の堆積土層と考えられることから、上流河川又は周辺からの流れ込みと考えられる。

古市場（1）遺跡及び古市場（2）遺跡の層序観察によれば、Ⅱ層の泥炭層から一転してⅢ層は砂質の土層となる。Ⅳ層は青灰色の砂層となりシルト状となる。遺構・遺物の含まれるのはⅡ層が主で、古墳時代から奈良・平安時代の包含層である可能性が高く、流路はⅢ層を掘り込んでいる。縄文時代及び弥生時代の包含層は恐らくⅢ層下部に相当するものと考えられるが、残存する痕跡や遺物に乏しく明らかでない。

又、包含層中の遺物はいずれも磨滅が著しく時期の特定できる資料も極めて少ない。

古市場（2）遺跡出土の木製品のうち比較的用途が特定できそうなものは大足状の木製品で、第134図1と第135図5の2点である。いずれも同一層位での出土である。第134図3は穂摘具である。

時期の特定は伴出遺物に乏しく断定できないが、山形県山形市島遺跡出土の大型の枠田下駄が7世紀～8世紀とされていることは一つの目安となる[34]。第134図1は一括取上げ遺物で整理作業の過程で大足の部材である可能性を確認したものである。第135図5は3トレンチの、第134図3は1トレンチと3トレンチの間の拡張区内のそれぞれ出土である。両者の出土位置は約10mほど離れているが、同一層位での検出ということもあり同時期のものと考えて差し支えない。

注1　日本道路公団東京第一建設局　1985『東関東自動車道千葉木更津線　海保地区土質調査　総括報告書』

2　新田浩三ほか　1998『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書1　市原市海保野口遺跡』（財）千葉県文化財センター

3　亀田直美　1996「角錐状石器」『石器文化研究5　AT降灰以降のナイフ形石器文化』　石器文化研究会

4　堤　隆ほか　1997『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』　柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団

5　早稲田大学校地埋蔵文化財調査室　1996『下戸塚遺跡の調査 第1部 旧石器時代から縄文時代』

6　本橋恵美子　1994「東京都練馬区東早淵遺跡（第4地点）の再検討(1)(2)」『旧石器考古学48・49』

7　新田浩三ほか　1994『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅷ　取香和田戸遺跡（空港№60遺跡）』（財）千葉県文化財センター

8　川島利道　1985『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅴ　№2遺跡・№10遺跡』（財）千葉県文化財センター

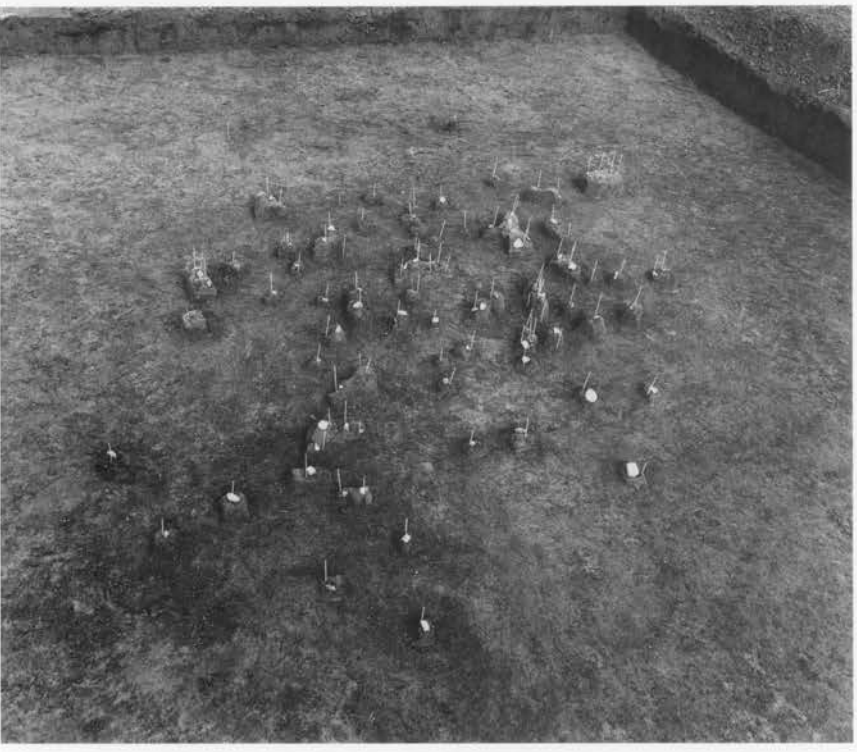
9　道澤　明ほか　1990「神田山第Ⅱ遺跡・内野第Ⅱ遺跡」『千葉県茂原市桂遺跡群発掘調査報告書』（財）長生郡市文化財センター
10　田村　隆ほか　1996『市原市武士遺跡１』（財）千葉県文化財センター
11　加藤勝仁　1996「礫石器」『石器文化研究５　AT降灰以降のナイフ形石器文化』石器文化研究会
　堤　隆　　1997「柏ヶ谷長ヲサ遺跡　第Ⅷ・第Ⅸ文化層の敲石・磨石類」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
12　小田静夫ほか　1980『西之台遺跡Ｂ地点』東京都埋蔵文化財調査報告書第7集
13　田村　隆ほか　1987『八千代市井戸向遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』（財）千葉県文化財センター
14　田村　隆ほか　1989『千葉市小中台(2)遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』（財)千葉県文化財センター
15　田村　隆・橋本勝雄　1987『房総考古学ライブラリー１　先土器時代』（財)千葉県文化財センター
16　諏訪間　順　1989　「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』　第24号
17　前掲注３
18　森本和男　1998『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書２　市原市今富遺跡』（財）千葉県文化財センター
19　小久貫隆史・渡邊高弘　1997『村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書－市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡－』（財）千葉県文化財センター
20　永沼律朗　1992『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』（財）千葉県文化財センター
21　中村恵次・沼澤　豊・田中新史　1975「千葉県市原市六孫王原古墳の調査」『古墳時代研究』Ⅱ　古墳時代研究会
22　前掲注18
23　大阪府立近つ飛鳥博物館　1996『平成８年度秋季特別展　金の大刀と銀の大刀－古墳・飛鳥の貴人と階層－』大阪府立近つ飛鳥博物館図録９
24　前掲注23
25　小出義治ほか　1980『上総山王山古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会
26　大場磐雄ほか　1970『千葉県市原市姉ケ崎町原１号墳発掘調査概報』千葉県教育委員会
27　中村恵次　1968「千葉県市原市富士見塚古墳」『日本考古学年報』16
28　丸子　亘　1970『姉ヶ崎台遺跡』千葉県教育委員会
29　中村恵次ほか　1968『市原市埋蔵文化財調査報告４　南大広遺跡・海保古墳群』市原市教育委員会
30　滝口　宏編　1976『南向原－古墳・方形周溝墓・住居址の調査－』市原市教育委員会
31　三森俊彦・阪田正一ほか　1974『市原市大厩遺跡』千葉県開発公社・千葉県都市公社
32　末永雅雄　1981『増補　日本上代の武器』木耳社
33　三木文雄　1971「妻鳥陵墓参考地東宮山古墳の遺物と遺構について」『書陵部紀要』23　宮内庁書陵部
34　柏倉亮吉　1964『島遺跡』山形県教育委員会

写 真 図 版

今富新山遺跡周辺航空写真（昭和42年撮影）

図版2

第1ブロック遺物出土状況

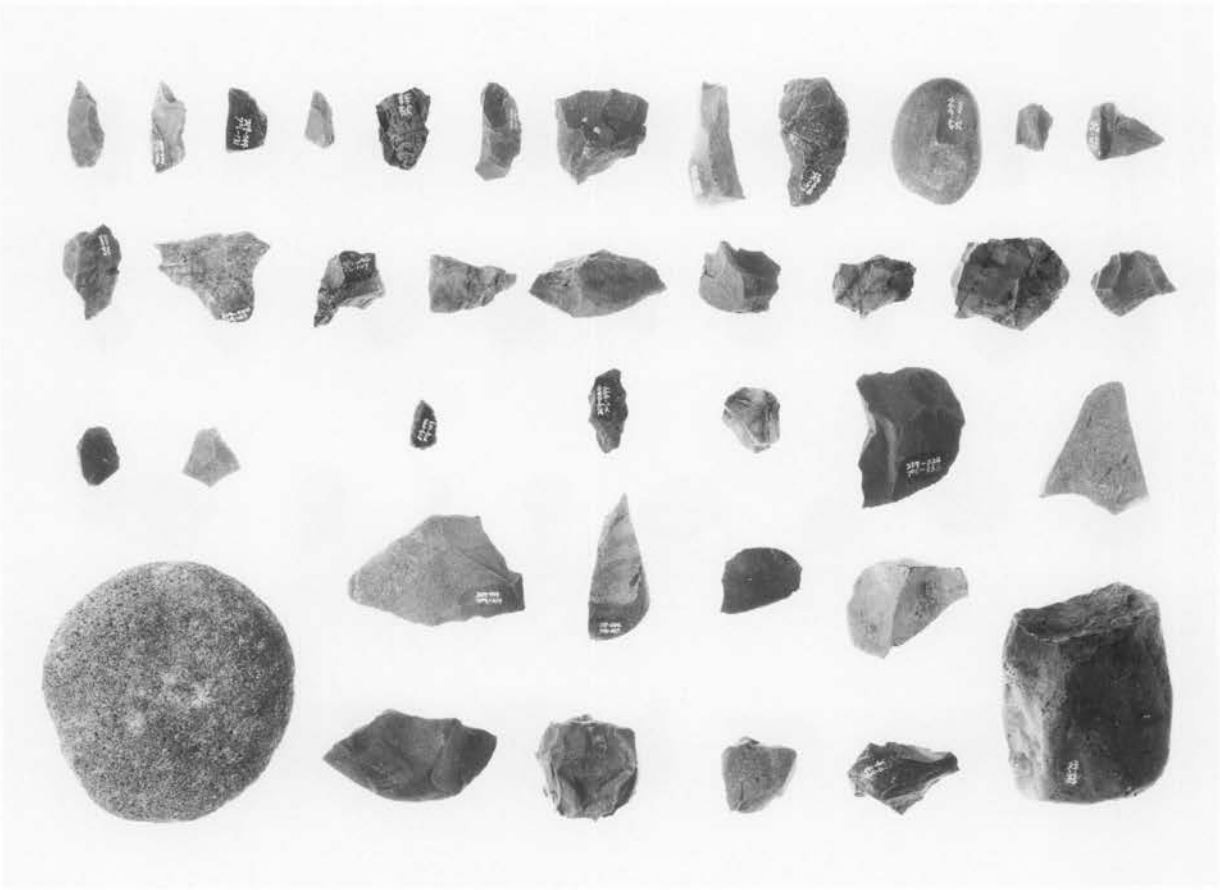


第3ブロック遺物出土状況

4C-79土層断面

第1ブロック石器（正面）

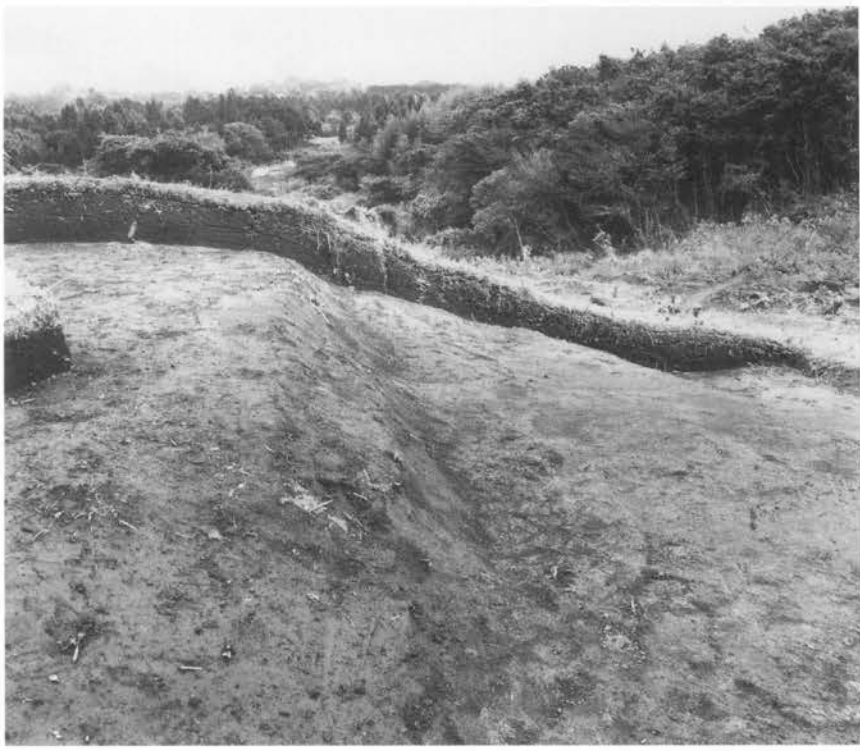
第1ブロック石器（裏面）



第2～第5ブロック石器（正面）

第2～第5ブロック石器（裏面）

1号墳調査前近景



1号墳墳丘断面（A-A'）

1号墳墳丘断面（B-B'）

1号墳周溝内遺物出土状況

1号墳西側周溝

1号墳内部施設検出状況

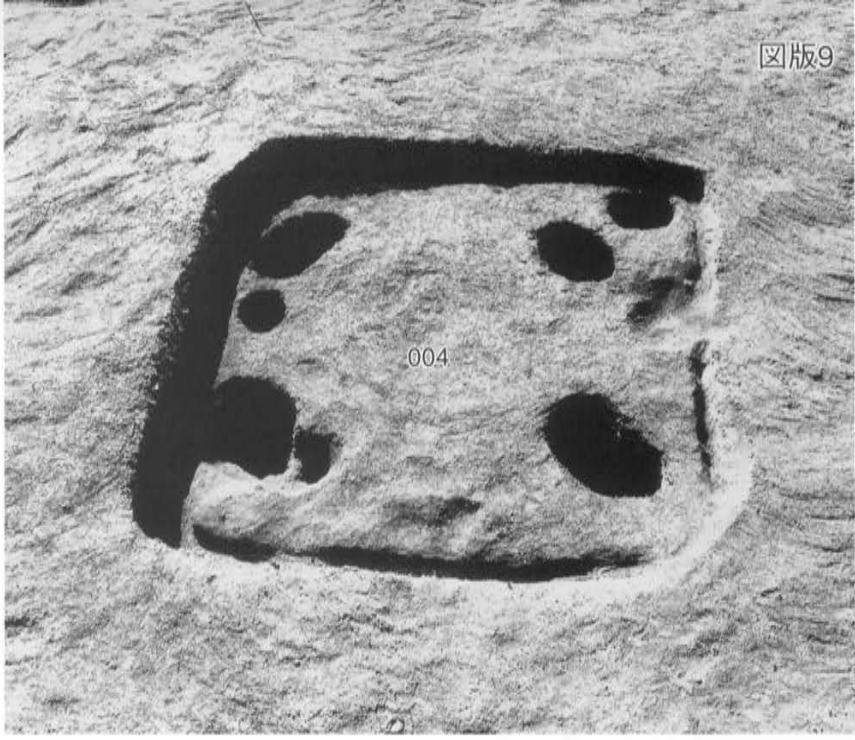
1号墳内部施設遺物出土状況

1号墳内部施設完掘

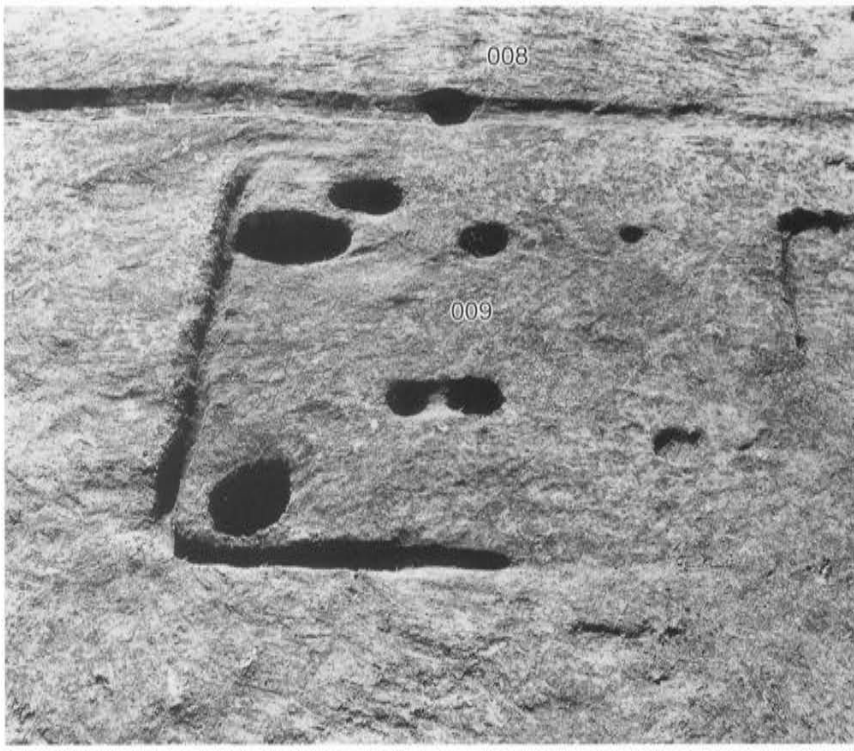
1号墳調査終了後

東側集落群（北から）

003号全景



004号全景



009号全景

010号全景

図版10

011号全景

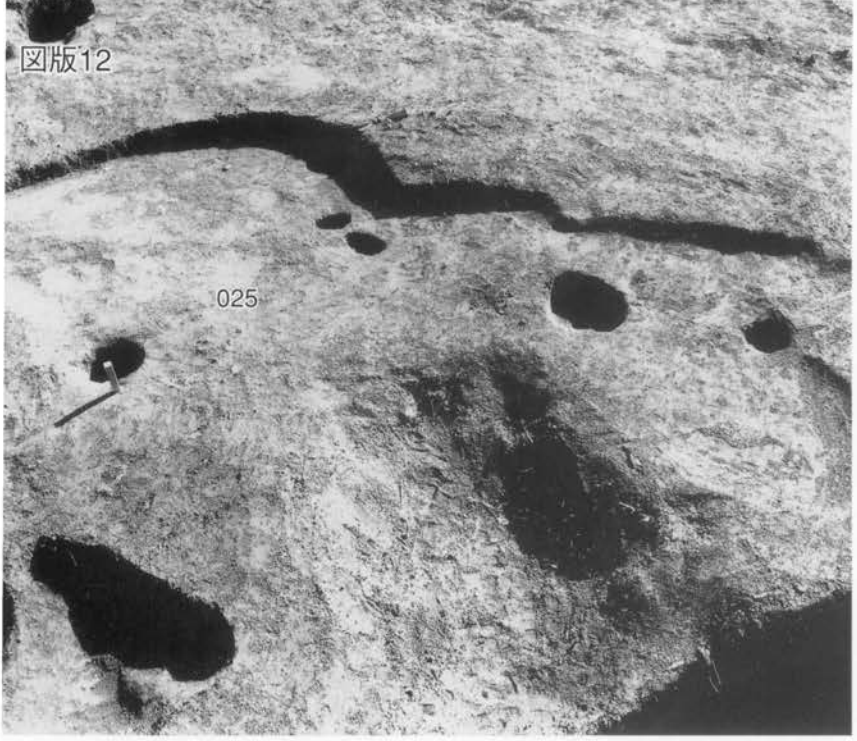
013・014号全景

015・016A・016B号全景

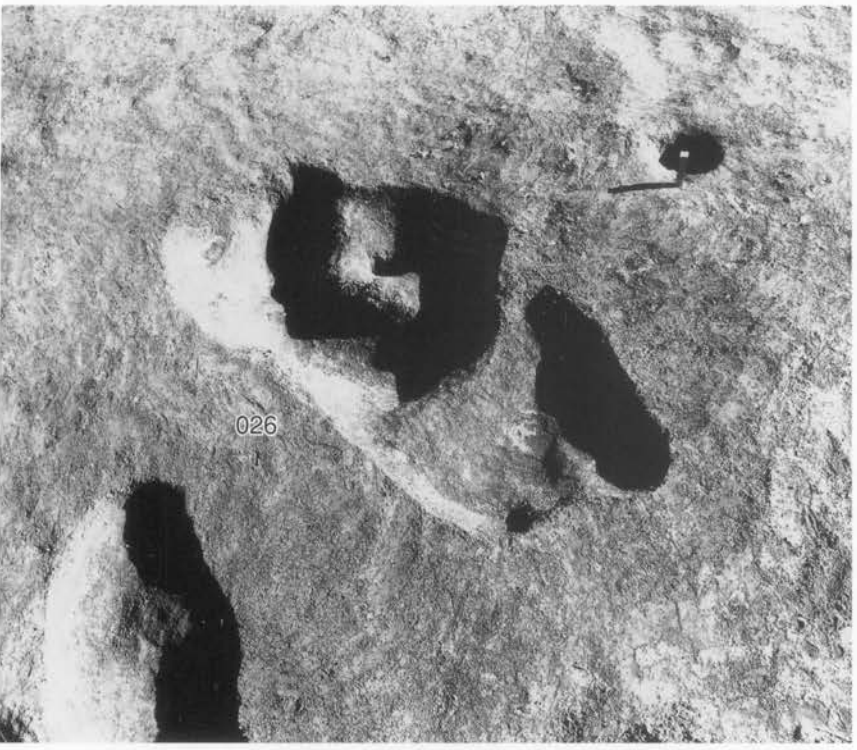
017・018号　全景

019・020・021号全景

023号全景



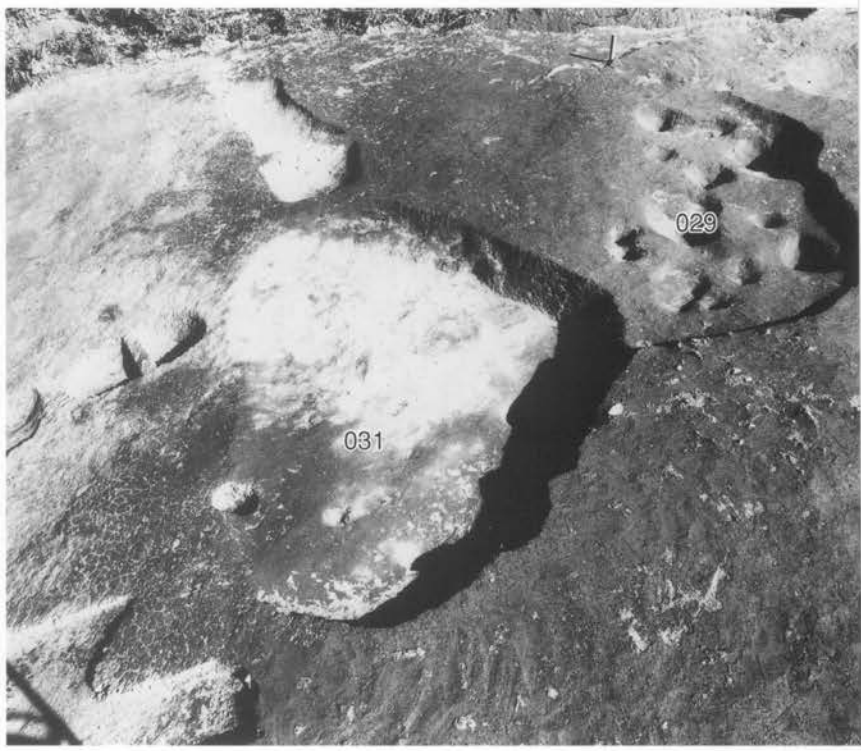
025号全景



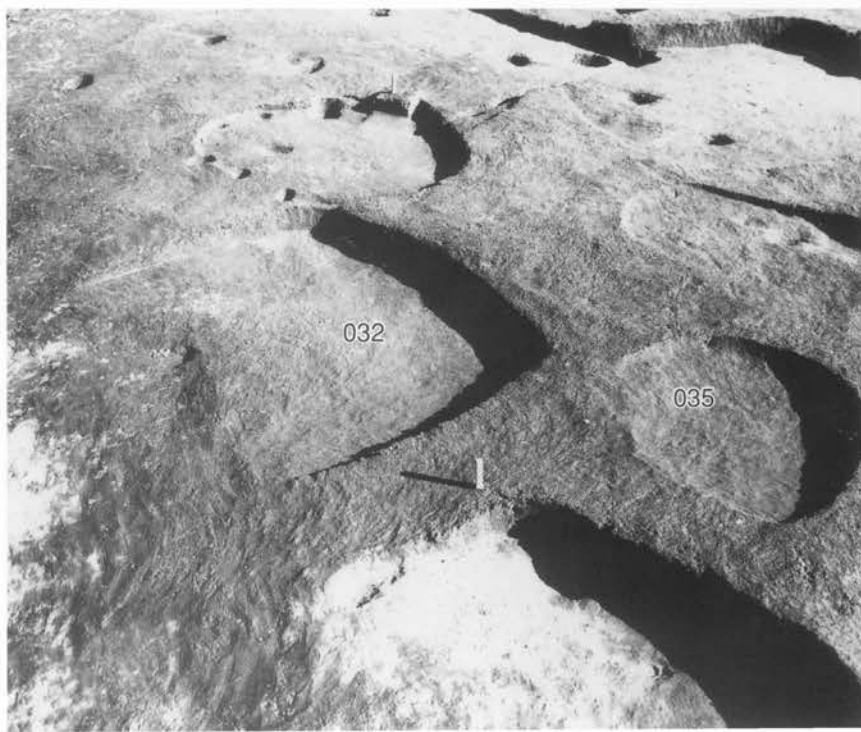
026号全景

027号全景

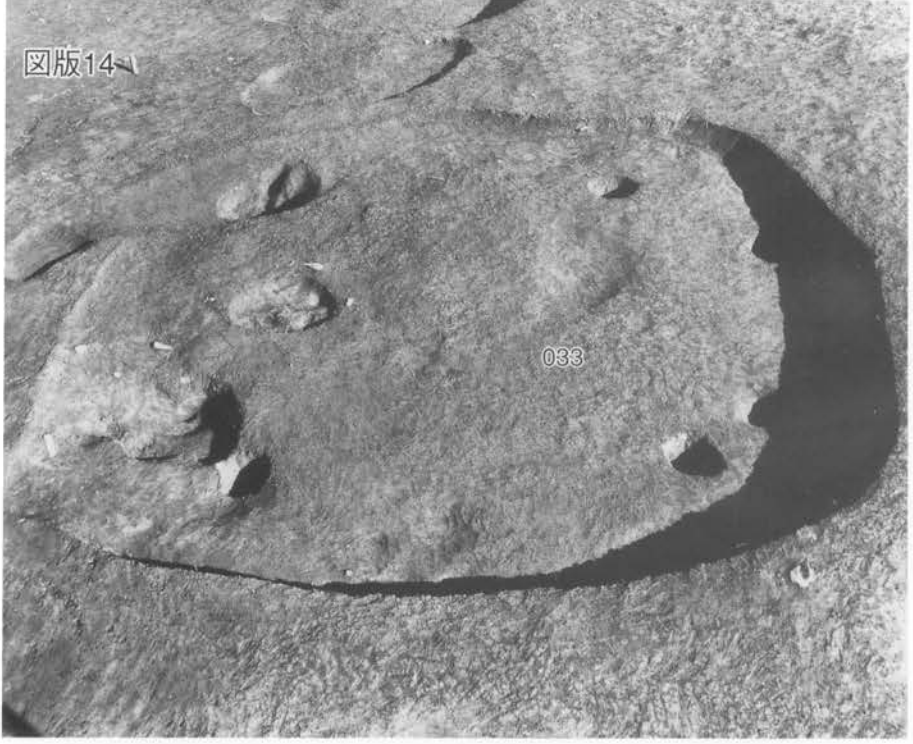
028・029・030号全景



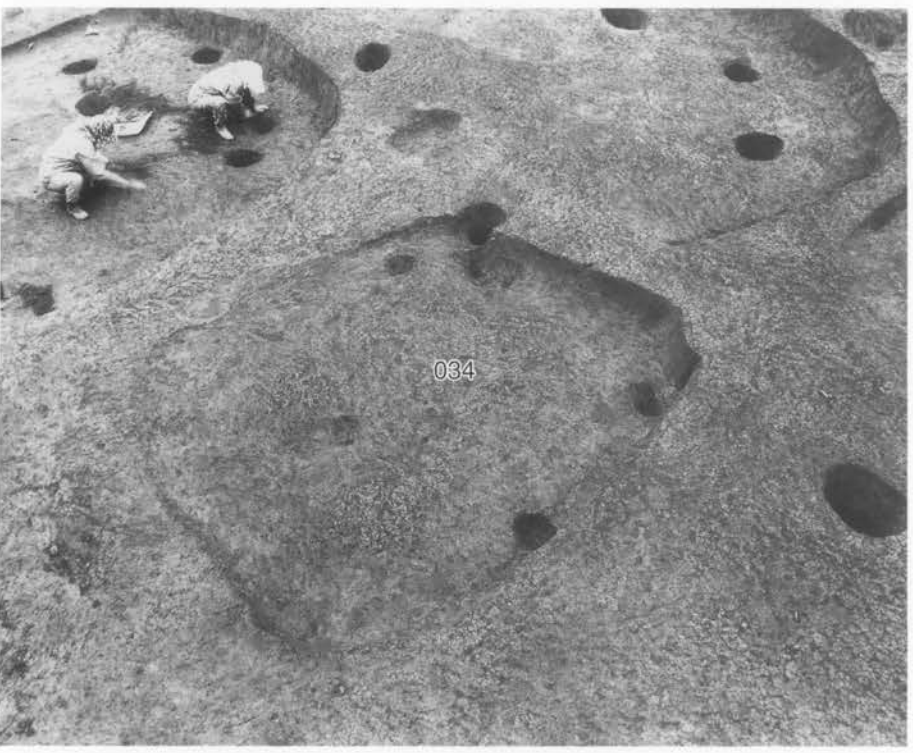
031号全景



032・035号全景



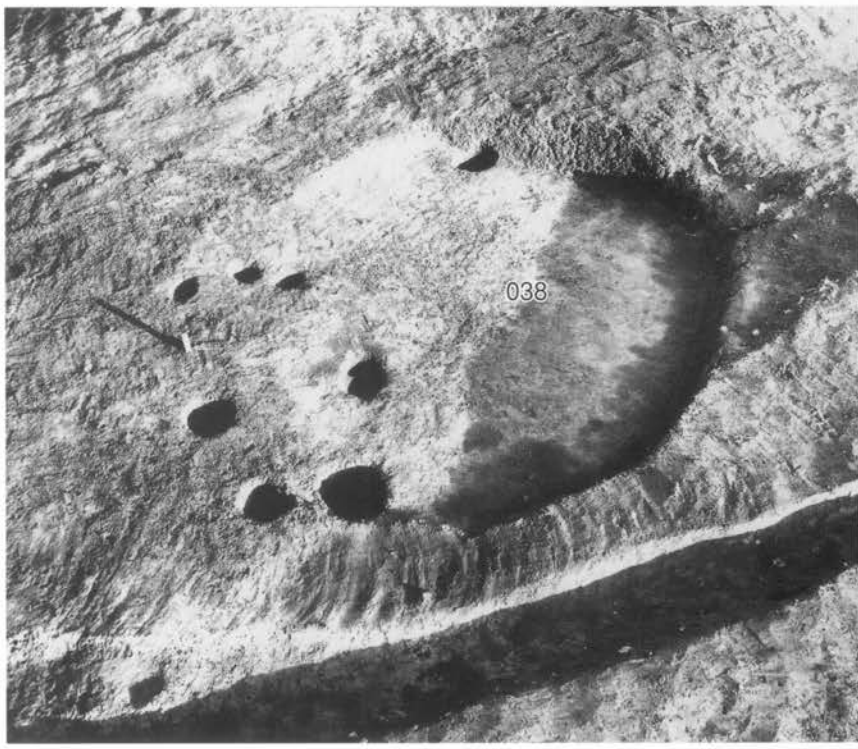
033号全景



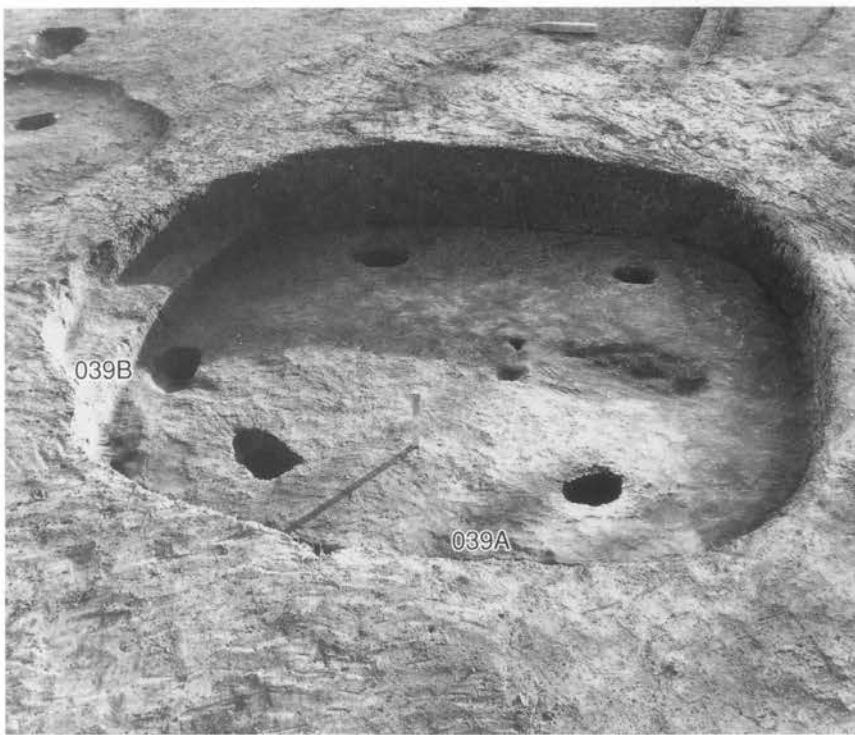
034号全景

036・045号全景

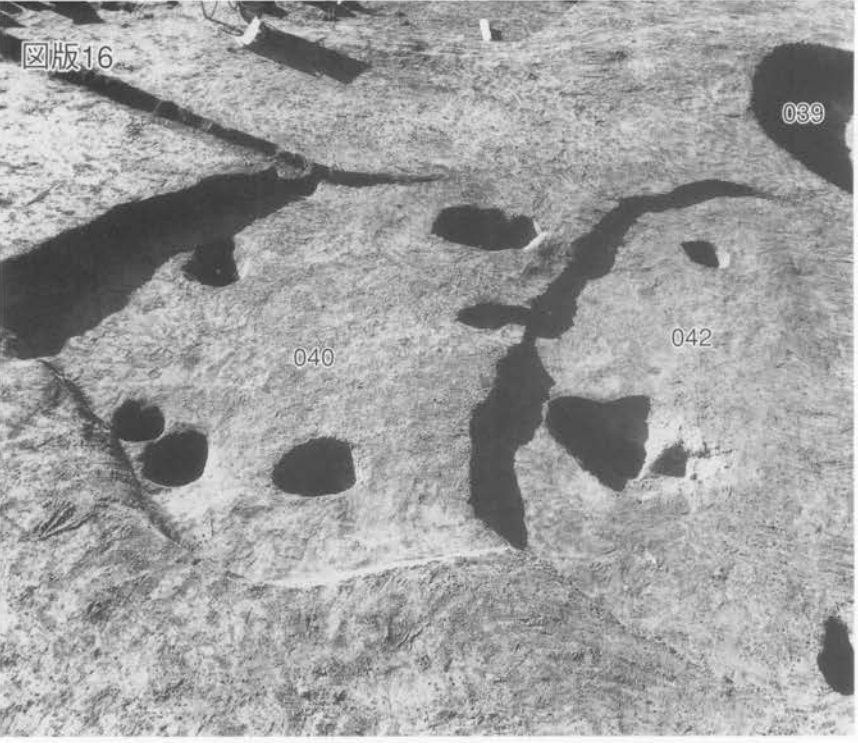
037号全景



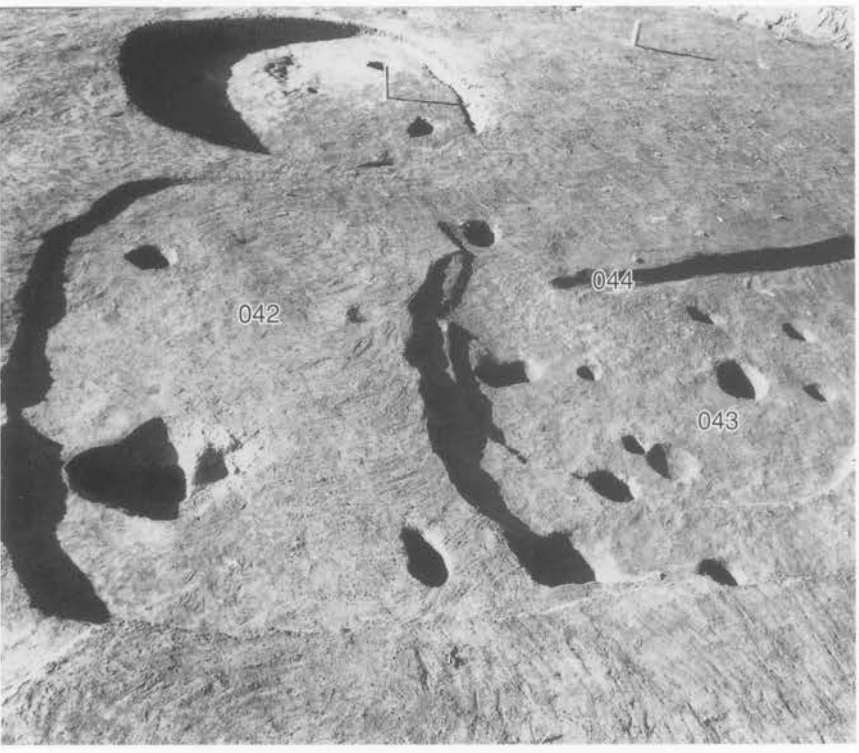
038号全景



039A・039B号全景



040号全景



042・043・044号全景

047号全景

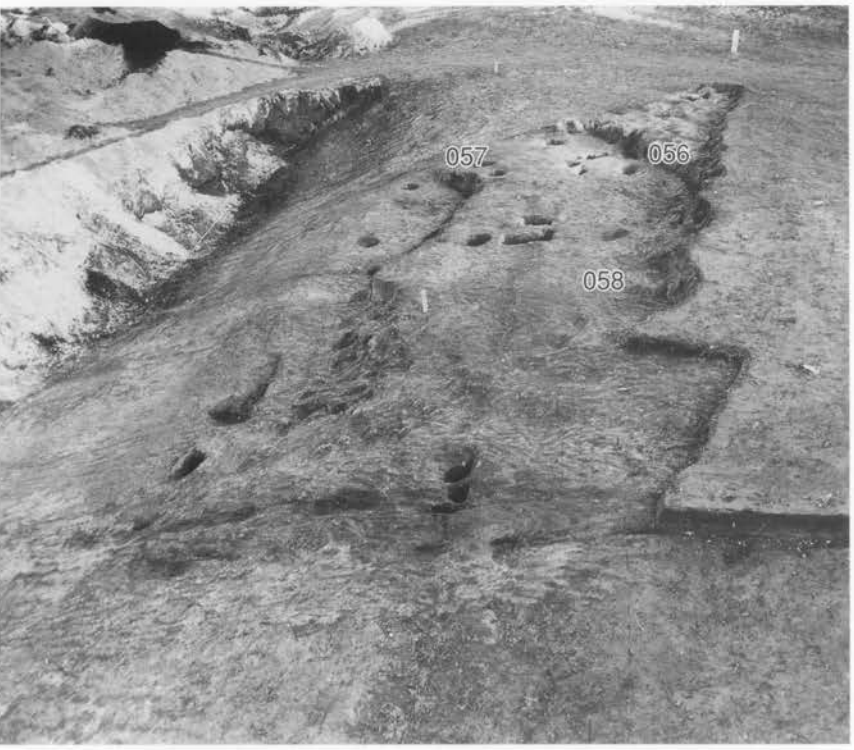
048号全景

049・050・053・072号全景

051・052号全景

図版18

054号全景

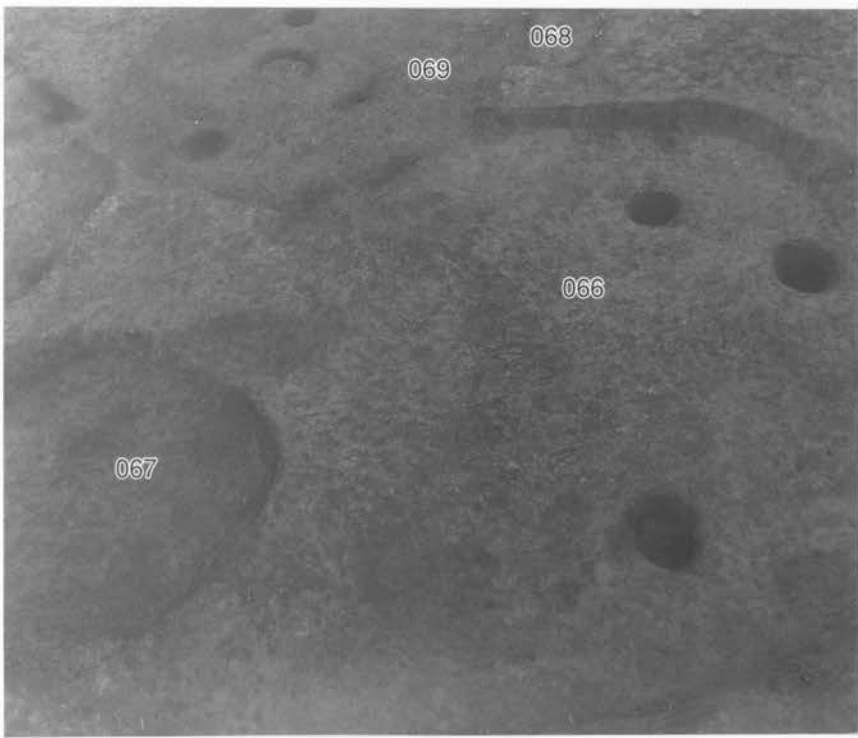


056・057・058号全景

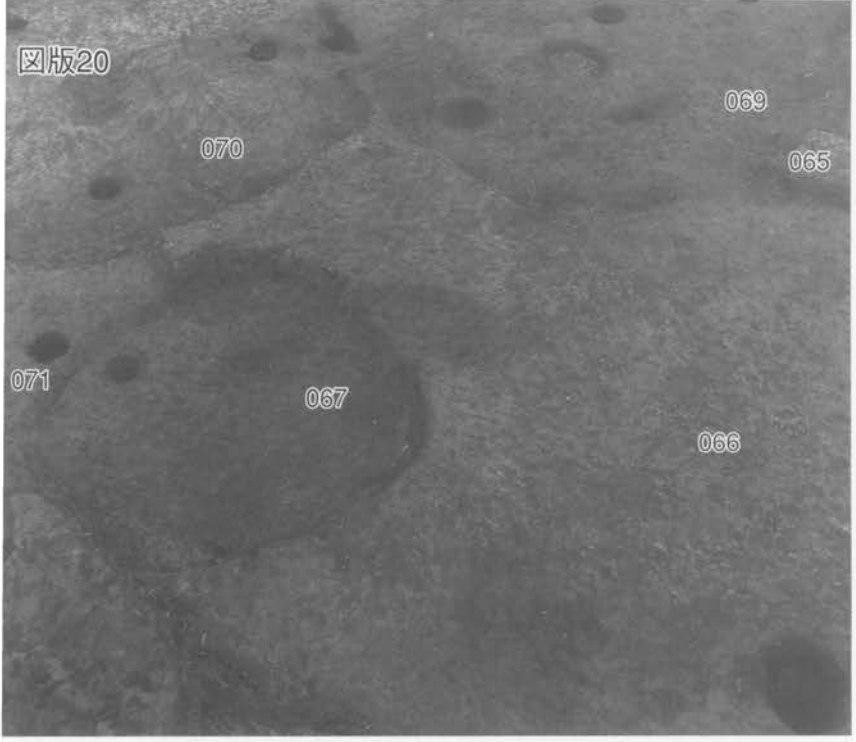
059・097号全景

061・062号全景

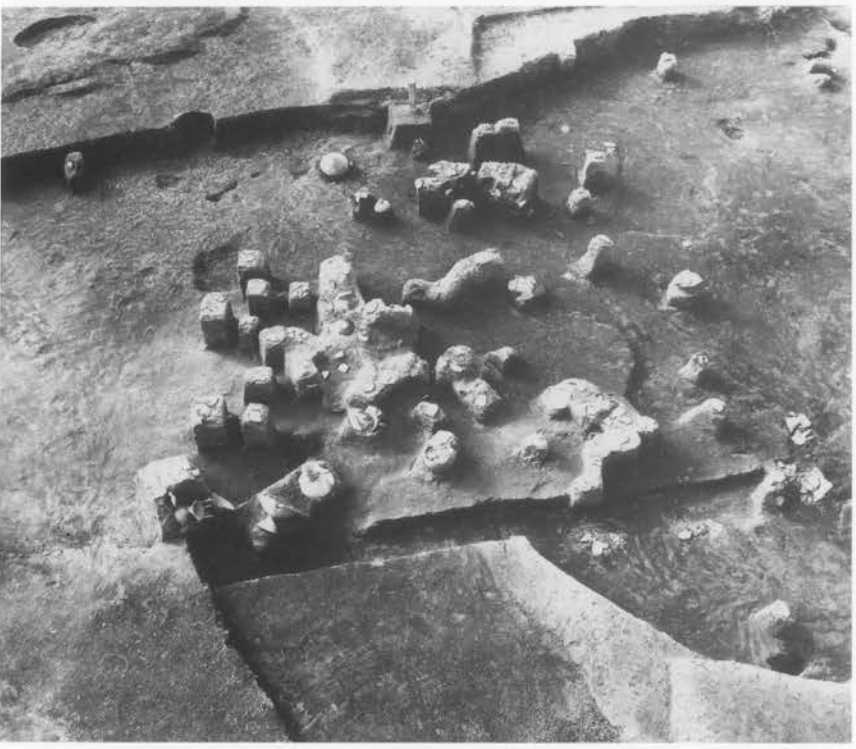
063・064・065号全景



066号全景



067・070号全景

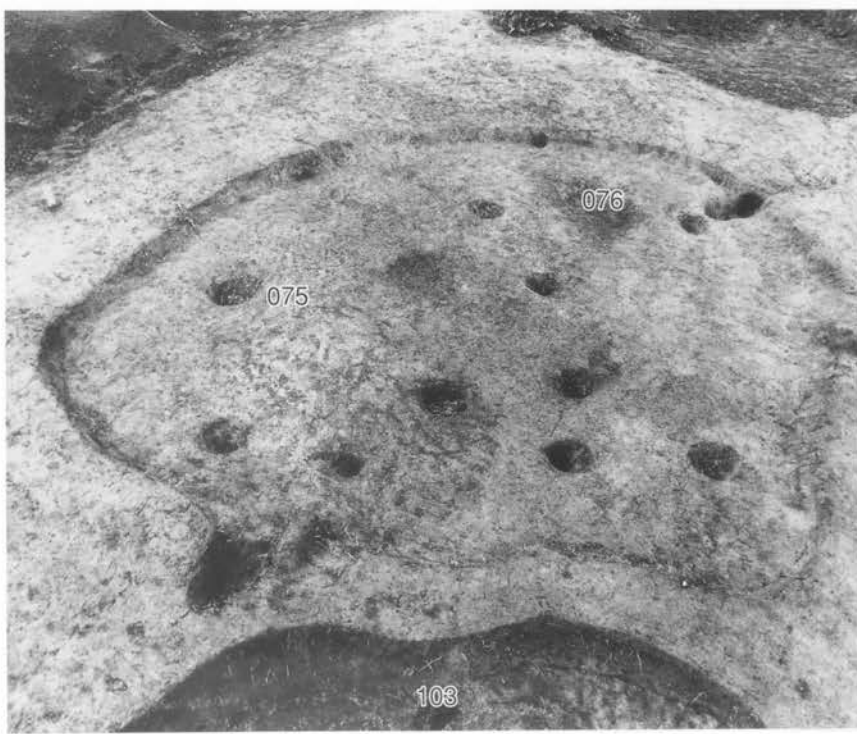


070号遺物出土状況

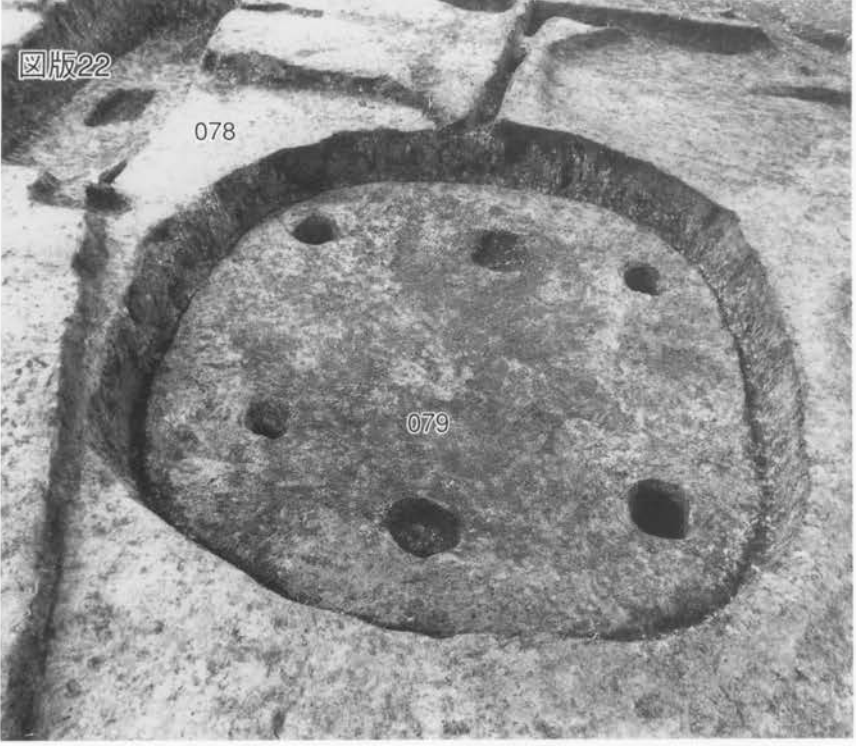
068・069号全景

071号全景

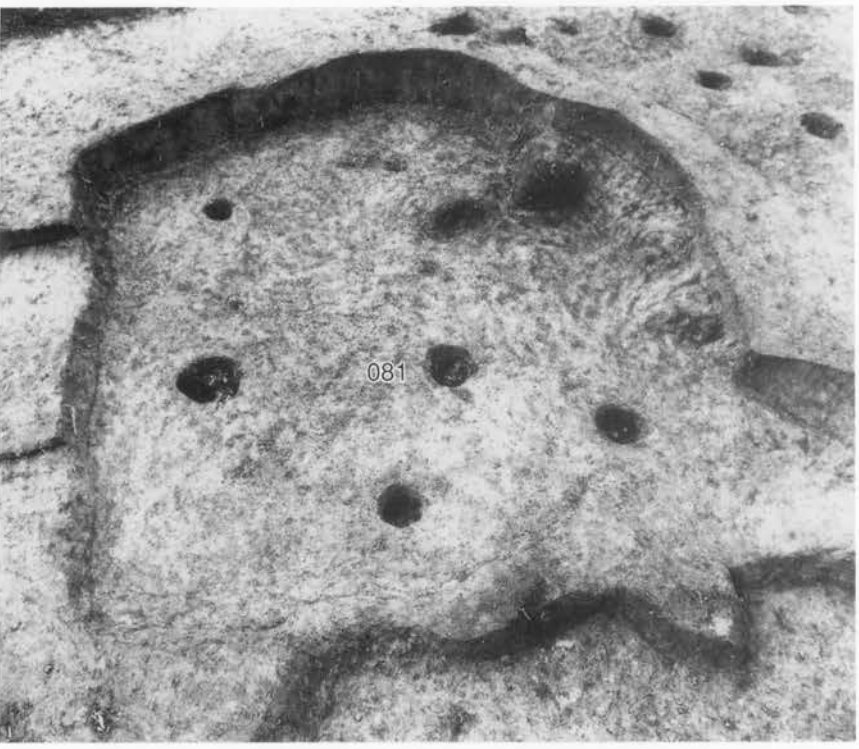
074号全景



075・076号全景



078・079号全景

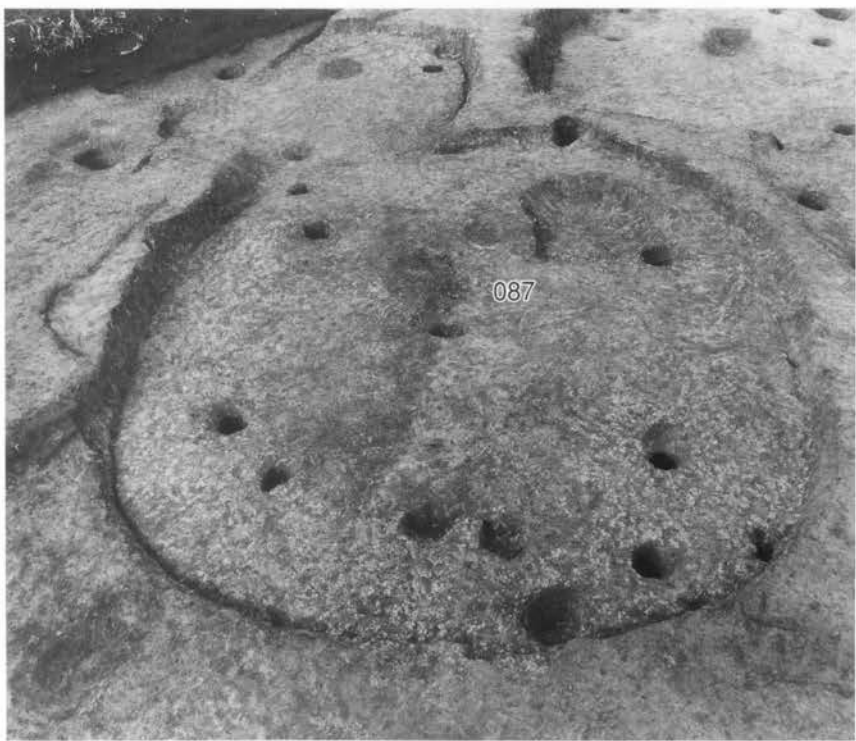


081号全景

083・084・100・101号全景

085・106・107号全景

086号遺物出土状況



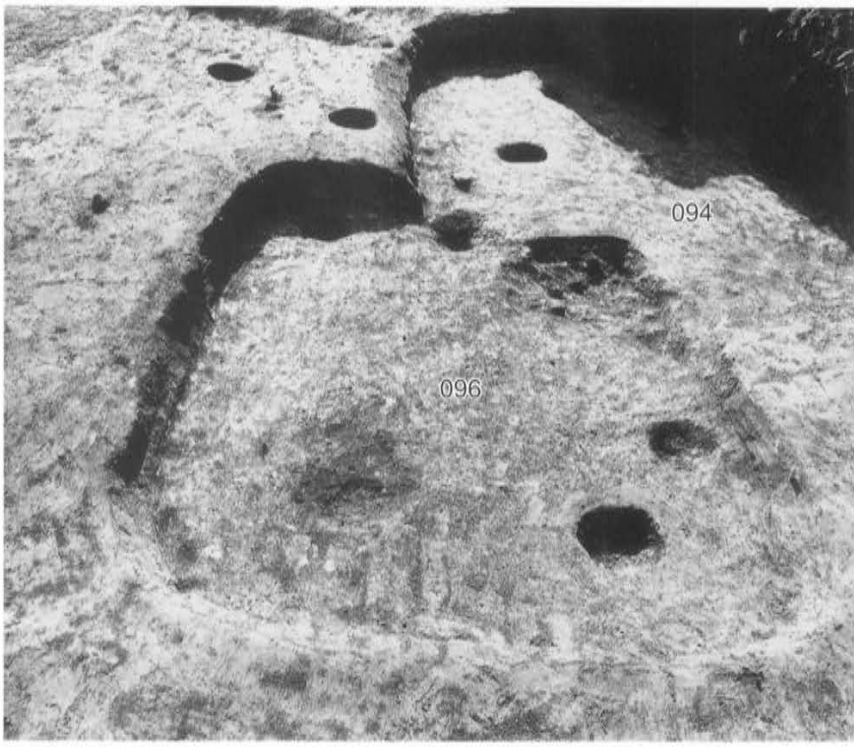
087号全景

088・089号全景

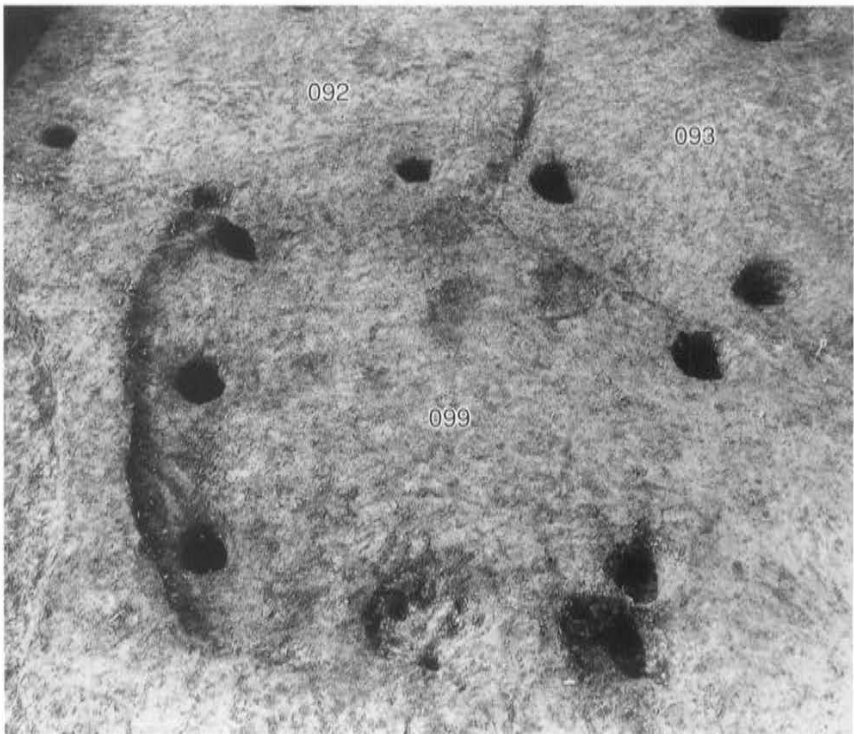
090号全景

091・092・098号全景

093号全景



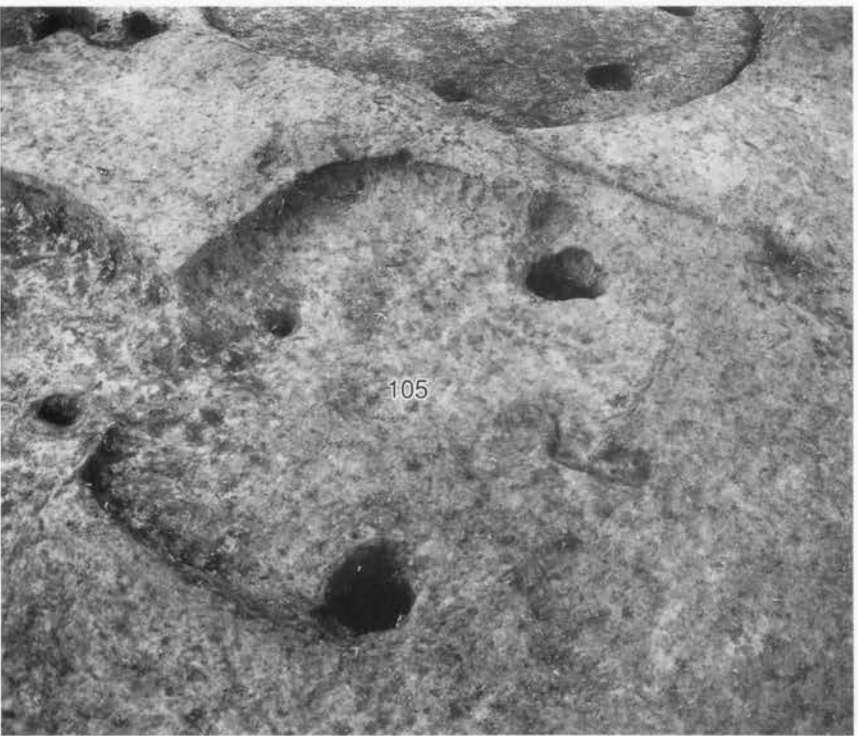
094・096号全景



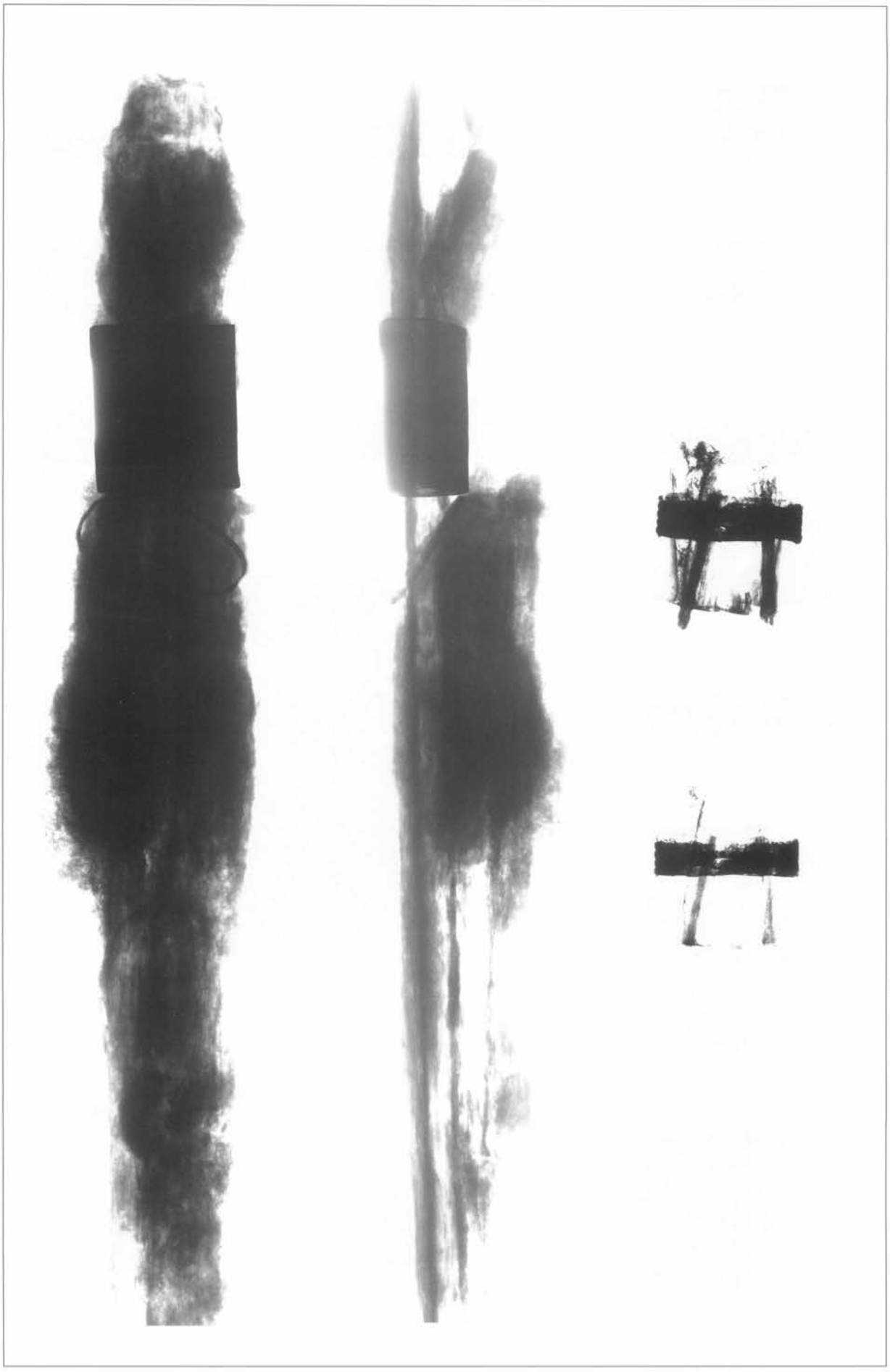
099号全景

102号全景

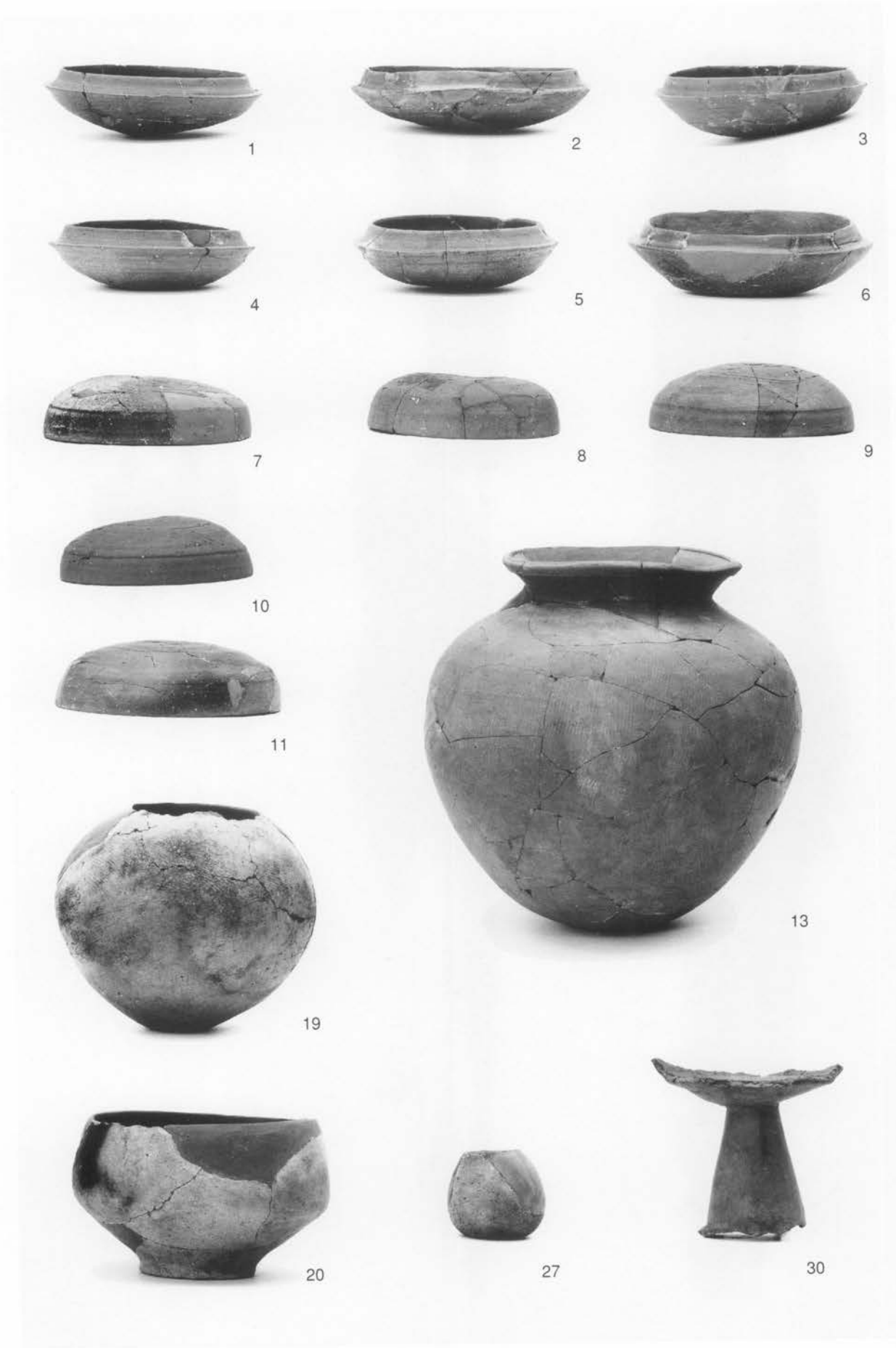
104号全景



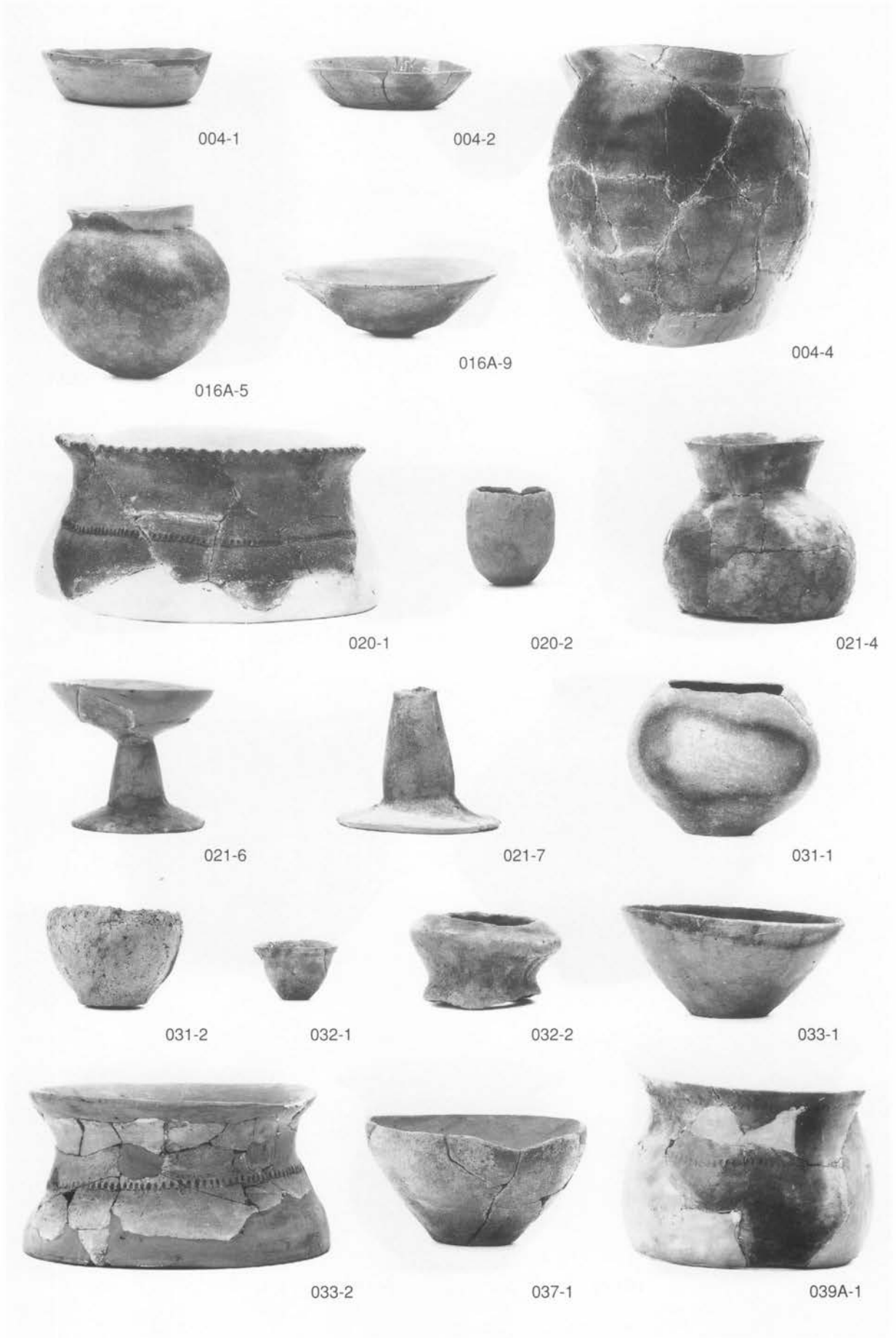
105号全景



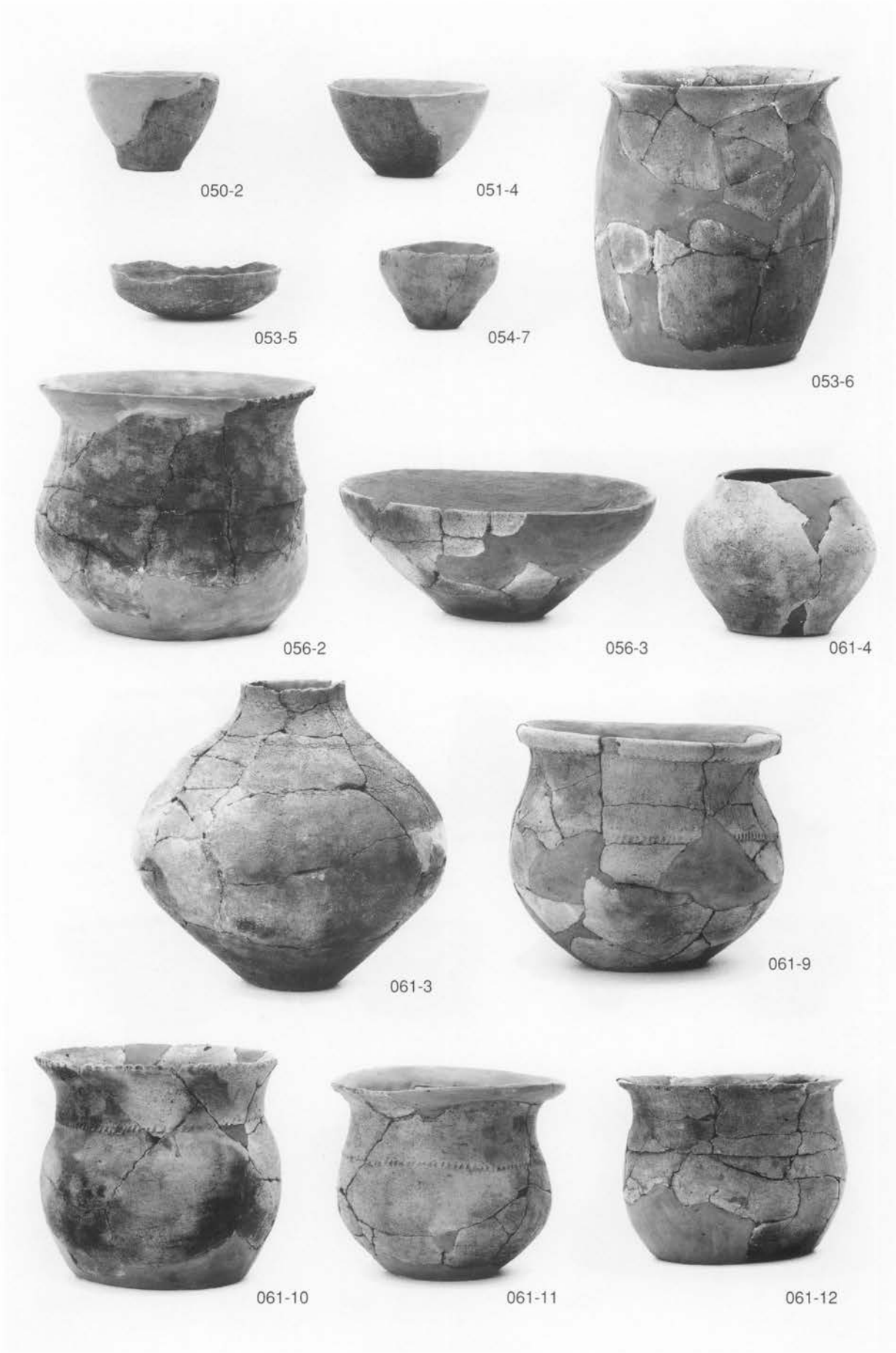
金銀装大刀のX線写真



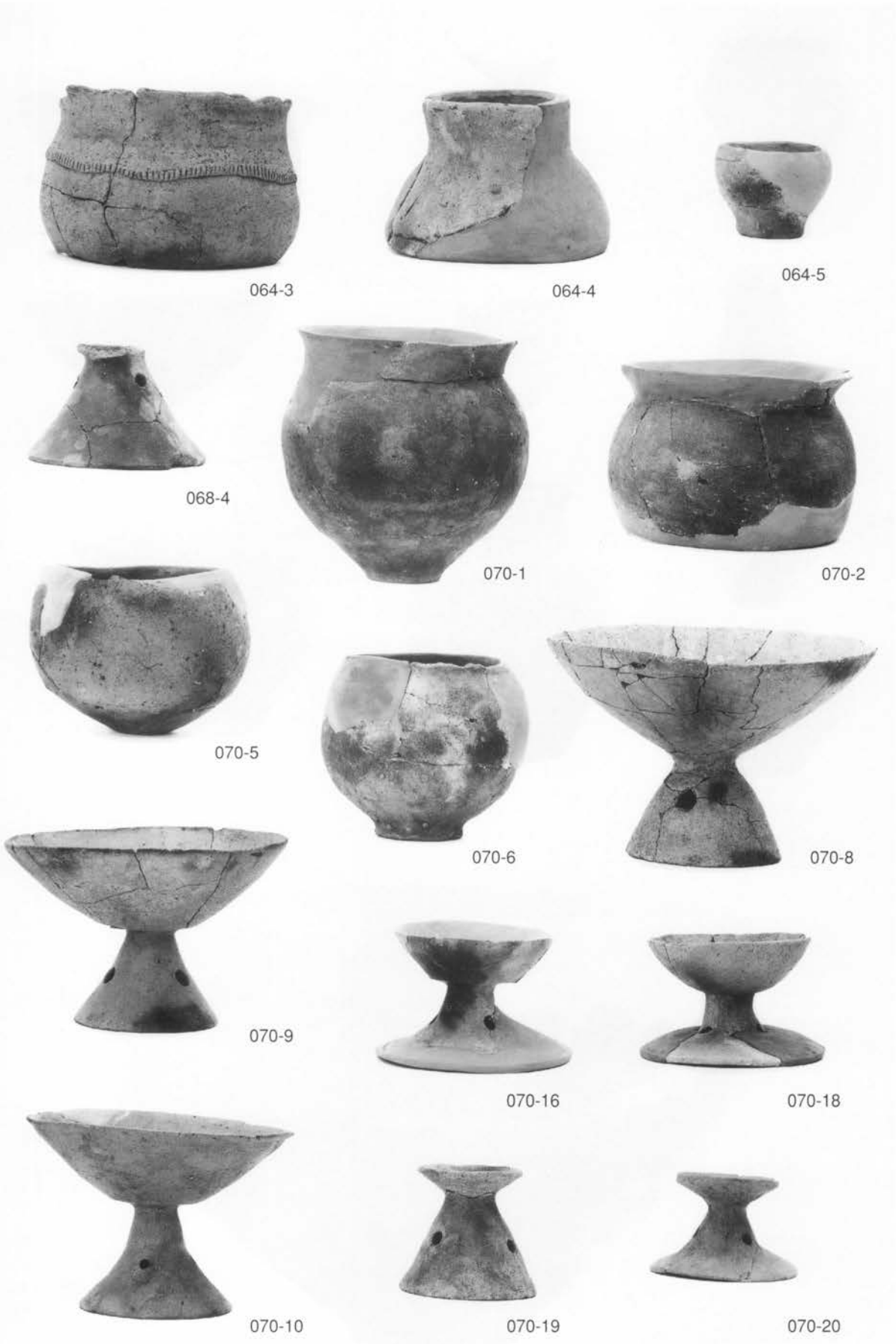
1号墳出土土器


004-1
004-2
004-4
016A-5
016A-9
020-1
020-2
021-4
021-6
021-7
031-1
031-2
032-1
032-2
033-1
033-2
037-1
039A-1

遺構出土土器（1）


050-2
051-4
053-5
054-7
053-6
056-2
056-3
061-4
061-3
061-9
061-10
061-11
061-12

遺構出土土器（2）


064-3
064-4
064-5
068-4
070-1
070-2
070-5
070-6
070-8
070-9
070-16
070-18
070-10
070-19
070-20

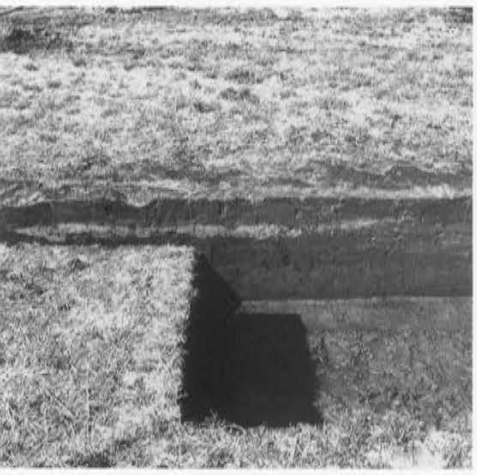
遺構出土土器（3）

遺構出土土器（4）

古市場(1)遺跡・(2)遺跡周辺航空写真(昭和42年撮影)

遺跡全景（右）
F6トレンチ
溝状遺構確認状況（左）

遺跡近景（右）
C10トレンチ
畦畔状遺構確認状況（左



遺跡近景（右）
D10トレンチ
土層堆積状況（左）

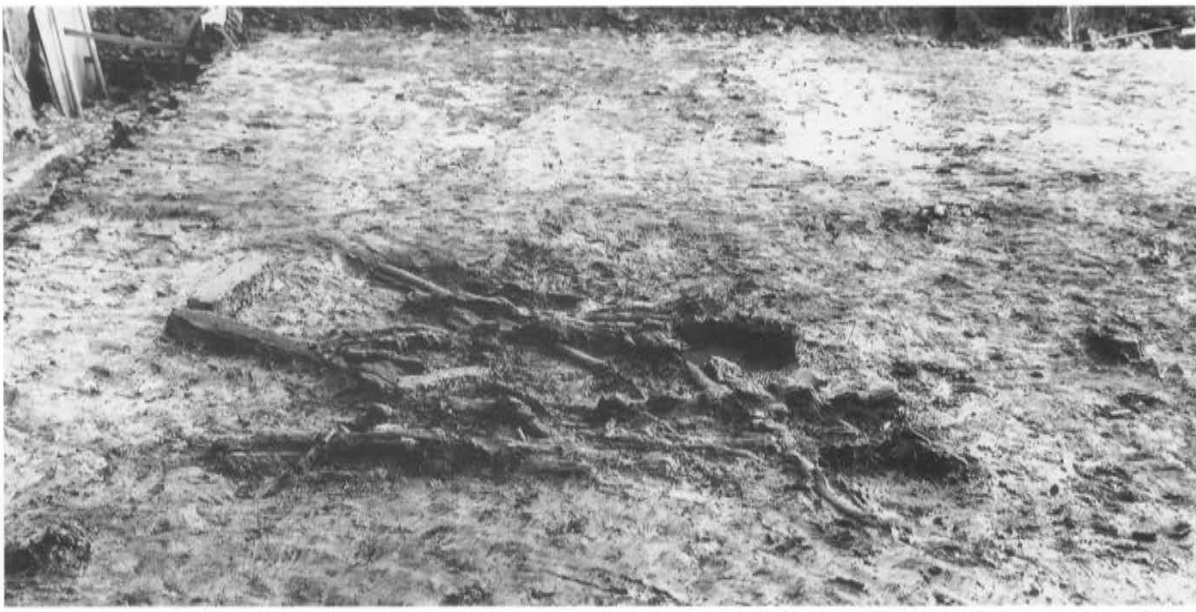
平成2年度本調査区
流路状遺構確認状況（右
土層堆積状況（左）

古市場(2)遺跡

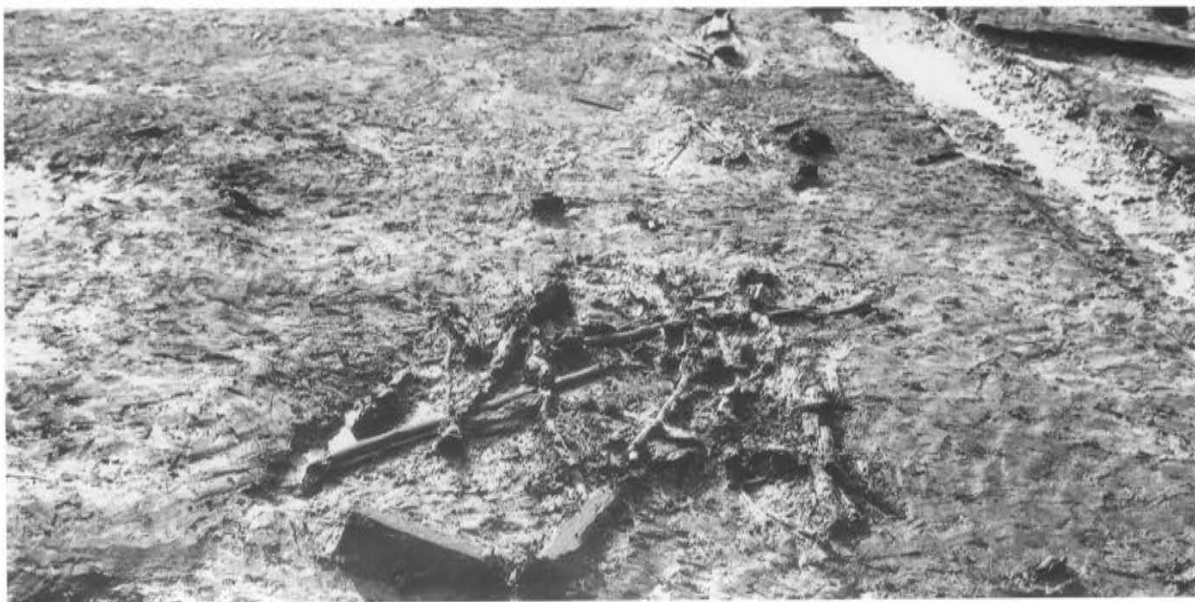
図版35

遺跡全景（左）
1号土坑（右）

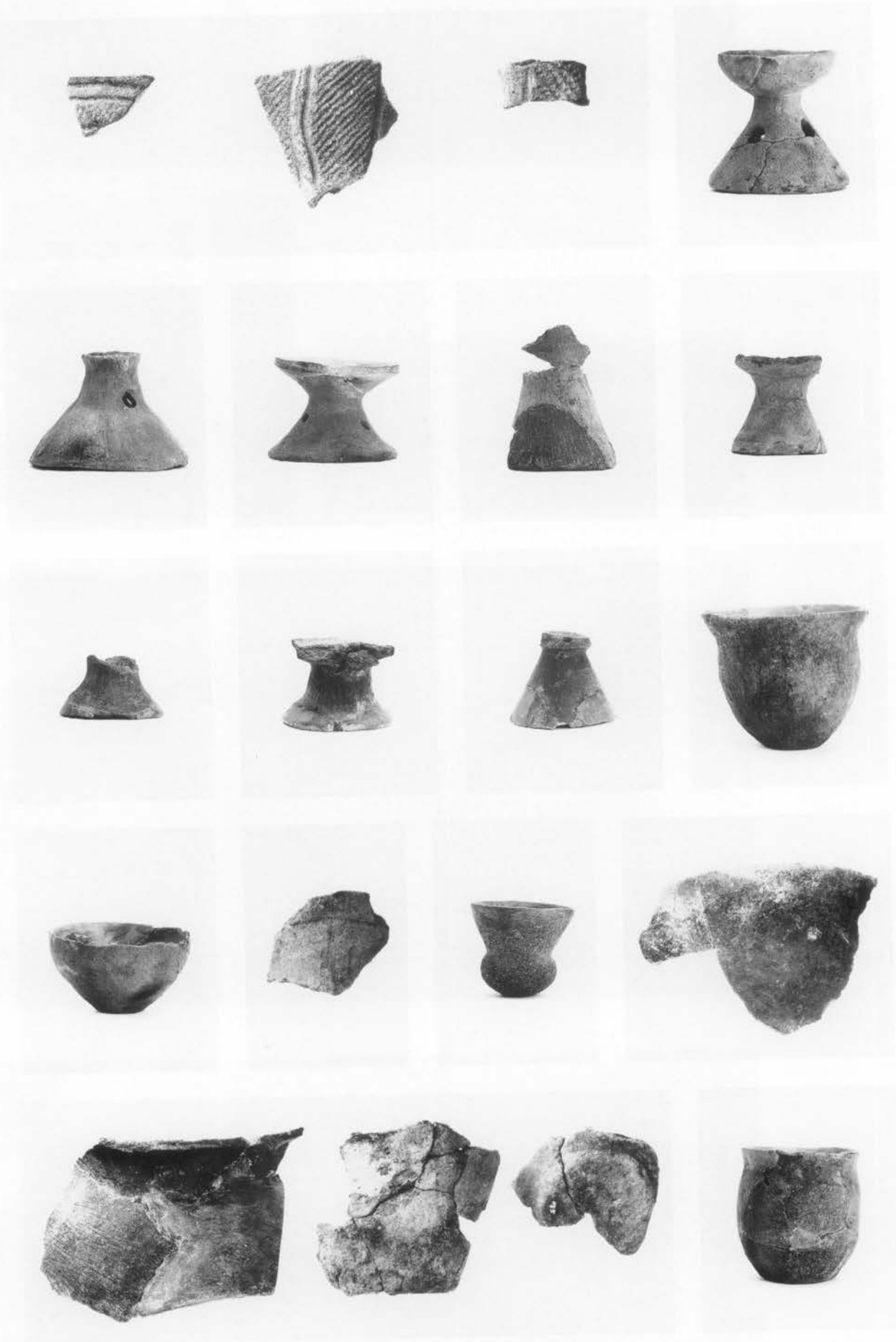
遺跡近景（左）
2号土坑（右）



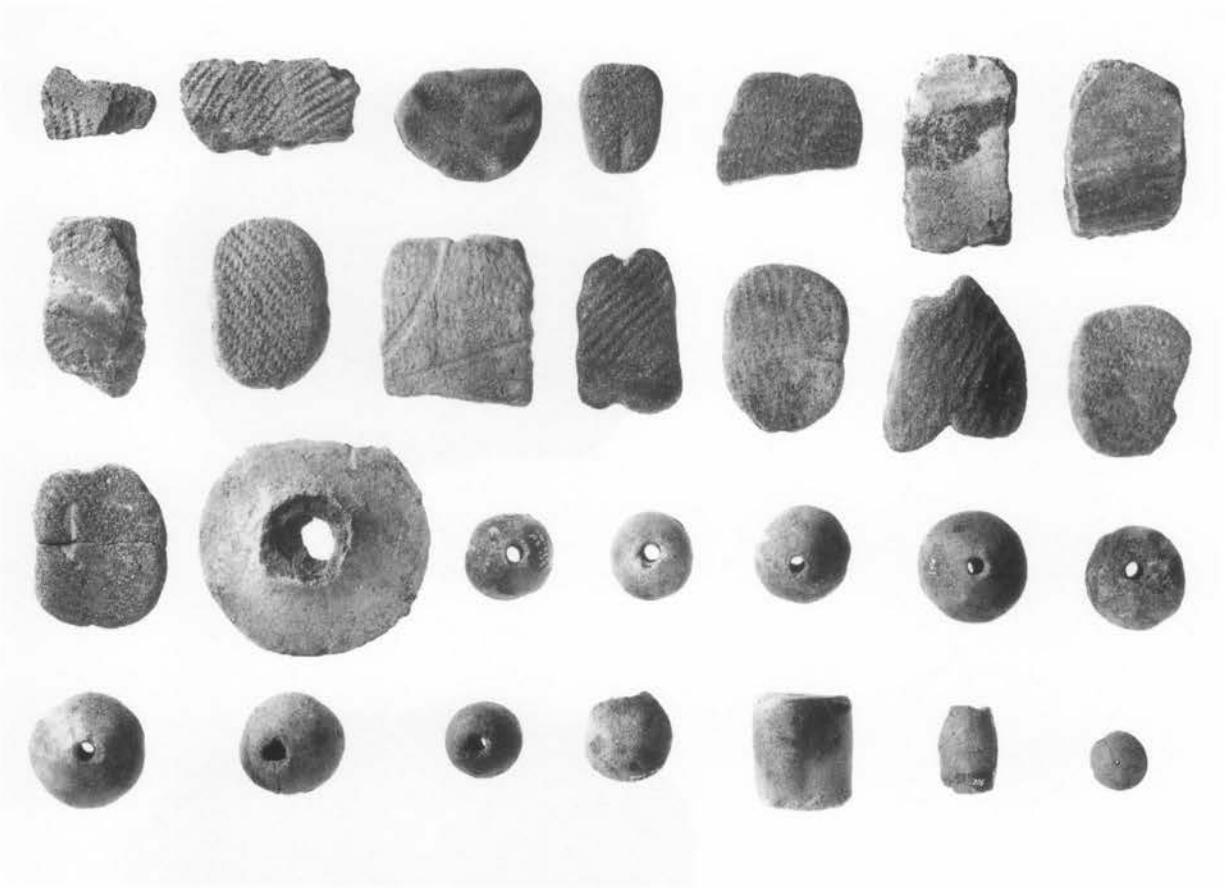
木製品及び流木集中状況
（S→N）



木製品及び流木集中地点
（E→W）



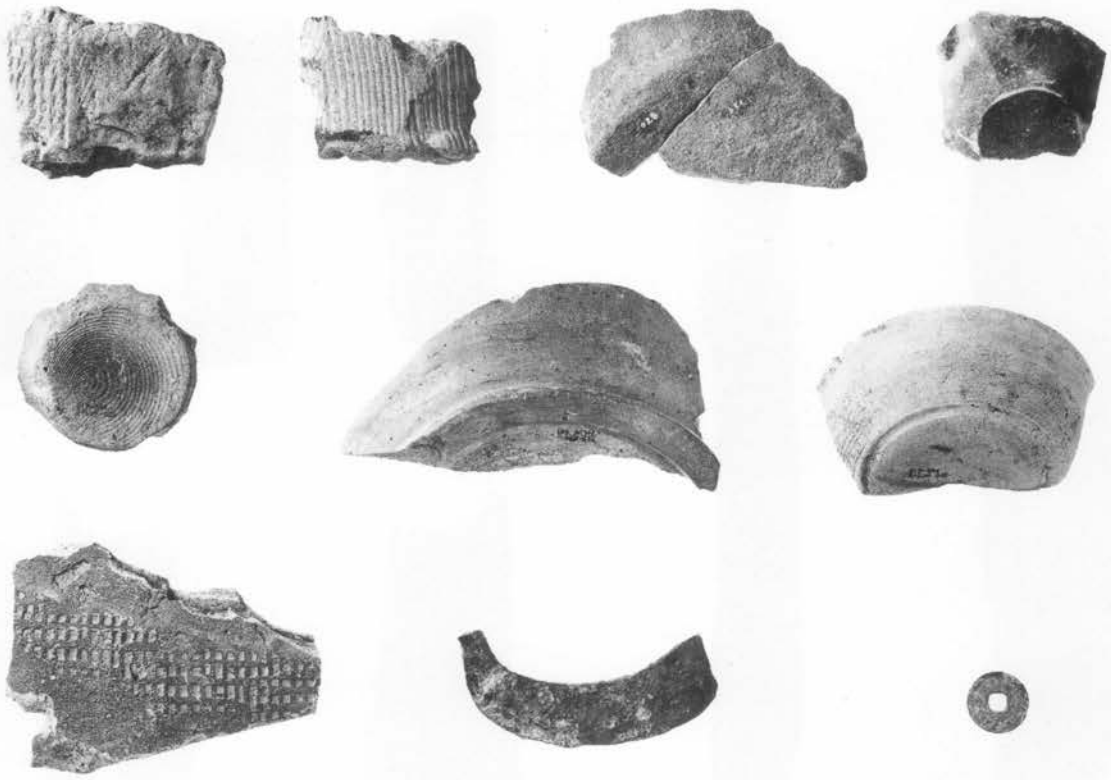
古市場（1）遺跡出土土器



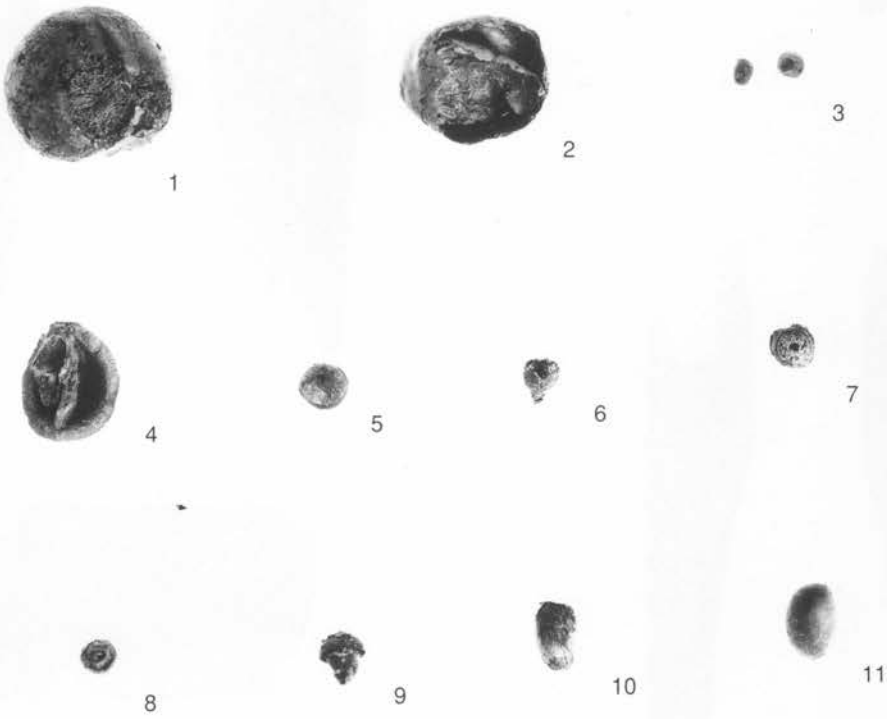
古市場（1）遺跡出土土製品

古市場（1）遺跡出土中近世の遺物

古市場(1)遺跡出土石塔



古市場(2)遺跡出土遺物



1～2 トチ　3 ジャノヒゲ　4 ヤブツバキ　5～9 シラカシまたはアラカシ　10～11 コナラ

古市場(1)遺跡出土植物種子

古市場(2)遺跡出土木製品(1)

古市場(2)遺跡出土木製品(2)

平成３年次補足調査区（近景）

報告書抄録

ふりがな	ひがしかんとうじどうしゃどう（ちば・ふっつせん）まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書4
副書名	市原市今富新山遺跡・古市場（2）遺跡、千葉市古市場（1）遺跡
巻次	4
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第356集
編著者名	石倉亮治・新田浩三・高梨友子
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地2
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
今富新山遺跡	千葉県市原市今富字新山1,123ほか	12219	044	35度28分1秒	140度5分14秒	19890510～19900209	5,500	道路（東関東自動車道）建設に伴う事前調査
古市場（2）遺跡	千葉県市原市古市場字上鎧384ほか	12219	094	35度32分35秒	140度8分39秒	19901001～19901122	6,800	同上
古市場（1）遺跡	千葉県千葉市中央区浜野107-1ほか	12201	090	35度32分50秒	140度8分37秒	19900108～19900317 19900402～19900516	18,700	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今富新山	包蔵地 集落跡 古墳	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	遺物集中地点　5か所 住居跡　81軒 円墳　1基 土坑　9基 溝状遺構　10条	ナイフ形石器、角錐状石器、石核 縄文土器（早期～中期）、石鏃、磨製石斧、敲石、砥石 弥生土器 土師器、須恵器、金銀製大刀、鹿角装小刀、鹿角装剣、鹿角装刀子、管状土錘、土製勾玉、瓦	古墳時代後期の円墳である1号墳の埋葬施設から、金銀装大刀をはじめ刀剣類が出土
古市場（2）	包蔵地	古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	土坑　2基 木材集中地点　1か所	平瓦、埴輪、土師器、須恵器、銭貨、木製品	
古市場（1）	包蔵地	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	溝状遺構　3条	縄文土器 土師器、須恵器 陶器、鉄製品、銭貨、石塔	

千葉県文化財センター調査報告第356集
東関東自動車（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書4
－市原市今富新山遺跡・古市場(2)遺跡、千葉市古市場(1)遺跡－

平成11年3月31日

編　集　財団法人　千葉県文化財センター
発　行　日本道路公団
東京都港区虎ノ門1-18-1
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2
印　刷　大和美術印刷株式会社
千葉県木更津市潮浜2-1-10